
魔法少女リリカルなのはStrikerS ～The dueler～

暗黒の覇者

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはStrikers ~ The duel
er~

【Nコード】

N4412N

【作者名】

暗黒の覇者

【あらすじ】

突然、リリカルなのはの世界に飛ばされてしまった、主人公の菊池雅之。

彼は、そこで何を思うのか？この話は、オリ主とリリカルなのはのキャラクターが繰り広げるファンフィクション（二次創作）です。この物語は、魔法少女リリカルなのはStrikersのストーリーを軸にしておりますが、オリジナルが入ることもあります。また、オリ主が嫌いという方は、ブラウザの『戻る』をクリック願います。

それでもいいと言う方はお進みください。

プロローグ（前書き）

皆さん、初めまして。作者の暗黒の覇者と申します。今回の作品が初投稿となります。キーワードにもありますが、投稿速度は極めて遅く、こちらの都合で出させていただくことになると思います。勝手だとは思いますが、どうぞよろしくお願いします。誤字、脱字等ありましたら、ご指摘お願いします。

プロフィール

プロフィール 自己紹介・・・？

やあ、みんな元気か？

俺は菊池雅之って言うんだ。よろしくな。

えっ？ああ、ごめん。まだ詳しいこと言ってなかったな。今から説明するから待っていてくれ。

名前 菊池雅之

年齢 22

身長 182 cm

体重 71 kg

誕生日 3月12日

職業 警察官

星座 うお座

血液型 A型

ざっとこんなもんだ。また不明な点とかあったら、その都度補足

していこうと思う。

実は言いにくいんだが、警察官と言っても、現実の世界にいる警察官のようなもんじゃないんだ。

どちらかといえば、遊戯王5D'sのセキュリティを思い浮かべてくれ。

俺はあんな仕事をしている。D・ホイールに乗って、時にはデュエルをしながら犯人を取り締まる仕事をしてるんだ。

何でって？俺の世界は遊戯王5D'sのようにカードゲームがとても盛んで、遊戯王は国技のようなものになっているんだ。

あり得ない話かもしれないが、笑わないで聞いてほしい。

俺も警官になってまだそんなに年数がたっていない新人だ。上司はいるよ、もちろん。

ちよつとうるさい人だけだな。そこは『密に、密に』ということ
で……。

まあ、まとめると俺のいる世界は、君たちの世界と、遊戯王5D'sが融合したような世界だ。

意外といいもんだぞ。遊戯王好きの人なら、狂喜乱舞するぞ。おそらく。

ちよつと話が逸れたが、続けよう。俺は今、仕事場に向かってるんだ。

実はちょっとした話があるみたいでな。あの上司に呼ばれてるんだ。早く行かないと怒られる。

ん？何だこれ・・・？

説明の途中で申し訳ない。何かD・ホイールに異常があるらしい。こんな時に何だ・・・！う、うわーーーー！！

突然、D・ホイールから光が出て、俺はそれに包まれ、気を失った。

プロローグ（後書き）

はい、いきなりですが、主人公がぶっ飛んで行きました。

訳が分からない方もいらっしゃるかと思いますが、私としてはこれが限界です（T|T）

菊池「おい、どう言うことだ？」

作者「どう、とは・・・？」

菊池「いきなり過ぎるだろう。読者の方の反応が怖いんだけど！」

作者「フン、チキン野郎め。それでもデュエリストか!？」

菊池「・・・リアリストだ」

作者「お前はロットンか、この野郎! かつこつけてんじゃねえよ!」

菊池「まあ、うるさい作者ですが、温かく見守ってください」

作者「おい! 無視するなー!」

第一話 「異世界へ・・・」 (前書き)

作者「早速、第一話を投稿。これで自分も小説家の仲間入りかと思うと、少し感動・・・。」

菊池「自惚れてないで、さっさと第二話も書けよ」

作者「あつ、貴様！人がせっかく苦勞して書きあげたところに、催促してくるとは、いい度胸だな・・・！」

菊池「読者の方々の本音を代弁したまでだ」

作者「くっ・・・！貴様、ただで済むと思うなよ・・・！！」

菊池「はいはい。こんなうるさい作者ですが、今後も宜しくお願いします」

ちなみに、俺が使うデッキは、遊星のデッキに似た『シンクロン』デッキ
になります。あしからず」

第一話 「異世界へ・・・」

「うん？・・・ここはどこだ・・・？」

菊池が意識を取り戻した時、そこは見知らぬ場所だった。

（確か、俺は上司に呼ばれて、警察署に向かう途中、突然光に呑みこまれたんだっけ・・・。）

菊池はとりあえず、状況を確認する。これでも警官だからだ。

無線を使い、上司や同僚に連絡を取ろうとしたが駄目だ・・・。繋がらない。

（ここは違う世界なのか？いや、もしかしたら、どこか違う場所に飛ばされた可能性もある。まずD・ホイールに乗って周りの様子を確認しておこう。それから考えても遅くはない。）

菊池はD・ホイールに跨ると、エンジンを起動させる。

キュイイイ・・・

相変わらず、好調だ。この調子で、この最悪の状況を打破しよう。

そう決意を固めながら、発進させた。

しばらくは、道なりに進んでいた。が、心当たりというか、自分がいた世界のものが見当たらない。

不安になって来たが、挫けるわけにはいかなかった。

なんとしても、仲間達のもとに帰らなければならない。

その思いだけが、菊池を行動に駆り立てていた。

D・ホイールで走っていると、破壊された街に出た。何があったのかは分からないが、おそらく戦争でもあったのだろう。

建物はもちろん、道や橋、車などが破壊されていた。一言で言えば、ひどいというありさまだった。

その時、爆発音があった。相当でかいものだった。

「何事だ？まあ、行って確かめてくるか・・・」

菊池は、直ぐにD・ホイールを爆発音のする方に走らせた。

くティアナsideく（始）

「・・・ったく。ついてないわね。こんな時にガジェットに出くわすなんて。」

オレンジ色の髪をツインテールに束ね、両手に二丁の拳銃を持つ少女は呟いた。

「うっとおしいのよ！クロスファイア・・・シュート!!」

そう言うと二丁の拳銃から魔力弾が発射され、ガジェットたちは次々と撃ち抜かれていった。

《ティアア！！そっちはどう！？》

《もうちょっとよ！スバルあんたは！？》

《こっちは終わったよ！すぐに援護に行く！》

念話で話した相手は、彼女、ティアナ・ランスターの同僚にしてパートナーである、スバル・ナカジマだ。

彼女達はペアだったがガジェットたちに奇襲され、二手に別れてしまったのだ。

（でもどうしてこんな所にガジェットがいるのかしら？）

ティアナはそう考えながらもガジェットたちを撃墜する。

全てのガジェットを破壊を確認した時、聞き慣れない機械音が聞こえた。

キュイイイ・・・

音のする方へ振り向くとそこには変な形をしたバイクが来ていた。運転しているのは自分より二つか三つ上ぐらいのように見える。

「時空管理局です。ここは立ち入り禁止です！！停止してください

「!!」

くティアナsideく（終）

く菊池sideく（始）

D・ホイールを走らせていると、聞こえてくる爆発音が大きくな
っていった。

現場に近づきつつあるようだ。

しばらくすると、爆発音が聞こえなくなり、代わりに声が聞こえ
た。

「時空管理局です。ここは立ち入り禁止です!! 停止してくださ
い!!!!」

俺は、止まるわけにもいかず、方向転換し、別の方向に走り出す。

時空管理局……。その単語に聞き覚えがあった。

上司から聞いた話だが、上司も昔、異世界に飛ばされたことがあ
ったらしい。

菊池は話を聞き流していたが、時空管理局……。上司はこの組織
に立ち向かい、大怪我を負って戻って来たそうだ。

上司は正義感が強い人間ではなく、ただ己の信念を貫こうとする人だった。

時空管理局のやり方に我慢できなかったらしい。

だからといって、反抗する必要はない。俺はその時そう思っていた。

そして上司を苦しめた時空管理局に興味を持った。

あの最強デッキを使い、どこその元キングのように雰囲気と話術で、相手を圧倒する上司が負けたのだ。よほど強いに違いない。

ただ、今はそんな呑気に考えている暇などない。とにかくここを離れなければ・・・！

く菊池sideく（終）

くティアナsideく（始）

私は警告したが、バイクは、別の方向に走って行った。スバルと共に、私はバイクを追った。

もしかしたら、次元漂流者かもしれない。だとしたら、放置するわけにはいかない・・・。

スバルと私は、必死でバイクを追った。

「時空管理局です！そのバイク、ただちに停止しなさい！！」

私は警告を行うものの、バイクは止まる様子がない。スバルに電話で話しかける。

《スバル！このままじゃ、追いつけないわ！あんたは、なのはさんに連絡して！私はこのまま、あのバイクを追うわ！》

《分かった。あんまり無理しないでね。》

《大丈夫よ》

そこで念話を止め、追跡に集中する。

くティアナsideく（終）

く菊池sideく（始）

「何てことだ。全く・・・」

あの二人をD・ホイールの画面で確認するが、まだついて来ているようだ。

あいつらのことだ。きっと応援を呼んでくるだろう。そうになると、かなりまずい。

何故、逃げているか。D・ホイールについて色々、調べられるのが、嫌だというのもあるが、魔法が発達したこの世界に、拳銃はまずいのだ。

拳銃は、菊池の胸のホルスターの中にある。これを取り上げられるのもきつい。これは自分の愛銃だ。

それに、拳銃はこの世界では質量兵器(?)と呼ばれるらしい。

上司がそう言っていたのを覚えている。

皮肉なことに、このせいで上司は終わりになき戦いを強いられたのだが……。

まあ、話を戻すと、今、停止すれば間違いなく拘束され、尋問を受けるということになる……。

とにかく検査されるのが嫌だったのだ。穏便に済ませたい。

だが、そうもいかないようだ。

俺が思案していると、声が聞こえてきた。

「時空管理局です！そのバイク、ただちに停止しなさい！！」

くっ、しつこいな……。これだけスピードを出してるのに何故見失ったりしない？

少なくともこのままじゃ、やられるな。確実に。

それならば、デュエルしかない。これで追跡を振り切る!!

俺は迷ったが、心を決めた。

「フィールド魔法、スピードワールド2、セットオン！」

俺はD・ホイールにある、ボタンを押す。

《デュエルモード、オープン。オートパイロット、スタンバイ》

「ライディングデュエル！アクセラレーション！！」

（菊池side）（終）

第一話 「異世界へ・・・」 (後書き)

菊池「何だ、この終わり方！続きが気になるじゃないか！！」

作者「いいじゃない。こうした方が皆、続きが気になって読んでくれると思って」

菊池「いつか、読者の方に見放されるんじゃないかな、こいつのせいで」

作者「ん！？なんか言ったかコラ」

菊池「何でもないさ。お前の気のせいだ」

作者「絶対悪口言われたと思うんだけど、まあいいか。それにしても、とうとうデュエルですか、しかも異世界でだ。大丈夫なのか？」

菊池「大丈夫だ。カード達がきつと応えてくれる」

作者「遊星のセリフをパクるな！それに、俺が心配したのはお前じゃねえ。スバルとティアナだよ！勘違いしてんじゃないやねえよ、バカ」

菊池「何だと！？もういい！ここで、お前に制裁を加えてやる！デュエルだ！！」

作者「ほう、この俺にデュエルを挑むとはいい度胸だ！来い！！」

二人がデュエルディスクを構え、対峙する。

数ターン後・・・、

菊池「行け、【ジャンク・アーチャー】！！スクラップ・アロー！
」

作者「ぐああああ！！」

第二話 「飛翔せよ!」【スターダスト・ドラゴン】!!」 (前書き)

ようやく第二話を投稿できました。

グドグドな感じが否めませんが、大目に見て下さい。

第二話 「飛翔せよ!『スターダスト・ドラゴン』!」

くティアナsideく(始)

私はバイクを追っていた。

しかし、止まる様子がないため、強制的に停止させることにした。

二丁の拳銃のようなデバイスを構え、威嚇射撃を行おうとした。

すると突然、廃墟が紫色に染まった。

「何なの? 一体?」

突然のことに、戸惑っていると、バイクに乗っている男が言った。

「ライディングデュエル! アクセラレーション!」

そう言った後、バイクの横に、何かが現れた。召喚獣のように見えた。

「何なの? あの召喚獣・・・」

私は、見たこともない召喚獣に戸惑い、攻撃ができなかった。

(ここは、おとなしく様子を見る方がいいわね…。)

くティアナsideく(終)

一方、菊池はティアナのことは、おかまいなしに、デュエルを始める。

「俺のターン！俺は【ジャスティス・ブリンガー】を召喚！カードを3枚伏せる！」

菊池 LP8000 SPC0

【ジャスティス・ブリンガー】 攻1700

菊池のD・ホイールの横に、【ジャスティス・ブリンガー】が現れる。

ティアナは、見たこともない召喚獣に戸惑い、攻撃ができなかった。

菊池はそれを見抜き、D・ホイールのスピードを上げる。

だが、ティアナも黙ってはいなかった。二丁の拳銃を構えると、【ジャスティス・ブリンガー】に魔力弾を打ち込む。

「クロスファイア………シュート！！」

菊池は冷静に、伏せてあるカードを発動する。

「罠カード、オープン！【くず鉄のかかし】！！」

すると、カードが表になり、そこからイラストと同じくず鉄のか

かしが現れ、

ティアナの攻撃を防いだ。

攻撃を防ぐとかかしはカードに戻り、また伏せた状態に戻った。

「防がれた!？」

ティアナは驚く。いきなり、かかしが現れ、攻撃を防いだのだから。

「このカードは、相手の攻撃を1度だけ無効にし、発動後、再び場にセットする!」

菊池のカード効果の説明に、ティアナは啞然とするしかなかった。

今まで、経験したことのない戦いに、頭が混乱していた。

だが、あのカードのかかしは、相当高い防御力があることは理解できた。

その時、スバルが追いついてきた。

「ティア〜! 待ってよ〜!」

「スバル! あんた連絡したの!？」

「ちゃんとなのはさんに念話送ったよ。すぐこっちに来るって」

「そう…。それよりも、あのバイクを止めないといけないんだけど、攻撃が効かないのよ」

スバルは驚き、聞き返す。

「効かないって、どういうこと？」

「かかしが現れて、防がれたのよ」

スバルは、？マークを頭に浮かべたまま、聞き返してくる。

「かかし？」

ティアナは、事情を説明する。

だが、スバルは、まだ理解できないようだ。しかし、説明している時間はもうない。

「相手は何者かは分からない。でも一刻も早く、あのバイクを止めない」と

スバルとティアナは、菊池のD・ホイールに近づきつつあった。

まずい！このままじゃ、追いつかれる！！

菊池は、さらにD・ホイールのスピードを上げながら、デッキを

見る。

（デッキを信じること……。生き残るには、それしかないようだ。）

「俺のターン、ドロー!!」

菊池 LP 8000 SPC 1↓2

菊池はドローしたカードを見て、呻く。

「このカードは……。!!」

引いたのは、レベル4のチューナーモンスター。

通常のデュエルなら、ここで遠慮なく召喚するところだろう。

だが、この異世界で、シンクロモンスターを出して問題ないのか？

自ら己の戦術をさらけ出しているのだろうか？

そんな疑問が菊池の頭によぎる。

菊池はD・ホイールの画面を見る。

すると、2人の少女が追いかけてくるのが見える。

迷っていても始まらない。勝負するならここしかない考える菊池。

「俺は、【ブライ・シンクロン】を召喚！」

【ブライ・シンクロン】 攻1500

とうとう、チューナーモンスターを召喚した。

場所は移り、機動六課、管制所。

ここでは、あの廃墟で戦っている彼女達に、的確なサポートをしている。

「ガジェット？型の撃墜を確認！！」

「了解！ガジェット？型、散開開始！追撃サポート入ります！」

その時、ドアが開き、女性が入って来る。

「八神部隊長！！」

「ごめんな、お待たせ！！」

関西弁で話す八神と呼ばれた女性は謝りながらも、椅子に座る。

彼女は八神はやて。機動六課の部隊長を務める若き指揮官である。

すると、眼鏡をかけた女性が、何か忙しくパネルを叩く。

「E地区に生体反応です！！見慣れないバイク、および召喚獣を確認！」

「何やて！？？」

「映像出します！！」

目の前の画面には男と召喚獣が移っている。画面の男は恐らく、はやてに近い年齢の人物だろう。

「あの男性から魔力反応！！これは・・・Sランクです！！ですが、あの召喚獣が現れた時はBランクまでダウンしています！！」

この報告に、はやては考えた。

Sランクの實力を持ちながら、なぜBランクの召喚獣を使うのか分からなかったからである。

考えていたはやては、画面に目を移し、菊池のデュエルディスクに注目した。

「アルト！！もう少し画面を拡大して！！」

アルトと呼ばれたオペレーターは、はやての言葉に反応し、すぐに映像を拡大する。

画面には、D・ホイールに装着されているデュエルディスクが映っており、カードがあるのが分かる。

「カードがあるようやけど、内容までは見えんなあ……。もうちょっと拡大できへん!？」

「無理です!ここからではこれが限界です!!」

「まあ、それならええわ。とりあえず、次元漂流者の可能性があるさかい、彼の保護が優先や」

そう言うのと、はやては管制所の職員に指示を出す。

「シャーリー!なのは隊長とフェイト隊長に繋いで!!」

「了解」と答えようとしたシャーリーと呼ばれた女性は、あることに気づき、はやてに報告した。

「八神部隊長!ティアナとスバルから連絡が入りました!2人によると、男性は停止するよう警告を受けているのですが、停止する様子がないようです!」

「何やて!?!?どういうことや!?!」

シャーリーは、言いにくそうに、言った。

「詳細はまだ分からないのですが、どうやら、こちらを敵と認識している可能性があります。このままだと、2人が危ないかもしれません」

「別にあの召喚獣を使って、2人に攻撃したわけではないんやろ?」

「分かりません。詳しい情報はまだこちらに入って来ていないので、なんとも・・・。」

はやては考えた。下手に攻撃すれば、2人が撃墜されるかもしれない。

だが、このまま放置するわけにはいかない。

どうすればいいか考えていたはやては、考えが纏まったようであり、再び、シャーリーに指示を出す。

「そんなら、こっちが敵じゃないってことを認識させる必要があるそうやな。シャーリー！なのは隊長とフェイト隊長に繋いでくれんか？」

「了解！！」

やがて管制所では、パネルを叩く音が増えた。

E地区から、約300m離れた上空に、白い服と黒い服を纏った女性が空を飛んでいる。

「これで終わりだね、なのは。」

黒い服の女性は、自分がなのはと呼んだ女性に話しかける。

「うん。後はスバル達の援護だね。それから・・・。」

「マスター、通信です。」

すると、なのはの前方にモニターが映し出される。

「なのはちゃん、フェイトちゃん。E地区に民間人がおる。ごめんやけど、保護してくれへんか？」

「民間人？ どうしてそんな所に？」

「分からへん。もしかしたら次元漂流者の可能性が高いと思う。でも、こっちを敵と思っとるようや。相手を刺激せんように注意してな」

はやての言葉に頷くなのはとフェイト。

「スバルとティアナも苦戦しとるから、援護よろしくな。今から映像を送るわ。」

「わかったよ。」

モニターには、管制所で映し出されていた男が映っていた。

なのはは男を見て、何か懐かしい気持ちになった。

だが、それが何かは分からない。

なのはとフェイトは、急いでスバル達のもとに向かった。

またまた場所は移り、E地区。

菊池と、スバル達の戦いは続いていた。

2体のモンスターを見ながら、菊池は叫ぶ。

「行くぞ！これが俺達の絆だ！レベル4の【ジャステイス・ブリンガー】に、レベル4の【ブライ・シンクロン】をチューニング！」

すると、【ジャステイス・ブリンガー】と、【ブライ・シンクロン】が空高く舞い上がる。

「これは一体、何が起ころの！？」

ティアナ達は、ただ呆然と見つめるだけである。

【ブライ・シンクロン】が4つの輪となり、【ジャステイス・ブリンガー】がその中を通る。

【ジャステイス・ブリンガー】の身体が透過通り、4つの星とな

る。

「集いし願いが新たに輝く星となる。光差す道となれ！ シンクロ
召喚！ 飛翔せよ、【スターダスト・ドラゴン】！」

【スターダスト・ドラゴン】 攻2500

その星が一行になり、急に光り出したとき、スバルとティ
アナは、目をつむった。

しばらくして目を開けた瞬間、2人は〈それ〉に目を奪われた。

その前にいるバイクに乗っている男。周りの風景。だが2人が見
ているのは〈それ〉にはあてはまらなかった。

バイクの男の上空にいる白銀のドラゴン。

その神々しいまでの美しさに。

2人は思わず、

「綺麗・・・・・・・・。」と呟いたのだった。

一方、管制所では、【スターダスト・ドラゴン】の出現にてんてこまいだ。

「シンクロ召喚！？シャーリー、解析！！」

シャーリーは、映像を複数出しながら解析する。

「わかりません！！しかし、あの召喚獣のランクはAAです！！」

「AA！？」

AAランクともなればそれはリミッター付きの隊長にも劣らない力だ。

（何なんや？見たこともない召喚魔法に、かかし。あの男は何者なんや？）

はやては椅子に座りながらも考えていた。

第二話 「飛翔せよ!」【スターダスト・ドラゴン】!」 (後書き)

はい、第二話が終わりました。

何か中途半端な感じで終わってますが、近いうちに第三話を投稿したいと思います。

これからも、『魔法少女リリカルなのはstriker』Th
e dueler』を宜しくお願いします。

第三話 「デュエルは終了。そして、菊池の過去とは・・・」 (前書き)

長らくお待たせしました。

少し、もの足りないかもしれませんが、ご了承ください。
それでは、第三話をお楽しみください。

第三話 「デュエルは終了。そして、菊池の過去とは・・・」

菊池は迷うことなく、バトルフェイズに入る。

「スターダスト！お前の力を貸してもらおう！行くぞ！！」

スターダストは菊池を見て、わずかに頷き、そしてティアナ達の方に向き直った。

（【スターダスト・ドラゴン】は、【ブライ・シンクロン】をシンクロ素材としているから、攻撃力は600ポイントアップし、3100だ・・・。だが、【スターダスト・ドラゴン】の効果は無効化されている・・・。無茶はしない方が良いな）

「バトル！！ 【スターダスト・ドラゴン】で攻撃！攻撃対象はお前だ！！」

菊池が攻撃対象に選んだのはティアナだった。

「響け！シューティング・ソニック！！」

【スターダスト・ドラゴン】の口から、超音波のようなソニックビームが発射され、ティアナに向かう。

【スターダスト・ドラゴン】に見とれていたティアナは、慌てて防御の体勢に入ったが、防ぎきれないのは明白だった。

ティアナは直撃を覚悟し、目を閉じた。

だが、ここでのなのはがやって来た。

そして、なのはは素早くティアナの前に出ると、ラウンドシールドで【スターダスト・ドラゴン】の攻撃を防いだ。

「大丈夫？ 2人とも」

「「なのはさん！！」」

スバルとティアナは、なのはの到着に喜ぶ。

2人の無事を確認したなのはは、レイジングハートを菊池に向ける。

「時空管理局、機動六課の高町なのはです！ ただちにバイクを止めて投降して下さい！」

菊池は振り向き、なのはを見る。

「……………無理な注文だな、それは」

そう呟くと、菊池はD・ホイールのスピードを上げる。

「待って！」

なのはが叫ぶが、菊池はその言葉を見せず、走り続ける。

威嚇なのか、桜色の魔力弾がいくらか飛んでくる。

D・ホイールに当たりそうな魔力弾は、【スターダスト・ドラゴ

ン」が防いでいる。

（ありがとう、【スターダスト・ドラゴン】・・・お前となら、どこまでも行ける！！）

菊池はデッキに手を置き、ドロースる。

「俺のターン！」

菊池 LP8000 SPC3↓4

「俺は、スピード・ワールド2の効果を発動する！！」

スピード・ワールド2 フィールド魔法 （遊戯王5D、sより）

「S^{スピード}p」と名のついた魔法カード以外の魔法カードをプレイした時、自分は2000ポイントダメージを受ける。

お互いのプレイヤーはお互いのスタンバイフェイズ時に1度、自分用スピードカウンターをこのカードの上に1つ置く。（お互い12個まで）

自分用スピードカウンターを取り除く事で、以下の効果を発動する。

●4個…自分の手札の「S^{スピード}p」と名のついたカードの枚数×80ポイントダメージを相手ライフに与える。

●7個…自分のデッキからカードを1枚ドロースる。

●10個…フィールド上に存在するカードを1枚破壊する。

「スピードカウンターを4つ取り除く事で、手札の「Sp」と名のついたカード1枚につき、800ポイントのダメージを……」

菊池は、そこまで言いかけた時、突然何者かの攻撃を受けた。

「プラズマスマッシャー!!」

「ぐああああ!!」

菊池は降り注いだ雷の奔流に吞まれ、D・ホイールから投げ出された。

そして、地面に叩きつけられ気を失ってしまった。

菊池が、D・ホイールから投げ出された為、強制的にデュエルモードは解除され、【スターダスト・ドラゴン】の姿も消えた。

「大丈夫だった? 皆」

フェイトは、遅れてやって来たというより、初めから奇襲を掛けるつもりだったのだろう。

なのは達は、とりあえず菊池に駆け寄る。

「なのはさん。その男の人、大丈夫でしょうか……?」

「どうかなあ。一応診てみるよ」

スバルの心配そうな声に、なのはは菊池の容体を確認する。

気を失っているため、菊池はピクリとも動かない。

「・・・一応、六課に連れて行こうか。色々聞きたいこともあるし」

なのはの提案に、フェイト達3人は頷く。

こうして、なのは達は機動六課へと帰還した。

未だに目を覚まさない男と、D・ホイールと共に…………。

「機動六課 医務室」

キュイイイ…

とある街中で、2台のD・ホイールが走っている。

よく見れば、片方は警察のD・ホイールらしい。

警察のマーク、旭日章きょくじつしょうがD・ホイールに付いているのが確認できる。

と、言うことは、もう片方は犯人なのだろう。

実際、警察方のD・ホイールの前を走っている犯人のD・ホイールは、追跡開始当初から、交通法規を無視しまくっていた。

犯人が猛スピードで逃げようとするため、警察方のD・ホイールは、スピード・ワールド2を発動した。

デュエルモードになれば、出せるスピードが制限されるためだ。

「「デュエル!!」」

菊池 VS アンノウン

「私のターン!」

アンノウン LP4000 SPC0

菊池 LP4000 SPC0

「私は【ワイズ・コア】を守備表示で召喚!!」

【ワイズ・コア】 守0

「カードを2枚伏せ、ターンエンド!」

(守備力0のモンスター……。誘っているのか・・・?)

菊池は、【ワイズ・コア】のステータスの低さに疑問を持つ。しかも見たことのないモンスターだ。

「俺のターン!」

アンノウン LP4000 SPC0↓1

菊池 LP4000 SPC0↓1

「俺は手札の【ボルト・ヘッジホッグ】を墓地に送って、【クイック・シンクロン】を特殊召喚!!」

【クイック・シンクロン】 攻700

「さらに、自分のフィールド上にチューナーが存在することにより、墓地の【ボルト・ヘッジホッグ】を特殊召喚！」

【ボルト・ヘッジホッグ】 攻800

菊池は叫ぶ。

「レベル2の【ボルト・ヘッジホッグ】に、レベル5の【クイック・シンクロン】をチューニング！」

すると、【ボルト・ヘッジホッグ】と、【クイック・シンクロン】が空高く舞い上がる。

【クイック・シンクロン】が5つの輪と成り、【ボルト・ヘッジホッグ】がその中を潜る。

「集いし思いがここに新たな力となる。光差す道となれ！シンクロ召喚！燃え上がれ、【ニトロ・ウォリアー】！」

【ニトロ・ウォリアー】 攻2800

「バトル！【ニトロ・ウォリアー】で、【ワイズ・コア】に攻撃！ダイナマイト・ナックル！！」

【ニトロ・ウォリアー】が、【ワイズ・コア】を破壊しようと迫っていくが・・・、

「フフ、そうはさせない！カウンター罠、【攻撃の無力化】を発

動！相手モンスターの攻撃宣言時に発動する事が出来、そのモンスター1体の攻撃を無効にし、バトルフェイズを終了する！」

菊池は、1ターン目から、【ニトロ・ウォリアー】を召喚したものの、【攻撃の無力化】で攻撃が通らなかった。

（まあ、いいだろう。【ニトロ・ウォリアー】の攻撃力は2800。そう簡単には倒せないはず・・・！）

「俺はこれで、ターンエンドだ！」

「私のターン！」

アンノウン	LP 4000	SPC 1↓2
菊池	LP 4000	SPC 1↓2

「罠カード、【スパーク・ブレイカー】を発動！その効果により、自分フィールド上のモンスターを全て破壊する！！」

「何だと！？自分のモンスターを自ら破壊するなんて・・・」

菊池は、普通なら自殺行為に等しい、相手の行動に驚く。

「この瞬間、墓地に送られた、【ワイズ・コア】の効果発動！！デッキの【機皇帝ワイゼル∞】と、【ワイゼル・トップ】、【ワイゼル・アタック】、【ワイゼル・ガード】、【ワイゼル・キャリア】を特殊召喚！！」

【機皇帝ワイゼル・∞】 攻0

【ワイゼル・トップ】 攻500

【ワイゼル・アタック】 攻1200

【ワイゼル・ガード】 守1200

【ワイゼル・キャリア】 攻800

「そして、【機皇帝ワイゼル∞】の効果発動！！このカード以外の、自分フィールド上に存在する「ワイゼル」と名のついたモンスターの攻撃力の合計の数値分、攻撃力をアップする！！」

【機皇帝ワイゼル∞】 攻0↓2500

菊池は、相手のフィールド上に現れた、合体モンスターに驚いていた。

データを検索しても、該当するモンスターは無い。

（何なんだ？あのモンスターは？）

菊池の疑問に、答えるかのようにデュエルは進んでいく。

「【機皇帝ワイゼル∞】は、1ターンに1度、相手フィールド上に存在するシンクロモンスター1体を装備カード扱いで装備する事が出来る！」

「何!?!」

「貴様の場にいる、【ニトロ・ウォリアー】はシンクロモンスター。よって、そのモンスターを吸収する!?!」

相手の宣言と共に、【機皇帝ワイゼル∞】の胸部から、糸のようなものが出され、【ニトロ・ウォリアー】を捕らえると、取りこんでしまった。

【機皇帝ワイゼル∞】 攻2500↓5300

「攻撃力5300だと・・・!?!」

「フッフ、当然だ。【機皇帝ワイゼル∞】の効果により、このカードの攻撃力は、この効果で

装備したモンスターの攻撃力分、アップするからだ。フハハハハハハハハ!! 死ぬがいい!! 【機皇帝ワイゼル∞】で、ダイレクトアタック!!」

「止めろおおおッ!!」

「っ!!」

菊池は、突然目を覚ました。

「ハア、ハア・・・」

周囲を見渡し、今置かれている状況を把握する。

「・・・夢、か」

あれは、昔の苦い思い出だ。自分の油断が招いた結果でもある。

その後、D・ホイールから投げ出され、全治3カ月の重傷を負った。

「機皇帝ワイゼル・・・」

犯人は、今だ捕まっておらず、警察も捜査本部を立ち上げ、捜査している。

（いずれ、また出会うのだろうか、あのモンスターに・・・）

菊池が1人で考えていた時、医務室の扉が開かれた。

第三話 「デュエルは終了。そして、菊池の過去とは・・・」 (後書き)

作者「やっと終わった・・・」

菊池「俺、捕まったのか？」

作者「おそらく」

菊池「何でだよ。俺は悪いことしてないぞ！」

作者「【スターダスト・ドラゴン】で、ティアナに攻撃しておきながら、よく言ったもんだ」

菊池「あれは正当防衛だ!!」

作者「それはどうかな？素直に警告を受け入れれば、良かったんだ。それを無視したお前が悪いな」

菊池「・・・」

作者「まあ、これ以上菊池を苛めるのも可哀想なんで、この辺にしておきます。

それでは皆さん、これから本作品を宜しく願います」

第四話 「六課メンバーとの邂逅」 (前書き)

勢いに乗って、第四話を投稿しました。
相変わらずの駄文ですが、宜しくお願いします。

第四話 「六課メンバーとの邂逅」

「なんや、起きとったんか」

医務室に入ってくるなり、1番に開口したのは、先頭に立っている、八神はやて部隊長。

はやての後ろには、長身桃髪で凛々しい表情をした女性と、金色の長髪で、心配そうな表情を浮かべている女性の姿も確認出来た。

「コイツがスバル達を?・・・・ふーん」

視線をやや下、声のした方へと向けると、赤い髪をおさげにした少女が、こちらを見上げている。

菊池はいきなり現れた4人に、驚いた。

もしかしたら、自分は捕まったのではないかと考え始めた菊池。

内心焦りを覚える菊池に、はやてが声を掛けて来た。

「まずは、自己紹介やな。私は機動六課部隊長、八神はやてや。はやてって呼んでな?」

「は、はい・・・。」

気さくに声を掛けてきたはやてに、戸惑う菊池。

普通なら、警戒心を持って、慎重に話すべきだろう。

尋問されるとばかり思っていた菊池にとっては、拍子抜けした格好だ。

「ほら、皆も自己紹介してや」

はやてが後ろにいる2人の女性と、はやての傍にいる、赤い髪をおさげにした少女に声を掛ける。

「分かりました、主はやて。私は時空管理局、ライティング分隊副隊長シグナムだ」

「あたしはスターズ分隊副隊長、ヴィータだ」

「わ、私はフェイト・テストロッサ・ハラオウン。あの時は、いきなり攻撃してごめんね」

長身桃髪の女性と、赤い髪をおさげにした少女が、きつちりと自己紹介したのに対し、金色の長髪の女性が、すまなさそうに謝る。

「い、いえ。気にしないでください。そもそも、警告を無視し、危害を加えようとしたのはこちらですから・・・」

菊池は、顔の前で右手を横に振って、気にしないよう言った。

「それじゃあ、こちらでも自己紹介します。私は菊池雅之と申します。よろしく願います」

「こちらこそ、よろしゅうな。あと、敬語は使わんでええよ。歳もあまり離れてないし」

「そ、そうですか……。では、改めてよろしく」

ここで、菊池は一応、気になることを尋ねることにした。

「はやてさんでしたっけ。いくつか質問してもいいかな？」

「んー……。なんか、さん付けされると、むず痒いなあ……。はやてって呼んでくれへんか？」

「え……。？呼び捨てで良いのか？」

「別にええよ。さん付けで呼ばれたら、何か遠慮されてるような感じがするねん。だから、呼び捨てで呼んでな」

そう言って、笑顔を見せるはやて。

警戒心を持っていた菊池は、その笑顔に魅了されたのか、少しずつ警戒心が無くなっていくのが分かった。

「じゃ、じゃあ、はやて。ここはどこなんだ？」

「ここはミッドチルダの時空管理局・機動六課や。菊池くんは、ここがミッドチルダって事は知っとるか？」

菊池は首を横に振り、知らないと言った。だが上司は、行ったこととかあるとか言ってたような気がする。

人間が空を飛ぶとか、魔法を使うとか、現実離れしたことを話していた記憶がある。

あの時は、ほとんど信じていなかったが、今思えば、嘘ではなかったことが分かる。

その時、誰かが入って来た。

「はやてちゃん、今日のお仕事終わりましたです」

可愛らしい女性の声だ。菊池は思わず声がした方を向く。

すると、そこには小さな人形がいた。

「人形？ いや、妖精か？」

何気ないその言葉に彼女は反応し、菊池に近づいた。

「むむうう！！ リインは人形や妖精なんかじゃありません！！ 私にはユニゾンデバイスのリインフォース？（ツヴァイ）という名前があるんです！！！」

リインは頬を膨らませ怒ったが、全然怖くない。むしろかわいらしい。

菊池は、傍にやって来たリインの頭を撫でる。

「すまない。リイン。俺は菊池雅之だ。よろしくな」

「ああ、あなたが保護された人でしたか。ところで大丈夫でしたか？ 怪我とかありませんか？」

リインは心配そうな表情で、こちらを窺う。

「大丈夫だ。特に大きな怪我は無かった。心配してくれてありがたい、リイン」

「い、いえ。そんなお礼を言われることじゃないですよ」

リインはモジモジと照れながら、言った。

菊池とリインが話している最中に、はやては考えていた。

ここがミッドチルダであること、時空管理局や機動六課のことも、知らないようだ。

このことから、彼は次元漂流者という事で間違いないだろうと、考えた。

「んゝ……。ということはやっぱり、菊池くんは次元漂流者かもしれへんな……。」

「次元漂流者？」

聞いたことない単語が出て来た。菊池ははやてに聞き返す。

だが、菊池の問いかけに答えたのは、シグナムだった。

「簡単に言えば次元の迷子だな。元いた世界から別の世界に飛ばされたもの達にも当てはまる」

「なるほど……。」

シグナムの説明を聞き、少し考える菊池に、はやてが質問する。

「それと、もう一つ。菊池くんが、うちの局員と戦っているところを見とってんけど……。」

あの召喚獣は何なん？ うちらは見たことないから……。」

すると菊池は腰からデッキを取り出し、傍にあったテーブルに置いた。

「これだ」

「カード？ いや、遊びじゃないんだけど……。」

しかし、菊池はフェイトの言葉を見せず、カードを1枚めくり、絵柄を見せる。

そのカードは【ジャスティス・ブリンガー】だった。

「これは……！ あの時の召喚獣……！」

「このカードのモンスターを〈デュエルディスク〉にセットし、〈デュエルディスク〉が、カードを読み込み、

それに成功すれば、バーチャルリアリティに再現できる。つまり、ホログラムのようなもので、殴られても痛くはない。

だが、こちらの世界に来てそれが現実になっている」

「現実！？ それってどういう……。」

菊池は淡々と言った。

「つまり、モンスターに殴られると痛みを覚える。この【ジャステイス・ブリンガー】のレベルなら、まだ重傷にはならない。だが、皆も見た、スターダスト……」

そう言葉を切って、フェイト達を見る。そして【スターダスト・ドラゴン】のカードをデッキから出し、テーブルの上に置く。

「こんなモンスターの攻撃を直に受ければ、重傷になってもおかしくない」

はやては、菊池の言葉に頷きながら言った。

「そうや。この召喚獣のレベルはA A。攻撃が直撃したらひとたまりもないで」

菊池は、一人ポツンと呟くように言った。

「ただ分からない。何故この世界では現実のものとして、現れるのか……。」

菊池が話し終わると、フェイトが質問してきた。

「ねえ、菊池くん。向こうでは何の仕事に就いていたの？」

「警察官として働いていた。もちろん下っ端だけだな。幹部にはむいてないし」

菊池がそう言うのと、フェイトが「へー。そうなんだ」と相槌を打ち、尋ねる。

「大変でしょう？ 仕事は」

菊池は苦笑する。

「まあな……。だけど、やりがいがある仕事だよ。市民を守るという使命感。あれは自分を奮い立たせてくれたしね」

その言葉に、はやては菊池の方を見ながら、呟く。

「それやったら、問題なさそうやな……」

はやての言葉に菊池は、はやてを見る。

そんな菊池にはやては、菊池をしっかりと見ながら言った。

「菊池くん。この機動六課に入ってくれへんか？」

「えっ？」

「はやて!？」

「あ、主はやて!？」

突然のはやての勧誘に、フェイトだけではなく、はやて以外の全員が驚いた。

「この機動六課には沢山エースがおるけど戦力は多い方がええ・

。。どうやる？」

「いいのか？俺は戦力としては、役に立たんと思うが・・・」

菊池の言葉に、はやてはとんでもないと言った。

「何言ってるの！？魔導師Sランクの実力を持ってる菊池くんが、戦力にならんはずがないやん」

「Sランクって・・・、そんなにすごいのか？」

菊池はフェイトに尋ねる。

「Sランクって、高ランクの魔導師がたくさんいる機動六課でも、上位に入るほどの実力だよ。もっと自信持っていんだよ」

フェイトが菊池の肩に手を置いて言った。

（この人達は、俺を必要としている・・・。ここまで世話になっておきながら、断ることはできないな・・・）

菊池はフツと笑うと、言った。

「まあ、他に行く所も無いし、俺でよければ力になるよ」

「ほんまか！　ありがとう菊池くん！」

はやては嬉しそうに笑った。

「ほな、私はカリムのところに行かないけないからリイン、菊池く

んに六課を案内してあげてな？」

「了解です」

はやてはフェイトと一緒に部屋から出て行った。

シグナム、ヴィータも菊池達に一声掛け、部屋から出て行った。

「それじゃあ菊池さん、六課を案内します」

リインが菊池の肩に座る。

菊池のことが気に入ったようで、リインの表情は明るく、嬉しそうだ。

菊池達は、医務室から出て、リインの案内の下、六課を見て回るようになった。

第四話 「六課メンバーとの邂逅」 (後書き)

作者「ようやく、リリカルなのはのキャラクターを登場させて、主人公と会話させたぜ・・・」

菊池「会話なら、もうすでにやっているぞ。バカ作者」

作者「うるさいなあ。細かいこと気にし過ぎなんだよ、お前は」

菊池「分かってるって。本格的にリリカルなのはのキャラクターが絡んでくるんだよね？」

作者「そういうこと。今回、第四話を投稿することになりましたが、第五話、もしくは、第六話はおそらく、10月になると思います。皆さん、今後の展開に期待して下さいとは思いますが、宜しくお願いします」

菊池「何でだよ。サボらず書けよ」

作者「アホ！俺も期末テストがあるんだよ！！それを疎かにできるか！」

菊池「そんなの、どうでもいいだろ・・・」

作者「いや、良くないからね！？単位落としたら、笑えないし！！ねえ、聞いている！？ねえ！！」

第五話 「絆を示せ!」「ニトロ・ウォリアー!」 (前書き)

すみません。前回、第五話はもう少し、先になると言いましたが、思ったよりもアイデアが浮かび、手が進みましたので、完成しました。

急いで作ったので、グドグドかもしれません。

第五話 「絆を示せ!」「ニトロ・ウォリアー」!!」

「此処がデバイスルームです」

リインに六課を案内してもらい、大体の場所は把握出来た。

「成るほど。そう言えば俺のデュエルディスクは此処にあるんだ?」

「はいです。シャーリーが見てくれてるはずです。」

菊池達が入ると、一人の女性がいた。

おそらく、彼女がシャーリーなのだろう。

何やら話し合っているシャーリーに、声をかけるリイン。

「シャーリー!」

リインの声に気づき、シャーリーはデュエルディスクを手に持って、こちらにやって来る。

「あっ、リインさんと、どちら様ですか?」

「君が手に持ってるデュエルディスクの持ち主の、菊池雅之だ」

「はじめまして、菊池さん。構造は分からないので、特に弄ってはいませんが、一部だけ部品が取れていましたので、つけておきました」

そう言ってシャーリーは、デュエルディスクを渡してくれた。

「私は、シャリオ・フィニーノって言います。皆はシャーリーって呼ぶからそう呼んでね」

シャーリーは、手を差し出してきた。

菊池は彼女の手を、そっと取る。

「分かった。よろしくシャーリー」

菊池が手を離すと、シャーリーは、思いついたように言った。

「あと、あのバイクもメンテナンスしておきました。また時間があれば、あのバイクのこと、色々教えて下さい」

「ああ。暇があればいつでも教えよう」

ここで、会話に入れず、黙っていたリインが菊池に話しかけた。

「菊池さん、次はなのはさん達が訓練してる所に案内するです」

「分かった」

「あっ、私もついて行って良いですか？ みんなのデバイスのデータを採りに行くの」

「それじゃ3人でレッツゴーです」

菊池とリインとシャーリーは訓練場に向かった。

「訓練場」

「みんな、少し休憩しようか」

フォワード達がストレッチをしているところに、菊池達がやって来た。

「なのはさん。ヴィータ！シグナム！」

訓練場には、隊長三人とフォワード達が休憩していた。

「リイン！と、菊池か」

「そうです。今日から私達の仲間になりましたから案内で来ました」
「なのはとフォワード達が集まって来た。」

「あ、君は・・・」

栗色の長髪をサイドポニーにした女性が菊池に気付く。この女性が、なのはなのだろう。

菊池も彼女には見覚えがあった。【スターダスト・ドラゴン】の攻撃を見事に防いだのだから。

咄嗟に菊池は頭を下げ、謝る。

「あの時はすまなかった。取り乱していたとはいえ、危害を加えようとしてしまって・・・」

「あはは・・・。私は気にしてないから、大丈夫だよ」

なのはは菊池のシュンとした姿を見て、苦笑する。

「はい・・・」

「君が菊池くんだね？はやてちゃんからお話は聞いてます。私は高町なのは、機動六課スターズ分隊の隊長をやってます。よろしくね」

「は、はい・・・。こちらこそ」

なのはの元気な挨拶に、戸惑い気味になりながらも、菊池は挨拶を返した。

「それじゃ、この中で菊池さんを知らない人はいますか？」

リインの質問に、2人が手を挙げた。

「あっ、そうか。あの2人にはまだ、紹介してなかったね」

「確かにあの二人は、菊池とは会ってなかったな」

なのはもシグナムも、菊池の紹介を忘れていたようだ。

リインがフォローに回る。

「えっと、じゃあ菊池さん。自己紹介よろしくです」

「菊池雅之だ。よろしくな」

「エリオ・モンディアルです。」

「キャロ・ル・ルシエと、フリードリヒです。フリードって呼んで下さい。」

「きゅー」

自己紹介が終わる。

「菊池くん、これからガジェットを相手して貰っても良いかな？」

なのはが聞いて来る。

「・・・？・・・どうしてだ？」

「菊池くんがそのデュエルディスクで戦うところを、みんなに見せたいから」

菊池の左腕に着けられているデュエルディスクを見ながら、なのはがニツコリ笑う。

前の件もあり、菊池はあまり乗り気ではなかったが、なのはの笑顔に押された。

「分かった。やろう」

「ありがとう菊池くん」

訓練場中央に立った菊池は、デュエルディスクを起動させる。

「準備良いかな？」

「大丈夫だ。いつでも来い」

なのははシャーリーを見た。

シャーリーはパネルを操作すると、菊池の周りにガジェットが現れる。

「L A D Y・・・G O！」

なのはの掛け声でガジェットとの模擬戦が始まった。

菊池 L P 8 0 0 0

「さて、なんだかんだ言って模擬戦やることになってしまったわけだが・・・」

菊池の周りにはたくさんガジェット。普通にモンスターを召喚...としていては押し潰されてしまうだろう。

さて、どうしたものかな・・・。

こんなにたくさんあるとは思わなかった。正直、数の多さに冷や汗が流れる。

けど・・・！！

俺にはカードとの絆がある。カード達を信じて戦うんだ！！

菊池は決意を固めると、デッキからカードをドロ―し、微笑む。

「まずは、こいつだ！手札のモンスター1体を墓地に送り、【クイック・シンクロン】を特殊召喚する！」

【クイック・シンクロン】 攻700

「さらに墓地に送った【ボルト・ヘッジホッグ】の効果発動！自分フィールド上にチューナーが存在する場合、このカードを墓地から特殊召喚する事ができる。来い、【ボルト・ヘッジホッグ】！」

【ボルト・ヘッジホッグ】 攻800

なのはは、早速シャーリーに尋ねる。

「シャーリー！あの二体の召喚獣のランクは？」

「ちょっと待ってください、もうすぐ出ますから……。えっ、これだけ？」

「どうした？」

「何があっただんですか？」

シャーリーの反応に、違和感を抱いたシグナム達が、画面に表示された二つのモンスターのランクを見て、驚いた。

「何これ・・・」

「何だこれは！？Cランクって・・・、菊池はSランクの魔導師じゃないのか？何故、ランクの低い召喚獣を使うのだ？」

菊池は、シグナムの問いに、直接は答えなかった。

「シグナム！何も俺は、お前たちを馬鹿にしているんじゃない。見せてやる。俺達の絆を！！」

【クイックシンクロン】、【ボルト・ヘッジホッグ】の2体とも、菊池の方を見て、頷く。準備はOKのようだ。

「行くぞ！！レベル2の【ボルト・ヘッジホッグ】に、レベル5の【クイック・シンクロン】をチューニング！」

すると、【ボルト・ヘッジホッグ】と、【クイック・シンクロン】が空高く舞い上がる。

「「これは一体！？」」

菊池の戦闘を見ていない、エリオとキャロは呆然としている。

「「「これはあの時の！！」」」

エリオとキャロ以外のメンバーは、また【スターダスト・ドラゴン】が出ると思った。

「集いし思いがここに新たな力となる。光差す道となれ！シンクロ召喚！燃え上がれ、【ニトロ・ウォリアー】！」

【ニトロ・ウォリアー】 攻2800

「シャーリー、今度はどう？」

「すごい、一気にAランクまで上がりました！」

「何!？」

「菊池くん、すごい・・・」

菊池は、【ニトロ・ウォリアー】に命令する。

「行け! 【ニトロ・ウォリアー】!! ダイナマイト・ナックル!」

【ニトロ・ウォリアー】は、菊池の声を聞くと、ガジェットに突撃する。

逃げていくガジェットもあったが、【ニトロ・ウォリアー】の巨大な拳での攻撃の余波を受け、全滅した。

ガジェット? 型が全滅すると、ガジェット? 型が空からやってきた。

「ちょっと厳しいな…。【素早いモモンガ】を召喚してターンエンド！」

【素早いモモンガ】 攻1000

俺の手札に敵の攻撃を止めるカードは無い。ここは大きなダメージを受けることを、覚悟するしかない。

空からやってきたガジェット？型は、【素早いモモンガ】に狙いを定め、攻撃した。

ガジェット？型の攻撃で菊池は、【素早いモモンガ】が破壊された余波によって、ダメージを受けた。

「うああっ！！！」

菊池 LP8000↓5800

「「「菊池くん！！！」」」

「まっ、まだだ……。このカードが戦闘によって墓地へ送られた時、1000ライフポイント回復する。さらにデッキから【素早いモモンガ】をフィールド上に表側守備表示で特殊召喚する事ができる」

菊池 LP5800↓6800

菊池の場には、2体の【素早いモモンガ】、【ニトロ・ウォリアー】がいた。

「行くぞ、俺のターン！ドロー！！」

（早速来たか！このデッキのキーカードが・・・！）

「俺は【ジャンク・シンクロン】を召喚！！」

【ジャンク・シンクロン】 攻1300

「また、新しい召喚獣！？」

「【ジャンク・シンクロン】の効果発動！このカードが召喚に成功した時、自分の墓地に存在するレベル2以下のモンスター1体を、守備表示で特殊召喚する事ができる。来い、【素早いモモンガ】！！」

【素早いモモンガ】 守100

次に現れたのは先ほど消滅した、【素早いモモンガ】だった。

だが、身体を青色に染め、守備の体勢だった。

「これじゃ、ガジェットに勝てない……。菊池さん、大丈夫かな……。？」

キャロは不安そうに菊池を見つめる。そんなキャロをエリオは励ます。

「大丈夫だよ。あの人には絆があるから」

菊池は叫ぶ。

「レベル2の【素早いモモンガ】にレベル3の【ジャンク・シンクロン】をチューニング！」

今度は、【素早いモモンガ】と、【ジャンク・シンクロン】が空高く舞い上がる。

なのは達は何が出るのか、見守る。

「集いし星が新たな力を呼び起こす。光差す道となれ！シンクロ召喚！出でよ、【ジャンク・ウォリアー】！」

【ジャンク・ウォリアー】 攻2300

「また、Aランクです！」

シャーリーは驚いていた。こうも立て続けに、Aランクの召喚獣を出すことに…。これは並大抵の実力がなければできない。

【ジャンク・ウォリアー】が召喚された時、菊池の場の2体の【素早いモモンガ】の身体が青白く光り、【ジャンク・ウォリアー】に吸収される。

「「「これは!?!」」」

「【ジャンク・ウォリアー】の効果、パワー・オブ・フェロウズだ。」

「「「パワー・オブ・フェロウズ?」」」

「【ジャンク・ウォリアー】はシンクロ召喚に成功した時、攻撃力が、自分フィールド上に表側表示で存在するレベル2以下のモンスター1体の攻撃力の合計分アップする。よって【ジャンク・ウォリアー】の攻撃力は、2体の【素早いモモンガ】の攻撃力分の、2000ポイントが加算される。」

「「「2000ポイント!?!?!」」」

【ジャンク・ウォリアー】 攻2300↓4300

「【ニトロ・ウォリアー】と、【ジャンク・ウォリアー】で、攻撃!?!」

【ジャンク・ウォリアー】は背中のウィングに取り付けたブースターで加速し、右の拳でガジェットに攻撃する。

【ニトロ・ウォリアー】は、背中のタンクで加速し、両拳で攻撃した。

【ニトロ・ウォリアー】と、【ジャンク・ウォリアー】の攻撃で、ガジェットは爆散した。

「シャーリー、次は?型を出して」

「はい」

シャーリーがまたパネルを操作する。

「またガジェットか」

(ちょっと強そうだが、ここは押し切る!!)

「俺のターン、ドロー! バトル、行け、【ジャンク・ウォリアー】
! スクラップ・フィスト!!」

先ほどと同じように、【ジャンク・ウォリアー】は背中のウィングに取り付けたブースターで加速し、右の拳でガジェットに攻撃する。

だが、ガジェットはバリアを張ったらしく、攻撃が本体に届いていないようだ。

「なら、速攻魔法、【エネミーコントローラー】を発動!! 相手フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体の表示形式を変更する! これで、バリアは無効だ!!」

ガジェットはバリアを解き、【ニトロ・ウォリアー】に向き合う。

「さらに、自分のターンに自分が魔法カードを発動した場合、そのターンのダメージ計算時のみ、

1度だけこのカードの攻撃力は1000ポイントアップする!!」

【ニトロ・ウォリアー】 攻2800↓3800

「行け! 【ニトロ・ウォリアー】!! ダイナマイト・ナックル!!」

【ニトロ・ウォリアー】の一撃が、ガジェットを破壊した。

?型が爆発して粉々になった。

第五話 「絆を示せ!」【ニトロ・ウォリアー】!!」(後書き)

作者「【ニトロ・ウォリアー】って、こんなに強かったかな?」

菊池「アニメ遊戯王5D'sでも、【ゴヨウ・ガーディアン】を戦闘破壊したモンスターだし、攻撃力も2800。上級モンスターの攻撃力の最低ラインに、届いているし、問題無いね」

作者「それはそうだが……。って、上級モンスターの攻撃力の最低ラインは2800だったのか?」

菊池「当たり前だろ。もし、攻撃力が2800未満なら、レベル6で攻撃力2800の破格のステータスを持つ、【ゴヨウ・ガーディアン】に戦闘破壊されて、御用されるからな。つまり、上級モンスターの攻撃力の最低ラインを作った張本人が、【ゴヨウ・ガーディアン】だ。このモンスターに泣かされたモンスターも多い」

作者「例えば?」

菊池「例えば、【森の番人グリーン・バブーン】だな」

【森の番人グリーン・バブーン】 効果モンスター

星7/地属性/獣族/攻2600/守1800

自分フィールド上に存在する獣族モンスターが破壊され墓地へ送られた時、1000ライフポイントを払って発動する事ができる。

このカードを手札または墓地から特殊召喚する。

作者「へえ。じゃあ、戦闘で破壊されても特殊召喚できるんだな」

菊池「残念ながら、それはできない」

作者「何でだよ!？」

菊池「俺に文句言っても意味ないぞ。実は、公式発表された裁定変更により、ダメージステップでは効果を発動させることができなかった。このため、獣族モンスターが戦闘破壊された時には効果を発動することができないことになったんだ」

作者「と、いうことは・・・？」

菊池「効果を発動できるのはダメージステップ以外での破壊、つまりカードの効果で獣族モンスターが破壊された場合になるな」

作者「それじゃ、使いにくいな・・・」

菊池「あと、【大地の騎士ガイアナイト】というモンスターもその一員だ」

作者「どんなモンスターなんだ？」

菊池「こんなモンスターだ」

【大地の騎士ガイアナイト】 シンクロモンスター

星6／地属性／戦士族／攻2600／守 800
チューナー＋チューナー以外のモンスター1体以上

作者「効果は無いのか？」

菊池「無い」

作者「それじゃ使えないな。【ゴヨウ・ガーディアン】より、攻撃力が劣っているにも関わらず、効果がないとは・・・」

菊池「まあ、そう言うな。この世に不必要なカードなんて無い。どんなカードも使い方次第で使えるカードになる」

作者「かつこいいこと言うなあゝ・・・って、それは遊星のセリフじゃないか！人のセリフをパクってじゃねえよ！」

菊池「良いじゃないか。減るもんじゃないし」

作者「人のセリフを、自分のセリフのように話すなって言ってるの！！！」

第六話 「菊池の前に立ち塞がる、烈火の将・シグナム!!」 (前書き)

書く勢いが止まりません。第六話まで投稿できました。
今日も、この勢いで、二つほど投稿したいものです。

第六話 「菊池の前に立ち塞がる、烈火の将・シグナム!!」

「これで終わりか？」

【ニトロ・ウォリアー】が、ガジェット？型を破壊したのを確認すると、デュエルディスクを収めようとした。

そこへバリアジャケットを展開したシグナムが、菊池の前に立つ。

甲冑を纏い、愛剣のレヴァンティンを手に持っている。

「今度は私と模擬戦だ」

「いいだろう。その勝負、受けて立つ！」

菊池は新たなデッキを装着し、シャッフル。そしてカードを五枚引く。

「デュエル!!」

菊池 LP 8000

「俺のターン！俺は【トライカラー】を守備表示で召喚！」

【トライカラー】 守300

菊池が出したモンスターは青いカラーリングをした機械のようなモンスター。

攻撃力が低いいため、守備表示にしている。

「カードを2枚伏せる!!」

「行くぞ、菊池!!」

シグナムはレヴァンティンを振り、【トライクラ―】を破壊する。

「【トライクラ―】が戦闘で破壊された時、デッキから【ヴィークラ―】を特殊召喚できる!」

【ヴィークラ―】 守200

次に現れたのは茶色の機械のようなモンスターだ。

「しかし、私の攻撃は終わりではないぞ!!」

シグナムはそのままレヴァンティンを振り下ろし、【ヴィークラ―】を破壊した。

「【ヴィークラ―】が戦闘で破壊された時、デッキから【アンサイクラ―】を特殊召喚できる!」

【アンサイクラ―】 守100

さらに現れたのは一輪車の機械のようなモンスターだった。

「何度も現れるなら、何度でも破壊するまでよ!!」

「それはここまでだ、シグナム!! 胃発動! 【くず鉄のかかし】

!! 相手モンスター1体の攻撃を無効にする!!」

シグナムが3度目の攻撃をしようとした時、【アンサイクラー】の前に【くず鉄のかかし】が現れ、攻撃を防ぐ。

シグナムと菊池の攻防を見続けるなのは達は、菊池の実力に驚いていた。

「すごい・・・、三連続で召喚獣を召喚するなんて・・・」

「あのシグナム副隊長と互角に戦っている・・・」

ここで菊池のターンとなった。

「俺のターン!」

菊池はドロウしたカードを確認すると、フツと笑った。

シグナムは怪訝そうな表情で菊池を見る。

「俺は【デブリ・ドラゴン】を召喚!」

【デブリ・ドラゴン】 攻1000

「このカードが召喚に成功した時、自分の墓地に存在する攻撃力500以下のモンスター1体を攻撃表示で特殊召喚する事ができる。来い、【トライクラー】!」

【トライクラー】 攻300

出て来たのはさっき破壊された【トライクラー】だった。

「レベル1の【アンサイクラー】と、レベル3の【トライクラー】に、レベル4の【デブリ・ドラゴン】をチューニング！」

すると、【アンサイクラー】と【トライクラー】、【デブリ・ドラゴン】が空高く舞い上がる。

【デブリ・ドラゴン】が4つの輪と成り、その中に【アンサイクラー】と【トライクラー】が潜ろうとする。

【アンサイクラー】と【トライクラー】が、4つの輪の中に入り、光となる。

「集いし願いが新たに輝く星となる。光差す道となれ！ シンクロ召喚！ 飛翔せよ、【スターダスト・ドラゴン】！」

【スターダスト・ドラゴン】 攻2500

【スターダスト・ドラゴン】の登場に、なのは達は興奮を隠せなかった。

「この召喚獣、あの時の・・・！」

「綺麗・・・」

スバルやティアナ、なのはは前にも一回見たことがある。

それでも、感動しているようだ。

何故なら、【スターダスト・ドラゴン】の翼が羽ばたくたびに光の粒子が舞い落ちる様が、綺麗で見とれてしまうほどだったからだ。

シグナムも【スターダスト・ドラゴン】に見とれているようだ。

「行け！ 【スターダスト・ドラゴン】！！シューティング・ソニック！！」

【スターダスト・ドラゴン】の口から膨大な魔力が発生し、銀色のブレスがシグナムに向かう。

シグナムは一瞬慌てたが冷静に対処する。

《プロテクション》

シグナムは一旦、【スターダスト・ドラゴン】の攻撃を受け止めた後、改めて攻撃するようだ。

猪のように突っ込んでくるのかと思っていた菊池は思わず、

「やるな。さすがだ」

と、不敵に笑った。

それを見たシグナムは、お互い様だと言い、さらに

「今度はこちらから行くぞ、菊池！」

と、菊池に向かって言った。

そんなシグナムの堂々とした姿に、菊池は燃えた。

「来い、シグナム！！全力で相手する！！」

デュエルディスクを構え直しながら、菊池は答えた。

「レヴァンティン、カートリッジロード！」

《エクспロージョン》

レヴァンティンがカートリッジを一発ロードする。

ガシヨンという音と共につばの部分がスライドし葉きょうが排出される。

そして、レヴァンティンの刀身を魔力の炎熱変換により炎が包み込む。

「紫電一閃！」

シグナムは、そう叫びながら、【スターダスト・ドラゴン】に向かってダッシュする。

【スターダスト・ドラゴン】に突進しながら、シグナムはカートリッジをさらに二発ロードした。

そして【スターダスト・ドラゴン】の近くまで接近したシグナムは、【スターダスト・ドラゴン】を一刀両断した。

紫電一閃が、【スターダスト・ドラゴン】に命中したため、煙が

上がる。

菊池以外の誰もが、シグナムの勝利を確信する。カートリッジを計三発もロードした紫電一閃を、まともに食らったのだ。

無事で済む訳がない。

そう思ったからだ。

だが、菊池は俯きながらも笑っていた。

そう、口の端を僅かに歪めて。

【スターダスト・ドラゴン】に一撃を与え、菊池と距離を取ったシグナムが、それを見つけて咎める。

「何が可笑しい!？」

シグナムの咎めを菊池は無視し、顔を上げ、シグナムに言った。

「ふふ、こんな面白い戦いは初めてだ。感謝するぞ、シグナム」

シグナムは菊池の言葉に疑問を持ち、尋ねる。

「何が言いたい?」

菊池は不敵な笑みを崩さず言った。

「ここまで真剣に正々堂々と、俺に勝負を挑んでくる相手はお前が初めてだ。感動のあまり、思わず発動タイミングを逃すところだ

った。俺は、お前の攻撃が当たる寸前に、このカードを発動していたのさ」

菊池はソリットビジョンで映し出された、自分が発動したカードを指差して言った。

「畏カード、【バスター・モード】をな！！」

第六話 「菊池の前に立ち塞がる、烈火の将・シグナム!!」 (後書き)

作者「来たな、バトルマニアが」

菊池「俺は、勝てるのか？」

作者「大丈夫大丈夫。そこんところは、主人公補正で何とでもなるから」

菊池「それは言っではいけないお約束だな。それにしても、俺って【スターダスト・ドラゴン】を幾度となく、召喚してないか？」

作者「いいじゃん。強いし、問題無いだろ」

菊池「効果は良いんだけど、攻撃力が2500とは少々心もとないな・・・」

作者「そこは魔法、罫で補えよ。デュエルはモンスターだけでは勝てんぞ」

菊池「分かってるよ。だから、【バスター・モード】なんてカードまで使ったんじゃないか！」

作者「何出そうとしてるのかは、大体想像つくけどね」

菊池「こんな駄文を読んでもくれる読者の方々に、ただただ感謝です。次回の話までは、戦闘描写になると思いますが、これからも本作品を、宜しく願います」

第七話 「仲間を包む星となれ！ ヴィクテム・サンクチュアリ！！」 **（前書き）**

ここの話は、アイデアが頭の中で出来上がっていたので、すんなり書けました。今日は、もう少し書けるだろうか・・・？

第七話 「仲間を包む星となれ！ヴィクテム・サンクチュアリ！！」

「【バスター・モード】だと！？何だ、それは！？」

「シグナム、このカードは、自分フィールド上に存在するシンクロモンスター1体をリリースして発動するんだ。そして、リリースしたシンクロモンスターのカード名が含まれる「／バスター」と名のついたモンスター1体を、自分のデッキから攻撃表示で特殊召喚する！！」

「何！？私の攻撃が当たる前に発動するとは・・・！」

「お前には感謝しているんだ。こんな風に勝負に熱くなったのは久しぶりなんだから・・・」

菊池の呟く声と共に、煙の中から銀色に光る閃光が空に飛翔する。

「現れよ！【スターダスト・ドラゴン／バスター】！！」

【スターダスト・ドラゴン／バスター】 攻3000

現れたのは、銀色の鎧を装備したような姿の【スターダスト・ドラゴン】だった。

「【バスター・モード】！？さっきの召喚獣からモードチェンジしたのか！？」

「あの時、シグナムの攻撃が当たる寸前で発動させたんだ・・・。
すごい・・・。」

「菊池くん、あんな召喚獣を召喚できるなんて……。さすがSランク魔導師だね」

ヴィータは、【バスター・モード】の効果に驚きを隠せず、フェイトは菊池の戦い方に驚いていた。

なのはは菊池の力量に感心しつつ、内心では菊池と戦ってみたいと考えていた。

一方、フォワード陣はめずらしい戦いに、驚きのあまり、言葉も出ないようだ。

「俺のターン！」

菊池 LP8000

「バトルだ！ 【スターダスト・ドラゴン／バスター】で攻撃！！
アサルト・ソニック・バーン！！」

【スターダスト・ドラゴン／バスター】の口から膨大な魔力が発生し、銀色のブレスがシグナムに向かう。

シグナムは防ぐしかないと考え、プロテクションを張る。

ここで、菊池は【スターダスト・ドラゴン／バスター】の効果を使う。

「【スターダスト・ドラゴン／バスター】の効果発動!!」

「何!?!」

「このカードをリリースする事で、魔法の効果が無効にし破壊する!! ヴイクテム・サンクチュアリ!!」

【スターダスト・ドラゴン／バスター】は光の粒子と成り、シグナムが張ったプロテクションを包み込む。

するとプロテクションは消滅してしまった。

「なっ、何だと!」

そして、リリースする前に放たれた銀色のブレスがシグナムに直撃する。

「ぐあああっ!?!」

シグナムはレヴァンティンで少し衝撃を弱めたものの、ほぼ直撃であったため、吹っ飛ばされた。

そのままシグナムは仮想シミュレータで映し出された廃墟ビルの壁にめり込んだ。

シグナムが激突したビルから煙が立ちこめ周囲に広がる。

菊池はその場所を眺めながらも、油断することなく、戦闘態勢を解かずにいる。

「俺はカードを1枚伏せてターンエンド。そして、この効果を発動するためにリリースされ墓地に存在するこのカードを、自分フィールド上に特殊召喚する事ができる！！戻って来い、【スターダスト・ドラゴン／バスター】！！」

再び菊池の場に現れた【スターダスト・ドラゴン／バスター】。

それを見て、なのは達は驚くしかなかった。

「何だよ、あの召喚獣。魔法を無効にするって…、そんなことをされたら、こっちは魔力を無駄に消費するしかないじゃねえか！あんなの一体どうやって倒すんだよ！？」

ヴィータは呻いた。

無理もない。魔法を使って戦う者、つまり魔導師にとって魔法とは武器に等しい。

それを無効にするということは、自分達の戦いの幅が狭くなる。相手を倒すことが困難になるのだ。

「シグナムさんがあそこまで苦戦するなんて…」

なのはも菊池の強さに驚くしかない。

ヴィータとなのはの2人は、そう言ったが、フェイトは何も言わず、ただ黙って菊池とシグナムの戦いを見ていた。

（あの召喚獣を菊池くんが出したのには、何か訳があるんじゃない？ただシグナムに勝つために出したとは思えない。ヴィクテム・サックチュアリ・・・。victimは『犠牲者』、sanctuaryは『聖域』と意味だったはず・・・。あの召喚獣は一体何を意味しているの？）

フェイトは、菊池の横顔を見ながらそう思った。

やがて、ビルの屋上部分から爆発のようなものが起き、そこからシグナムが飛び出してきた。

体中、埃を被っているが、傷などはなかった。ビルの壁に激突する瞬間に魔法で衝撃を和らげたようだ。

（まさか、あの召喚獣に魔法を無効にする効果があったとは…。だが、それも嬉しい誤算と言うものだ！）

シグナムは驚いていた。自分の魔法が無効にされたこともあるが、

菊池が自分よりも強いことだ。

昔から、シグナムは自分より強い相手との戦いを望んでいた。その相手が今、目の前にいる。

願ってもないことだ。なら、できることは一つである。

自分の渾身の一撃を相手にぶつけること・・・！！

「レヴァンティン！！」

《シュランゲンフォルム》

シグナムは自分の全力を出すため、持っている魔力のほぼ全てをつぎ込むように、カートリッジをロードして連結刃にした。

「来るか・・・！俺のターン！俺は装備魔法、【魔導師の力】を【スターダスト・ドラゴン／バスター】に装備！！装備モンスターの攻撃力・守備力は、自分フィールド上に存在する魔法・罠カード1枚につき、500ポイントアップする！俺のフィールド上に存在する魔法・罠カードは3枚！よって1500ポイントアップする！！」

【スターダスト・ドラゴン／バスター】 攻3000↓4500

「飛竜一閃！！」

シグナムはレヴァンティンを鞘から抜くと、刀身は「シュランゲフォルム」により鞭のようになり、彼女の魔力の色である紫色を帯びていた。

そして、その鞭は大蛇のようにその巨大な魔力を帯び、【スターダスト・ドラゴン／バスター】に向かう。

シグナムの現在持っている魔力のほぼ全てを、注ぎ込んだ飛竜一閃を、【スターダスト・ドラゴン／バスター】はギリギリの戦いの中で、防いでいる。

シグナムが勝っているのかと言うとそうでもない。レヴァンティンが悲鳴を上げている。

【スターダスト・ドラゴン／バスター】の力によるものだろう。

だが、【スターダスト・ドラゴン／バスター】も耐えきれないようである。

となれば、お互いに相討ちとなる。

ついに、【スターダスト・ドラゴン／バスター】の攻撃の反動からか、レヴァンティンは碎けた。

それとほぼ同時に、シグナムの渾身の一撃が入り、【スターダスト・ドラゴン／バスター】が破壊された。

シグナムの魔力はほぼ無くなり、菊池も【スターダスト・ドラゴン／バスター】が破壊されたため、

引き分けということで、決着はついたかと思われた……。

だが……！！

「【スターダスト・ドラゴン／バスター】の特殊効果発動!!」

まだ、決着はついてはいなかった。

「「「「え!?!」」」」

「このカードが破壊された時、自分の墓地に存在する【スターダスト・ドラゴン】1体を特殊召喚する事ができる!! 戻って来い、【スターダスト・ドラゴン】!!」

【スターダスト・ドラゴン】 攻2500

そこに現れたのは、【バスター・モード】で【スターダスト・ドラゴン／バスター】になる前の、【スターダスト・ドラゴン】がいた。

「シグナム! お前の想い、確かに受け取った!! だから、俺も前に全力をぶつける!!」

シグナムは満足そうに頷く。

もう防御する力も残って無いようだ。

「行け! 【スターダスト・ドラゴン】!! シューティング・ソニック!!」

菊池は迷うことなく【スターダスト・ドラゴン】に命令する。

【スターダスト・ドラゴン】は、シグナムに無情の一撃を与えた。

シグナムはその一撃をまともに喰らい、その場に倒れ伏した。

第七話 「仲間を包む星となれ！ヴィクテム・サンクチュアリ！！」（後書き）

作者「またまた、投稿できました」

菊池「いくらなんでも、ぶっ飛ばしすぎじゃないか？」

作者「でもさ、この機会を逃したら、当分の間更新できないから、今のうちにとあってね」

菊池「なるほどね…。でも、急ぎ過ぎて、質の悪い話を書くなよ。読者の方に失礼だぞ」

作者「大丈夫。そこらのことは分かってるさ」

菊池「それにしても、【スターダスト・ドラゴン／バスター】は強すぎるな…。除去するのに、一苦労するんだよ」

作者「遊星も、アクセルシンクロなんてしないで、【スターダスト・ドラゴン／バスター】で戦えばいいのに・・・」

菊池「あー！！それ言っちゃダメ！大体、【スターダスト・ドラゴン／バスター】はさ、コントロール色が強すぎるんだよ。主人公がそんなカードで、一方的なデュエルしたら、かっこ悪いし、おもしろくないだろ！」

作者「た、確かに・・・」

第八話 「長かった模擬戦も、ようやく終了・・・。」（前書き）

最近、サブタイトルを考えるのが、しんどくなってきました。ですが、それでも読者の方の期待に添えられるよう、頑張ります。

第八話 「長かった模擬戦も、ようやく終了……。」

菊池との戦いで、地面に倒れ伏したシグナムをフェイトとヴィータが医務室に運んで行った。

シグナムを運ぶフェイトとヴィータの背中を見送った菊池は、なのはを見る。

「はい、これで模擬戦は終了です。お疲れさまでした」

なのはは、模擬戦の終了を告げた。菊池もデュエルディスクを元に戻すと、ふうと一息吐いた。

リインが菊池にタオルを渡してきた。

「お疲れ様です。もうすぐ夕飯なので食堂に行きましょう」

菊池は左手に着けた腕時計を見る。確かにもう夕飯時だ。こんな時間まで模擬戦をやっていたようだ。

「分かった。行こう」

「レッツゴーです」

（食堂）

食堂に着くと人でいっぱいだった。

「たくさんの人でいっぱいだな……。空いてる席は……」

キヨロキヨロと周りを見て探していると、

「リインさくん、菊池さくん！」って呼ぶ声が聞こえ、そちらを見るとスバル達が夕飯を食べていた。

「ここに丁度二人分空いてますよ」

他に空いている場所は無いらだったので、菊池達はお邪魔した。

何故か、リインにあくんされて、周りから嫉妬の視線を浴びながらの夕飯を終え、一息着く。

「菊池さん、質問して良いですか？」

エリオがそう言ってきた。

「ん？ 答えられる範囲なら構わないが……」

「ありがとうございます。菊池さんは昼間の模擬戦の時、シンクロ

召喚って言うっていましたけど、あれってなんですか？」

「ああ、そのことか。ちょっと説明が長くなるが、構わないなら、説明するが……」

「そんなに、ややこしいんですか？」

スバルが、訊いてくる。

「そうだな……。まあ、できるだけ分かりやすく説明するよ。皆、できるだけ近くに寄ってくれ」

なのは達が菊池の近くによると、菊池は腰のデッキホルダーから、デッキを取り出しテーブルに置いた。

「まず、本題に入る前に、デュエルのことについて説明しておこう。いきなりシンクロ召喚の話をしてても理解できないと思う。これがデュエルで使用するカード、〈デュエルモンスターズ〉だ。これを40枚以上60枚以下まで用意するんだ。」

菊池はデュエルの方法を教える。

デュエルの流れ、種族、属性、カードの種類などを、なのはたちに教えていく。

「じゃあ。実際にカードを見ていくか。」

菊池はデッキを皆に見えるように絵柄のほうを見せた。

なのはたちはその絵を見つめていた。

かわいらしいものから、いかにも強そうなもの様々な絵がそこにあったからだ。

なのは達の様子を見ていて、菊池は思い出しように言った。

「さっき言ったカードの種類をわかりやすくするために、色を分けているんだ。黄色が通常モンスター、橙色が効果モンスター、紫色が融合モンスター、青色が儀式モンスター、緑色が魔法カード、赤紫色が罠カードだ。」

「たくさん種類があるんですね。菊池さんは、全部のカードを記憶しているんですか？」

カードを手に取りながら、ティアナが訊いてくる。

菊池は首を横に振る。

「いや、全部のカードを記憶してはいない。〈デュエルモンスターズ〉のカードは、たくさんあって覚えきれないんだ。」

「それで、結局シンクロ召喚って何なの？」

なのはが皆を代表して訊く。

「簡単にいえば、これだ。」

すると菊池は、【スターダスト・ドラゴン】のカードを見せた。

「あ！このドラゴン！！」

「綺麗……」

「何回見てもすごい……」

「うわぁ……」

「「かっこいいです」！」

上からスバル、なのはとティアナ、フェイト、キャロ、エリオ、
リインの順に感想を漏らす。

スバル、ティアナ、なのはは、どうやらもう一度見惚れているようだった。

菊池は【スターダスト・ドラゴン】のカードを机の上に置き、説明を始めた。

「このカードのように白色のカードは〈シンクロモンスター〉と呼ぶ。

〈シンクロモンスター〉は〈チューナー〉と呼ばれるカードが必要となる。」

「〈チューナー？〉」

フェイトが皆を代表して聞く。

「〈チューナー〉とは、〈シンクロ召喚〉をするとき必要なカードだ。〈シンクロモンスター〉は

「へチューナー」と他のモンスターとの「レベル」の合計が一緒でなければ召喚できないんだ。」

そう言うのと菊池はデッキから、【ジャステイス・ブリンガー】と、【ブライ・シンクロン】をテーブルに置いた。

「この【ジャステイス・ブリンガー】はレベル4、そしてへチューナーである、【ブライ・シンクロン】もレベル4。合計でレベル8だ。」

さっき言ったが「シンクロモンスター」は「へチューナー」と他のモンスターとの「レベル」の合計が一緒でなければ召喚できない。

【スターダスト・ドラゴン】のレベルは8だ。よって、さっき言った、条件をクリアしているから召喚は可能になる。」

「へえー。シンクロ召喚って、レベルに注意しないとできなかったんだ。菊池くんは、あんなに簡単そうに出してたけど・・・」

なのはは、菊池を感心そうに見つめて言った。

「慣れれば大丈夫だ。なのは、君にでも可能だ。さっき言った条件を守れば、基本は問題ない」

菊池は、なのはを見て言った。

「まだ、注意しなければいけないことってありますか？」

スバルが訊いてくる。

「そうだな……。シンクロ召喚で、他に注意すべきことといえば、二つある」

「それは何ですか？」

エリオは、興味深そうに訊いてくる。そんなエリオに、菊池は微笑みながら、エリオの頭を撫でる。

突然頭を撫でられ、驚いていたエリオだが、気持ち良さそうに目を細めた。

「まず、〈チューナー〉同士で〈シンクロ召喚〉は行えないことだ」

「えっ、チューナー同士ではできないんですか？」

キャロは驚いて、菊池に尋ねる。

菊池は頷く。

「【スターダスト・ドラゴン】のカードのテキストの部分をよく見してくれ。『チューナー＋チューナー以外のモンスター1体以上』って書いてあるだろう？だから、チューナー同士ではシンクロ召喚はできない。」

「なるほど。分かりやすいね。」

エリオとキャロは納得したようだ。

菊池は続ける。

「また、〈召喚条件〉がある〈シンクロモンスター〉がいることだ。」

「〈召喚条件〉、……ですか？」

フェイトが遠慮がちに訊いてくる。

「そう。〈召喚条件〉とは、カードのテキストに書かれている条件を、クリアしなければ、召喚できないんだ。

例えば、そうだな……。例となるシンクロモンスターは……、これだな……」

菊池はデッキから、【ニトロ・ウォリアー】、【ジャンク・ウォリアー】を取り出し、机の上に置く。

「カードのテキストの部分をよく見てもらったら、分かると思うが、チューナーが指定されてるんだ。」

「えっ、どういうこと？」

なのは達は今の説明では分からなかったようだ。菊池は、机の上に【スターダスト・ドラゴン】、【ニトロ・ウォリアー】、【ジャンク・ウォリアー】を並べた。

「【スターダスト・ドラゴン】の召喚条件が、『チューナー＋チューナー以外のモンスター1体以上』だというのは分かったと思う。これを頭に入れて考えてくれば、難しくない。【ニトロ・ウォリアー】の場合、『【ニトロ・シンクロン】＋チューナー以外のモンスター1体以上』、【ジャンク・ウォリアー】の場合、『【ジャン

ク・シンクロン』+チューナー以外のモンスター1体以上』となっているのは理解できるか？この二体の場合、チューナーは、『ニトロ・ウォリアー』の場合、『ニトロ・シンクロン』、『ジャンク・ウォリアー』の場合、『ジャンク・シンクロン』と指定されているんだ」

「……………あつ、なるほど！！」

「分かってくれたか？」

エリオとキャロ以外は理解してくれたようだ。

菊池は2人のために補足する。

「【スターダスト・ドラゴン】を出す場合、レベルに注意していれば大丈夫だ。チューナーは何でも良い。だが、『ニトロ・ウォリアー』を出す場合、チューナーは【ニトロ・シンクロン】を、『ジャンク・ウォリアー』を出すには、チューナーは【ジャンク・シンクロン】を使わなければいけないんだ」

この説明にエリオとキャロも理解してくれた。

「シンクロモンスターと一口に言っても、色々ある。だから、自分のデッキに合ったシンクロモンスターを選んで、デッキに入れるんだ。他にも、シンクロモンスターによって、『チューナー+チューナー以外のモンスター2体以上』と言った厳しい召喚条件があるものもある。これをクリアしない限り、召喚は行えない」

「何か私達みたいだね」

なのははそう言う。

なのは、フェイト、はやては魔力が高く、普段は制限がかけられている。

しかし、六課の隊長格の全員の容認があれば制限がはずされ、全力を出せるのだ。

「でも菊池さんは、【ニトロ・ウォリアー】を出すとき、【ニトロ・シンクロン】を使っていませんでしたよ」

ティアナが指摘する。

「良い指摘だ。確かに、俺は【ニトロ・シンクロン】を使っていない。だが、俺が代わりに使った【クイック・シンクロン】には効果がある」

「」「効果？」「」

なのは達が【クイック・シンクロン】のカードのテキスト部分を見る。

「このカードは「シンクロン」と名のついたチューナーの代わりにシンクロ素材とする事ができる。となっているだろう。これによって、【クイック・シンクロン】は、【ニトロ・シンクロン】の代わりになったんだ」

「すごいね。」

「大体こんなものだ。まだ説明仕切れていないところもある。詳し

「いことはまた機会があれば、いつでも教えよう」

菊池はそういつて説明を終えた。

「なんや、何かおもしろそうな話しとるな？」

丁度良い頃に、はやてが来た。

「ちょっと昼間の俺の模擬戦の事についての質問に答え、デュエルについて少し教えた。仲間には伝えておいた方がいいと思ってな」

「そっか。菊池くん、今話したい事がちよつとあるんやけどええかな？」

「大丈夫だ」

「良かった。ほな向こうで話そか」

菊池は、はやてに連れられ別の席に座る。

何か後ろに殺気を感じるが、とりあえず今は無視だ。

「で？ 俺に話とは？」

「菊池くんには明日、聖王教会に行つて欲しいんや」

「聖王教会？」

知らない菊池に、はやてが説明してくれる

「分かった。明日カリムって人に会えば良いんだな？」

「それと、もう一つやねんけど、フォワード達の訓練を、菊池くんにも手伝って欲しいんや。フェイトちゃんは多忙であんまり教導出来へんねん」

「まあ構わないが、大丈夫なのか？俺は教える資格を持ってないが・・・」

「大丈夫や。教えるって言っても、大したことないない。フォワード達の模擬戦の相手をしたり、なのはちゃん達の手伝いをしてくれればええから」

「分かった。ここに保護してもらってるわけだし、喜んで手伝うよ」

「ありがとう。菊池くん」

はやてとの話を終えると、フォワード達が菊池に駆け寄ってきた。

「菊池さん、僕もデュエルをしてみたいです！」

「私もしてみたいです！」

エリオとキャラが、目をキラキラさせて言った。

「かっこよかったなあー！菊池さんの【スターダスト・ドラゴン】・・・」

「姿もすごかったけど、モードチェンジしたら、魔法を無効にするって、強すぎるわよ・・・」

スバルとティアナも、それぞれ感想を漏らす。

「まあ、無敵ではないから、安心しろ。とは言っても、【スターダスト・ドラゴン／バスター】を倒そうと思えば、相当苦勞を強いられるけどな・・・」

菊池がそう言うと、

「菊池さん・・・それ、フォローになってませんよ・・・」

この時のティアナの鋭い指摘がキツかったと、菊池は思った。

第八話 「長かった模擬戦も、ようやく終了・・・。」（後書き）

作者「皆さん、お久しぶりです！ やっと、暇ができて投稿できました」

菊池「テストがあるんじゃないのか？」

作者「・・・そ、それは言わないでくれないか・・・？」

菊池「・・・まあ、ガンバレ・・・」

作者「これからも頑張っていきますので、よろしくお願いします。
では、この辺で失礼します」

第九話 「フィールドを駆け抜けろ!」【ロード・ウォリアー】!!」 (前書き)

最近、ネタが底をついてきました。

小説を書くのは、案外難しいものですね。

さて、いよいよ第九話です。そろそろ物語も中盤に差し掛かろうと
しています。

これからも、本作品をよろしく願います。

感想、意見等があれば、どしどしお寄せ下さい。

第九話 「フィールドを駆け抜けろ！【ロード・ウォリアー】！！」

（聖王教会）

翌日、菊池は聖王教会に来たのだが、何か感動を覚えずにはいられなかった。

菊池は生まれて初めて、教会と言う場所に足を踏み入れたためだ。

仕事でも、プライベートでも行くことが無かった菊池にとって、教会とは未知のところだった。

シスターシャツハが今、菊池をカリムのところに案内してくれている。

カリムのところに着くまでの間、菊池はシャツハと他愛もない話をしていた。

「へえ、何だか夢のような話ですね」

シャツハは、菊池の世界の話を聞くと、菊池に微笑みながら、そう言った。

「そうでしょう。僕もこの世界に来た時、魔法なんて夢じゃないかって思いましたからね」

菊池も苦笑しながら、シャツハに言った。

シャツハは夢のようだと言いながらも、菊池の話を馬鹿にすることなく、聞いてくれた。

相槌を打ったり、分からないところがあれば、質問してきた。

菊池はシャツハのことを、純粋な人なんだなという印象を持った。

やがて、菊池達はカリムの部屋の前までやって来た。

シャツハは、ドアをノックする。

コンコン！

「騎士カリム、機動六課から菊池さんがいらっしゃいました」

業務をしていたカリムは、丁度終わったのかペンを片付ける。

そして、ドアの方に声を掛ける。

「どうぞ」

ガチャ・・・。

菊池は部屋に入る

そこには、きれいな女性がいた。思わず感動した。

「ようこそ聖王教会へ。私は聖王教会の騎士、カリム・グラシアです」

「はじめまして、菊池雅之です」

菊池とカリムは、自己紹介を終わらせ席に着く

「今日あなたを呼んだのは私の能力で出た予言についてです」

カリムさんは予言が書かれた紙を取り出し、読む。

『聖王のゆりかごが落ちし後、次元を破滅に導く者が現れ、時と次元を越えし魔導師が世界を救うために参らん。そして時と次元を越えた魔導師は数多あまたの世界に旅立つ』

「と、少し気になる予言だからあなたに覚えが無いのか直接聞きたかったのよ」

「なるほど。確かに次元は越えたと思いますが、『時と次元を越えし魔導師』が俺を指したもののかは、分かりませんね。そもそも、俺は魔導師じゃないですし」

菊池は、カリムの言葉について、少し考えた後、素直に思ったことを言った。

「失礼します、騎士カリム」

そこへ紅茶を持って来たシャツハが部屋の中に入って来た

「じゃあ、この話は保留にして次はあなたの事について聞かせて？」

カリムは、話の転換を図った。

シャツハが紅茶をカップに注ぎテーブルに置く。

「大体の事は、はやてに聞いていると思いますし、今日の模擬戦のことでも構いませんか？」

「誰と模擬戦したのですか？」

シャツハが興味深そうに訊いて来た。

「ガジェットと、後、シグナムとやりましたが・・・、それが・・・？」

「シグナムと模擬戦したのですか！？」

シャツハが詰め寄って来た。

何故か目がキラキラとしている。何が嬉しいのだろうか？

「ああ・・・、ガジェットと戦った後、突然シグナムが乱入して来たんだ」

菊池はシャツハの勢いに思わず、たじろぐ。それでも、しっかりと昨日のことを言った。

「クスッ、シグナムらしいわね。はやてから聞いているわ。あなたは、なんでもカードを使って戦うそうね。シャツハ、一緒に紅茶を飲みながら聞きましょう」

シャツハも席に座り、菊池は今日のガジェットとの模擬戦、シグナムとの模擬戦のことを話した。

その後で、目をキラキラと輝かせたままのシャツハに、模擬戦して下さいって頭を下げてお願いされた。

断りたかったが、頭まで下げられては断りにくくなってしまい、しぶしぶながらも、菊池は模擬戦をする事になった。

「シャツハは本当にシスターなのか!？」　って言ってしまう程、典型的なバトルマニアだった。

シャツハは意外に強く、LPを多く削られたが、辛勝した。

とある日のこと

なのはは新人達の成長ぶりを報告していた。

隣にはフェイトがいる。

「皆、成長が早いし、これだったモード2の解除は近いと思うよ。」

「やっぱり初出勤が良い刺激になったようだね。」

しかしなのはは、フェイトの言葉に顔を曇らせる。

「それなんだけどね……。キャラ、まだ竜魂召喚がコントロールできてないでしょ？」

「ああ……。」

「だから、キャロだけ少しきついかなくて思ってるの。」

「なるほど……。キャロの竜魂召喚はまだ扱いが難しいか……。」

竜魂召喚はキャロのレアスキルである。

使いこなせれば強力な力だが、キャロはまだ完全に制御しきれていないため使用できないのだ。

「うん……。だから、どうしようかなって思ってるんだ。」

その時、なのは達の前に菊池が現れた。

「どうした？ 2人とも？」

菊池は、2人の様子を見ながら尋ねる。

「うん、実はね……」

なのはとフェイトは、菊池にキャロのことについて話す。

菊池は時折尋ねたりもしたが、基本は黙って聞いていた。

「なるほど。そういうことか……」

なのはとフェイトの話を聞き終えた菊池は、腕を組みながら言った。

「分かった。そういうことなら、俺に良い考えがある」

「「え!？」」

時間は過ぎ、お昼の訓練の時間になった。

訓練施設の設定は市街地に設定されており、その一角にキャロとエリオはいた。

「あれ？スバルさんとティアナさんは？」

いつもなら、ここで2人の漫才(?)が見られるのだが、いつまでたっても2人はやってこない。

2人が来ないことに、疑問を持っているエリオとキャロに、なのは答える。

「2人には別の訓練をさせてるんだ。それにお昼の訓練は私の担当じゃないよ。」

「え？それじゃ、誰が？」

するとどこからかバイクの音がする。

「遅れてすまない」

やってきたのは菊池だった。エリオとキャロの前に、D・ホイールを止めると言った。

「今日は俺の特別授業だ」

「え!？」

突然D・ホイールでやって来て、自分が教えると言った菊池に、キャロが驚きの声を上げる。

「なのはさん、どういことですか？」

エリオはなのはに尋ねる。

「今日は菊池くんが特別に担当してくれるの」

これには、さすがに2人も驚いていた。

だが、なのはは慌てることはなかった。

「それじゃ、菊池くん。お願いね」

「ああ。任せておけ」

なのはは菊池に一声かけると、どこかに行ってしまった。

菊池はD・ホイールに乗ったまま、首だけを2人の方に向ける。

「エリオ、キャロ。始めるぞ」

「「は、はい!」」

2人は菊池の声に慌てて返事をする。

菊池は2人の返事を確認した後、フィールド魔法、スピードワールド2を発動させる。

「ライディングデュエル！アクセラレーション！！」

そう言うのと、菊池はD・ホイールを発進させる。

その後ろをエリオとキャロがついていく。

菊池 LP8000 SPC0

「俺のターン！俺は【ライトロード・パラディン ジェイン】を召喚！」

【ライトロード・パラディン ジェイン】 攻1800

菊池の横に、全身を鎧で固めた騎士が現れる。

「バトルだ！行け、ジェイン！！」

ジェインはエリオに真っ先に向かい、攻撃する。

「うわぁ！！」

【ライトロード・パラディン ジェイン】 攻1800↓2100

ジェインの軽快な動きを纏った攻撃に、エリオは攻撃を防ぐが、攻撃力2100のパワーに押され、吹き飛ばされてしまう。

「エリオ君！！フリード、ブラストフレア！！」

キャロはフリードに攻撃をさせるが、ジェインは盾で防いだため、全く効かなかった。

菊池は、キャロとフリードを一瞥すると右手にカードを一枚持つ。

「カードを1枚伏せる。そしてエンドフェイズ、ジェインの効果で、デッキからカードを2枚墓地に送り、ターンエンド」

菊池はデッキから、【ボルト・ヘッジホッグ】、【マッシュ・ウオリアー】を墓地に送った。

「どうした！？2人とも攻撃が生ぬるいぞ。もっと本気で来い！」

菊池はエリオとキャロに向かって言った。

菊池 LP8000 SP CO↓1

エリオは負けじと反撃を開始する。

「くっ！！まだまだ！！ストラダー！！」

「スピーアアングリフ」

エリオはカートリッジをロードし、そのままジェインに突っ込む。

ジェインはエリオの攻撃に、しばらく耐えていたが、耐えきれずに破壊された。

普通なら菊池は、ジェインの攻撃力分のダメージを受けるが、こ

こで伏せカードを発動する。

「永続罨、オープン！【死力のタッグ・チェンジ】！！」

菊池がカードの発動を宣言すると、伏せられていたカードが表になった。

「自分フィールド上に攻撃表示で存在するモンスターが、戦闘によって破壊されるダメージ計算時、その戦闘によって発生する自分への戦闘ダメージを0にし、手札からレベル4以下の戦士族モンスター1体を特殊召喚する事ができる。来い、【マックス・ウォリアー】！！」

菊池の隣に、棍を持った機械の僧侶のようなモンスターが現れた。

【マックス・ウォリアー】 攻1800

「俺のターン！」

菊池のターンになり、スピードカウンターが一つ増える。

菊池 LP8000 SP1↓2

「俺は【ジャンク・シンクロン】を召喚！」

ジャンク・シンクロン 攻1300

「【ジャンク・シンクロン】の効果発動！このカードが召喚に成功した時、自分の墓地に存在するレベル2以下のモンスター1体を守備表示で特殊召喚する事ができる。来い、【マッシュ・ウォリアー】

「!!」

【マツシブ・ウォリアー】 守1200

エリオとキャロは身構える。この前の菊池の模擬戦を見ていた2人は、菊池のデュエルの流れから、【ジャンク・ウォリアー】が出てくると思ったからである。

「レベル4の【マックス・ウォリアー】に、レベル3の【ジャンク・シンクロン】をチューニング!!」

菊池の声に反応し、【ジャンク・シンクロン】と、【マックス・ウォリアー】が空高く舞い上がる。

【ジャンク・シンクロン】が3つの輪となり、【マックス・ウォリアー】がその中を通る。

【マックス・ウォリアー】の身体が透き通り4つの光となる。

「集いし叫びがこだまの矢となり空を裂く。光差す道となれ!シンクロ召喚!出でよ、【ジャンク・アーチャー】!」

【ジャンク・アーチャー】 攻2300

菊池の場に、弓を構えた戦士が現れる。

菊池が出したのは、【ジャンク・ウォリアー】ではなく、【ジャンク・アーチャー】だった。

エリオとキャロは、【ジャンク・ウォリアー】じゃないことに違

和感を抱きつつも、見たことがない【ジャンク・アーチャー】に驚いていた。

菊池はそんな二人に思わず苦笑する。

が、それも一瞬のことですぐに目の前の現実集中する。

「【ジャンク・アーチャー】の効果発動！1ターンに1度、相手フイールド上に存在するモンスター1体をゲームから除外する。ディメンジョン・シュート！！」

【ジャンク・アーチャー】が矢を放つ。矢はフリードに向かって飛び、フリードに当たる。

すると、フリードはどこかに吸い込まれるように消えていった。

「フリード！！」

キャラはフリードが消えたことに対して、慌てている。

だが、菊池はそんなキャラに容赦なく攻撃をする。

「バトル！【ジャンク・アーチャー】の攻撃！スクラップ・アロー！！」

再び、ジャンク・アーチャーが弓を構え矢を放つ。矢はキャラに向かっていた。

「キャラ！！」

咄嗟にエリオが、キャロの前に庇うように立ち、【ジャンク・アーチャー】の矢を受け止める。

だが、防御が間に合わず、矢が当たってしまった。

「くっ!!」

「エリオ君!!」

ここで、【ジャンク・アーチャー】によって除外されていたフリードが、戻って来た。

「フリード!! よかった・・・」

菊池 LP5700 SPC2↓3

その様子を見ていた菊池は、キャロに尋ねる。

「キャロ、お前の様子をさっきから見えて思ったんだが、エリオに庇ってもらってばかりじゃないか？」

エリオの援護もできていないようだ。お前はただそのまま何もせず、仲間が倒れるのを見ているつもりなのか？」

キャロは菊池の言葉に何も反論できず、ただ黙っている。

「お前は恐れているんじゃないのか？それが何か俺には分からない。だが、どんなに逃げていても現実から逃れることはできない。そんな生ぬるい覚悟で戦いの場に出ても意味はない！むしろ足手まといだ！」

いつもの温厚な菊池からは、考えられない厳しい言葉に、キャラは泣きそうになった。

しかし、菊池の言葉に反論する者がいた。

「違います!! キャロは自分の夢のためにここにいます! 訓練の時だって僕達に負けないぐらい頑張っているんです!!」

そう、キャラのパートナーである、エリオだ。

エリオはキャラが自分達と負けないぐらい、頑張っていることを傍で見ているため、一番分かっている。

だからこそ、菊池の言葉に大声で否定したのだ。

「努力は認めてもいい! だが戦いの場において結果を残さなければ何の意味もない! 夢を叶えるには力が必要だ。たった1体のモンスターを倒すのにすら手間取っているお前達に、夢を叶えることなど到底できない!」

エリオの言葉を否定する菊池。

「見せてみる、お前達の本気を! そんな腑抜けた覚悟で戦場に出ることは許さん!!」

「言われなくても!! ストラダー!!」

菊池の言葉にエリオはストラダーを構え、【ジャンク・アーチャ―】に切りかかる。

その様子を見ていたキャロは菊池の言葉を思い出していた。

『お前は恐れているんじゃないのか？それが何か俺には分からない。だが、どんなに逃げていても現実から逃れることはできない。そんな生ぬるい覚悟で戦いの場に出ても意味はない！むしろ足手まといだ！』

（そうだ……。私はフリードの力を制御しきれないから、皆に迷惑かけてた……。確かに私一人じゃ強くなれない……。でも！）

「私には仲間がいるから！！」

キャロの地面に魔法陣が現れる。

「蒼穹^{そうきゆう}を走る白き閃光。我が翼となり、天を駆けよ。来よ、我が竜フリードリヒ。竜魂召喚！」

するとフリードに環状魔法陣が展開され、無くなるとそこにいたのは「白銀の飛竜」に相応しい姿となったフリードリヒがそこにいた。

「エリオ君、下がって！！フリードリヒ、ブラストレイ！！」

フリードリヒの口から炎の砲撃が撃たれ、【ジャンク・アーチャー】が破壊される。

「ぐああああ！！」

菊池 LP8000↓5700 SPC3

「「これが、私（僕）達の力です!!」」

エリオとキャロの決意に満ちた声に、菊池は微笑んだ。

「そうだ、それでいい。恐れずに向かって来い。一人では何をやるにしても、限界がある。そんなときこそ、仲間の出番だ。信じていれば、仲間は必ず応えてくれる。それさえ分かれば十分だ」

菊池はデッキに手を置く。

「俺のターン!」

菊池 LP5700 SPC3↓4

「俺は【Spエンジェル・バトン】を発動!デッキからカードを2枚ドローし、その後、手札から1枚墓地に送る」

菊池がひいたのは、【ロード・シンクロン】と【奇跡の残照】。

ドローしたカードを手札に加え、【チューニング・サポーター】を墓地に送った。

「俺は、【ロード・シンクロン】を召喚!」

【ロード・シンクロン】 攻1600

「墓地の【ボルト・ヘッジホッグ】の効果発動!自分フィールド上にチューナーが存在する場合、墓地から特殊召喚する事ができる。来い、【ボルト・ヘッジホッグ】!」

【ボルト・ヘッジホッグ】 攻800

「レベル2の【マッシブ・ウォリアー】と、レベル2の【ボルト・ヘッジホッグ】に、レベル4の【ロード・シンクロン】をチューニング！」

菊池の声に反応し、【ロード・シンクロン】と、【マッシブ・ウォリアー】、【ボルト・ヘッジホッグ】が空高く舞い上がる。

【ロード・シンクロン】が4つの輪となり、【マッシブ・ウォリアー】と【ボルト・ヘッジホッグ】が、その中を通る。

【マッシブ・ウォリアー】と【ボルト・ヘッジホッグ】の身体が透き通り、それぞれ2つの光となる。

「集いし希望が新たな地平へいざなう。光差す道となれ！シンクロ召喚！駆け抜けろ、【ロード・ウォリアー】！」

【ロード・ウォリアー】 攻3000

光の中から現れたのは【ロード・ウォリアー】だ。

戦士の王様と言った雰囲気が出ていた。エリオとキャロは【ロード・ウォリアー】の出す雰囲気吞まれていた。

「【ロード・ウォリアー】の効果発動！1ターンに1度、自分のデッキからレベル2以下の戦士族または機械族モンスター1体を特殊召喚する事ができる。来い、【ワンショット・ブースター】！！！」

【ワンショット・ブースター】 守0

「「すごい……。」」

「バトルだ!! 【ロード・ウォリアー】の攻撃! ライトニング・クロー!!」

「フリード! ブラストレイ!!」

【ロード・ウォリアー】の右手に膨大な魔力が溢れ、そのままフリードに振り下ろす。

フリードはそれをブラストレイで相殺しようとするが、【ロード・ウォリアー】の力が強いいためか、押され始めていた。

「行け! 【ロード・ウォリアー】!!」

菊池がそう言ったとき、【ロード・ウォリアー】の攻撃はフリードに届き、倒された。

しかも【ロード・ウォリアー】の攻撃の余波で、エリオとキャロは吹っ飛ばされ気を失った。

「まあ、こんなものだ。2人も仲間について分かっただろうから、後は自然に力が身に着くと思う。2人の事、頼んだぞ」

菊池は空から降りてきたのはにそう言うと、D・ホイールに跨り、去っていった。

第九話 「フィールドを駆け抜けろ!」【ロード・ウォリアー】!!」 (後書き)

作者「さて、今回はシンクロモンスターが出まくったな」

菊池「出まくったと言っても、2体しか召喚してないぞ」

作者「2体もよく、出せるな。俺だったら絶対無理だわ」

菊池「とか言って、【BF】のデッキでシンクロモンスターを並べまくって、総攻撃してたくせに……。よく言うよ」

作者「う、うるせえよ!! 悪かったな!!」

菊池「図星らしく、逆切れた。こんな作者に付き合う俺の身にもな
ってほしいね・・・」

作者「大体さ、遊星のデッキに【ライトロード・パラディン ジェ
イン】は入ってないだろ? 何で入ってんだ?」

菊池「俺のデッキは、遊星のデッキをモチーフにしたデッキだから
な。多少のオリジナルはあるさ」

作者「ふーん。単なる詰め込みデッキかなと思ってたんだが・・・」

菊池「・・・気のせいだ」

作者「最初の間が気になるが、まあいい。では今回はこの辺で失礼
します」

菊池「皆さんの感想、待ってます!!」

番外編 「菊池のデッキについて」 (前書き)

この間、アクセス数を見たら、既に二万を突破してました。

感激のあまり、椅子から勢いよく立ち上がり、頭上にあった本棚に頭をぶつけてしまいました。い、痛かったです・・・。

番外編 「菊池のデッキについて」

暗黒「どうも、この作品を書いております、暗黒の覇者と申します」

菊池「何だ、いきなり改まって」

暗黒「うーん、一応形式上は、挨拶をしておかないといけない思
ってね」

菊池「なるほどね・・・」

暗黒「さて、今回は菊池のデッキについてだ」

菊池「・・・？俺のデッキは、アニメ5D'sの不動遊星のデッキを
モチーフにした【シンクロン】デッキと言ってあるはずだが・・・」

暗黒「それだけじゃ、ないんだろ？持ってるデッキは」

菊池「ああ。あと二つほど持ってるが・・・」

暗黒「もしかして【ゴヨウ・ガーディアン】を持っていたりするの
か？」

菊池「持ってるよ。っていうか、D・ホイールに乗る警察官のデッ
キには、絶対入ってる」

暗黒「おお、こわっ！そんなモンスターが場に出てきたら、負ける
しかないじゃないか・・・」

菊池「で、俺のデッキの何を聞きたいんだ？」

暗黒「あと二つのデッキ……。とても強いって聞いてるんだけど、ホントかなって思ってたな」

菊池「二つのうち、一つはかなりのガチデッキだな。勝つためには弱点を突くしかないような万能さだ」

暗黒「そのデッキはどんなデッキだ？ 教えてくれないか？」

菊池「それは、秘密ってことで」

暗黒「ケチだな。教えてくれてもいいじゃないか」

菊池「今、教えたならネタバレになるだろうが！」

暗黒「・・・チッ」

菊池「そろそろこの辺で、お暇しようか。キリがいいからな」

暗黒「ああ。それと、余裕があれば、感想や意見などをドシドシ送ってください。良いものであれば、採用していきたいと思っています。それでは皆さん、またお会いしましょう。」

菊池「それでは、さようなら」

番外編 「菊池のデッキについて」 (後書き)

暗黒「この前さ、友人にさ、小説家になろうの作者の寄合に来ないかって誘われてさ」

菊池「なんて答えたんだ？」

暗黒「返事は、保留しておいた」

菊池「え！？何で？」

暗黒「いや、まだ俺は小説家としても駆け出しなんだよ？それに比べて友人は五年以上小説を書き続けている、ベテランなんだぞ。比べ物にならないからさ・・・、ついていけるかどうか、心配で・・・」

菊池「そんなの、入ってみないと分からないだろう？とりあえず、入ってみなよ」

暗黒「・・・テストが終わったらな」

菊池「そうか、今日からテストか・・・。今日は何のテストだったんだ？」

暗黒「数学と、政治・経済と、有機化学・・・」

菊池「難しかったか？」

暗黒「数学がな・・・。もしかしたら、赤点かもな」

菊池「・・・頑張れよ」

暗黒「ああ。必ずいい結果を残してやるぜ！」

第十話 「菊池の新エースモンスター、【波動竜騎士 ドラゴエクイテス】！」

題名に、新エースモンスターと書いてありますが、おそらく【波動竜騎士 ドラゴエクイテス】は、この先登場しないかもしれません。シンクロ召喚がメインであるこの小説では、融合召喚は、あまりやりたくないのです……。あくまでも、今回のメインという形になります。もし、これからも出してほしいという、意見がありましたら、考慮します。

第十話 「菊池の新エースモンスター、【波動竜騎士 ドラゴエクイテス】！」

「試験？」

「そや。菊池くんの魔導師ランクを測るための試験や」

いつも通りに仕事をこなしていると、突然はやてからの呼び出しがあった。

何事だろうと思いつながら部隊長室まで向かった。

そして、たった今、はやてから試験を受けろと言われたのだ。

はやて曰く、

「菊池くんは一応、六課に配属ってことになるんやけど、今月いっぱいが書類の提出期限なんや。で、書類を提出するためには、菊池くんの力の詳細を調べないとあかんのよ」

と、いうことらしい。

確かに言っていることは正しい。正論だ。

だが、引っかかることが一つ・・・。

「俺は厳密には魔導師じゃないし、そもそも魔導師ランクなら、この前測ったんだけど」

そう、フォワード陣に紹介した後、ガジェットと模擬戦した。

その時、シャーリーが測っていたのを覚えている。

「ああ、あれはあくまでも目安や。今回は試験やさかい、ちゃんとしたデータが取れるんよ」

なるほど。正式に調べようと言うことか。

「分かった。で、試験はいつやるんだ？」

「明後日や」

「何！？明後日だと！」

菊池が驚くのも無理は無い。意外なほどの試験までのタイムリミットが短すぎるのだ。

明後日、つまりは二日後。時間としては、短い、短すぎる。

こういうのは、もっと余裕を持ってやるものではないだろうか？

「六課だけやのうて、どこの部署も忙しいんよ。せやから、試験を行えて、六課の外部の人間も限られてくるってことやな。それで、なんとか都合が付いたんが明後日や言うわけ。急なことは承知の上なんやけど、どうかな？菊池くん」

はやて自身、今回の試験は準備期間が短い事は承知の上である。

だが、今のままでは菊池を仕事に出す事が出来ない。

フォワード陣の訓練の付き合い、もしくは他の局員のデスクワークの手伝い程度しかできない。

元々、機械には詳しく、慣れないミッドチルダの文字の読み書きもできるようになったため、整備班での仕事や、デスクワークができるとはいえ、前線に出てサポートできないということは、菊池にとっても六課にとってもマイナスだった。

「はやてが何とか取り付けてくれたのだから、無駄にはできない。ぜひ、やらせてほしい」

菊池ははやての努力に感謝し、試験を受けることにした。

「さよか、ほんなら、ごめんやけどそう言う事で頑張ってな？それと、試験は模擬戦形式やさかい、明日一日は模擬戦をやっもらうで。菊池くんの戦い方はフルバックやからなあ…。適任者はおらへんけど、なのはちゃんには話を通してるから、頑張ってな！」

「ああ。お前の努力を無駄にはしない」

菊池は引きしめた表情で、はやてを見つめる。

急に顔を赤らめたはやてに挨拶をし、部隊長室を後にする。

そして、訓練場に向かい、今日、明日と模擬戦をすることになった。（半強制的に）

この2日間、体がボロボロになるまでやらされたので、大変だった。

たけど、何か大きなものを掴めた気がした。

2日後、いよいよ試験の日がやってきた。今日は予定通り、菊池の魔導師ランクを測定する試験の当日である。

前々日と前日は言っていた通り、菊池はいつも以上に訓練に励んだ。

最初は、なのはとマンツーマンでやるつもりだったが、フォワード達のが菊池と一緒にやりたいと言い出したので、大混戦の模擬戦をやることになった。

それでも、様々な戦い方があるのには正直驚かされた。

スバルとエリオのコンビネーション、ティアナの迅速で的確な指示、キャロのバックアップ…。

仲間の団結力を改めて見せつけられた菊池。

少し引け目を感じた菊池に、スバルは菊池の手を取り、「菊池さん」と引っ張っていく。

ティアナ、エリオやキャロも菊池の傍にやってくる。

そして4人は言った。

『菊池さんは私（僕）達の仲間ですよ！』

その言葉に、菊池は思わず涙する。

俯き、泣きだした菊池におろおろする4人。

なのはも慌ててやってくる。

菊池を慰め、改めて訓練を再開。

菊池はフルバックと言うことで、キャロと同じように後方で援護を行う。

モンスター、魔法、罠……。様々なカードでの援護は、ティアナを喜ばせるものだったようで、

「今回だけじゃなく、これから訓練に参加して下さい！」との言葉をいただいた。

俺の援護を当てにすることにならねばいいが……。と考えてしま
う菊池。

それほど、ティアナの喜びは言動に表れていたのだから。

そして今。

菊池は、試験が行われる六課の仮想訓練場に来ていた。なのはやフェイト、はやてが来るのは勿論のこと、ティアナ達も見学に来ていた。

菊池はD・ホイールの調整をしている。不備が無い点検しているのだ。

「（よかった……。あんまり緊張はしてないみたい……。）」

「
なのはは、菊池を見ながらホッとしている。なのは自身、菊池の力には驚かされる。」

2日前からの訓練で、何度驚いたか分からない。

彼には間違いなく才能もある。菊池の使うカードには、どれ程の力を持っているのか想像も付かない。

それに加え、なのはが最も驚いたのは、やはりシンクロモンスターだった。

「チューナ」>と呼ばれる召喚獣を用いて、光の中から突然現れるものだ。

大抵、シンクロモンスターが出てくると、フィールドを蹂躞する。

なのはは力任せの砲撃で倒そうとするが、破壊されなかったり、倒しても倒しても出てくることがあり、結構厄介である。

シンクロモンスターには、大きな秘密が隠されているんじゃないかなあ・・・？

とそんな事をなのはが考えていると、仮想訓練場にお馴染みのはやてと、小柄で、変わった雰囲気を持った男性が入ってきた。

恐らく、男性の方が今日の試験の相手を勤める人だろう。

「ん、皆一通り集まってるみたいやな。ほな、そろそろ菊池く

んの魔導師ランクの認定試験始めよか」

はやてがそう言うのと、菊池やティアナ達は試験官と思しき男性の方へ行き、挨拶する。

間違いなく上官に当たる人物なので、当然だろう。

だが、背丈がスバルと同じぐらいであり、結構背が低いことが分かる。

『おはようございます!!ラルゴ教官!』

菊池達は今日の試験官、ラルゴに元気よく挨拶する。ティアナ達は訓練校時代や、現場などで見かけた事があるのか、彼の事を知っていた。

菊池も名前だけははやてから教えて貰っていたのだ。

「……おはよう。それで、俺の相手は誰なんだ？」

少し苛立ったような声に、フォワード陣は怯えているようだ。

ティアナによると、いつもはこうじゃないらしい。いったいどうしたというのだ？

「私です。ラルゴ教官」

菊池がそう言うのと、ラルゴは不機嫌そうな顔を向けてくる。

菊池は彼を少し睨む。無言の抵抗である。

「……ちっ。よりによってこんな奴の相手かよ」

ラルゴは小さな声で呟く。なのは達には聞こえなかったようだが、菊池にはしっかりと聞こえていた。

菊池はラルゴを睨みつける。何だこのヤロウとやるわけにもいかないため、必死に怒りを抑える。

何でこんな口の悪い奴とやらなきゃいけないんだ……？だが、この教官も強さは伊達ではないらしく、

書類には、ラルフの魔導師ランクはSSと書かれてあった。要するに、めっちゃくちゃ強い。

フェイトやなのは達でも勝てるかどうか、微妙なレベルである。

「さっさと来い。始めるぞ」

ラルゴは冷たくそう言うと、フィールドに向かう。菊池も彼の背中を追う。

何だか陰悪な雰囲気漂いつつある訓練場。

菊池も相当頭に来ていた。やはり初対面で仏頂面を見せられると、イライラするのだ。

今回の試験は、試験官であるラルゴとの模擬戦を行い、戦闘データやラルゴの見立て、および記録員の2名が、菊池の魔導師ランク

を見極めるというものだった。

記録員はローズという女性の局員。階級は二等空尉だそうだ。

ラルゴは一等陸佐。やはり人は見かけによらないようだ。

いつの間にか、もうセットアップを完了しているラルゴ。

菊池は、ラルゴの少し先にある場所で、D・ホイールに跨っている。準備が整い次第、試験は開始される。

既に、仮想訓練場の機能が稼働しており、周囲の風景は前にも見たビル街になっている。

「それが、貴様の戦闘スタイルか。・・・ダサイな」

「貴様・・・！」

菊池はまたもやラルゴを睨みつける。

だが、ラルゴはそれを受け流し、言った。

「さあ、始めようか。無駄話はしたくないんだよ」

「くっ・・・。」

菊池は『スピード・ワールド2』をONにする。

すると、訓練場が紫色に変わった。

「手品を仕掛けてくるとな・・・。」

ラルゴは不敵な笑みを浮かべる。

菊池はそれに反応することなく、デッキから5枚のカードを引く。

「ライディング・デュエル、アクセラレーション！！」

菊池のD・ホイールが走り出した。ラルゴはその後を追う。

「俺のターン！」

菊池 LP8000 SPC0

「俺は【シールド・ウォリアー】を守備表示で召喚！」

【シールド・ウォリアー】 守1600

「カードを2枚伏せて、ターンエンド！」

菊池 LP8000 SPC0↓1

「ふん、フルバックに何ができる」

ラルゴはそう言うのと、薙刀の形をしたデバイスで、斬りかかってくる。

魔導師での経験は豊富なようで、動きに迷いはない。

だが、菊池はそれに恐れてはいけないと思った。

俺は俺の戦いをする！あいつのペースに吞まれてはいけない。

「罨カード、発動！【くず鉄のかかし】！！」

カードが表になり、そこからイラストと同じくず鉄のかかしが現れ、攻撃を防いだ。

「何だ、このかかし！？」

ラルゴが驚いている。無理もない。急にかかしが出てきて、攻撃を防がれたのだから。

「このカードは、相手モンスターの攻撃宣言時に発動する事ができ、相手モンスター1体の攻撃を無効にする。そして、発動後このカードは墓地に送らず、そのままセットする！」

すると、かかしはカードに戻り、再び伏せられた。

「そう簡単に攻撃を通させるものか！！」

菊池はラルゴに向かって叫ぶ。

それに対し、ラルゴは無言であった。

何か策を練っているのだろうか？

菊池はデッキに手を置く。

「俺のターン！」

菊池 LP8000 SPC1↓2

「俺は、手札から【SP-エンジェル・バトン】を発動！デッキからカードを2枚ドロし、その後、手札から1枚墓地に送る！」

菊池が引いたのは、【デブリ・ドラゴン】と【ロード・ランナー】。菊池は迷うことなく、【ロード・ランナー】を墓地に送る。

「そして、チューナーモンスター、【デブリ・ドラゴン】を召喚
「！！」

【デブリ・ドラゴン】 攻1000

ラルゴは先ほどと比べれば、落ち着いている。

デバイスを構えながら、こちらを見ている。

「このカードが召喚に成功した時、自分の墓地に存在する攻撃力500以下のモンスター1体を

攻撃表示で特殊召喚する事ができる。来い、【ロード・ランナー】！！」

【ロード・ランナー】 攻300

「レベル1の【ロード・ランナー】と、レベル3の【シールド・ウォリアー】に、レベル4の【デブリ・ドラゴン】をチューニング
「！！」

すると、【ロード・ランナー】と【シールド・ウォリアー】、【

デブリ・ドラゴン】が空高く舞い上がる。

【デブリ・ドラゴン】が4つの輪と成り、その中に【ロード・ランナー】と【シールド・ウォリアー】が潜ろうとする。

【ロード・ランナー】と【シールド・ウォリアー】が、4つの輪の中に入り、光となる。

「集いし願いが新たに輝く星となる。光差す道となれ！ シンクロ召喚！ 飛翔せよ、【スターダスト・ドラゴン】！」

【スターダスト・ドラゴン】 攻2500

「来た〜！ 【スターダスト・ドラゴン】だ!!！」

「スバル、うっさい!!！」

「何度見ても・・・」

「綺麗です・・・」

フォワード陣の反応は様々。

それに対し、隊長陣は少し複雑そうである。

「菊池くん、やっぱりその召喚獣が好きなんだね・・・」

「また、あのドラゴンを・・・」

「やっぱりか。よっぽど好きなんやろな、あのドラゴン」

なのは、フェイト、はやては呆れが混じった視線で菊池を見る。

初めて【スターダスト・ドラゴン】を見た、記録員のローズは、手が止まっていた。

「バトルだ！【スターダスト・ドラゴン】の攻撃！シューティング・ソニック！！」

【スターダスト・ドラゴン】の口から膨大な魔力が発生し、銀色のブレスがラルゴに向かう。

「へっ！甘いわ！！」

ラルゴは薙刀を構えると、一振りする。

すると、銀色のブレスは見事に一刀両断されたのだ。

「くっ・・・！！」

菊池は悔しさのあまり、ラルゴを見る。

「この程度で勝てると思ったのか？屑が」

「っ・・・！！」

菊池は怒りのあまり叫びたいところを、グッと我慢し、手札にカードを1枚持つ。

「・・・カードを1枚伏せて、ターンエンドだ」

菊池 LP8000 SPC2↓3

ラルゴは薙刀を構え、突撃しようとしてくる。

「プロミネンス！カートリッジロード」

「オールライト」

すると、薙刀の刀身が若干、長大になり、彼の魔力の色である黄色を帯びていた。

「その星屑には消えてもらおうか・・・」

その声と共に、ラルゴは【スターダスト・ドラゴン】に向かって突撃する。

（俺の場に、くず鉄のかかしがあるのは奴も知っているはず。何故攻撃を？）

「罨発動！【くず鉄のかかし】！！」

伏せられていたカードが表になり、【スターダスト・ドラゴン】の前にかかしが現れる。

「無駄だ！叩き割ってくれる！！」

ラルゴは薙刀を振り上げ、勢いをつけると、思い切り振り下ろした。

かかしはラルゴの言葉通り叩き割られてしまい、ついにかかしだけではなく、【スターダスト・ドラゴン】も破壊されてしまった。

「ぐうう・・・」

菊池 LP 8000 ↓ 5500 SPC 3

「くっ・・・！スターダスト・・・」

菊池はこの世界に来て、初めて【スターダスト・ドラゴン】を破壊されるところを目の当たりにした。

しかし、いつまでもそんな恐怖や悔しさに浸っている菊池ではなかった。

「リバーズカード、オープン！【奇跡の残照】！！」

菊池の発動宣言と共に、カードが表になる。

「このターン戦闘によって破壊され、自分の墓地へ送られたモンスター1体を、墓地から特殊召喚する。戻って来い、【スターダスト・ドラゴン】！！」

【スターダスト・ドラゴン】 攻2500

「ちっ・・・、またかよ。しつこい奴だ」

「・・・」

菊池はラルゴの挑発に乗らず、デッキからカードを引く。

このままでは、【スターダスト・ドラゴン】はまた破壊されてしまう。

カード達よ、お前達を信じる！だから、応えてくれ！！

「俺の、ターーン！！」

菊池 LP5500 SPC3↓4

菊池は引いたカードを見る。

（よし！！このカードならば！！）

「俺は手札から、【S p ースピード・フュージョン】を発動！」

「何だ、そいつは・・・？」

ラルゴは怪訝そうにこちらを見ている。

しかし、菊池はお構いなしに進めていく。

「自分のスピードカウンターが4つ以上ある時に発動する事が出来、手札またはフィールド上から、融合モンスターによって決められたモンスターを墓地へ送り、融合モンスター1体をエクストラデッキから特殊召喚する」

この言葉に驚いたのはなのは達だ。

「い、今さっき、菊池くん・・・、何て言ったの？」

「確か、融合なんか言ってたけど・・・」

「どういことや、一体・・・」

上から、なのは、フェイト、はやての反応である。

どうも、初めてのことで、殆ど理解できていない。

「俺は場の【スターダスト・ドラゴン】と、手札の【ターレット・ウオリアー】を融合!!」

この言葉の後、【スターダスト・ドラゴン】と【ターレット・ウオリアー】が一つになった。

そして一つになったところから、新しいモンスターが現れた。

「融合召喚!! 現れろ、【波動竜騎士 ドラゴエキイテス】!!」

【波動竜騎士 ドラゴエキイテス】 攻3200

「は、波動竜騎士・・・」

「ドラゴエキイテス・・・」

なのはとフェイトは新たに現れたモンスター名を呟く。

そのにいたのは、手に大きな矛を持ち、背中に大きな翼をつけたドラゴンだった。

フォワード陣は皆、初めて見るモンスターに、呆然としている。

「バトルだ！【波動竜騎士 ドラゴエクイテス】の攻撃！！スパイラル・ジャベリン！！」

その声と共に、ドラゴエクイテスはくるくると矛を回すと、ラルゴに投げつけた。

咄嗟に避けたラルゴだったが、矛は掠めたらしく、ラルゴはうめき声を漏らした。

「く……。やるじゃねえかよ」

ラルゴは掠めた右腕を左手で抑えながら、言った。

ラルゴが歩みを止めたため、菊池もD・ホイールを止めた。

「どうです、教官。試験の結果は」

「……。そうだったな。最初はつまらない試験になると思っていたが、久々にいい勝負が出来た。感謝するぜ……。試験は、問題無く終了だ……。」

ラルゴはそう言って、D・ホイールに跨っている菊池に歩み寄ってくる。

「先ほどはすまなかった」

手を差し出してくるラルゴ。菊池はラルゴの言葉に嘘が無いことを知ると、手を出し、その手を握り返す。

「こちらこそ、すみませんでした。教官」

菊池が頭を下げ、そう言うと、ラルゴは恥ずかしそうに言った。

「・・・敬語で話さなくていいぞ。俺を負かすだけの力があるのだからな」

「・・・わかった」

こうして、菊池の魔導師ランク測定試験の為の模擬戦が、無事終了した。

結果的には引き分けとなった。

さすがにSSランクのラルゴに勝ったとなると、色々面倒になるらしい。

だが、実際はラルゴを負かしたのだから、菊池にとっては満足のいく結果となった。

菊池雅之

魔導師ランク 陸戦AAA+

菊池の局員の証明書に、この一文が追加されたのだった。

第十話 「菊池の新エースモンスター、【波動竜騎士 ドラゴエキイテス】！」

作者「出たー！！【波動竜騎士 ドラゴエキイテス】！」

菊池「テンション高いな。そんなにすごいのか、【波動竜騎士 ドラゴエキイテス】の融合召喚は？」

作者「いや、攻撃力3200だぞ。この小説内での最高攻撃力、3100を上回ったんだぞ」

菊池「ちょっと待て、最高攻撃力は3100じゃなくて、5300だぞ」

作者「へ？嘘でしょ？」

菊池「俺の夢に出てきていた【機皇帝ワイゼル∞】が、5300という攻撃力を叩き出してるからな。これを超えてはいないぞ、俺は」

作者「しまった、自分で書いておきながら、存在を忘れてた」

菊池「とんだお調子者だな、お前は」

作者「ついつい、うっかりやっちゃった、てへっ」

菊池「何が『てへっ』だよ。気持ち悪いし、可愛くない」

作者「お前だって、某小説のサブタイトルに書いてあった『悪い子は月に代わっておしおきよ♪』にツボってたじゃないか。このタイトルで腹が痛くなるほど、笑えるのか？」

菊池「ハハハハハ、それはダメだろ！音符までつけてるところが、もう最高！！おまけに、話の中身は全然可愛くないところが、さらに良い！！ギャップの差に痺れる！憧れる！って感じなんだよ」

作者「ついに壊れたな、こいつ。早く救急車呼ばないと・・・」

第十一話 「キャラとタッグで模擬戦」(前書き)

もうすぐ、アグスタ編の話を書いていくつもりです。

ただ、ネタが思いつかない。どう絡ませていくかを、現在進行形で考えています。

もう少し、お待ちください。

第十一話 「キャラとタッグで模擬戦」

〽菊池の魔導師試験から数日後〽

「はい、整れーっ!」

なのはの号令の下、フォワード一同は森林戦設定で構築された訓練場に整列した。

今日もいつも通りの訓練が行われている。

菊池はなのは達のいるところから、少し離れたところで訓練を見ていた。

(いい天気だ・・・)

菊池は雲一つない青空を見て思った。

昨日は天気がとても悪かったため、外での訓練ができなかった。

デスクワークもいいのだが、たまには外で・・・と思っていた菊池にとって、昨日の天気はその思いを打ち砕くものとなった。

そして、翌日となった今日、昨日の天気が嘘のような快晴となった。

ただ、昨日雨が降ったためか、湿度が高くなってジメジメとしている。

天気が良いのは結構だが、こうも湿度が高いと、気分が良いとは言えない。

冷房の効いている隊舎にいたかった菊池だが、与えられたデスクワークはすでに昨日に済ませてしまい、整備班での手伝いも、今は必要ないと言われ、口実を失った菊池は、暇つぶしにフォワード達の訓練を見に来たのだ。

「菊池くん」

考え事をしていた菊池に声かけられる。

声がした方を見ると、なのはが呼んでいるのが分かった。

菊池は返事をして、なのは達の元に向かう。

「どうしたんだ、なのは」

早足でやって来た菊池に、なのははある提案をする。

「実はね、菊池くん。突然なんだけど、模擬戦をしてもらえるかな？」

「模擬戦？ 誰とやるんだ？」

模擬戦の提案に驚きながらも、菊池は対戦相手が誰なのかを尋ねる。

「えーと、私と・・・」

「あたしだ」

なのはの言葉を繋ぐように言って、菊池達がいるところまでやって来たのは、ヴィータだ。

「ということは、俺は二人を相手に戦うことになるのか？」

二人の強さは、フォワード陣から聞いていた菊池は、冷や汗を掻く。

なんだ、この二人は俺を潰そうとしてるんじゃないのか？

いくら、シンクロモンスターが強いとはいえ、限界がある。

そのところは言うておくべきだろうか？

そんなことを考えていた菊池に、なのはが言った。

「さすがにそれは、菊池くんにとって不利だがら、フォワードメンバーのうち、一人をつけていいよ」

それは、ありがたい話だ。さすがに隊長陣二人を相手にたった一人で戦うのはキツイ。

「誰を選んでも良いが、一人だけだぞ」

ヴィータが改めて、注意をする。

菊池は誰を選ぶかと悩む。

フォワード陣は、誰が選ばれるのか不安と期待が混じった表情で、菊池を見つめる。

「そうだな・・・・・・・・・・、よし決まった」

そう言って、菊池が選んだのはキャロだった。

キャロは、まさか自分が選ばれるとは思っていなかったのか、驚愕の表情で菊池に尋ねる。

「い、いいんですか？ 私なんかで・・・・。スバルさんとか、ティアナさんの方がいいんじゃないですか？」

キャロの自信なさげな声に、菊池ははっきりと言った。

「いいんだ。確かに君は直接的な戦闘では、役に立たないかもしれない。だが、今回の場合は君の力が必要なんだ。力を貸してくれるか、キャロ」

「・・・は、はい！！頑張ります！！」

「いい返事だ」

菊池はキャロの頭を撫でてやる。突然、頭を撫でられたキャロは恥ずかしそうに、だが嬉しそうに頬を染めた。

「それじゃあ、そろそろ始めようか。準備はいい？」

「問題ない。準備はできてる」

菊池はD・ホイールに跨っている。その後ろにキャロが乗っているのだ。

「あ、あの、菊池さん。ちょっといいですか？」

菊池の腰に手をまわし、しがみつくような体勢のまま、キャロが尋ねてくる。

「ん？何かな、キャロ」

「なのはさん達を相手に勝てるでしょうか・・・？」

そう、なのは達はかなりの強敵だ。下手すれば、2人揃って撃墜されかねない。

「大丈夫だ。俺を信じろ」

菊池は軽く後ろを向いて、不安そうなキャロを元気づけようと笑顔を見せた。

キャロもそれに応えるように、笑顔を見せる。

「はい！」

キャロの返事を聞いて、菊池はスピード・ワールド2を発動させる。

「行くぞー！ライディング・デュエル、アクセラレーションー！」

その声と共に、勢いよくD・ホイールを走らせる。

なのはとヴィータは、上空から追ってくる。

「俺のターン！」

菊池&キャロ LP8000 SP C0

「俺は【シールド・ウイング】を守備表示で召喚！！」

菊池の場に、翼でガードする鳥が現れる。

【シールド・ウイング】守900

「カードを2枚伏せて、ターンエンド！」

これを見て、なのはとヴィータが動く。

「守るだけじゃ勝てねえぜ！アイゼン！！」

そう叫ぶと、グラーフアイゼンを振り、シュワルベフリーゲンを放つ。

「耐えろ、【シールド・ウイング】！！」

鉄球が【シールド・ウイング】に向かい、ぶつかる。

耐え切れると思っていたが、耐えきれない分のダメージを受けてしまう。

「ぐうう・・・！！」

菊池&キャロ LP8000↓7200 SPC1

「どうだ!!」

ヴィータは今の一撃で、【シールド・ウイング】を倒したと思っているようだ。

だが、煙の中から出てきた【シールド・ウイング】を見て、驚く。

「な、何で倒せてねえんだ!?!」

「【シールド・ウイング】は、1ターンに2度まで、戦闘によっては破壊されないからだ!俺達の思いを簡単に打ち砕くことはできない!」

そう言ったものの、ダメージはしっかりと受けている菊池。

このまま、【シールド・ウイング】をフィールドに留まらせておくのはまずい。

だが、今の手札にチューナーモンスターはいない。

次のドロローが勝負だな・・・。

考えながら、菊池はカーブを曲がるため、D・ホイールを傾ける。

「俺のターン!」

菊池&キャロ LP7200 SPC1↓2

菊池は、ドローしたカードを確認する。

「俺は、手札から【SP—エンジェル・バトン】を発動！デッキからカードを2枚ドローし、その後、手札から1枚墓地に送る！」

ドローしたのは、【デブリ・ドラゴン】と【軍人の采配】。

菊池は確認すると、手札にあった【ボルト・ヘッジホッグ】を墓地に送った。

「そして、チューナーモンスター、【デブリ・ドラゴン】を召喚！」

【デブリ・ドラゴン】 攻1000

【デブリ・ドラゴン】の登場に、なのはは声を上げた。

「チューナー……。ま、まさか！あのドラゴンが来る！ヴィータちゃん、気をつけて！」

なのはの焦った声に、ヴィータは首を傾げる。

確かに、【スターダスト・ドラゴン】を見たことはあるが、進化しない限り、対して強くはないはず。そう思っていたヴィータは、はっと思立った。

（そう言えば、菊池があのだらゴンを出したら、いつも何かが起こる。これは注意しねえと……）

ヴィータも表情を引き締める。

「自分フィールド上にチューナーが存在する場合、墓地から特殊召喚する事ができる。来い、【ボルト・ヘッジホッグ】！」

【ボルト・ヘッジホッグ】攻800

菊池の場に、【ボルト・ヘッジホッグ】が現れた。

レベルの合計は8。

菊池は叫ぶ。

「レベル2の【ボルト・ヘッジホッグ】と、レベル2の【シールド・ウイング】に、レベル4の【デブリ・ドラゴン】をチューニングー！！」

菊池の声に反応し、【デブリ・ドラゴン】と、【シールド・ウイング】、【ボルト・ヘッジホッグ】が空高く舞い上がる。

【デブリ・ドラゴン】が4つの輪となり、【シールド・ウイング】と【ボルト・ヘッジホッグ】が、その中を通る。

【シールド・ウイング】と【ボルト・ヘッジホッグ】の身体が透き通り、それぞれ2つの光となる。

「集いし願いが新たに輝く星となる。光差す道となれ！ シンクロ召喚！ 飛翔せよ、【スターダスト・ドラゴン】！」

【スターダスト・ドラゴン】攻2500

「これが、菊池さんのドラゴン・・・」

キャラは近くで見るのは初めてなので、呆然と見ている。

フリードも、菊池の頭上を飛翔する【スターダスト・ドラゴン】を、見上げている。

「キャラ！今度は君の番だ」

菊池は後ろにいるキャラに声をかける。

「え、ええ！？私ですか！？」

キャラの驚いた声に、頷く菊池。

「で、でも何をすれば・・・」

「まず、フリードの竜魂召喚をお願いできるか？」

「は、はい！」

すると、菊池のD・ホイールが走っている地面に魔法陣が現れる。

「蒼穹^{そうきゆう}を走る白き閃光。我が翼となり、天を駆けよ。来よ^こ、我が竜フリードリヒ。竜魂召喚！」

キャラがそう言うと、フリードに環状魔法陣が展開され、無くなるとそこにいたのは「白銀の飛竜」に相応しい姿となったフリードリヒが現れた。

一方、なのは達は、すでに攻撃できる体勢に入っていた。

「あたしがあのドラゴンを倒すから、なのははフリードを頼む！」

「了解！」

二人は散開し、攻撃のモーションに入ろうとしていた。

だが、菊池のあるカードが、その攻撃をさせなかった。

「永続罠、オープン！【強制終了】！！」

菊池の声と共に、伏せられていたカードが表になった。

「このカードは、自分フィールド上に存在する、このカード以外のカード1枚を墓地へ送る事で、このターンのバトルフェイズを終了する。俺は伏せカード、【リミッター・ブレイク】を墓地に送る！」

【強制終了】のカードから、バリアが現れ、菊池達を包み込む。

それにより、なのは達は攻撃が通らないと判断し、いったん距離をとった。

だが、まだカード効果の処理が終わってないので、菊池は続ける。

「さらに、【リミッター・ブレイク】が墓地に送られた時、自分の手札・デッキ・墓地から【スピード・ウォリアー】1体を特殊召喚する。来い、【スピード・ウォリアー】！」

【スピード・ウォリアー】守400

「俺のターン！」

菊池&キャロ LP7200 SPC3↓4

（駄目だ・・・！あのカードが来ない・・・！！ここは、しのぐしかない）

「【スターダスト・ドラゴン】の攻守変更！攻撃表示から、守備表示に！」

【スターダスト・ドラゴン】攻2500↓守2000

【スターダスト・ドラゴン】は、守備表示になると、体が青く染まり、自身の翼でガードする体勢を取った。

「カードを1枚伏せて、ターンエンド！」

菊池&キャロ LP7200 SPC4↓5

《どうやら、何もないみたいだぞ。このまま、押し切ろう》

《うん。早めに決着を着けたほうが良いね。モードチェンジなんかされたら、勝てなくなるからね》

ヴィータとなのはは、念話で連絡を取り合い、短期決戦に持ち込もうとしていた。

今なら、【スターダスト・ドラゴン】も守備表示。反撃されることはないだろう。

だが、問題は永続罠の【強制終了】だ。あのカードを何とかしない限り、攻撃が通らない。

《ヴィータちゃん、このままだと攻撃が通らないよ。どうする？》

《そうだな……。あいつの攻撃にしろ、防御にしろ、菊池が反応できて、初めて効果を発揮するものだ。だから、真正面から攻めずに、奇襲攻撃をかけるぞ》

《そうだね！》

なのはとヴィータはお互いに頷き合うと、散開していく。

(? 何故、離れて行くんだ?)

菊池はなのは達が、離れていくことに疑問を抱く。

キャラはその行動から、なのは達が何をしようとしているのかを読み取った。

「菊池さん！ 気をつけて下さい！ なのはさん達は、奇襲をかけようとしています！」

「奇襲!?!」

菊池は思わず、キャラに聞き返す。

菊池はてつきり、なのはが砲撃をしてくるものと思っていたので、キヤロの警告には驚いた。

「はい！なのはさんが砲撃をするなら、あんな行動をとるはずないからです」

キヤロの言い分も間違っではなさそうだ。彼女は彼女なりに、考え、発言しているはずだからだ。

と、いうことは俺の罨カードを警戒してるってことか・・・。

まあ、ここは様子を見よう。

「キヤロ、大丈夫だ。俺がついてる。だが、振り落とされないようにしっかりと掴まってるよ」

「はい！」

キヤロの、菊池の服をつかむ手に、さらに力が加わったのが分かった。

菊池が思わず微笑んだ時、突然背後からの攻撃を受けた。

「ぐわぁ！」

菊池は思わず、バランスを崩しそうになったが、何とか持ちこたえた。

（直撃は免れたが、ライフが大きく削られた・・・）

菊池&キャロ LP7200↓5800 SPC5

（このままではマズイ・・・！早めに決着を着けなければ・・・！！）

「俺のターン！」

菊池はドローしたカードを見る。

（来た！！このカードを待っていた！！）

菊池はドローしたカードを手にしたまま、キャロに尋ねる。

「キャロ、フリードをちょっと借りてもいいか？」

「えっ？」

キャロは菊池の意図が見えず、茫然とした返事を返す。

「フリードの力が必要なんだ。君から、頼んでくれないか？」

菊池がそう言うと、キャロはくすりと笑い、言った。

「私もフリードも、菊池さんを信じていますよ。私に仲間の大切さを教えてくれたのは、他の誰でもない、菊池さんですから」

キャロの言葉に、菊池はそうかと笑う。

「その様子なら、大丈夫そうだな。行くぞ、キャロ！フリード！」

「はい！」

「きゅく〜！」

菊池はD・ホイールのスピードを上げる。

「俺は手札から、【S p ースピード・フュージョン】を発動！」

「ま、まさか・・・！」

なのはが思わず、声を上げる。

なのはは、菊池の魔導師試験の時、菊池が【S p ースピード・フュージョン】を使い、【波動竜騎士 ドラゴエキイテス】を召喚したことを思い出したらしい。

だが、菊池が狙っているのは・・・、

「俺は、場の【スターダスト・ドラゴン】と・・・」

【波動竜騎士 ドラゴエキイテス】の融合召喚ではなく、新たなモンスターの召喚だった。

「フリードを融合!!」

菊池の言葉と共に、【スターダスト・ドラゴン】とフリードが、光に包まれ、一つになった。

そして、その光の中から、新たなモンスターが現れた。

「融合召喚！！現れろ、【ソニック・ブラスター・ドラゴン】！」

【ソニック・ブラスター・ドラゴン】 攻3500

そこにいたのは、白く美しい、ドラゴンだった。

「何あれ！？ねえ、ティア！あのドラゴン、見て！！すごく綺麗だよ！」

「うっさい、そんな大声で言わなくても分かってるわよ。でも、あのチビ竜が、あんな姿になるなんて・・・」

「あれが、菊池さんのドラゴンと、フリードの究極の姿・・・」

菊池に選ばれなかったスバル、ティアナ、エリオは離れた所から、観戦していたが、【ソニック・ブラスター・ドラゴン】の召喚に、思わず声を上げた。

菊池は、D・ホイールを傾け、操りながら、【ソニック・ブラスター・ドラゴン】に攻撃命令を出す。

「これが、俺達の絆だ！行け、【ソニック・ブラスター・ドラゴン】！！シューティング・フレア！！」

すると、【ソニック・ブラスター・ドラゴン】の口から、炎のブレスが放たれる。

それは、なのはに向かっていく。

なのはは、それをプロテクションで防ごうとするが、防げなかった。

「【ソニック・ブラスター・ドラゴン】の効果発動！このモンスターが攻撃する時、相手は魔法を発動できない！！」

そのため、攻撃が直撃し、なのはは撃墜。

ヴィータも、なのはの撃墜後、時間を待たずに撃墜した。

二人が撃墜したことを確認すると、菊池はD・ホイールを止め、デュエルモードを解除する。

「キャロ〜！菊池さ〜ん！」

菊池とキャロがD・ホイールから降りると、スバル達が駆け寄ってくる。

キャロはスバル達と話している。

菊池は、なのはとヴィータを抱え、医務室へ運ぶ。

（キャロの力は、忌むべきものじゃない。仲間を守る大事な力だ・・・）

なのはとヴィータを医務室へ運びながら、菊池は思った。

第十一話 「キャラとタッグで模擬戦」(後書き)

作者「はい、後書きですね。それにしても、難しかった。戦闘描写は簡単には書けないんだな」

菊池「そりゃ、そうだろ。他の作者様も苦労されてるようだ。お前だけじゃないさ。それにしても、今回出た融合モンスターが気になるな。どんなモンスターなんだ？」

作者「この作品は、前から言ってるように、オリカが登場するんだが、その一つだ。やってみたかったんだよ。【スターダスト・ドラゴン】とフリードの融合はね。まあ、オリカだから、完全に作者の偏見が入ってますが、OCG風に直すと、こんな感じかな？」

【ソニック・ブラスター・ドラゴン】

融合・効果モンスター

星10／風属性／ドラゴン族／攻3500／守2500

ドラゴン族シンクロモンスター＋ドラゴン族モンスター

このカードは融合召喚でのみエクストラデッキから特殊召喚することができる。

このカードは、ダメージステップ終了時に攻撃力・守備力を1000ポイントダウンさせることで、1ターンに一度だけ、戦闘では破壊されない。

また、このカードが攻撃する場合、相手はダメージステップ終了時まで魔法・罠カードを発動できない。

菊池「強いな・・・。【ミラクルシンクロフュージョン】でも出せ

るからな。結構、強力だぞ。このモンスター・・・」

作者「菊池は、フリードがドラゴン族モンスターと仮定して、融合召喚しています。不都合等感じるかもしれませんが、大目に見て下さい」

菊池「それでは、この辺で失礼します」

第十二話 「菊池の初任務」 (前書き)

はい、お待たせしました。ホテル・アグスタ編に突入しました。

とは、いえ、今回の話は内容が薄いです。期待して下さった方もおられるかもしれませんが、自分ではこれが限界です。

それでは、短いですが、アグスタ編をどうぞご覧ください。

第十二話 「菊池の初任務」

キャロとの模擬戦から数日後、菊池ははやてに呼び出されていた。

「どうしたんだ？俺を呼び出して」

「菊池くん、落ち着いてえな。実は頼みたいことがあるんよ」

「頼みたいこと？」

はやての話によれば、近々ホテル・アグスタに大規模なオークションが行われるのだそうだ。オークションの品の中にはロストログアもあるらしく、それを狙われ襲撃されるかもしれない。そこで機動六課はオークションの警備をする事になった。

「菊池くんには、このお手伝いをして欲しいんや」

「水臭いぞ、はやて。俺も六課の一員だ。ぜひ、やらせてほしい」

菊池は快く引き受けた。

「菊池くん・・・、ありがとうな。ほんならうちらは先行ってるから気をつけてな。」

菊池はD・ホイールに乗り、はやてから貰ったデータを頼りに、ホテル・アグスタに向かった。

ホテル・アグスタに着いた菊池は、地下駐車場で待機していたシヤマルからケースを渡された。

「これは？」

菊池はシャルからケースを受け取るなり、尋ねた。

明らかに何か入っているのが分かる。

「菊池くんの仕事着よ。ここにはそれなりに地位がある人達が集まってるから。それと、身分証も入ってるから無くさないでね」

シャルに念を押されつつも、菊池は控え室に向かい、ケースに入っていた服に着替えた。

なのは達はホテルのロビーで、菊池を待っていた。

「菊池くん、まだかな。どんな格好してるのかな？」

はやてがそわそわしながら、呟く。

なのはやフェイトも、言葉に出さないものの、心の中では楽しみにしている。

今回の仕事服に関してはシャルに一任しており、なのは達は菊池がどんな服を渡されたのか、知らないのだ。

「菊池くんのことだから、きっと似合ってると思うよ」

「楽しみだね」

3人が話し込むこと、数分後…。

「すまない。着替えに手間取って遅くなった」

3人は菊池を見て固まった。

菊池は一般的な黒のスーツを着ながらも、より男らしさが出ている。

いつも着ている六課の制服とは、また違った雰囲気が出ている。

「どうしたんだ？3人とも？」

菊池が声をかけると、なのは達は慌てて言葉を返す。

まさか、菊池の姿を見て、見惚れてしまったなんて言えない。

「ななな、な、何でもないよ」

「う、うん・・・」

「そ、そうや。ちょっと考え事をしててん」

菊池に怪しまれないよう、できるだけいつも通りの対応を心がけたつもりなのは達。

普通の人なら、あまりの慌てっぷりに怪しむところだが、女性との交流に乏しかった菊池は、そういうことに気づくことはなかった。

「それじゃ、とりあえず中に入ろう」

菊池がそう言い、中に入ろうとすると、なのはとフェイト、はやての三人が菊池の両隣を巡って争い始め、菊池も慌てて仲裁に入る。じゃんけんという平和的手段で解決したが、必然的に一人は余る。運悪く余ってしまったのはやては、機嫌が悪くなっていたが、どうすることもできず、なのはとフェイトに引きずられるようにして、中に入った。

菊池はホテル内を歩き、周りを見る。

時折セレブの人達に声をかけられるが、やんわりとかわす。

今日は何か嫌な予感がする……。

菊池は、腰のホルスターに入っているデュエルディスクを見る。

いつも通りだ。問題ない。

今日のような移動ミッションの日や、出掛ける日は、ガン型というか、拳銃の形をしたデュエルディスクを携帯している。

このモヤモヤ感は何だ……？見えない道を走っているようで、気持ちが悪かった。

菊池はミッションが無事終了することを願っていた。

菊池が物思いに耽っている頃、ホテル周辺を警護しているティアナは機動六課のメンバーを考えていた。

時空管理局のエースである高町なのは。

ハラオウン家の出にして優秀な執務官であるフェイト・T・ハラオウン。

SSランクの魔導師である八神はやと、ニアSランクを持つ守護騎士達。

主席で卒業したパートナーであるスバル、幼いながらも陸戦Bランクのエリオ、

そしてつい先日に変身スキルの制御に成功し、菊池との連携にも成果を見せたキャロ。

このメンバーを見て彼女は自分には何の取り柄も無い。

それに追い打ちをかけたのが、菊池だ。

シンクロ召喚という自分の知らない召喚術を使い、シグナム副隊長や、竜魂召喚に成功したキャロを圧倒した。それどころか、キャロとの連携とはいえ、なのはとヴィータを撃墜した。

（それでも関係ない！私はランスターの弾丸が強いことを証明するだけ！！）

彼女は待機モードになっているクロスミラージュを強く握りしめ、新たに決意を固めた。

ホテル内にいる菊池達は、それぞれに別れて警備と見回りをすることにした。

だが、ここでも菊池の取り合いが発生する。

結局、菊池はなのは・はやての2人と行動することになった。

フェイトは不機嫌になっていたが、菊池は何とか機嫌を直した。

とは、言ってもその代償が、一日フェイトとつきっきりで手伝いをするというものだったが・・・。

「それにしても菊池くんはすごいね。機械の整備とかこっちのパソコンとかもう使用できるようになっているし、デスクワークもとても早いし」

菊池はここ数日、六課の設備の点検や、事務処理の手伝いなどをしてなのは達をサポートしている。

キャロとのタッグで行った模擬戦の結果を聞きつけたシグナムが、「ぜひ、模擬戦を」と頼んできたが、さすがにもう一度、キャロに負担を強いるわけにはいかない。

そこで、模擬戦はいつかすると約束し、今はシグナムの書類の手伝いをするということで、納得してもらった。とは言っても、本人はかなり、残念がっていたが・・・。

「元いた世界でも、このぐらゐの雑務をこなしていたからな」

「なるほどね」

菊池のの言葉に、なのはとはやては納得をした。

その頃、ホテル・アグスタから数百メートルの森に、フードを被った男性と紫色の髪をした少女がいた。

「あそこか。お前の探し物はここにはないのだろう？」

男は少女を見るが、少女は何も言うわけでもないのか、ただ見つめている。

「何か気になるのか？」

「うん」

少女は男性の言葉に、頷く。

そこに一匹の虫が少女が差し出した人差し指に止まる。

「ドクターのおもちやが近づいて来てるって」

少女の言葉通り、そこにはガジェットの様子があつた。

ホテルのヘリポートにいたシャマルのデバイス、クラールヴィンクトはガジェットの接近をキャッチしていた。

「！！クラールヴィントのセンサーが反応している！シャーリー！」

『はい！』

シャーリーは、すぐさまホテル周辺のレーダーを見る。

するとガジェット反応があった。

『来ました！ガジェットドローン？型、数30～35！！』

『ガジェットドローン？型4！』

シグナム、エリオ、キャロ、ザフィーラは、ガジェットの襲撃を地下駐車場で聞いていた。

「キャロ、エリオ！お前たちは上へ上がれ！ティアナの指示でホテル前で防衛ラインを設置をする」

「「はい！！」」

「ザフィーラは私と迎撃にでるぞ」

「心得た」

二人は喋れないと思っていたザフィーラが、喋ったことに驚いている。

「ザフィーラって喋れたの！？」

「びっくり・・・。」

かなり失礼な発言かもしれないが、ザフィーラは二人の反応を気にしていない。

「守りの要はお前たちだ。頼むぞ。」

「う、うん！」

「頑張る！」

シグナムとザフィーラは外に出て、迎撃準備のため移動を始めた。

同時刻に報告を聞いたはやては、菊池達に指示を送る。

「なのはちゃんとフェイトちゃんはそのままオークションの警備を続けて！菊池くんは、D・ホイールに搭乗して待機しといて！！」

「「わかった！！」」

『了解した！』

「このお・・・！！」

ティアナはホテルの近くに現れたガジェットを狙い撃つ。

その隣では相棒のスバルが新たな敵に向かっている。

『防衛ライン、持ちこたえる？ヴィータ副隊長が援護に来るから！』

シャルの通信にティアナは焦った。

「守ってばっかじゃ駄目です！！私達でもちゃんと全機墜とします！！」

ティアナは、近くにいるエリオに指示を出す。

「エリオ！あんた達はセンターに戻って！私とスバルのツートップで行く！！」

「は、はい！」

エリオを下がらせると、ティアナは走り出した。

「スバル！クロスシフトA！！」

「了解！！」

スバルがウイングロードでガジェットを誘い出す。

するとガジェットはスバルに反応し、スバルを追う。

そこにティアナがカートリッジをロードする。

(証明するんだ!! ランスターの弾丸は敵を倒すことができる事
!!!)

さらにロードする。その数は4発。

今のティアナでもこの数は完全に制御できるかどうか怪しい。

しかし、功を焦っていたティアナは、その事など考えていなかった。

「クロスファイアアアア…シューート!!」

膨大な数の魔力弾がガジェットを撃ち抜いていく。

しかし、その中の一発が敵から逸れて、何と味方であるはずのスバルの方向に行く。

「え!?!」

スバルもこれには驚いた。まさかの誤射である。それに、どう考
えても直撃コース。

当たれば、無事では済まされない。

スバルに当たる寸前だと思ったその時である。

「買発動! 【ガードブロック】!!」

その声と共に、爆発が起こる。

煙が晴れると、そこには菊池がいた。

スバルを守るために慌ててやって来たらしい。少々、息が上がっているのが分かる。

「大丈夫か？ スバル」

「は、はい。大丈夫です・・・」

あの時、罨カード、【ガードブロック】が、スバルを守ったのだ。菊池もスバルが無事なのを確認すると、ホッとしている。

と、そこにヴィータがやってきた。

菊池はティアナを見る。

ティアナは、ミスショットしたのがショックで顔を青ざめている。スバルが無事だったとはいえ、誤射をしてしまったことに変わりはない。

やはり、ショックは大きいようだ・・・。

「ティアナの馬鹿野郎！ 無茶して味方を撃つやつがあるか！」

菊池と共にやって来たヴィータは、ティアナがミスショットしているところを見ていた。

ヴィータはティアナを睨みながら、怒鳴る。

なのはを守ってやれなかった・・・。

そんなあの頃と重なったのが原因か、その怒りようは尋常ではなかった。

「あの・・ヴィータ副隊長。あれはコンビネーションの一つで―」

「ふざけるなタコ！ 直撃コースだよ今のは」

「それは私が上手く！」

ヴィータはティアナを睨む。

「もう良い、後はアタシと菊池でやる。お前ら二人まとめてすっこんでいろ！」

ヴィータの剣幕にスバルとティアナは何も言えず、撤退していく。

スバルとティアナのことで頭に血が上っていたヴィータは、不意打ちに気がつかなかった。

ヴィータの傍にいた菊池は、不意打ちに気づいた。

（まずい！このままでは・・・！ここは、このカードを使うしかない！！）

「相手モンスターの直接攻撃宣言時、このカードは、手札から特殊召喚する事ができる。来い、【ジャンク・ディフェンダー】！！」

【ジャンク・ディフェンダー】守1800

「【ジャンク・ディフェンダー】は、1ターンに1度、このカードの守備力をエンドフェイズ時まで300ポイントアップする事ができる。よって、【ジャンク・ディフェンダー】の守備力は、合計2100!!」

【ジャンク・ディフェンダー】守1800↓2100

ヴィータの前に【ジャンク・ディフェンダー】が現れ、ガジェットの不意打ちを防いだ。

ヴィータは、振り向きざまに、不意打ちしてきたガジェットを粉砕した。

「す、すまねえ……。助かった……」

「お互い様だ。さて、まだガジェットはいる。早めに片付けよう」

「おう！」

やがて、菊池達は全てのガジェットを破壊し、今回のミッションは終了となった。

第十二話 「菊池の初任務」 (後書き)

作者「うーん・・・」

菊池「どうした？ うんうん、唸ってさ」

作者「どうも内容が薄いなあと思ってね」

菊池「だったら、もう少し構想を練ってから投稿しろよ。馬鹿か、お前は」

作者「だって、読者の方を待たせるわけにはいかないだろう」

菊池「確かにそうだが・・・。それにしても、雲行きは怪しいな」

作者「シリアスモードですね。はたして、うまく書けるだろうか・・・」

菊池「まあ、頑張んなさい」

作者「おうよ！ 只今、テスト期間真っ最中だけど頑張るぜ！」

菊池「まず、テストを頑張れよ！！」

第十三話 「過去の回想と、新たなカード」 (前書き)

今回は、菊池がメインです。ちょっとしたお話が書かれています。

さて、もうすぐアグスタ絡みの話も終わりに近づいています。

この先のことについては、まだ不透明ですが、頑張りますので、応援よろしくお願いします。

第十三話 「過去の回想と、新たなカード」

全てのガジェットの破壊を確認した後、菊池達は事後処理に追われていた。

なのはは、ティアナと向こうの森で話している。

一方、菊池は、事後処理をキャロとエリオとやっている。

（ティアナの奴、大丈夫だろうか？）

ミスショットして顔が青ざめていたのを思い出す菊池。

嫌な予感がするな・・・。

なのは、ちゃんとティアナの思いに気づいてやれ。そうでなければ、最悪の場合、ティアナは・・・

「・・・・・・・・さん。・・・・・・・・さん！菊池さん！」

「!？な、何だ？どうした、キャロ」

キャロは何度も呼んでいたらしく、少し怒り気味である。

「菊池さん、どうしたんですか？さっきから、難しい顔してましたよ？」

心配そうに菊池の顔を覗き込みながら、尋ねてくるキャロ。

「ちょっと考え事をな」

「・・・・・・・・」

「きゅく・・・」

キャロとフリードは、菊池の答えに、不安感を強めたようだ。

「大丈夫でしょうか、ティアナさん・・・」

エリオが菊池に尋ねてくる。

「なのは次第かもな。俺達もサポートしてあげないといけないが、やはり難しいなあ」

エリオは心配そうに菊池を見ていたが、フェイトに呼ばれ、キャロと共に菊池の元を去って行った。

なのはがティアナとの話を終え、ユーノと良い雰囲気になっていく。

だが、菊池の頭の中は、今後のティアナへの対処法についてのことで一杯だった。

「ティアナ、絶対に無茶だけはするなよ・・・」

菊池は小さくその言葉を呟く。

その呟きは蚊の鳴き声程で、誰にも聞こえることはなかった。

（機動六課）

菊池達は、たった今、ホテルアグスタから帰って来たところだ。

「じゃあ、今日はもう解散」

「しっかり休んで今日の疲れを取ってね？」

『はい！』

なのは達は隊舎に、フォワード達は宿舎に戻って行く。

一人取り残された菊池はというと、休憩所でデッキの調整をしていた。

一つ一つ、カードを見ていく。

そして、ある一つのカードに目が留まる。

「これは、あの時の・・・」

そのカードとは、【ジャンク・ディフェンダー】だった。

（俺は、このカードを初めて貰った時、使えないクズカードだと思っていた。だけど・・・）

そう、このカードは、数少ない友人のひとりに貰ったのだ。

病弱だった友人。だから、彼は外で遊ぶことも許されなかった。

そんな彼がハマった遊びが、カードゲームだった。

これなら、激しく体を動かさなくても遊ぶことができる……。

彼が、カードゲームにハマりだした頃だった。俺と彼が出会ったのは。

俺も、その友人も友達はほとんどいなくて、一人ぼっちだった。

たまたま出会って、話してみると意気投合。俺達はカードゲームで遊ぶようになった。

そんなある時、彼とカードを交換し合い、彼がくれたのが、【ジヤンク・ディフェンダー】だった。

俺が渡したカードは、結構なレアカードだった。それと釣り合うとは思えないカードだった。

俺は思わず、顔をしかめそうになったが、できなかった。彼はレアカードをあまり持ってなかったのだ。そんな彼がくれたたった一枚のカード。それにケチをつけることなんて、できるはずもなかった。

（だが、このカードをくれた彼は、もうこの世にはいない……。だから、このカードだけが、俺と彼との絆なんだ。このカードをデッキからは抜いたら、彼との絆を断ち切るのと変わらない……）

初任務の時、ガジェットが、ヴィータへの不意打ちをしようとし

ていたのを、気づいた菊池は、咄嗟に手札にあった【ジャンク・デ
イフェンダー】を使った。その時に、思い出したのだ。こんなカー
ドをデッキに入れていたのだと・・・。

（絆とは、奥が深いものなのだな・・・。今更だが、そう感じる・
・・・）

菊池は小さく笑う。だが、その笑いもすぐ消えた。

「当面の問題は、ティアナのことだな・・・。だが、なのはも何か
考えてあるに違いない。ここはおとなしく様子を見よう・・・」

菊池はそう呟くと、立ち上がり、宿舎に戻って行った。

だが、菊池は気付かなかった。いや、見落としてしまったのだ。

ティアナの思いを、願いを聞くことを・・・。

菊池はその夜、夢を見た。

「ここは？」

見渡す限り、何もない。辺りが真っ白なのだ。

「？」

すると、誰かがこちらに向かってくるのが分かる。

菊池は黙って、やってくる人物を注視する。

やってきたのは、見たこともない、初対面の男性だった。

「あんたは？」

菊池が尋ねると、彼は答える。

「私の名はザルグ。君にこのカードを渡しに来たのだ」

ザルグと名乗るその男性は、菊池にあるカードを見せる。

菊池は、そのカードを見て、驚く。

「そ、それは・・・、俺の世界で伝説のレアカードと呼ばれるカード・・・。何故、あんたが持つてるんだ!？」

「君がそんなことを気にする必要はない。君はこのカードを受け取る権利がある。さあ、どうぞ」

そう言っ、ザルグは菊池にカードを差し出す。

「・・・っ!だが、理由もないのに、受け取ることはできない!」

「フム・・・、なら、理由を話せば受け取ってくれるか?」

彼は考えるような仕草をとると、菊池に尋ねる。

「いきなり、受け取ってくれと言われても、納得できない!せめ

て、理由を説明してくれないか？」

「分かった。と、言っても理由はそんなに大したものではない。ところで、君は【スターダスト・ドラゴン】のカードを持っているだろう？」

菊池は、ザルグを警戒しながらも頷く。

「実は、私が渡すこのカードは【スターダスト・ドラゴン】を持つ者にだけしか使えない、カードなんだ」

「だが、【スターダスト・ドラゴン】を持つ者は俺だけじゃない！」

菊池は、ザルグの言葉を否定する。

「確かに【スターダスト・ドラゴン】を持つ者は、君だけではない。だが、君が今いる世界に、【スターダスト・ドラゴン】を持つ者が君以外にいるのか？」

「そ、それは・・・」

菊池は、今までの勢いが嘘かのように、言葉を失う。

「だが、俺があんたの言葉に従ったとしよう。俺は、そのカードを使って、何をすればいいんだ？」

「それは、君自身が決めることだ。君自身が正しいと思った道を進め。行け、若きデュエリストよ。己の意思を貫くのだ」

ザルグがそう言った時には、いつの間にか菊池の手に、カードが乗せられていた。

「ま、待て！」

菊池が、背中を向け、去っていくザルグに手を伸ばした時、夢から覚めた。

第十三話 「過去の回想と、新たなカード」 (後書き)

作者「お前さ」

菊池「何だよ」

作者「あれだけ、ティアナのことを心配しておきながら、傍観とは情けないな。

何で、介入しないのさ」

菊池「そのところは、ネタバレの可能性があるから、ノーコメントで」

作者「はぁ……。全く、うちの菊池は消極的だなぁ……。まあ、こんな情けないキャラが主人公の物語ですが、よろしくお願いします」

第十四話 「傍観から一転、説得へ」 (前書き)

やっと、できました。第十四話です。こういうシリアスな場面の描写は、人の心の動きが複雑で、難しいです。それに、話の展開上、ウキウキハッピーな気分にはなれません。ですが、もうすぐ、アグスタ関連の話には、けりをつけられると思います。

第十四話 「傍観から一転、説得へ」

ホテル・アグスタでの任務から、何日か経ったある日、菊池は訓練に顔を出していた。

フォワード達の訓練の様子を遠くから観察していた菊池は、ある異変に気付いた。

（ティアナの様子が変だな・・・）

ホテル・アグスタでの任務前の姿とはうって変わっていることに、不安を隠せなかった。

少なくとも、ティアナには焦っているような態度が見られる。

（やはり、アグスタでの任務が影響しているようだな・・・。それに、動きにキレが無くなったな・・・。前はもつと、キレのある動きを見せていたのだが・・・）

そんな風に考えていると、なのはが菊池を呼んでいる。

菊池は返事をする、なのはの元に向かった。

菊池は今、フォワード陣と軽い模擬戦のようなものを行っている。

四人の相手をしながらも、菊池はティアナの動きを注視していた。

（やはり、戦ってみれば一発で分かる……。四人の連携が取れてないのが丸分かりだ。）

菊池がそう感じるのも無理はなかった。

菊池は知らないが、スバルとティアナは、ここ最近、自主トレーニングをしているのだ。

そして、二人で勝手なフォーメーションを組んで、今までとは違うフォーメーションを、スバルとティアナは取るためだ。

そのため、ライトニングのエリオとキャロとのペアとの間に、溝ができてしまっている。

おまけに、自主トレーニングの疲労が、動きのキレの悪さに繋がっている。

（これはまずい。なのはに相談した方がいいな……。）

菊池は、D・ホイールを操りながらそう思った。

夕食後、しばらくしてから菊池は、なのはの部屋を訪ねた。

どうしても、フォワード達の異常な様子に、傍観できなかった。

あのままでは、いつか大変なことがおきると思った菊池は、なの

はの意見を聞いておこうと思った。

なのはは、いつもフォワード達と接している。今回の事態をどう思っているのかは、ぜひとも知りたかった。

菊池は、クッキーとホットミルクを乗せた盆を持ち、なのはの部屋の前に立つ。

コンコン！

菊池は扉をノックする。

「失礼するよ、なのは」

菊池はクッキーとホットミルクを乗せた盆を持ち、部屋に入る。

なのはは突然の来訪者に驚きつつも、声を掛けて来た。

「菊池くん、どうしたの？こんな時間に」

なのはは、フォワード達の教導時の動きを見ていたようだ。

つまり、菊池が訪ねてくるまで、ずっと仕事をしていたのだ。

それを見て菊池は、若干目を細めながらも、持って来た物を見せる。

「深い意味は無い。ただ、歩いていたらお前の部屋から光が漏れて

いたからな。

頑張っているなら、と差し入れを持って来たんだ」

これは、真っ赤な嘘である。

菊池は、何となくやって来たのではなく、明らかに意図があつて来たのだ。

だが、なのははそんなことは微塵も知らない。菊池が持ってきたクッキーとホットミルクを、嬉しそうに受け取る。

「ありがとう。菊池くん」

なのはは、盆を机に置くと、お皿に乗っているクッキーを一つ掴み、口に入れた。

「このクッキー、美味しいね」

なのはは笑顔を見せた。よっぽど美味しいのだろう。

褒められた菊池は、素直に礼を言う。

「ありがとう。それ、俺の手作りなんだ」

「そうなんだ」

しばらく、菊池となのはは雑談していた。

話が弾んでいく中で、菊池は危うく目的を忘れるところだった。

話のタイミングを見計らって、話の転換を図ろうと考える菊池。

ここで、なのはは、ホットミルクが入ったマグカップに、手を伸ばした。

そのためか、今まで弾んでいた話が一旦途切れた。

そこで菊池は、なのはがマグカップを掴もうとするなのはの手を掴んだ。

「ひゃっ!?!どどど、どうしたの、菊池くん!?!」

なのはは、顔を真っ赤にしながら訊いてくる。

菊池はそれをサラリと受け流し、自分が訊きたかったことを尋ねる。

「なのは。お前は自分の教導についてどう思う?」

「えっ?どうって・・・?どういうことなのかな?」

菊池の真剣味を帯びた声に、なのはは戸惑いながらも、訊き返してきた。

菊池は掴んでいたなのはの手を離すと、言った。

「そのままの意味だよ。自分がやっている教導は、正しいと思っているか、間違っているかと思っているかということさ」

「もちろん正しいと思っているよ。私は、間違っていると思うこと

を教えたりしないよ」

菊池は、「そうか」と言うと、なのはにティアナのことについて尋ねてみることにした。

「なのは、お前はフォワード達の様子がおかしいことを知ってるか？」

菊池はなのはの目を見て、言った。実はこれが訊きたかったのだ。

差し入れは、なのはの部屋に来るための口実だ。

菊池の質問になのはは、黙って頷く。

「特に、ティアナとスバルの様子がおかしいんだ。なのは、何か心当たりはないか？」

菊池がそう尋ねると、なのははスバルとティアナの様子がおかしくなっている、原因を教えてください。

なのはの話によれば、スバルとティアナは朝練の前や、夕練が終わった後に、自分達だけで自主トレーニングをしているらしい。

そして、二人で独自のフォーメーションを作り、行うため、ライティングのエリオとキャロとの連携があまりうまくとれていないのだとか。

そんな二人になのはやヴィータは注意するのだが、その場では反省し訓練中は指示に従うものの、自主トレーニングをやめないのだそうだ。

「なのは、お前、ティアナと話をしたか？」

菊池は、なのはとティアナのコミュニケーション不足を指摘する。

「今の2人には何を言っても聞いてもらえないの。自主トレーニング自体は悪い行為ではないからね。ただ、訓練に差し支えが出てきたから、少し自重してもらいたいんだけど・・・」

なのはは静かに話すが、若干不安そうだ。

普段より話すトーンが低い。

こういうおとなしい娘が怒ると想像を超える行動をとることを、菊池は今までの経験で知っているの、そうなる前になんとかしておきたいと考えた。

「なのはは、ティアナが今何に悩んでいるか知っているか？」

菊池はは静かに、落ち着いてなのはに話す。

「確かに、なのはがフォワードの皆のために練習メニューを考えたり、それぞれの特性、癖などを把握しているのは知っている。今日も俺がここに来るまでは、やっていたんだろう？けど、スバルやティアナ達に訓練の意味を話したか？なのはの訓練に対する思いを伝えたか？」

菊池の言葉に、なのはは何も言い返さない。ただ黙って聞いている。

「ティアナは訓練の意味、自分の機動六課での存在意義に疑問を持つてと思う。でなきゃ普通、自主練なんかしないし、焦った様子を見せるはずがないからな。人間にはお互いを尊重し、話し合いをすることが出来るんだ。意地を張らず、お互い歩み寄るのも必要だぞ」

菊池はそう言うとなのはに挨拶をして、空になったマグカップとお皿を盆に載せて持つと、部屋を後にした。

菊池が出て行った後、なのはは菊池の言葉を頭の中で反芻していた。

しかし、こうした菊池の努力も空しく、その後もなのはとティアナはお互い歩み寄ることはなく、

なのは対スバル、ティアナコンビの模擬戦の日がやって来た。

第十四話 「傍観から一転、説得へ」 (後書き)

作者「ふー、何とか書けた」

菊池「ねえ、最後の文は何なの！？嫌な予感しかないんだけど！
！」

作者「いよいよだな。菊池の最期が見れるぞ」

菊池「十五話で完結！？しかも主人公死亡で！？そんな終わり方、
納得できん！！」

作者「心配するな。俺でも納得できん」

菊池「じゃあ、紛らわしいこと言わないでくれる！？誤解しそうだから！！」

第十五話 「二人のすれ違う思い」 (前書き)

やっと投稿できました。心の中の描写は、デュエルの内容を考えるよりも難しいです。うまく表現できていないかもしれませんが、ご了承ください。

第十五話 「二人のすれ違う思い」

「さあて、それじゃ朝のおさらい。2ON1で模擬戦するよ。まずはスターズから。二人ともバリアジャケット展開して」

「はい！」

ティアナとスバルは元気よく返事をする。

ティアナとスバルはセットアップして、菊池とヴィータ、ライトニングは別の場所で見物することになった。

「もう始まってるんだ」

フェイトが遅れてやって来る。

「本当はスターズも私がやる予定だったんだけど・・・」

フェイトは模擬戦を行おうとしているのはを心配そうに見る。

「最近、訓練密度濃いからな・・・休ませてやらないと」

ヴィータも最近のなのはのオーバーワークは気になっていたようだ。

厳しい顔でなのはを見ている。

「なのは、部屋に戻ってからもずっとモニタに向かいっぱなしなんだよ。」

訓練メニュー作ったり、ビデオでみんなの陣形見たり」

菊池も頷きながら言った。

「確かに、なのはは夜遅くまで訓練メニューを考え直したり、フォワード達の動きを何度も見たりしてるみたいだな。

この前も、なのはの部屋に行ったことがあったが、その時も仕事していた」

ヴィータとフェイトは菊池の発言に少し驚く。

「なのはさん何時も僕達の事、訓練中も見えてくれてたんだ・・・」

エリオは普段の訓練でのなのはの心配りに感動しているようだ。

「うん・・・、ずっと」

キヤロもエリオに賛同するように嬉しそうなのはを見る。

ヴィータはそんな二人を微笑みながら見つめる。

菊池は、昨日のことを思い出していた。

D・ホイールの整備をしていた菊池は、ティアナのことが気になり、作業が中々進まなかった。

しまいには、溜息まで出て来た。なのはを説得したのは良いが、目立った進展が見られるわけでもなかったからだ。

菊池は、ティアナの上司であるなのはから、歩み寄って本人と直

接話し合うべきだと考え、話し合うよう説得した。

あれから、少し経つが、ティアナの様子が変わることはなかった。

工具を片手に、どうするべきだろうと考えていた時、後ろから声を掛けられた。

「どうした？ バイクの整備か？」

「ヴァイスか。ああ・・・、ちよつとな」

ヴァイスは、たまたま通りかかり、菊池を見かけたのでやってきたようだ。

「元気ないな、具合でも悪いのか？」

「いや、具合が悪いわけではない。だが、ティアナのことが心配でな。アグスタでの任務以来、何か思いつめているようだから、なのは話をしたんだが・・・」

菊池の様子に、異変を感じたのか、心配そうに尋ねてくるヴァイスに、菊池は悩みを打ち明けた。

「なるほどねえ・・・」

「誤射は確かに危険だし、ショックを受けるのも分かる。だが、いくらなんでもあそこまで思いつめているのは、きっと何かあるはずなんだ。ヴァイス、何か思い当たることはないか？」

菊池の言葉に、ヴァイスは少し考え込んでいたが、やがて静かに

口を開いた。

「そうだな、お前には話しておいたほうが良いかもしれないな。
実は……」

ヴァイスは、ティアナの兄、ティーダ・ランスターについて話し始めた。

彼は首都航空隊という部署に所属し、当時の階級は一等空尉。

両親と早く死別したティアナにとって唯一の肉親であり、執務官志望のエリート空士だった。

だが、ティアナが10歳の頃に、逃走違法魔導師追跡任務に従事し、違法魔導師と交戦して、殉職した。

享年21歳。まだまだ、これからという時に亡くなったのだ。

彼は精密射撃魔法が得意で、ティアナに射撃魔法を教えたのも、彼だった。

彼の死後、その遺志を継ぐように、ティアナは管理局への道を志しており、現在のティアナに多大なる影響を与えた人物だそうだ。

「なるほど。ティアナがあそこまで思いつめているのは、お兄さんの存在が大きいようだな」

「だが、このままだとティアナは体を壊しちまう。俺もあいつに忠告はしたんだが……」

「うまくいかなかったのか？」

「ああ・・・」

菊池は、ヴァイスと話しながらも考える。

俺はどうするべきなのだろうと。

この世界で発達している魔法。これについてはまだまだ、よく分からない。だけど、俺も機動六課の一員だ。仲間が無茶をしているのだとしたら、全力で止めるべきだ。

明日にでも、ティアナと話をしよう。菊池はそう決意した。

そして、今日。菊池は訓練場にいた。

もうすぐ、午前中の訓練も終わる。午後の訓練までの間の昼休みに話をしようとティアナとは約束している。

話をする約束を取り付けてはいるのだが、菊池は嫌な予感がしていた。

（昨日のヴァイスの話を聞いて、疑問に思っていたことが大方分かった。それでも、不安が拭えないのが現状だ。）

この日、菊池は万一の事態に備えて、D・ホイールを持ってきている。

「おっ！ クロスシフトだな」

エリオとキャロを横目で見たヴィータは、ティアナがクロスファイアを放つのに気付く。

ティアナは周囲に10個程の魔法弾を展開している。

「クロスファイアー、シュート！」

ティアナから魔力弾が発射される。

魔力弾は、なのはに向かって行くが、ただ飛ばしているように見える。

「何かキレが無えな？」

ヴィータはティアナのクロスファイアにいつもの勢いが無いことに疑問を抱く。

「コントロールは良いみたいだけど・・・」

フェイトは正確なコントロールに目をやるが、それでもヴィータは釈然としないようだ。

「それでもこれは・・・」

ヴィータを含む観戦している4人は、何時ものキレが無くて疑問に思っているようだ。

なのはは、魔力弾をあっさりと避ける。

だが、クロスファイアは、飛んで回避するなのはの後ろを追尾し

続ける。

すると、なのはの前にスバルのウィングロードが展開し、その上にはスバルがなのはに向けて近づいていた。

なのはは迫り来るスバルを確認する。

「っ！？フェイクじゃない、本物！？」

なのはは即座に魔法弾を展開し、前方のスバルに向けて発射する。

スバルは飛んでくる魔法弾をシールドで防御し突進をやめない。

何個かのスフィアはスバルのシールドを突破し、スバルの体をかすっていく。

そして、全ての魔法弾を捌ききると、スバルはなのは目掛けてリボルバーナックルを振り下ろす。

「うおりゃああああっ！！」

なのはは咄嗟にレイジングハートでシールドを展開しスバルのリボルバーナックルを防御する。

スバルは力押しでなのはのシールドを破ろうとしているのか、回避するそぶりを見せない。

リボルバーナックルのナックルスピナーが回転数をあげ、唸る。

なのはは、スバルの無茶な突進に顔を顰める。

すると、なのははレイジングハートを振り、スバルを弾き飛ばす。

「きゃああああっ!？」

吹き飛ばされたスバルは、なんとかウィングロードの上に着地する。

「こらスバル!ダメだよ、そんな危ない軌道!」

なのははスバルを叱りながら、ティアナのクロスファイアをよけ続ける。

「すいません!でも、ちゃんと防ぎますから!!」

「ティアナは?」

なのはは周囲を見渡す。

すると、別の廃ビルの屋上で光の反射を確認した。

そこには、ティアナが砲撃準備し、しっかりなのはをロックしていた。

「ティアナが砲撃!？」

フェイトが驚き、口にする。

驚くのは当然のことだ。

ティアナは普段の訓練では砲撃などしていないし、教えていない。

《特訓成果、クロスシフトC！ 行くわよ！》

「おう！」

ティアナの合図と同時にリボルバーナックルがカートリッジをロードし、マッハキャリバーがうねりを上げる。

そして、マッハキャリバーの突進力を利用し、一気になのはとの距離を詰めるスバルは、

リボルバーナックルを振り上げなのは目掛けて体ごと突撃する。

なのはは魔法弾を展開するが、スバルはそれ等を全て避け、拳の届く距離まで近づき、リボルバーナックルを振り下ろした。

だが、なのはもレイジングハートでシールドを展開し、リボルバーナックルの攻撃を防ぐ。

両者の魔法がぶつかり合い、火花を散らせる。

ナックルスピナーの回転が上がるが、シールドが突破できない。

スバルは必死になのはに喰らいつき、なのはの隙を作る。

《ぐぐぐ、ティアー！》

スバルは力を込め、念話でティアナを呼ぶ。

なのははスバルの攻撃を防御しつつ、ティアナの方を見る。

「！」

すると、砲撃準備をしていたティアナはその場から消えてしまった。

「あれは幻影！？」

「じゃあ本物は！？」

キャロとエリオが慌てている。

それとは対照的に、隊長陣や菊池は冷静に見守っている。

（なるほどな。スバルの役目は、なのはの注意を引くことか……。ということは、本命はティアナのクロスファイアなのか？）

菊池は、模擬戦の終着を考えた。

今までなのは達に混じって、模擬戦に参加してきた菊池も、ティアナが砲撃をしているところを見たことはない。

つまり、あの局面で使うのは間違いなく危険行為になる。

そう考え、改めてティアナの居る位置を確認すると、ティアナはなのはの頭上に展開されたウィングロードを走っていた。

「・・・？」

菊池は、呆氣にとられた。

てっきり、クロスファイアを撃つのだと思っていた菊池は、顔色を変えた。

（何がしたいんだ？ ティアナ・・・）

そう思っていると、ティアナのデバイス、クロスミラーージュの銃口部分から、何かが出て来たのを菊池は目視で確認する。

（あれは銃剣か？ ティアナは近接戦闘をするつもりなのか？）

ティアナの行動に疑問を抱いた菊池は、これまでのスバルとティアナの動きを思い出す。

（確か、最初にクロスファイアを撃ち、その後、スバルがなのはの注意を引きつけた。その間、ティアナは何かをしていた。そして今、ウイングロードを走っている・・・）

ここまで考えて、菊池はある考えに辿り着いた。

（ティアナは、スバルと同時になのはに一撃を入れるつもりだ。こんな戦い方、今までになかった・・・）

菊池は、今回のティアナの行動を斬新な動きだと評価した。おそらく、スバルとの自主トレーニングで考え出したのかもしれない。

だが、あくまでも自主トレーニングでの立案だ。なのはやヴィータの監修の下でのフォーメーションではない。

つまり、勝手に自分達で作って、練習し、実行したフォーメーションということになる。

（作戦としては面白いと思うが、訓練の成果を試す模擬戦では自重するべきだ。なのはやヴィータに相談し、許可を得れば別だが・・）

考え込む菊池を他所に、ティアナは、カートリッジを2発ロードして魔力刃をなのはに向けて飛び込んでいった。

ティアナは、なのはの後ろを取り上から肉迫する。

「一撃必殺！ でええええい！！」

「レイジングハート、モードリリース」

『オーライ』

なのはの言葉に、菊池は嫌な予感的中したと感じ、拳を固く握りしめたまま、急いでD・ホイールの置いてある所にむかった。

「っ！？ 菊池くん、どうしたの！？」

フェイトが菊池に声を掛けて来たが、菊池には答える余裕など無かった。

菊池は後悔していた。行動に移すのが遅かった。いや、それ以前にもっと2人のために親身になれば良かったのだ。

そんなことを思いながら、焦る気持ちを胸に菊池は早足で歩く。

D・ホイールをおいている所までは、そんなに時間は掛からない。
だが、それでも早足で向かった。

「だあああっ!!」

ドカーン!!

菊池が、丁度立ち去った時、ティアナの掛け声と共になのは達のいた場所は爆発し、爆煙に包まれた。

衝撃波が、離れて観戦していたフェイト達にも襲い掛かる。

「なのは!」

なのは達は煙が包み込み、フェイトはなのはの安否を心配する。

あのティアナの攻撃をまともに喰らっていたら、ただでは済まないだろう。

そう、まともに喰らっていればの話だが。

煙が晴れると、なのはは左手でスバルのリボルバーナックルを受け止め、右手はティアナの魔力刃のタガ―部分を掴んでいるため、血が流れていた。

「……おかしいなあ……、二人とも……どうしちゃったのかな?」

「あっ!？　なのは・・・さん」

スバルとティアナは驚き、声を発したスバルの声は震えていた。

「頑張っているのは分かるけど、模擬戦は喧嘩じゃ無いんだよ？」

なのはは静かに語りだす。

しかし、二人とは目を合わせず淡々と怒りを表している。

「練習の時だけ言う事聞くフリして、本番でこんな無茶して危険な動きしたら、練習の意味・・・無いじゃない」

なのはの顔が伏せられる。

ティアナは、なのはの右手から流れる血を見て恐怖する。

傷つけてしまった。訓練とはいえ、仲間を、傷つけてしまった。

ただ、そのことに。

「ちゃんとさ・・・練習どおりやろうよ。ねえ？」

スバルはなのはの怒りに震え、まともに喋れない。

「私の言ってること・・・私の教導・・・、そんなに間違ってる・・・？」

なのはは、ティアナを見る。

しかし、ティアナはなのはと目を合わせることが出来ず、クロスミラージュのダガーを解除し、なのはと距離をとる。

そして、体勢を立て直し、クロスミラージュをツーハンドで構え、カートリッジをロードする。

「私は！ 傷付けたく無いから！ もう無くしたく無いから！」

ティアナは泣き叫び、自分の思いをぶつける。

そんな独白にスバルはただ見ているしかなく、立ち尽くしていた。

「だから・・・！ だから・・・！ 強くなりたいんです！」

なのはは、ティアナの独白を聞きながら一度、目を瞑り、聞き終わると再び目を開ける。

そして、ゆっくりと左腕をあげ、人差し指をティアナに向けると、静かに言った。

「少し、頭冷やそうか・・・」

なのはの足元に魔法陣が現れ、指先に魔力が集まりだす。

「クロスファイアー」

なのはは静かに魔法を唱える。

次第に右手に魔力弾が形成される。

「うあああ！　ファントムブレ・・・」

「シュート」

ティアナが必殺の砲撃魔法を撃つよりも早く、なのははクロスフ
アイアをティアナ目掛けて発射した。

ドーン！！

クロスフアイアは逸れることなくティアナに被弾し、爆発した。

「ティア・・・！！」

スバルがティアナの元へ行こうとするが、なのはのバインドがス
バルを拘束する。

「バインド！？」

スバルは、なのはにそんな事しないですよねって言ったそうな表
情を見せるが、

なのははティアナから目を離さずに、ティアナの方に人差し指を
指し続けている。

「じっとして・・・よく見てなさい」

煙の晴れた中に、立つのも精一杯という姿のティアナがいた。

今にも倒れそうである。

にも関わらず、なのはの右手にクロスファイアが形成される。

「なのはさん!？」

スバルの悲痛な叫びも空しく、なのはの指先からクロスファイアが発射された。

その瞬間である。ある声が訓練場に響いた。

「その攻撃はこのカードが受ける!! 【速攻のかかし】!!」

この声の後、何かにクロスファイアが当たり、大きな爆発がした。

ドカーン!!!

そして、爆発の後に煙が上がる。

なのはは、声がした方を向く。

そこには、D・ホイールに跨り、なのはを睨んでいる菊池がいた。

菊池はフェイト達と共に観戦していたが、嫌な予感がしたため、

D・ホイールを置いているところまで戻り、慌てて戻って来たのだ。

戻って来た時には、バインドで縛られたスバルと、茫然としているティアナ、そしてクロスファイアを発射しようとしているなのはの姿があった。

「くっ!間に合うか!？」

菊池は急いでスピード・ワールド2を発動し、デッキをシャッフルする。

その後、カードを5枚引いた。

「じっとして・・・よく見てなさい」

なのはの言葉と同時に菊池は、デッキからカードを1枚ドロースる。

「なのはさん!？」

スバルのその言葉と同時に、なのははティアナに砲撃した。

菊池は先ほど、ドロートしたカードをチラッと確認し、発動した。

そう、そのカードが【速攻のかかし】である。

「【速攻のかかし】は、相手モンスターの直接攻撃宣言時、このカードを手札から捨てることで、その攻撃を無効にし、バトルフェイズを終了する!!」

なのはは、菊池の突然の登場に驚きながらも、尋ねる。

「菊池くん・・・、何故、私の邪魔したの？」

なのはが菊池を睨んでくる。

菊池も負けずに睨み返し、言った。

「もう模擬戦は終わったんだ。これ以上、ティアナを攻撃する必要はない」

「私は教導してただけだよ・・・」

菊池は睨んだまま、言った。

「なのは、確かに自分の意見を貫くために相手を叩きのめす必要がある時もある。だが、お前はティアナと話し合ったのか？話し合ってもいないのに、叩きのめすのは明らかにおかしい！」

「・・・・・・・・」

「俺はこれ以上、お前がティアナに攻撃をすることを許すわけにはいかない！ティアナは敵じゃない！仲間なんだ！仲間ならきつと分かりあえる。お前にも分かるはずだ！」

「菊池くんも、私の邪魔をするの・・・」

なのはが戦闘の態勢を取る。

（今のなのはには、何を言っても無駄だ。ならば、なのはとはデュエルで決着をつけるしかない・・・！）

「仕方ない！こうなったら、デュエルで俺の思いを伝えてみせる！」

菊池は、手札、墓地にあるカードをデッキに戻し、シャッフルする。

「行くぞー!! ライディング・デュエル、アクセラレーション!!」

第十五話 「二人のすれ違う思い」 (後書き)

作者「難しいね、心情を表現するのは」

菊池「人の心の動きは複雑だからな。一筋縄ではいかないはずだ」

作者「何度も推敲して書きあげたんだけど、何かしっくり来なくてな。何でだと思う？」

菊池「さあな。お前の表現力が乏しいからじゃないか？」

作者「痛いところを突いてくるね。俺も気にしてるのに・・・」

菊池「さて、次こそは戦闘になるのかな？」

作者「最後の文を読んでみろよ。戦闘以外、何をするのかを教えて欲しいもんだ」

菊池「グダグダな文章でできた作品なので、不快に思われる方もいると思いますが、これから宜しくお願いします」

第十六話

「なのはと菊池の思い。生来せよ!」
「シューティング・スター・ドミ

ようやく、書きあげました。早いもので、もう第十六話です。

物語としては、まだまだ中盤です。これからサボらず投稿していきたいと思います。

第十六話

「なのはと菊池の思い。生来せよ!」**【シューティング・スター・ドミ**

「俺のターン!!」

菊池は、素早くドロートしたカードを確認し、右手に2枚のカードを持つ。

「このカードは相手フィールド上にのみモンスターが存在する場合、レベル4モンスターとして、手札から特殊召喚する事ができる。来い、**【レベル・ウォリアー】!**」

【レベル・ウォリアー】 攻300

レベル3↓4

菊池はさらに畳みかける。

「さらにチューナーモンスター、**【ブライ・シンクロン】**を召喚!」

【ブライ・シンクロン】 攻1500

「行くぞ!レベル4の**【レベル・ウォリアー】**に、レベル4の**【ブライ・シンクロン】**をチューニング!」

すると、**【レベル・ウォリアー】**と、**【ブライ・シンクロン】**が空高く舞い上がる。

「菊池、いきなりあのドラゴンを出すのか?」

ヴィータは呟くように言った。確かにレベル4とレベル4の合計は8。

【スターダスト・ドラゴン】を出す用意はできている。

いつもの模擬戦でも、たまに召喚することがあるので、おかしいことなどないのだが、ヴィータ達は菊池から、いつものような頼もしさというか、迫力が伝わってこないことに疑問を抱いていた。

「菊池さん・・・」

「何をするつもりなんでしょうか・・・？」

エリオとキャロは心配そうに菊池を見つめる。

「集いし願いが新たに輝く星となる。光差す道となれ！シンクロ召喚！飛翔せよ、【スターダスト・ドラゴン】！」

照明弾のように浮かんだ光の中から出て来たのは、菊池が一番好んで召喚する、【スターダスト・ドラゴン】だった。

そして今、菊池の頭上を飛んでいる。

【スターダスト・ドラゴン】の両翼から舞い散る光の粒子は、いつでもウットリしてしまうような美しさを備えている。

「シンクロ素材となった【ブライ・シンクロン】の効果で、【スターダスト・ドラゴン】の効果は無効化されるが、エンドフェイズ時まで、【スターダスト・ドラゴン】の攻撃力は600ポイントアップする！」

【スターダスト・ドラゴン】攻2500↓3100

（なのはがあそこまで怒るのは何か訳があるはず。だが、それが何かは分からない。なら、この戦いでなのはの真の気持ちをくみ取り、俺の思いを伝えるしかない！）

「行け、【スターダスト・ドラゴン】！シューティング・ソニック
！！」

【スターダスト・ドラゴン】の口から、銀色のブレスが飛び出し、
なのはに向かう。

《プロテクション》

レイジングハートはオートガードで防ぐが、【スターダスト・ドラゴン】の攻撃力は3100。

並大抵の防御力でなければ、【スターダスト・ドラゴン】の攻撃は防げない。

「くっ！？」

【スターダスト・ドラゴン】の攻撃にシールドが耐えきれず、なのはは吹き飛ばされる。

（さすがに今の一撃は効いたようだが、次のターンには【スターダスト・ドラゴン】の攻撃力は元に戻っている。ここは、このカードでしのぐしか・・・っ！）

「・・・カードを2枚伏せてターンエンドだ」

【スターダスト・ドラゴン】攻3100↓2500

菊池 LP8000 SP C0↓1

訓練場のあるビルの屋上には、菊池となのはの戦いを見ている
ヴィータ達の姿がある。

皆、心配そうに菊池となのはを見つめる。

「菊池は何がしたいんだ？」

ヴィータは疑問に思っていたことを口にする。

「今のあいつからは、闘争心というか、相手を打ち負かそうとする
意思が感じられねえ。単純になのはを倒そうとしているようには
見えねえんだ」

「・・・・・・・・」

ヴィータの言葉を聞き、フェイトは菊池を見つめる。

菊池は、苦しそうな表情を浮かべていた。

ライディングデュエルをする際、菊池は必ずヘルメットを被って

いるので、はっきりと見ることはできないが、それでもどんな表情をしているのかは確認できた。

「菊池くん・・・」

フェイトはただ、菊池の横顔を見つめていた。

「ディバインバスター!!」

菊池がカードを2枚伏せたすぐ後に、なのはは吹き飛ばされた所から、遠距離砲撃をしてきた。

「【スターダスト・ドラゴン】！迎撃しろ!!」

菊池の言葉に、【スターダスト・ドラゴン】も迎撃の姿勢を取り、ディバインバスターに銀色のブレスをぶつける。

だが、やはり攻撃力2500では力不足のようで、ディバインバスターに押されていた。

そしてついに、【スターダスト・ドラゴン】にディバインバスターが命中した。

ディバインバスターが当たっても、少しの間【スターダスト・ドラゴン】は耐えていたが、破壊された。

「ぐああああ!!」

菊池 LP8000↓5500 SPC1

「ス、【スターダスト・ドラゴン】・・・」

菊池は、その身でなのはの強さを思い知った。

（これが、なのはの強さか……。生半端じゃない力だ）

苦々しい思いだが、認めるしかない。一撃で【スターダスト・ドラゴン】を葬ったのは事実なのだから。

「これで分かってくれたかな？菊池くん」

「・・・・・・・・」

なのはが声を掛けて来たが、菊池は苦い表情のまま、答えようとはしない。

そんな菊池に、なのははわずかに顔を顰める。

「どうして黙ってるのかな？」

「・・・・・・・・なのは、お前は何故ティアナの気持ちに気付いてやらなかった？」

質問を質問で返す菊池。明らかに会話がかみ合っていないのが明白だった。

それでも、なのはは菊池の質問に答えようとした。

「私は――――」

「俺は言ったはずだ。“人間はお互いを尊重し、話し合いをすることが出来る”と。それなのに何故、ティアナと話をしなかった？」

「……………」

「確かに、今回の件で一番悪いのはティアナだ。だが、ティアナが培ってきた努力……、それまで否定する必要はないはずだ」

菊池はなのはに諭すように話す。

「でも、間違った努力なら、否定するよ……」

なのはは、菊池の方を見ながら答える。

「それはどういう意味だ？」

菊池の質問に、なのはは怪訝な顔をする。

「……………どうって、そのままの意味だけど。何でそんなこと――」

「なるほどな」

菊池は、なのはの声を遮る。

「お前の教導とは、教える立場の者が一方的に、自分の価値観や考えを押し付けるといことなんだな」

「違う！私はそんな教導してない！」

「お前はいつも、フォワード達のことを気にかけていた。朝から晩までずっと……。フォワード達もお前の頑張る姿を見て、感謝していた。だから、口に出して言わずとも自分の気持ちを分かってくれている……。そう思っていたんじゃないのか？」

なのはは、菊池が自分の教導を“押しつけ”だと評価したことに
ついて、声を荒げるも、さらなる菊池の言葉に何も言い返せなかつた。

「そ、それは……」

「だけどな……」

ここで、一拍置くと、菊池は一気に言った。

「何でもかんでも、言わなくてもわかってくれると思ったら大間
違いだ！自分の気持ちは、口に出して初めて他人に伝わる。でも、
お前はそれをしなかった。何も言わずとも分かってくれているもの
だと、勝手に解釈し、勝手に納得していた。やっぱり、どう考えて
もお前の自己満足でしかない！」

「っ！」

なのはは、とうとうブチキレた。

「うるさい！！あなたに何が分かるの！！」

菊池に向けて、レイジングハートを向ける。

「ディバイン……」

杖の先端に収束されていく桜色の光。

静かに解放されるまでの僅かな間の刻を待つ。

「バスタアアア——ッッ!!」

解放された魔力は膨大な光の奔流となって、菊池へと向かった。

桜色の光の奔流が、菊池に迫る。

先程、【スターダスト・ドラゴン】は戦闘破壊され、菊池のフィールドにはいない。

つまり、菊池のフィールドはガラ空き。菊池を守ってくれるモンスターは存在しないので、ディバインバスターは直接、菊池に向かう。

「まずい!このままだと、菊池に直撃するぞ!」

「た、助けないと!!」

「駄目です、フェイトさん!もう、間に合いませんよ!!」

「菊池さん!!」

ヴィータは、ディバインバスターが菊池に向かっていていることに焦り、フェイトは菊池を助けるために動こうとするが、エリオに止め

られる。

キャロはこの先の展開を予感し、菊池の名を叫ぶ。

観戦組が焦っているのとは対照的に、菊池は至って冷静に伏せカードを発動する。

「罨カード、オープン！【トゥルース・リインフォース】！！」

菊池がカード名を宣言すると、伏せられていたカードが表になる。

「このカードを発動するターン、バトルフェイズをスキップする代わりに、自分のデッキからレベル2以下の戦士族モンスター1体を特殊召喚する。来い、【マッシュ・ウォリアー】！」

【マッシュ・ウォリアー】守1200

【トゥルース・リインフォース】のカードから、【マッシュ・ウォリアー】が現れる。

そして、ディバインバスターは菊池ではなく、【マッシュ・ウォリアー】に当たる。

当たった瞬間、爆発が起き、衝撃波が菊池に伝わる。

「くっ・・・！」

菊池以外の誰もが、今の一撃で【マッシュ・ウォリアー】は破壊されたと思った。

だが、煙が晴れると、【マッシブ・ウォリアー】は菊池を守るように防御の姿勢をとっていた。

（今の一撃は大きかったはず。なのに、何で・・・）

なのはは愕然とする。デイベインバスターの直撃を受けた【マッシブ・ウォリアー】が破壊されていなかったからだ。

「残念だが、【マッシブ・ウォリアー】は1ターンに1度だけ、戦闘では破壊されない」

「そんな・・・」

菊池は驚いているのはを一瞥し、デッキに手を置く。

「俺のターン！」

菊池 LP5500 SPC1↓2

引いたのは、【ワンショット・ブースター】。

（よし、今こそ、あのカードを使う！）

「俺は、【ターボ・シンクロン】を召喚！」

【ターボ・シンクロン】 攻100

「さらに、モンスターの召喚に成功したターン、このカードは手札から特殊召喚する事ができる。来い、【ワンショット・ブースター】！」

【ワンショット・ブースター】 攻0

菊池は、ここであるカードの召喚を狙っていた。

「俺は、レベル1の【ワンショット・ブースター】に、レベル1の【ターボ・シンクロン】をチューニング！」

菊池の声に反応し、【ターボ・シンクロン】と、【ワンショット・ブースター】が空高く舞い上がる。

【ターボ・シンクロン】が1つの輪となり、【ワンショット・ブースター】がその中を通る。

【ワンショット・ブースター】の身体が透過し1つの光となる。

「集いし願いが新たな速度の地平へいざなう。光差す道となれ！シンクロ召喚！希望の力、シンクロチューナー、【フォーミュラ・シンクロン】！」

【フォーミュラ・シンクロン】 守1500

現れたのは、F1のレーシングカーのような姿をしたモンスターだ。

「シンクロチューナー・・・？」

なのはは初めて聞く単語に疑問を持ち、怪訝な面持ちで菊池を見る。

菊池はそれに反応することなく、D・ホイールを走らせる。

「【フォーミュラ・シンクロン】の効果発動！このカードがシンクロ召喚に成功した時、自分のデッキからカードを1枚ドロースる事ができる！」

そう言って菊池は、デッキからカードを1枚ドロースし、ドロースしたカードを確認すると手札に加えた。

「リバーズカード、オープン！【ウィキッド・リボーン】！！」

【ウィキッド・リボーン】は、800ライフポイントを払い、自分の墓地に存在するシンクロモンスター1体を選択し、そのモンスターを攻撃表示で特殊召喚するカードだ。

だが、【ウィキッド・リボーン】で特殊召喚したシンクロモンスターは、発動したターンには攻撃できず、効果も無効化される。菊池が狙っているのは、【スターダスト・ドラゴン】をアタッカーとして使用するのではなく、別の用途で使用するためだ。

「俺は、墓地に眠る【スターダスト・ドラゴン】を復活させる！戻って来い、スターダスト！」

【スターダスト・ドラゴン】 攻2500

菊池 LP5500↓4700 SPC2

【スターダスト・ドラゴン】の復活に、なのははいつでも迎え撃てるよう、体勢を整える。

（俺は初め、この件に手を出すつもりはなかった。今こそ、違和感なく六課のメンバーとして解け込んでいるが、あくまでも部外者であることに変わりはない。そんな俺が、2人のためにできることなど無いと思っていた。下手に手を出せば、こじれて修復できないようなことになってしまうと恐れていた。だがそれは、逃げていただけだった。どんなに目を逸らしても、現実是不変ならない。そのことに俺は気付くことができなかった。だから、今は自分ができる精一杯のことをしよう・・・）

そんなことを思いながら、菊池はD・ホイールのスピードを上げる。

スピードを一気に上げたためか、菊池のD・ホイールは、今までにない早さが出ていた。あまりの早さになのはもつていくのが精一杯だ。

「行くぞ、スターダスト!!」

菊池の呼びかけに、【スターダスト・ドラゴン】が咆哮する。

口の端を吊り上げて笑いながら、新たなモンスターの召喚の準備を行う。

「俺はレベル8のシンクロモンスター、【スターダスト・ドラゴン】に、レベル2のシンクロチューナー、【フォーミュラ・シンクロン】をチューニング!!」

【フォーミュラ・シンクロン】が二つの輪になり、菊池と【スターダスト・ドラゴン】はその輪を潜る。

すると、周りの景色が緑色に染まった。

「集いし夢の結晶が新たな進化の扉を開く。光差す道となれ！」

菊池は、D・ホイールのスピードに、体が溶けていくような感触を覚える。

（これが、ザルグがくれたカードの力・・・）

普通のシンクロ召喚とは違う、新しいシンクロ召喚。

ザルグは、それをアクセルシンクロだと言っていた。

菊池はザルグに言われたとおりに、新しいシンクロ召喚方法であるその名を叫ぶ。

「アクセルシンクロ！！！」

菊池が手に持っているのは、カードイラスト、カード名、カードテキスト、属性などが何も書かれていない、シンクロモンスターのカード。

だが、菊池が“アクセルシンクロ”と叫ぶと、絵柄が浮かび上がり、あるシンクロモンスターを示すカードになった。

「消えた！？」

なのはは、つい先程まで自分の前を走っていた菊池が姿を消したことに驚き、慌てる。

周りを見渡した時、後方から菊池が現れた。

「生来^{しょうらい}せよ！【シューティング・スター・ドラゴン】！」

初めて見るモンスターと共に・・・。

第十六話

「なのはと菊池の思い。生来せよ!」【シューティング・スター・ドラゴン】

作者「とうとう来たな、新たなシンクロモンスター、【シューティング・スター・ドラゴン】が!」

菊池「アニメ効果の方が、良かったなあ……。OCGの効果だと、除外とバウンスに耐性が無いから、【次元幽閉】とか、【強制脱出装置】で対処されるんだよ。やられたら、泣くしかないね。カードを6枚も使って出したモンスターを、カード一枚で対処なんかされたら、巻き返しできないし」

作者「この物語で出てくるカードは、一部のカードを除いて、OCG効果になってるからね。気をつけないと」

菊池「ところで、作者さんよ。この作品、とうとう6万PVを突破したぞ」

作者「マジで!?!」

菊池「ああ。マジだ。俺も確認した時、夢かと思ったぐらいだ。これも読者の皆さんのおかげだな」

作者「本当に、読者の皆さんには感謝しております。これからも、本作品をよろしくお願いします」

菊池「それでは、また次回お会いしましょう。さようなら」

第十七話 「対決姿勢から、和解へ」 (前書き)

投稿が遅くなり、申し訳ありませんでした。

菊池の立ち位置に結構苦労しましたが、何とかできました。

それでは、第十七話をお楽しみください。

第十七話 「対決姿勢から、和解へ」

【シューティング・スター・ドラゴン】 攻3300

訓練場の空を舞う、【シューティング・スター・ドラゴン】。

暖かい光が、訓練場に降り注ぐ。

「何なの、この召喚獣・・・」

「これが、俺の新たな切り札、【シューティング・スター・ドラゴン】だ!!」

なのはは、突然現れた【シューティング・スター・ドラゴン】にどう対処すべきか、迷っていた。

だからなのだろう。ただ呆然と【シューティング・スター・ドラゴン】を見つめていた。

（頼む、シューティング・スター……。力を貸してくれ!）

「・・・俺はカードを1枚伏せ、ターンエンドだ」

菊池 LP4700 SPC2↓3

「あいつ、攻撃しないのか!？」

ヴィータは、菊池の行動に驚く。あの場面ならば、なのほも呆然としていたし、攻撃する機会があったはずだ。

それなのに、攻撃しないとは・・・と思った時、ヴィータは確信した。

「やっぱり菊池は、ただなのはを倒そうとしてるんじゃないか。なのはと分かり合おうとしてるんだ」

「えっ・・・？」

ヴィータの言葉に、フェイト達は菊池を見る。菊池の横顔には、さっきまでの苦悩した表情は無く、決意に満ちた顔をしていた。

一方、なのほはすでに攻撃のモーションに入っていた。

（この一発で決める!!）

「デイベイン・・・バスター!!」

なのほは、菊池の頭上を舞う、【シューティング・スター・ドラゴン】にデイベインバスターを撃ち込む。

なのはが放った桜色の砲撃が、一直線に【シューティング・スター・ドラゴン】に向かっていく。

（やはり、この程度で諦めたりはしないか。さすがだ・・・）

「【シューティング・スター・ドラゴン】の効果発動!!」

「えっ!？」

「【シューティング・スター・ドラゴン】は、相手モンスターの攻撃宣言時、このカードをゲームから除外し、相手モンスター1体の攻撃を無効にする事ができる!」

【シューティング・スター・ドラゴン】は光の粒子となって、向かってくるデイバインバスターを打ち消した。

「そ、そんな……。あっさりと消されるなんて……」

「そしてエンドフェイズ時、自身の効果で除外した【シューティング・スター・ドラゴン】はフィールドに戻ってくる! 来い、シューティング・スター!!」

菊池 LP 4700 SPC 3↓4

「俺のターン!」

菊池は引いたカードを確認すると、手札に加えた。

「俺は、【シューティング・スター・ドラゴン】の効果発動! 自分のデッキの上からカードを5枚確認し、その中のチューナーの数だけ、攻撃する事ができる!」

(この思い、必ずなのはに届かせる!)

菊池はそう思いながら、デッキから5枚カードを確認する。すると、5枚のうち、3枚がチューナーモンスターだった。

「引いたチューナーモンスターは3体！よって、3回の攻撃が可能だ！」

「さ、3回の攻撃！？」

「なのは！お前の思い、俺が受け止めてやる！【シューティング・スター・ドラゴン】！！」

すると、【シューティング・スター・ドラゴン】の3体の分身が現れ、なのはに向かっていく。

「くっ・・・」

なのははガードするつもりらしい。【シューティング・スター・ドラゴン】の3回の攻撃をラウンドシールドで防ごうと考えたようだ。

まず、1体目がなのはの張ったラウンドシールドにぶつかる。

「くう・・・！」

「なん・・・だと・・・！？」

なんと、なのはは攻撃力3300の【シューティング・スター・ドラゴン】の攻撃を防いだ。菊池は思わず、驚きの声を洩らす。

「だが、あと2回の攻撃が残っている！行け、【シューティング・

スター・ドラゴン】――！――」

菊池の声と同時に、2体目がラウンドシールドにぶつかる。

さすがに、2回目は耐えきれないだろうと考えた菊池だが、シールドを砕くことはできていなかった。

「そ、そんな・・・、馬鹿な・・・！！」

それでも、なのはも限界のようで、次の攻撃でラウンドシールドは砕けそうになるまでになっていた。

（2回もシューティング・スターの攻撃に耐えるとは・・・。なのはの防御は鉄壁だな。でも、あの防御を破らない限り、なのはに思いを伝えることはできない・・・！！）

「これが、最後のバトルだ！行け、【シューティング・スター・ドラゴン】――！！」

3体目が、なのはのラウンドシールドに勢いよくぶつかる。

なのはには、もう【シューティング・スター・ドラゴン】の攻撃に耐えきれただけの力は、残っていなかったようだ。

「スターダスト・ミラーージュ――！！」

3回目であろうやく、ラウンドシールドが砕ける。

なのはも力を使い果たしたためか、空中で気絶していた。

空中で気を失ったなのは【シューティング・スター・ドラゴン】が助け、菊池の元まで運んできた。

菊池は、D・ホイールを止めると、気絶したなのはを抱きかかえながら訓練場を後にした。

（これで、良かったのか？本当に・・・）

こうして、曖昧な形で模擬戦は終了した。

なのはを医務室まで運び込んだ菊池は、模擬戦のことについて追及してきたシャルをやりわりとかわし、格納庫に向かった。

模擬戦で結構無茶をさせてしまったらしく、不具合がたくさん見つかる。そのため、D・ホイールを修理しているのだが、なかなか修理に集中できない。やはり、模擬戦のことが頭から離れないのだ。

（今思えば、ティアナが力を求めようとした理由は分かった。だが、なのははどうしてあそこまで怒ったのだろうか？）

菊池は作業の手を止め、考え始めた。

（俺は知りたい。結果的に、なのはを力づくで抑えつけてしまったとはいえ、なのはの思いが少し伝わって来た。なのはにも似たような状況があったのかもしれない。だから、止めようとしたのではないか・・・？）

そう考えれば、何となく説明がつく気がしないでもない。

（ただ、教導官として止めた可能性もある。でも、そうだとしたらあそこまで、砲撃を加えることもないはずだ。やはり、なのはにも暗い過去があったのだろうか……。）

・・・もし、そうだとすれば俺は、一方的になのはを撃墜させてしまったことになる……。なのはの話も聞かずに……！

（俺は間違っていた。なのはの事情も知らずに勝手なことをしてしまった……。）

なのはと話をして謝ろう。そう思った菊池は、工具をしまい、大方修理が終わったD・ホイールを置いてある格納庫を後にした。

格納庫を出た菊池は、なのはがいそうな場所を手当たり次第探すことにした。

ティアナとも話をすべきかもしれないが、何と言ってもティアナは、なのはの砲撃を受けているのだ。自分が悪いということに気付いているかもしれない。それならば、一方的に撃墜させてしまった、なのはと話をすべきだろうと考えたため、なのはの搜索を優先している。

それにしても、先程から探しているのだが、なのはの姿は見当たらない。

（なのはは、どこにいるんだ？）

あちこち探し回っていると、建物内にアラートが響き渡り、後ろから探していた人物が走ってくるのが見えた。

「あつ、菊池くん……」

菊池に気付いた瞬間、なのはは決まりが悪そうに、菊池から目を逸らす。

そんななのはに、菊池はわずかな罪悪感を覚えながらも、なのはに近づき、肩をポンポンと叩く。

「なのは……、すまなかった。俺は、なのはの事情も知らずに一方的に自分の意見を押し付けてしまつて……」

「え、ううん。私の方こそ、ごめんね。菊池くんは、私達のために思つてやってくれたのに、私、菊池くんの話を聞かずにあんなこととして……。」

菊池は、模擬戦時との態度の変化に驚きながらも、疑問に思つたことを尋ねる。

「なのは、どうしてそのことを……?」

「フェイトちゃんとヴィータちゃんが、教えてくれたの」

（フェイトとヴィータ、あの2人か……。全く、行動が早いというか、何と言うか……。）

フェイトとヴィータに呆れつつ、菊池はそつとなのはを抱きしめる。

「ふえ……? 菊池くん……」

「なのは、今回のなのは達の行動は正しいとは言えない。だけどなのは、なのはで何とかしようと努力してた。それでいいんだ。俺達は成功と失敗を繰り返して、成長していくんだから。な？」

そう言っ、菊池は抱擁を解く。菊池を見上げるなのはの目には、涙が溜まっていた。

「ほら」

なのはにハンカチを渡し、涙を拭くよう言った。

「俺は、なのはには笑顔でいてほしい。なのはは笑顔が一番似合ってるよ」

「！」

菊池の爆弾発言に、顔を真っ赤にするなのは。

発言した菊池も、自分の発言の意味に気付き、顔を赤く染める。

この後、2人は少しあたたかしたものの、出撃するヘリポートまで向かった。

（ヘリポート）

「今回は空戦だから出動は私とヴィータ副隊長、フェイト隊長の3人で行くからフォワードはロビーで出撃待機していてね」

「だから留守を頼むぞ！」

「「はい！」」

「・・・はい」

フェイトやヴィータの言葉に返事をするスバル、エリオ、キャロ。

ティアナは、三人の後に返事をする。

やはり、表情に明るさが戻っていない。

それを見かねたなのはは、指示がいきわたった所で、ティアナの
前まで歩く。

「ああ、それからティアナ」

「はい・・・？」

「ティアナは・・・出動待機から外れとうか」

ティアナは目を見開き、信じられないという顔になっている。

ライトニングの二人は驚き、声を上げ、スバルは心配そうにティアナを見る。

「・・・いう事が聞けないヤツは使えないって、事ですか？」

ティアナの言葉に、一瞬皆が沈黙する。だがすぐに、なのはが口を開く。

「自分で言ってて分からない？　当たり前の事だよ、それ」

ティアナの言葉に一瞬困ったような顔をしたが、それでも言葉を続けるなのは。

菊池はなのはの言葉に、顔を顰める。

（そ、そんな言い方しなくてもいいんじゃないのか・・・？その言い方では、お前はいらないうって言ってるようにしか聞こえないんだが・・・）

なのはの言葉に、ティアナも食下がる。

「現場での指示や命令は聞いてます。教導だって、ちゃんとサボらずやってます。それ以外の場所や努力まで、教えられた通りじゃないと、駄目なんですか？」

途中でヴィータが前に出ようとしたが、なのはに止められる。

「私は、なのはさん達みたいのエリートじゃないし、スバルやエリオミみたいな才能も、キャロミみたいなレアスキルもない。少しくらい・・・死ぬ気で頑張らないと、強くなかなれないじゃないですか！！」

なのはとティアナの罵り合いも、ピークに達した。

ティアナも歯止めが効かなくなったらしく、自分の言い分をなのはにぶつける。

まるで子供のように喚くティアナの胸倉を突然掴み、いつの間にかヘリポートにきていたらしいシグナムが右拳を振りかぶる。

と、ここまでだんまりを決め込んでいた菊池が動いた。

素早くシグナムの背後を取り、ティアナに振り下ろそうとされていたシグナムの右拳を掴む。

「何をする、菊池！」

「お前こそ、何をしているんだ。シグナム」

菊池はティアナとシグナムの間に割って入る。

「確かにティアナの言っていることは間違っている。それでも、殴って良いということにはならないはずだ」

「だが・・・」

シグナムは言葉を続けようとしたが、できなかった。菊池はティアナを背にし、シグナムを睨んでいたということからではなく、菊池から強い意志を感じたからだ。

（なのはもシグナムも、何故ティアナと話し合おうという考えに至らないんだ？突き放され、殴られたりでもしたら当分は立ち直れないぞ）

菊池は、後ろにいるティアナを見る。

ティアナは俯いたまま、菊池の方を見ようとしなかった。

はぁ、と小さくため息を吐くと、菊池はヘリにいるヴァイスに声を掛ける。

「ヴァイス、出撃の準備はできてるのか？」

「ええ、乗り込んでくれればいつでも出撃できますぜ！」

ヴァイスの返答を聞くと菊池は、なのは達に言った。

「さっさと行って来い。敵は待つてはくれないぞ」

「え・・・う、うん！」

なのはが慌てて返事をし、ヘリに乗り込む。

それと同時に、フェイト、ヴィータもヘリに乗り込む。

フェイトとヴィータが乗り込んだと同時にハッチが閉まり、4人を乗せたヘリは現場まで飛んで行った。

（さて、問題はティアナだな・・・。）

スバル達が慰めているようだが、効果はあまりない。

菊池はスバル達に一声掛けて、ティアナと共に格納庫に向かった。

菊池とティアナは今、格納庫にいる。

ティアナは菊池のD・ホイールにもたれかかるようにして座り込んでいる。

「ほら、飲むか？」

菊池はティアナに缶コーヒーを渡す。

「はい・・・」

ティアナはのろのろと差し出された缶コーヒーを受け取る。

菊池はティアナの隣に腰掛け、一息吐く。

しばらく、2人の間には重苦しい空気が流れていたが、ティアナが口を開いたことで断ち切られた。

「菊池さん・・・」

「何だ？」

「菊池さんは怒らないんですか？私がしたこと」

ティアナの言葉に、少し考え、フツとわずかに笑って言った。

「どうして俺がお前に怒らないといけないんだ？」

「そ、それは・・・」

ティアナは何か言いたそうにしているが、口を噤んでしまった。

おそらく自分がしてきた行動が、正しいものではなかったことに
気付き始めているようだ。

でも、それを認めたくはない・・・という思いが、プライドが、
邪魔をしているのかもしれない。

菊池はやれやれと呆れながらも、静かに話しだす。

「俺はさ、結果がどうであれ、努力をする奴を叱ったりはしない
さ。何を成功させるにも努力は不可欠だ。そうだろう？」

ティアナは、菊池の言葉に頷く。

「それが今回は、少し道を間違えたただけだ。あんまり考え込むな。
少しは仲間を頼ることも必要だぞ」

菊池はティアナの肩をそっと叩きながら、諭すように言った。

ティアナは、菊池の態度に安心して来たらしく、少しずつ口を開
き、自分の思いを話し始めた。

途中、詰まりながらもティアナは、自分なりの言葉で自分の思い
を表現していく。

聞いている菊池にも、ティアナの一生懸命さが伝わってくる。

だから、決して茶化したりせず、黙ってティアナの話を聞く。

やがて、話し終えたティアナは菊池の顔を窺う。

「ティアナ」

「は、はい！」

突然、菊池はティアナの名を呼ぶ。不安な気持ちで顔色を窺おうとしていたティアナにとって、不意を突かれた形になった。

「お前の言いたいことは分かった。だけど、一つ言っておきたいことがある」

そこまで言って、言葉を切る菊池。ティアナの方を向くと、ティアナの目を見ながら言った。

「その思い、ちゃんとなのはに伝えるんだ。俺に伝えてくれたように」

「で、でも・・・」

「不安なのか？」

菊池が聞くと、ティアナは顔を俯かせ、黙ってしまふ。

「冷たく突き放され、拳句の果てには殴られそうになったんだ。無理もないと思う・・・。それでも、お前はなのはと向き合えないといけない。何故なら、お前の気持ちはお前にしか分からないか

らだ。何を思ったにしろ、言葉にしなければ他人には伝わらないんだ」

「……」

一人だけで考えていたら、どれだけ気がつく人でも他人の思いはわからない。

ぼんやりと捉えられるだけで、鮮明に捉えることが出来ない。

だから人は言葉でわかり合おうとするのだが、そのことに誰も気がつかなかった。

「何のために言葉があるんだ？自分の意思や思いを他人に伝えるためだ。なのはもお前も、お互いに向き合って話し合ってないみたいだからな。今回はそれを気付かせてくれるいい機会になった。このチャンスを無駄にするな」

菊池はティアナに、なのはと話し合うよう説得する。お互いに分かり合うには、話し合うのが一番だ。殴り合って分かり合えることなど、ほとんどない。そんなことをしても、一方的な押しつけになるだけだからだ。

「……分かりました。ちゃんとなのはさんと話し合います」

そう言って、ティアナは顔を上げ菊池の方を見る。その顔には、先ほどまであった不安や迷いが、少し無くなったように見えた。

わずかだが、やっと嬉しそうに笑顔を見せるティアナの様子を見て、ホッとする菊池。

どうやら、分かってくれたようだ。

菊池も言いたいことも言い終わったので、邪魔にならないように退出することにした。

「・・・後は何とかなるだろう。俺の出る幕じゃなさそうだな」

そう呟き、菊池は立ち上がろうとした。

が、袖を引っ張られるのを感じ、引っ張られた方を見ると、ティアナが頬を染めて菊池の服の袖を掴んでいた。

「あ、あの・・・・・・・・。もう少しだけ・・・・・・・・、一緒にいて下さい・・・・・・・・」

上目遣いにそうお願いされた菊池は、黙って頷き、再び腰を降ろした。

そしてしばらくの間、2人は並んで座っていた。

任務が終わり、なのは達が帰ってくると、菊池達は迎えに走った。

その後、なのはとティアナはすぐさま話をしたそうだ。

なのはの教導の意味と、ティアナの気持ち。

それらを話し終えた後の2人の顔は、今までにない、非常に晴れやかなものだった。

こうして、ホテルアグスタでの任務以来、機動六課を騒がせた騒動は、仲間達の絆を確かめ合うという形で締め括られた。

第十七話 「対決姿勢から、和解へ」 (後書き)

作者「結局さ、【シューティング・スター・ドラゴン】を出した意味は何なの？」

菊池「そりゃ、思いを届かせるために・・・」

作者「言ってて苦しくないか？」

菊池「でもさ、遊戯王じゃよくあることじゃないか？家族や親友との気持ちのすれ違いはデュエルで解決っていうパターンだよ」

作者「あれって、確か『デュエル脳』ってやつか？」

菊池「そう。何でもデュエルで解決。何かあったら、『おい、デュエルしろよ』って相手に言っただュエルするんだよ」

作者「何でもありだな」

菊池「まあ、この作品ではそうそうないようになるはず・・・だよな？」

作者「そこらは、ちゃんとするよ。それでは、また」

菊池「また次回お会いしましょう」

第十八話 「迫り来る闇 【前編】」（前書き）

投稿が遅くなり、申し訳ないです。

それでは忙しい中、作り上げた第十八話をご覧ください。

第十八話 「迫り来る闇 【前編】」

ティアナの一件以来、フォワード達の訓練は更に厳しさを増した。

基本的になのはとヴィータの2人体制で、たまに時間のある時はフェイトやシグナムも来ていた。

そんな中、すっかり違和感なくフォワード達に混じって訓練に加する菊池の姿があった。

なのはとの模擬戦で、【シューティング・スター・ドラゴン】を出して以来、なのは達隊長陣は菊池が模擬戦に参加する時、菊池を真っ先に警戒するようになった。

ただ、あまりにも警戒しすぎて、ある日の模擬戦で足をすくわれる結果になったことがあった。

菊池が苦笑いで撃墜されたなのは達を眺める中、スバル達は菊池との連携がうまくいっていることに喜んでいた。

フォワード達との連携がうまくいっていることに不満はない。だが、隙を見せてしまうのはどうかと思う。

あの時は、なのは達も相当参ったらしい。おかげで次の日の模擬戦は、前日の激戦が嘘のようなあっさりした結果になった。

菊池を2人ががりで抑え、その隙にフォワード達を包囲し、撃墜させる。そしてたった一人残った菊池を集中攻撃するという恐ろしい作戦を立てて来たのだ。

おかげで、菊池を含むフォワード達は全滅。ただ唯一、ヴィータを撃墜したのがその日の大きな収穫だった。

撃墜された本人はかなり不機嫌だったが。

そんなこともあったが、あれから2週間。フォワード達も、2度目の転機を迎えていた。

「はいっ。今朝の訓練と模擬戦も無事終了。お疲れ様」

なのはがヘトヘトになっているフォワード達を労うように声をかける。

だが、フォワードの4人は返事を返す余力も残っていない。

菊池もD・ホイールを止めると、のろのろとやって来る。顔には疲労の様子が見てとれる。

当然と言えば当然だった。いつもに比べて、今日の模擬戦は特別で、いつも以上に厳しかったのだから。

「でね？ 実は何気に、今日の模擬戦が第2段階クリアの見極めテストだったんだけど・・・」

「」「ええっ!？」」「」

さりげないなのはの発言に驚くフォワード達。まあ、当然といえば当然の反応だ。

事前に今日抜き打ちのテストをしようのではなく、テスト終了後に実はテストでしたと言われたのだから。

「どうでした？」

なのはは、フェイトに尋ねる。

「合格」

「「はやっ！」」

「ま、こんだけみっちりやって問題あるようなら、大変だったった」

「「あ、あはは・・・」」

フェイトはあっさりと合格と言い、それに思わず突っ込みを入れるスバルとティアナ。

一方、ヴィータは相変わらずの辛口評価だ。

そんなヴィータの言葉に、苦笑を洩らすエリオとキャロ。

「ところでよ・・・」

ヴィータはへとへとになって座り込んでいる菊池の目を向ける。

「菊池も何だかんだ言って、成長してきてるよな」

「確かにそうだね。フォワード達との連携もうまくいってるみたい

だし」

菊池は疲れのあまり、返す言葉も話せないのか、俯いたままだ。

フォワード達が心配のあまり、菊池の傍に駆け寄り、声を掛けている。

「なのははどう思う？」

フェイトがなのはに声を掛ける。

しかし、なのはは答えない。菊池をぼうっと見つめている。

「・・・なのは？なのは！」

フェイトがなのはの肩を叩きながら、なのはの名を呼ぶ。

「・・・ふ、ふえ！？フェイトちゃん！？どうしたの？」

「どうしたの？じゃないよ。さっきから呼んでいたんだよ。具合でも悪いの？」

「え、ううん！大丈夫だよ、フェイトちゃん」

なのはは何でもないと言うが、フェイトの不安は拭えない。ここ最近、なのはは菊池を見てぼうっとしていることが多くなっていた。

何があったのかとても気になるが、本人が何でもないとやっている以上、下手に追究できない。

そうこうしているうちに、菊池がフォワード達と共にやって来た。フォワード達との年齢差は決して少なくはないが、フォワードメンバーの一員といっても過言ではないぐらい、溶け込んでいた。

菊池はティアナの一件以来、フォワード達とのコミュニケーションを増やすよう、心掛けていた。

この2週間は、その一環として訓練に参加していた。

フォワード達と訓練をして感じるのは、4人の伸びは素晴らしいということだ。

基本に戻る。基本に返って、とにかく基礎を重点に訓練を行なう。基礎出来ずして応用ならず。この4人は、ようやく応用の段階へと入ったのだ。

菊池がここに初めて来た時とは比べ物にならないほど、4人は肉体的にも、精神的にも成長しているのだ。

なのはは、菊池を連れてやってきたフォワード達に声をかける。

「私もみんな良い線いってると思うし。じゃあこれにて第2段階終了っ！」

「」「やったあゝっ！」「」

フォワード達が、なのはの一声に歓声を上げる。

「デバイスリミッターも一段解除するから、あとでシャーリーの所に行ってきてね？」

「明日からはセカンドモードを基本に訓練していくからな」

「「「はいっ！」」」

フェイトとヴィータの言葉に勢いよく返事をするフォワード達だが……。

「……………えっ？明日？」

ヴィータの台詞にあった明日という単語に、首を傾げるキャロ。

キャロに釣られて、同じように怪訝そうな表情を見せる3人。

フォワード達が疑問に思っていることに答えるかのように、なのは達隊長陣が訳を話し始める。

「ああ。訓練再開は、明日からだ。」

「今日は私たちも、隊舎で待機する予定だし、みんな入隊日からずっと訓練浸けだったしね。」

「「「はあ……………」」」

「ま、そんなわけで」

「今日はみんな、一日お休みですっ。街にでも出かけて、遊んでくるといいよ」

「「「は〜いっ!」「」」」

たまには休暇も、必要だ。

菊池は自分の知る限り、ここに来て以来、殆ど休みとっていい休みはなかったことを思い出す。

今回は、第二段階クリアのご褒美として、また今まで諦めずにしつかり付いてきた事に対しての、隊長達からのささやかなプレゼントなのだろう。

こうして訓練が終了し、フォワード達と共に隊舎に向かう。

「菊池さんは、今日はどう過ごすんですか？」

「特にすることもなし、部屋で休んでおくよ」

尋ねて来たスバルにそう答える菊池。

「ここんところ、菊池さんも私達と一緒に訓練に参加してくれたからね」

ティアナは言いながら、菊池の横顔を見つめる。その顔には感謝の気持ちが表れていた。

「それにしても菊池さんって、本当に優しいんですね」

キャロが菊池を見上げながら言った。エリオも同じ気持ちなのか、微笑を湛えながら菊池を見る。

「そ、そうかな……。俺はただ仲間のために全力を尽くしているだけなんだが……」

褒められると何かむず痒いものを感じる。困ったような笑みを浮かべながら、キャロに言葉を返す。

「そんなことはありませんよ。この前の模擬戦でも僕を庇ってくれましたし。あの時、菊池さんのフォローがなければ撃墜されてしまったよ……」

菊池の言葉をやんわりと否定するエリオを見て、菊池はその時の模擬戦を思い出す。

確か、あの時はなのはと菊池を含めたフォワード陣との模擬戦だった。

最初はお互い互角の勝負を繰り広げていたのだが、フロントアタッカーのスバルのミスが原因で、まずスバルが撃墜されてしまったのだ。

エリオと菊池は、迫り来る誘導弾を何とかかわしていたものの、ティアナとキャロは誘導弾を捌ききれずに撃墜となった。

菊池はモンスター、魔法、罠の全てを使ってかわしていたが、疲労の色が見え始めたエリオに集中的に誘導弾が襲いかかったのだ。

それを見た菊池は、D・ホイールを加速させ、地上で必死に防戦しているエリオの許に向かった。そして、彼の腕を掴むと、D・ホイールに乗せた。

助かったものの、2人一緒では不利になるのではないか・・・と思ったエリオだが、結果は違った。

特殊召喚した【バックアップ・ウォリアー】の一撃が入り、逆転勝利を収めたのだ。

ここまで聞くと、かっこよく聞こえるのだが、実は、エリオを見捨てたとしても菊池は勝つことができた。

だが、あえて危険を冒してまでエリオを助けに行った。

菊池としては、仲間を見捨てることはできないという思いからの行動だったのだが、フォワード達は菊池の優しさと受け取ったようだ。

普段は寡黙で、冷静に皆を見守る菊池だが、実は熱い闘志の持ち主であることにフォワード達は気付き始めていた。

フォワード達と別れ、部屋に戻った菊池は休みをどう過ごすか、考え込んでいた。

無趣味の自分に、やることなど無い。D・ホイールの整備は明日でも問題ない。することもないので寝ようかと思っていたら、突然はやてから連絡が入った。

「菊池くん、ちょっとええかな？」

「ん？どうした、はやて」

「実は・・・」

はやては菊池に買い物をお願いしてきた。何が欲しいのかと聞くと、文房具類が足りないという。だが、その理由に首を傾げる菊池。

（文房具類なら、備品で用意されてるはずでは・・・？）

そう思ったが、どうも備品を切らせているようで明日には備品が届くらしい。だが、それでは今日の分がないので、仕事に支障が出ているとのこと。

「分かった。すぐに買ってくるよ」

「ごめんな。せっかくの休みに働かせてしもて・・・」

菊池が承諾の意を示すと、はやてが申し訳なさそうな声を漏らす。

「俺も暇だったから問題ない。別に気にすることはないさ」

「でも、ほんまにありがとうな、菊池くん」

「困った時はお互い様だ。ところでリストは用意してくれているのか？」

「あ、うん。リストなら菊池くんのD・ホイールにデータとして転送したさかい、問題ないはずや」

はやてに分かったと言うと、通信を切る。

菊池はD・ホイールをおいてある格納庫に向かう。

格納庫に向かうと、ヴァイスがバイクの整備をしていた。

「ヴァイス、お前も出かけるのか？」

菊池が声をかけると、ヴァイスは作業の手を止め、菊池の方を向く。

「いいや、バイクは俺のだけど、ティアナが使うのさ」

「そうか」

（ティアナはこんなバイクに乗れるのか……。すごいな）

ティアナがバイクに乗れることに感心しながらも、菊池は自分のD・ホイールのエンジンをかけ、データを確認する。

はやての言う通り、確かにリストはある。これなら問題は無い。

「お前も出かけるのか？」

「ああ。はやてに頼まれたからな」

菊池がそう言うと、ヴァイスは何故か憐れむような視線を送って来た。

（菊池は優しいからな。ホントに、優しすぎるぐらいだ・・・。）

そんなヴァイスの心の中を知ることもなく、菊池は簡単な整備を終えるとD・ホイールに跨る。

その時、スバルとティアナがやって来る。

「あれっ、菊池さんだ」

「菊池さんも出かけるんですか？」

部屋で休むと言っていた菊池が、D・ホイールに跨り、今まさに出かけようとしているためだ。

「ああ。はやてに買い物を頼まれたからな」

菊池はヘルメットを被り、発進しようとした。

「あ、あの」

だが、ティアナに呼び止められる。

「ん？」

ティアナの方に向き直り、用件を聞こうとする菊池。

菊池に見つめられたティアナは顔を赤らめる。

「ま、街まで行くのでしたら、一緒に行きませんか？」

クラナガンまで行くのは、菊池もティアナ達も一緒である。

一緒に行くことに違和感はない。

それにクラナガンまでの道順を記したデータもあるので、一人でも行くことはできるが、土地勘がないので不安がないわけではない。

ここは、土地勘があるティアナ達と共に行くべきだろう。

「じゃあ、お言葉に甘えて一緒に行こうか、ティアナ」

「は、はい!!」

承諾の返事をした菊池に、心底嬉しそうな表情を見せるティアナ。

こうして、ヴァイスの冷やかしを受けながらも、菊池とティアナ達は街に繰り出した。

第十八話 「迫り来る闇 【前編】」（後書き）

作者 「やっと書き上げたぞ」

菊池 「遅すぎだ。読者を待たせすぎだぞ」

作者 「俺だって忙しいの。そこらのことは分かってくれよ」

菊池 「もうすぐ高専祭らしいな。忙しくなって来たということか」

作者 「そういうこと」

菊池 「まあ、頑張りな」

作者 「はいよ。これから更新が遅くなってしまうのですが、どうぞよろしく願います」

第十九話 「迫り来る闇」 【中編】（前書き）

最近、更新速度が遅くなってしまい、申し訳ないです。ネタはあっても、書く時間が……。高専祭まで、あと一週間なので結構忙しいです。なので、高専祭が終われば、小説の方に力を入れていきます。

第十九話 「迫り来る闇」【中編】

菊池達は今、クラナガンまでの道を走っている。

スバル達は街に行くのが楽しみなのか、とても嬉しそうである。

そんな2人を見ていると、自然と笑顔が漏れる。

（本当に、この時間がずっと続けばいいな・・・）

今ある幸せを感じる時間を大切にしていこうと考えていた時、後ろから何かがやってくるのが見える。

「ティアア！あれは何？」

ティアアナにしがみつくようにバイクに乗っているスバルが、後方からやって来る何かに気付いた。

スバルの声に反応し、咄嗟にミラーで後方を確認するティアアナだが、よく分からなかった。

「さあ・・・？私には分からないわ。菊池さんは分かりますか？」

そう菊池に尋ねたティアアナは、菊池が驚愕の表情を浮かべていることに気付いた。

「菊池さん・・・？どうかしましたか？」

不審に思ったティアアナが声を掛けるが、菊池の意識は後方からや

って来るものに向いていた。

やがて、後方から一台のバイクと共に、球体の形をした何かがやって来る。

「行け！【A・ボム】！！！」

【A・ボム】攻400

突然現れた男の声を合図に、【A・ボム】と呼ばれた球体がスバルとティアナに迫る。

（このままでは、まずい・・・！）

菊池は急いでスピード・ワールド2を発動し、カードを5枚引く。

（よし、このカードならいける！！）

「相手モンスターの直接攻撃宣言時、このカードを手札から捨てることで、バトルフェイズを終了する。来い、【速攻のかかし】！！」

【速攻のかかし】は【A・ボム】の体当たりを受け止め、スバル達への攻撃を妨害した。

【A・ボム】は攻撃を妨害されたため、しぶしぶ持ち主のもとに戻っていく。

「ふん……。邪魔が入ったか……。」

突然乱入してきたD・ホイーラーらしき男が忌々しそうに呟く。

「お前は何者だ！？何故このようなことをするんだ！」

「貴様に教えるつもりなど毛頭ない。どうしても知りたいのなら、デュエルで勝つことだな」

男は菊池の問いに、挑戦的な口調で返事を返してくる。

「いいだろう。お前の化けの皮、俺が剥いでやる！！」

「来るなら来い！」

「「デュエル！！」」

菊池 VS アンノウン

「俺のターン！」

菊池	LP4000	SPC0
アンノウン	LP4000	SPC0

「俺は【ジャンク・シンクロン】を召喚！」

【ジャンク・シンクロン】攻1300

「【ジャンク・シンクロン】の効果で墓地の【速攻のかかし】を特殊召喚！！さらに、自分フィールド上にモンスターが1体以上存在し、自分の墓地にモンスターが存在しないので、手札から【ミラー・レディバグ】を特殊召喚！！」

【ミラー・レディバグ】攻100

「【ミラー・レディバグ】が、自身の効果で特殊召喚に成功した時、このカードのレベルはこのカード以外の自分フィールド上に存在するモンスターのレベルを合計したレベルになる。俺の場には、レベル1の【速攻のかかし】とレベル3の【ジャンク・シンクロン】がいる。よって、レベルは4になる！」

【ミラー・レディバグ】レベル1↓4

「俺は、レベル1の【速攻のかかし】と、レベル4の【ミラー・レディバグ】に、レベル3の【ジャンク・シンクロン】をチューニング！」

菊池の声に反応し、【ジャンク・シンクロン】が自身の腹部にある紐のようなものを引っ張る。

【ジャンク・シンクロン】からはエンジン音が出て、それは道路に響き渡る。

そして、【ジャンク・シンクロン】と、【速攻のかかし】、【ミラー・レディバグ】が空高く舞い上がる。

【ジャンク・シンクロン】が3つの輪となり、【速攻のかかし】と【ミラー・レディバグ】が、その中を通る。

【速攻のかかし】と【ミラー・レディバグ】の身体が透過通り、それぞれのレベルの光となる。

スバルとティアナは、空に浮かんだ菊池のモンスター達を見て眩く。

「えーと、 $1+4+3$ は・・・」

「8ね。来るわよ、【スターダスト・ドラゴン】が・・・」

もうかれこれ何カ月も菊池と過ごしているスバル達には、レベルが8といえば【スターダスト・ドラゴン】であるのが当たり前になっていた。

だが、今回の場合は違った。

「集いし闘志が怒号の魔神を呼び覚ます。光差す道となれ！シンクロ召喚！粉碎せよ、【ジャンク・デストロイヤー】！」

【ジャンク・デストロイヤー】攻2600

現れたのは、菊池が今まで見せたことのないモンスター、【ジャンク・デストロイヤー】だ。

「【ジャンク・デストロイヤー】の効果発動！このカードがシンクロ召喚に成功した時、このカードのシンクロ素材としたチューナー以外のモンスターの数まで、フィールド上に存在するカードを破壊できる！俺が素材にしたのは2枚、よってお前の場にいる【A・ボム】を破壊する！」

「何だと!?!」

明らかに男は動揺している。

今がチャンスだ。

「タイダル・エナジー!!」

【ジャンク・デストロイヤー】の胸部から発射されたものが【A・ボム】に当たり、破壊された。

「くっ……、馬鹿な……」

いきなり攻撃を止められたかと思えば、1ターンでシンクロ召喚をして来て、自分のカードを破壊されたのだ。

男はもう啞然とするしかなかった。

「これでお前のフィールドはガラ空き! 行け、【ジャンク・デストロイヤー】! デストロイ・ナックル!!」

【ジャンク・デストロイヤー】の4連打の攻撃が男に直撃する。

「ぐああああ!!」

菊池 LP 4000 SPC 0

アンノウン LP 4000↓1400 SPC 0

「俺はカードを2枚伏せ、ターンエンド」

菊池 LP 4000 SPC 0↓1
アンノウン LP 1400 SPC 0↓1

「俺のターンだ！ドロー！！」

引いたカードを確認した男は、ニヤリと笑みを浮かべる。

「俺は【ワイズ・コア】を守備表示で召喚！」

【ワイズ・コア】守0

「【ワイズ・コア】だと・・・！？何故、お前が持ってるんだ！？」

「フフフ・・・」

驚く菊池を見て、男は笑みを深め、手に2枚のカードを持つ。

「カードを2枚伏せてターンエンドだ」

菊池 LP 4000 SPC 1↓2
アンノウン LP 1400 SPC 1↓2

（【ワイズ・コア】は効果で破壊された時、機皇帝のパーツを一気に呼び出す能力を持っている。ということは、あの伏せカードは、自ら【ワイズ・コア】を破壊するカード・・・！）

「俺のターン!!」

菊池は引いたカードを確認し、手札に加える。

(ここは、このカードで攻める!)

「俺は【スピード・ウォリアー】を召喚!」

【スピード・ウォリアー】 攻900

菊池の場に新たなモンスターが召喚される。

「【スピード・ウォリアー】は召喚したバトルフェイズのみ、元々の攻撃力は倍となる!」

【スピード・ウォリアー】 攻900↓1800

(ここは相手の様子を見るのが吉だ)

菊池は下手にカードを消費するような行動をせずに、相手の伏せカードを発動させてしまおうと考えた。

「機皇帝の力、受けて立つ!俺は【スピード・ウォリアー】で、【ワイズ・コア】を攻撃!」

【スピード・ウォリアー】が【ワイズ・コア】に突撃する。

「ソニック・エッジ!!」

【スピード・ウォリアー】は、【ワイズ・コア】に回し蹴りを咬まそうとしたが、その攻撃が【ワイズ・コア】に届くことは無かった。

「罠カード、オープン！ 【ツイン・ボルテックス】！！このカードの効果により、自分フィールド上のモンスター1体と相手モンスター1体を破壊する！」

【ツイン・ボルテックス】のカードから、ビームのようなものが放たれ、【スピード・ウォリアー】と【ワイズ・コア】に当たる。

そして、【スピード・ウォリアー】と【ワイズ・コア】は破壊された。

「くっ……」

「この瞬間、【ワイズ・コア】の効果発動！！ 【ワイズ・コア】が効果で破壊された時、デッキ・手札・墓地から【機皇帝ワイゼル∞】、【ワイゼル・トップ】、【ワイゼル・アタック】、【ワイゼル・ガード】、【ワイゼル・キャリア】を特殊召喚する！！」

【機皇帝ワイゼル∞】 攻0

【ワイゼル・トップ】 攻500

【ワイゼル・アタック】 攻1200

【ワイゼル・ガード】 守1200

【ワイゼル・キャリア】 攻800

「【機皇帝ワイゼル∞】の攻撃力は、全てのパーツの合計となる
！！！」

【機皇帝ワイゼル∞】 攻0↓2500

菊池の脳裏に、あの時の悪夢が蘇る。

（【機皇帝ワイゼル】は、シンクロモンスターを吸収する恐ろしい能力を持っている。機皇帝に勝つにはあのカードしかない！！）

「【機皇帝ワイゼル】は攻撃力2500。ならば、【ジャンク・デストロイヤー】の攻撃力の方が上！バトルだ！！【ジャンク・デストロイヤー】で、【機皇帝ワイゼル∞】を攻撃！！」

菊池の声と同時に【ジャンク・デストロイヤー】が攻撃のモーションに入った。

「デストロイ・ナックル！！」

【ジャンク・デストロイヤー】が4つの球を出し、それは【機皇帝ワイゼル∞】に向かっていく。

（これで機皇帝は葬ったか・・・）

だが、菊池の思うように簡単には機皇帝は倒れなかった。

「そうはさせない！俺は【ワイゼル・ガード】の効果を発動！相手モンスターの攻撃対象をこのカードに変更することができる！！」

「な、何だと！？」

【機皇帝ワイゼル∞】、つまり胴体部分に向かっていた【ジャンク・デストロイヤー】の攻撃は【ワイゼル・ガード】によって受け止められてしまった。【ジャンク・デストロイヤー】の攻撃を受けた【ワイゼル・ガード】は吹き飛び、その衝撃が両者を襲う。

「くっ・・・」

「ふん！シンクロモンスターの攻撃など、機皇帝の前では無力だ。次のターン、お前のシンクロモンスターは俺のものとなる。機皇帝の圧倒的な力を、貴様の身に染み込ませてやる！」

男が菊池を指差して、相変わらずの挑戦的な口調で言った。

（まさか、機皇帝にそんな力があつたとは……。機皇帝はただのシンクロキラーではないということか）

「俺はカードを1枚伏せ、ターンエンドだ」

菊池	LP 4000	SPC 2↓3
アンノウ	LP 1400	SPC 2↓3

「俺のターン！」

男がデュエルディスクからカードを引く。

「俺は【ワイゼル・ガード3】を召喚！」

【ワイゼル・ガード3】守2000

先程、【ジャンク・デストロイヤー】の攻撃で【ワイゼル・ガード】は破壊されたため、【機皇帝ワイゼル】は右腕を失った姿をしていたが、【ワイゼル・ガード3】が召喚されたことで、右腕に【ワイゼル・ガード3】が装着され、機皇帝は完全な姿となった。

「【機皇帝ワイゼル】のモンスター効果を発動！1ターンに一度、相手フィールド上に存在するシンクロモンスターを吸収することができる！虫けらごときシンクロモンスターよ、機皇帝の糧となれ！」

すると【機皇帝ワイゼル】の胸部から紐のようなものが出て来て、【ジャンク・デストロイヤー】を絡み取り、取り込もうとした。

だが、それをみすみす見逃す菊池ではない。

「させない！罨発動、【スター・シフト】！！自分フィールド上に存在するシンクロモンスターをエクストラデッキに戻し、戻したシンクロモンスターと同じレベルのシンクロモンスターを特殊召喚する。飛翔せよ、【スターダスト・ドラゴン】！！」

【ジャンク・デストロイヤー】が8つの星となり、一つの道となる。

その道から、【スターダスト・ドラゴン】が現れた。

【スターダスト・ドラゴン】攻2500

「ふん、うまくかわしたか。機皇帝対策のカードを仕込んでいるとは、貴様も少しは学ぶようだな。だが、いつまでもその場しのぎの手が通用すると思うな」

「見ている。仲間達の絆と、俺が手に入れた新たな力でお前を倒して見せる！」

一方、菊池達のデュエルを遠巻きに見つめているスバルとティアナは、菊池を心配していた。

「大丈夫かなあ、菊池さん・・・」

スバルが心配そうに言う。

「大丈夫よ。菊池さんがそう簡単に負けるはずないじゃない」

「そうだけど・・・」

いつもの模擬戦から考えても、菊池が負けることは考えられない。短い期間だとはいえ、菊池と訓練を重ねて来たスバルとティアナだ

から言えるのだ。だが、菊池が戦っているのは、自分達も知らない相手だ。

（菊池さんは、危険な目に遭うのを分かった上で私達を守るために戦っている・・・。）

「菊池さん、頑張って・・・！」

ティアナはただ、菊池の無事を祈っていた。

第十九話 「迫り来る闇 【中編】」（後書き）

作者「ようやく、【中編】を書き上げることができた・・・」

菊池「ここで機皇帝が現れるとはな・・・。全くの予想外だった」

作者「一回、負けてるもんな。機皇帝に」

菊池「確かにそうだ。だが、今度は負けない！俺にも機皇帝に対抗できる新たな力があるからな」

作者「それでは、【後編】をお楽しみに！」

第二十話 「迫り来る闇」 【後編】 (前書き)

更新が大幅に遅れてしまい、申し訳ありません。

何せ、書く時間が最近ありません。誰か、時間をください・・・。

第二十話 「迫り来る闇」 【後編】

「俺のターン！」

菊池

LP 4000

SPC 3↓4

アンノウン

LP 1400

SPC 3↓4

「俺は【ヴィークラー】を守備表示で召喚！」

【ヴィークラー】守200

「ターンエンドだ」

（もうすぐ、アクセルシンクロの条件が整う。これ以上、機皇帝の独走を許しはしない！）

菊池は着々とアクセルシンクロの準備をしていく。

だが、それでも一抹の不安が菊池を焦らせる。

それは、いくら進化しようとも【シューティング・スター・ドラゴン】はシンクロモンスターだ。

一歩間違えば、機皇帝に吸収され、敗北する。

（それだけは絶対に避けなければならない。機皇帝がいる今、俺が負ければスバルとティアナが危ない・・・！）

菊池がそう考えていた時、男が声を掛けて来た。

「どうした、貴様の實力はその程度か」

「何が言いたい!？」

菊池がそう言うのと、男は笑い始めた。

「ハハハ、笑わせるなよ。貴様は【スターダスト・ドラゴン】をフィールドに残したまま、ターンを終了した。それが、敗北への第一歩だと言うのだ。覚悟はできているんだろうな？」

「俺が機皇帝の効果을 忘れたことは一度もない! 奪えるものなら、奪ってみろ!」

(奴の自信に溢れた眼差し……。何を企んでいる?)

男は菊池の意図を探ろうとする。明らかに菊池は不利な条件下で戦っているにも関わらず、勝負を諦めていない様子だったからである。

「俺のターン!」

菊池 LP 4000 SPC 4↓5

アンノウン LP 1400 SPC 4↓5

「【機皇帝ワイゼル】の効果を発動! 1ターンに一度、相手フィールド上に存在するシンクロモンスターを吸収する! 貴様の【スターダスト・ドラゴン】は貫うぞ!」

2ターン前と同じように、【機皇帝ワイゼル】の胸部から紐のよ

うなものが出て来て、【スターダスト・ドラゴン】に迫る。

「罨発動！【亜空間物質転送装置】！！このカードは、自分フィールド上にモンスター1体を発動ターンのエンドフェイズ時までゲームから除外する！」

【スターダスト・ドラゴン】は【亜空間物質転送装置】のカードから出て来た装置に入り、亜空間に飛んで行った。

それにより、対象を見失った機皇帝の効果は不発となった。

「今度もかわしたか。だが、今度はそう簡単にはいかない！罨発動、【ワイズA3】！自分フィールド上の【ワイゼル・アタック】1体を墓地へ送る事で、手札の【ワイゼルA3】1体を特殊召喚する！！」

「何だと！？」

【ワイゼルA3】攻1600

機皇帝の左腕の部分が消え、先端が鋭利な刃を付けた【ワイゼルA3】が機皇帝の左腕として装着される。

【機皇帝ワイゼル∞】 攻2500↓2900

「何！？攻撃力が上がった？」

D・ホイールのデュエル画面を見ると、【機皇帝ワイゼル】の攻撃力が400ポイントアップしているのが分かる。

（機皇帝は変形を繰り返すことで、パワーアップしていくとも言えるのか？）

改めて、機皇帝の強さを感じた菊池。だが、考える間も無く男は、容赦なく菊池に襲い掛かる。

「攻撃力だけではない！【ワイゼルA3】の効果により、【機皇帝ワイゼル∞】が守備表示モンスターを攻撃した時、貫通ダメージを与える」

「貫通ダメージ・・・！！！」

「そうだ。【ヴィークラー】の守備力は200。2900もの攻撃を喰らえば、貴様のライフを0にできないものの、大ダメージが貴様に向かうことになる・・・」

「っ・・・！」

つまり、菊池は2700ポイントの戦闘ダメージを受けることになるのだ。

「行け、【機皇帝ワイゼル】！【ヴィークラー】を攻撃！！」

【機皇帝ワイゼル】が【ヴィークラー】に迫り、左腕で一刀両断にする。

「ぐあああああ！！！」

菊池	LP 4000	↓ 1300	SPC 5
アンノウン	LP 1400		SPC 5

(何だ、この痛みは!?)

菊池は攻撃を受けた瞬間、味わったことのない激痛に襲われた。今は、ズキズキと痛む程度に収まっているが……。

「だが、【ヴィークラー】が戦闘によって破壊され墓地へ送られた時、手札またはデッキから【アンサイクラー】1体を特殊召喚する事ができる!!」

【アンサイクラー】守100

「フン! ひと思いにクラッシュすればいいものを……。なら、機皇帝の力で舞い踊らせてやる!」

男は菊池の様子を見て、満足そうに笑いながら1枚のカードを手につ。そして、デュエルディスクにセットする。

「カードを1枚伏せ、ターンエンドだ」

「このエンドフェイズ、除外した【スターダスト・ドラゴン】が復活する!」

【スターダスト・ドラゴン】攻2500

「俺のターン!」

菊池 LP1300 SPC5↓6
アンノウン LP1400 SPC5↓6

「俺は【ターボ・シンクロン】を召喚！」

【ターボ・シンクロン】攻100

「レベル1【アンサイクラ】に、レベル1【ターボ・シンクロン】をチューニング！」

菊池の声に反応し、【ターボ・シンクロン】と、【アンサイクラ】が空高く舞い上がる。

【ターボ・シンクロン】が1つの輪となり、【アンサイクラ】がその中を通る。

【アンサイクラ】の身体が透過通り1つの光となる。

「集いし願いが新たな速度の地平へいざなう。光差す道となれ！シンクロ召喚！希望の力、シンクロチューナー、【フォーミュラ・シンクロン】！」

【フォーミュラ・シンクロン】守1500

一本の光の道から現れたのは、F1のレーシングカーのような姿をしたモンスターだ。

「【フォーミュラ・シンクロン】の効果発動！このカードがシンクロ召喚に成功した時、自分のデッキからカードを1枚ドロウする

事ができる!」

そう言って菊池は、デッキからカードを1枚ドロし、ドロしたカードを確認すると手札に加えた。

(今こそ、やるんだ! アクセルシンクロを・・・!!)

「俺はレベル8、シンクロモンスター、【スターダスト・ドラゴン】に、レベル2、シンクロチューナー、【フォーミュラ・シンクロン】をチューニング!!」

【フォーミュラ・シンクロン】が二つの輪になり、菊池と【スターダスト・ドラゴン】はその輪を潜る。

すると、周りの景色が緑色に染まり、凄まじい速度で流れて行く。

「集いし夢の結晶が新たな進化の扉を開く。光差す道となれ!」

(シューティング・スターよ、もう一度、力を貸してくれ!)

「アクセルシンクロ!!!」

菊池が“アクセルシンクロ”と叫ぶと、手に持っていた、カードイラスト、カード名、カードテキスト、属性などが何も書かれていない、シンクロモンスターのカードに絵柄が浮かび上がる。

「消えただと!?!」

男は、つい先程まで自分の前を走っていた菊池が姿を消したことに驚く。

周りを見渡した時、後方から菊池が現れた。

「生来^{しょうらい}せよ！【シューティング・スター・ドラゴン】！」

【シューティング・スター・ドラゴン】 攻3300

「何だ、このモンスターは！？」

「これが俺の切り札、【シューティング・スター・ドラゴン】だ
！！」

【シューティング・スター・ドラゴン】は菊池の頭上を飛んでいる。

（【シューティング・スター・ドラゴン】だと・・・！奴は、いつの間にそんなモンスターを手に入れたのだ！？）

自分が知っている限り、菊池が【シューティング・スター・ドラゴン】を手に入れたという情報は初耳だ。

男は自分が持っているデータが通用していないことに気付く。

「だが、いくら進化しようとも【ワイゼル・ガード3】は1ター
ンに一度だけ、戦闘によっては破壊されない。鉄壁の守備を誇る機
皇帝を、そう簡単に倒すことはできんぞ！」

男の言葉に菊池は、口の端を吊り上げ、フツと笑う。

「それはどうかな？」

「何!？」

「俺は【シューティング・スター・ドラゴン】の効果を発動! 1ターンに一度、自分のデッキの上からカードを5枚確認し、その中のチューナーモンスターの数だけ、攻撃できる!」

（【シューティング・スター・ドラゴン】の効果は、複数回攻撃か・・・）

男が【シューティング・スター・ドラゴン】の効果に少し驚いているのを一瞥し、菊池はデッキを見る。

（機皇帝に勝つには、【シューティング・スター・ドラゴン】の効果に賭けるしかない・・・!）

男の説明が本当ならば、少なくとも3回の攻撃をしなければならぬ。

菊池がデッキからカードをドローしようと、デッキに手を伸ばした時だ。

「菊池さん! 頑張って!!」

「菊池さん!! 負けないで!」

スバルとティアナの声が聞こえた。

後ろを振り返ると、2人は心配そうにこちらを見ている。

（スバル・・・、ティアナ・・・）

菊池は、自分にはこんなにも頼もしい仲間がいるのだと思うと、涙が出そうになった。

それを振り払うように菊池は、自らを奮い立たせる。

「スバル！ティアナ！お前達の思い、受け取った！！」

そう言って、再びデッキに手を伸ばす菊池。

だが、その手は途中でピタリと止まった。

「カードが・・・、光ってる・・・」

デッキをよく見ると、デッキの上から5枚のカードが光っているのが分かる。

（これは一体、どういうことなんだ・・・？）

菊池は、カードが光っていることを不思議に思いながらも、5枚のカードを一気に引く。

確認してみると、1枚目は【くず鉄のかかし】、2枚目はチューナーモンスター【エフェクト・ヴェーラー】、3枚目はチューナーモンスター【デブリ・ドラゴン】、4枚目は【S p―スピード・エナジー】、5枚目はチューナーモンスター【ロード・シンクロン】だった。

「合計、3回の攻撃だ！？」

「これが俺達の絆だ！！行け、【シューティング・スター・ドラゴン】！！」

すると、【シューティング・スター・ドラゴン】の3体の分身が現れ、【機皇帝ワイゼル】に向かっていく。

「くっ、【ワイゼル・ガード3】の効果発動！このカードは1ターンに一度だけ、戦闘によっては破壊されない。1回目のバトルは無意味だ！」

【機皇帝ワイゼル】が、向かってくる【シューティング・スター・ドラゴン】の分身を右腕で受け止める。

「だが、戦闘によって破壊されないのも一度だけだ！2回目のバトル、【ワイゼル・ガード3】を攻撃！！」

【シューティング・スター・ドラゴン】の2体目の分身が、【機皇帝ワイゼル】に迫る。

先程と同じく右腕で受け止めようとするが、効果はすでに使用済みのため、【シューティング・スター・ドラゴン】の2体目の分身の体当たりを受けると爆発し、右腕がもぎ取られる結果となった。

「ぐああああ！！」

「これが最後のバトルだ！【シューティング・スター・ドラゴン】！！！！【ワイゼル・トップ】を攻撃！！」

【機皇帝ワイゼル】の右腕の付け根の部分からは、黒煙が上がっ

ている。

3体目の【シューティング・スター・ドラゴン】の分身が、【機皇帝ワイゼル】の頭の部分に向かって体当たりする。

「ぐううう!!」

菊池 LP1300 SPC6

アンノウン LP1400↓0 SPC6

【機皇帝ワイゼル】は、3体目の【シューティング・スター・ドラゴン】の分身が【ワイゼル・トップ】を攻撃した後、崩れ去り爆発した。

菊池はD・ホイールを止め、男の元に駆け寄る。

だが駆け寄った時には、男の物であろう、デッキやD・ホイールは光の粒子となって、消えて行くところだった。

第二十話 「迫り来る闇 【後編】」（後書き）

作者「最近、思うんだよね」

菊池「何が？」

作者「菊池の戦法ってワンパターンだなんて」

菊池「そう思うんなら、早く二つ目や三つ目のデッキを使わせてくれよ。でないと、いつも同じ戦い方じゃ面白くないじゃないか」

作者「そこんところは、大丈夫！もうすぐ、二つ目のデッキが登場するから」

菊池「本当か！？」

作者「ああ。だから、楽しみにして待っていてくれよ。それでは皆さん、またお逢いしましょう」

第二十一話 「新たな敵の影が現れる。降臨せよ、【極神聖帝オーディン】！」

いよいよ、ナンバーズの登場です。

それと同時に、菊池の二つ目のデッキも解禁です。

神の力を持つカードは、何をやらかすのか・・・。

それでは、第二十一話をお楽しみ下さい。

第二十一話 「新たな敵の影が現れる。降臨せよ、【極神聖帝オーディン】！」

【機皇帝ワイゼル】を倒した菊池は、スバル達と別れ、はやてに頼まれた文房具類を購入した。

（何だったんだ、さっきのデュエルは……。カードもD・ホイールも消えるなんて・・・）

菊池は買い物を済ませ、近くの広場で一息ついているのだが、頭の中ではずっと機皇帝との戦いを思い出していた。

本来、この世界にいないはずの機皇帝。

菊池が元いた世界のものはずなのに、何故か世界を越え、現れたのだ。

と、一人悶々と考えていた菊池に通信が入る。

（こんな時に何だ・・・？）

思考を中断させられ、少し苛立ちを覚えながら通信を受け取る。

通信を掛けて来たのは、はやてだ。

はやてから休暇の終了と、新しい任務の依頼を要請される。

菊池は直接的な戦闘への参加ではなく、隊長達や今回の事案で保護する少女を運ぶヘリを護衛することになった。

（さて、気持ちを切り替えて頑張るか！）

自分を鼓舞しつつ、菊池ははやてから送られてくるヘリの位置を確認する。

そしてD・ホイールに乗り、その後を追っていく。

空を悠々と飛べるヘリに対し、地上から追いかけて行く菊池。

何とか見失うことなく、ヘリが止まった周辺まで辿り着く。

ヘリはビルの屋上に止まっているようだ。

菊池が屋上に辿り着くと、フォワードやなのは達がいた。

なのはが菊池がやって来たことに気付く。

「あっ、菊池くん」

「はやてから大体のことは聞いた。容体はどうだ？」

菊池は容体を確認しているシャマルに尋ねる。

「特に異常は見当たりません。メンタルも安定してますし、大丈夫だと思います」

「そうか、良かった・・・」

シャマルの返答に、菊池はホッと息を吐く。なのは達もひとまず安心といった表情を見せる。

とりあえず、レリックと少女はヘリで六課まで搬送することになった。

フォワード達は現場調査のために現場に残ることになり、なのとはフェイトははやてからの指示で、ガジェットの掃討を行うようだ。

菊池には特に新しい指示等は出されていない。なので、ヘリを護衛する任務を継続することになった。

（必ず守って見せる。かけがえのない大事な仲間を・・・）

強い決意を胸に抱いて・・・・・・・・。。。

その頃、現場から離れた廃棄ビルの屋上に、人影が2つ。

1人は白いマントを羽織り、もう1人は茶色いマントに、何か筒のようなものを包み込んだ、同じく茶色の布を持っている。

「ディエチちゃん。ちゃんと見えてる？」

「ああ。遮蔽物もないし、空気も澄んでる。よく見える」

そう言うと、ディエチと呼ばれた少女の左目が光り、カメラアイが動く。

「??、ディエチ。スカリエッツィの作り出した戦闘機人の1人だった。」

「でもいいのか？クアットロ。撃っちゃって……。。ケー
スに残せるだろうけど、マテリアルの方は、破壊しちゃうことになる」

「ウフフツ。ドクターとウーノ姉様曰く、あのマテリアルが当り
なら……。。本当に『聖王の器』なら、砲撃くらいでは死んだ
りしないから大丈夫。だそうよ？」

「ふん……。。」

そう言うのと、ディエチは持っていた布をはぎ取る。

中から出てきたのは、ロングバレルの砲撃機だった。

一方、クアットロの方には、??、ウーノから連絡が来ていた。

『クアットロ。ルーテシアお嬢様とアギト様が捕まったわ。』

「あゝあ。そう言えば例のチビ騎士に捕まってましたね？」

『今はセインが様子をうかがっているけど』

「……。。フォローします？」

『お願い』

クアットロは、ウーノとの通信を切るとセインに連絡する。

《セインちゃん？》

《あいよくア姉。》

《こっちから指示を出すわ。お姉様の言うとおりに動いてね？》

《ふん、了解》

そう言うのと、地面がまるで液状化でもしているように、地面から腕が出てくる。

その一本の腕はヴィータ達がいる橋の下の地面から伸びていた。

橋の上ではルーテシアに対する簡易尋問が為されている。

すると、ルーテシアに向けて念話が入る。

《はーいルーお嬢様》

《クアットロ？》

《なにやらピンチのようで？お邪魔でなければクアットロがお手伝い致します》

《・・・・・・・・お願い》

《はい。ではお嬢様？クアットロの言うとおりの言葉を・・・・・・・・

……その紅い騎士に》

一方、なのはとフェイトも、ようやくヘリを目視で確認できる位置まで近づいていた。

周囲に出現したガジェットは、菊池が召喚したモンスターによって全機破壊されており、今のところヘリの周囲に危険はない。

が、突如膨大な力が、廃棄都市区画から感じられる。それは、ロングアーチのオペレータ陣も観測していた。

「市街地にエネルギー反応！お、大きい！」

「そんな、まさか！」

その力は、遠方にいたはやてにも感じられた。

「砲撃のチャージ確認！物理破壊型、推定Sランクッ！」

ロングアーチからの通信は菊池にも届いている。

オペレータ達の焦った声が聞こえる。

（まずい！このままではあの砲撃がヘリに……！流石に今、アクセルシンクロをしている暇はない……）

故に、菊池は決断した。

（とうとう、あのデッキを使う時が来たようだな。本当はあんまり、使いたくないんだけど・・・）

菊池は、素早くスピードワールド2を発動し、デッキを入れ替える。

そして、手札を5枚になるよう、カードをドローする。

「俺は、【きよくせいてん極星天ヴァルキュリア】を召喚！」

【きよくせいてん極星天ヴァルキュリア】攻400

菊池の手には、とあるシンクロモンスターのカードがあった。

一方、廃棄ビルの屋上では、先ほど姿を現した砲撃機がチャージを行っていた。

「インヒューレント・スキル。『ヘヴィ・バレル』、発動」

また、同時にクアットロはルーテシアを介してヴィータに話しかける。

ここでヴィータ達は、ようやく知る。

ヘリが、撃墜の危機に瀕していると言うことを。

そして、放たれる凶弾。

「発射」

インヒューレント・スキル、『ヘヴィ・バレル』から放たれたエネルギーは、そのままヘリの方へと向かい、衝突し、大きな爆発を起こした。

放たれた凶弾。

地上を走っている菊池に止めてもらおうと考えたはやてだが、よく見ると菊池の場には明らかに弱そうなモンスター1体がいるのみだ。

とてもではないが、砲撃を止められるとは思えなかった。

そこではやては、直ぐさまなのはの限定を解除した。

確かに、スピードならフェイトの方が上だが、あの砲撃を止めるとなるとなのはクラスの防御能力がないと辛いのだ。

故に、なのはの限定解除許可を行なったが、1歩、遅かった。

なのはが到着する前に、そのエネルギーはヘリに集まっていく。

その時だ。突然大きな音がしたのは。

「何あれ・・・!?!」

地上に現れたのは、長い白髭を蓄え、つばの広い帽子を被り、手に大きな槍を持った人だ。

ヘリへの砲撃は、その人物、いや人のような何かが持っている槍に止められた。

こんなものを出しそうな人は、一人しかいない。

「まさか、菊池くんが？」

「そんなはずないよ。だって今まで、あんな召喚獣を出したことなんてなかったよ」

フェイトとなのはは、突然現れて砲撃を止めた“それ”を見やる。

それにしても大きい。間違って、あの大きな槍がヘリに当たらないか心配でもある。

フェイトとなのはは、菊池に連絡をする。

「菊池くん、聞こえる!?!」

「ああ、問題なく聞こえるぞ」

なのはは早速、市街地に堂々と立っている“それ”について尋ねる。

「ねえ、あれを召喚したのは菊池くんなの？」

「そうだ。そいつは俺が持っているシンクロモンスターの中でも最高クラスの攻撃力を誇る。北欧神話の最高神、【極神聖帝オーデイン】だ」

「「北欧神話？」」

菊池の説明に首を傾げるフェイトとなのは。

2人は地球で暮らしてきたのだから、北欧神話という単語だけは、ちらりと聞いたことはある。

だが、今何故ここで北欧神話が出てくるのだろうか？

お互いに顔を見合わせて、怪訝そうな面持ちでいる2人に、菊池は声を掛ける。

「まあ、詳しいことは後で説明する。とりあえず今は、現状打破に専念してくれ」

菊池の言葉に2人は頷く。

「うん、了解」

「気をつけてね、菊池くん」

「ああ。2人も気をつけてな」

なのはとフェイトとの通信を終え、菊池は砲撃してきた相手に一

撃を与えるため、あるカードを発動する。

（なるほど。見えないところからの砲撃か。だが、どこに隠れようともオーディンの前では無駄なことだ）

「俺は罠カード、【オーディンの眼^{まなこ}】を発動！」

菊池のカードの発動宣言と共に、【極神聖帝オーディン】の閉じられた左目に眼球がはめ込まれる。

そして、菊池は見抜く。

（そうか、そういうことか。クククッ、うまく隠れているつもりだろうが、全部筒抜けだ）

何と菊池はオーディンを通して、市街地に潜伏している敵の位置を全て見抜いたのだ。

「さて、砲撃してきた敵はあのビルの屋上にいるようだな。よし、行け！【極神聖帝オーディン】！！奴らに神の裁きを下してやれ！！」

菊池は、あるビルを指し示し、オーディンに攻撃をするよう指示する。

「神の力を受けるがいい！ヘヴンズジャッジメント！！」

オーディンは右手に持っている槍をビルの屋上に向かって突き刺す。

ビルはオーディンの攻撃を受け、中層辺りまで壊れてしまった。

だが、それでも敵は逃げていたようだ。

そして、オーディンの攻撃を機になのは達が動き出す。

菊池はこれ以上動くと、なのは達の行動が阻害されると考え、追撃を断念し、ヘリの護衛に戻ることにした。

空中では、フェイト、なのは、はやての3人が連携し、逃げている敵を追撃している。

限定解除を受けているため、いつもよりも威力の高い砲撃を放っている。

いくら、オーディンがいるとはいえ、なのは達の底力に恐怖する菊池。

（やっぱり、Sランクを名乗っているだけのことはある。それにしても、やりたい放題だな）

敵が逃走し、投降の意思を見せていないとはいえ、Sランクの魔導師3人で寄って集めることはないのではないだろうか？

やがて、なのはとフェイトが、ヘリに砲撃を放った2人に収束砲を叩きこむ。

だが、逃げられたらしい。菊池はロングアーチとの通信を繋いでいるため、オペレーター達の焦った声が聞こえてくる。

(ん?)

少しばかり走っていると、遠くの方に何か見えた。

よく見ると、道のだ真ん中に誰かがいる。

そう、そこには砲撃を放ったディエチとクアットロ、収束砲の直撃から2人を助けた??、トーレがいたのだ。

何やら話をしているようだが、このままみすみす見逃してあげるほど、菊池はお人好しではない。

「何をしている、お前ら」

「「!?!」」

振りかえった3人に、威圧的に声を掛ける菊池。

3人とも、突然やってきた菊池に驚いているようだが、視線は菊池の少し後ろに立っている【極神聖帝オーディン】にあった。

やはり、【極神聖帝オーディン】の一撃の影響だろうか。ディエチとクアットロは怯えた表情を見せる。

だが、トーレは怖気つくことなく、こちらを見据えている。

「お前らだな?へりに砲撃を放ったのは」

「だったら、どうした」

「どんな目的、理由があるのかは知らないが、お前達の行動は決して許されるものではない。今すぐ、無駄な抵抗は止めて投降しろ」

「断る」

トーレはきっぱりと、拒否の言葉を菊池に突きつける。

「なら、力づくでも逮捕させてもらう。俺は【極星將テュール】を召喚!!」

【極星將テュール】攻2000

菊池がデュエルディスクにカードをセットすると、【極星將テュール】が現れる。

「……………ディエチ、クアットロ。先に行け」

「トーレ姉様!？」

どうやら、トーレは自ら囿となって仲間を逃がすつものようだ。

「逃がしはしない! 攻撃だ、【極星將テュール】!!」

菊池の声で、【極星將テュール】がトーレに迫っていく。

「インパルス・ブレード!」

互いの攻撃が交錯し、閃光が起こる。

煙が上がり、辺りを包む。

「くそっ・・・、逃げられたか」

煙が晴れると、そこには誰もいなかった。

どうやら、うまくかわされたらしい。

攻撃を終えた【極星將テュール】は、菊池の元に戻って来た。

菊池はこのまま、追撃を行なうかどうか考え、止める。

上から、なのはがやってくるのが確認されたからだ。

(・・・さて。どこから話せばいいんだろうか?)

これから、【極神聖帝オーディン】のことを話さなければいけない。

その結果、どうなるかもわからない。だが、とりあえず今は一安心だ。

後から分かったことだが、あれだけの敵を相手に、部隊は無傷で済んだようだ。

奪われたと思っていたレリックも、ティアナとキャロの機転のおかげで、奪われたのはケースのみとなったようだ。

(何かが動き始めている。俺達の見えないところで、こっそりと・・・)

運命の齒車は、すでに回り始めていたのだ……。

第二十一話 「新たな敵の影が現れる。降臨せよ、【極神聖帝オーディン】！」

作者「だめだ・・・、何とか【極神聖帝オーディン】を出したのはいいが、アニメで使ったデュエリストを思い出してしまふ・・・」

菊池「ハラルドだな、【極神聖帝オーディン】を召喚したデュエリストは」

作者「それだけなら、まだ良いよ。ハラルドの奴、電波発言しやがるから『まるで意味が分からんぞ！』みたいなネタが生まれたんだよ。しかも応用利くから、余計性質が悪い」

菊池「顔芸まで披露してくれたもんな。それに比例して、プレイングも下手だったな。追撃として出したモンスターコンボを逆に利用される、トドメとしてくりだした罠カード【ギャラルホルン】を利用され、自ら神を意味なく除外してしまう、神関連のカードしか入っていないかったために壁となるモンスターが出せずそのままストリート負けするなんて、お前は一体、今まで何をしてきたんだ、修行してきたんじゃないのか？って思わず言っちゃったけど・・・」

作者「そもそも、元ネタがこれだからなあ・・・」

戦闘機に乗っていると、突然発生した謎の暗雲に包まれる

← 山に激突しそうになり、「神よ…力を…！」

← ミサイルで山頂を破壊

← その行為を上官に叱られると「世界を守るために仕事をやめます（

大意)」

←

「まるで意味がわからんぞ！」

菊池「『これから我々が向う敵は兵器では倒せません・・・』って、カードでは倒せるっていうことかよ!! いくらなんでも、ふざけ過ぎだろ・・・」

作者「それが遊戯王なんだよ。いつまでもネタに走り続ける・・・。止められないんだな」

菊池「この作品では、そうそうないな。何かネタを出してくれないか？」

作者「無理です」

菊池「ちょっとは考えたらどうなんだ？ いきなり即答はないだろう!?!」

作者「考えてるけどね・・・、面白くないよ。それでも良いならやるけど・・・」

菊池「いや、やっぱりいいよ。このままで」

作者「それでは皆さん。またお逢いしましょう」

第二十二話 「二つ目のデッキの秘密」 (前書き)

すみません、一ヶ月近く放置してしまいました。

テストがあつて・・・なんて言い訳が通用しないのは承知していますが、本当に執筆時間がありませんでした。なので、今の今まで放置ということになってしまいました。

これからは、なるべく間を空けずに書いていきたいと思いますので、よろしく願います。

第二十二話 「二つ目のデッキの秘密」

「ほな、約束通り話してもらうで」

今、菊池は部隊長室の真ん中に置かれた椅子に座らされている。

部隊長室には菊池以外に、はやて、なのは、フェイト、シグナム、ヴィータ、そしてリインフォース？。

隊長陣全員が菊池を囲むように座っており、菊池の真正面にはやてがいる。

皆の菊池を見る目は厳しいものとなっている。

当然と言えば当然だろう。ビルの中層辺りまで破壊できるぐらいの力を持つ召喚獣を召喚されたら、仲間とはいえ見逃すわけにはいかないからだ。

「まずは、“これ”について話してくれるかな？」

そう言って、なのはがモニターを出す。

そこには【極神聖帝オーダー】が檣でビルを破壊しているところ映されている。

どうやら、なのはが言う“これ”とは【極神聖帝オーダー】のようだ。

菊池は、ここまで来ればもう隠しきれないと悟り、ゆっくりと話

しだす。

「ヘリへの砲撃を止めたのは、俺が召喚した【極神聖帝オーディン】で間違いはない。【極神聖帝オーディン】は、神の力を持つカード。【極神聖帝オーディン】の前には、全ての戦略がさらけ出される」

この言葉になのは達は改めて、菊池のすごさを思い知る。

【シューティング・スター・ドラゴン】でさえ強いのに、さらにそれを越える召喚獣を操るとは……。

もしかして、これでも地じゃないかもしれない……。

なのは達はそう思うと、戦慄さえ覚えた。

「菊池。一つ聞いていいか？」

「どうぞ、何なりと」

質問してきたのはシグナム。

菊池はある程度までのことなら話してもいいだろうと考え、質問することを了承した。

「その、何だ……、オーディン……と言うのか？ そいつには特別な力はあるのか？ 神の力があるのなら、あるはずだが」

「もちろんある……が、今は言えない」

あえて、【極神聖帝オーディン】の効果を言わない菊池。

当然のように、なのは達は反発した。

「どうして？」

「何で隠すんや？菊池くんらしくもないな」

「お願いです、菊池さん。リイン達に教えてほしいですよ」

フェイトやはやて達だけではなく、リインも教えてほしいと言う。

リインは菊池の肩に座り、お願いしてくる。

菊池は言うべきか、隠すべきか迷った。

【極神聖帝オーディン】の効果は、『1ターンに1度、このカードはエンドフェイズ時まで魔法・罠カードの効果を受けない』というものである。【シューティング・スター・ドラゴン】と比べると、かなり強い部類に入るだろう。

こんな強力な効果を持ったモンスターを相手にするとすると、なのは達は間違いなく苦戦を強いられる。

そもそも、菊池は何故【極神聖帝オーディン】を出したのか。

それには大きな理由があった。

「そこまで言うのなら、仕方ない。少し話は長くなるが、話を

う。オーディンの効果、そしてオーディンのデッキとの出会いを・
・」

ここからは回想になります。

く菊池Side（始）く

あれはいつだったか……。そうだ、俺が初めて参加したデュエルの大会で、決勝まで上り詰めた時のことだ。

あの時の俺のデッキは、パワーで押し切って勝つという、何とも単純で安易なコンセプトの元で作ったものだった。

デュエルの大会と言っても、全国レベルではなかった。

自分の住んでいる地区で競い合う、小さな大会だった。

そんな小さな大会だったからだろうか、パワーデッキで決勝まで上がったのは……。

決勝戦。

ここで勝てば、見事優勝となり、トロフィーが貰える。

一回戦から負けることなく、ストレート勝ちしてきたのだから、優勝は貰った、と俺は正直そう思っていた。

いや、思いこんでいた……。

その時の対戦相手は、少し小太りの男。

見た目が弱そうだったからだろうか、その時の俺は大した相手でもない和高を括っていた。

そしていよいよ、デュエルが始まった。

その時の俺のデッキは【レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン】を用いたドラゴン族デッキだ。

先攻を取ると、1ターン目から【レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン】を特殊召喚した。

大抵、これができれば勝利は貰ったようなものだったが、この時ばかりは違った。

「私は【極星天ヴァルキリア】を召喚！」

【極星天ヴァルキリア】攻400

男が出したのは、貧弱なステータスのチューナーモンスター。

「シンクロ召喚か？」

その当時の俺はシンクロ召喚に興味は無く、そもそもしようとも思っていなかった。

カードを消費した割には、大したことないシンクロモンスターが多く、シンクロモンスターのカードを集めるのも面倒だったからだ。

一回戦から今まで対戦した相手の中にも、シンクロ召喚をしてきた者がいたのだが、俺はパワーで押し切ることで勝ち進んできた。

だが、そのパワーが通用しなかったのだ。今回の相手には……。

「北辰の空にありて、全知全能を司る王よ！今こそ、星界の神々を束ね、その威光を示せ！！シンクロ召喚！天地神明を統べよ、最高神、【極神聖帝オーディン】！！！」

【極神聖帝オーディン】攻4000

そう叫んで男が出したのは、【極神聖帝オーディン】というシンクロモンスターだった。

まず俺が驚いたのは、攻撃力の高さだ。

俺のデッキには攻撃力4000を超えるモンスターは、【F・G・D】しかない。

俺の場には、攻撃力2800の【レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン】と、伏せカードが一枚。

念のために、と攻撃反応型の罠カードを伏せていたのだが、【極神聖帝オーデイン】には無力だった。

「インフルエンス・オブ・ルーン!」

その声と共に、【極神聖帝オーデイン】は『エンドフェイズ時まで魔法・罠カードの効果を受けない。』という効果を得、

【レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン】に攻撃してきた。

【レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン】が戦闘破壊され、ピンチに陥っても、俺はできる限りのことを尽くした。

だが、この後はもう語るまでもないだろう。

結局俺はなすすべもなく、敗北した。力の差を見せられたのだ。

見事に完敗し、ショックを受けた俺に対戦相手の男は、「倉本満」と名乗り、言った。

「中々に面白いデュエルだったぞ。どうだ、私と一緒にやらないか？」

「やるって、何を・・・？」

男は不敵な笑みを浮かべる。

「私は君のようなデュエリストを探していた。たとい悪い状況になっても、決して諦めたりはしない、強い意志を持ったデュエリストを・・・」

この日から俺の人生は大きく変わった。

俺は彼に従い、彼のもとで働き始めた。

彼は俺よりも10歳も離れていたが、優しく接してくれた。

そんな彼の仕事は、市民を守る警察官だった。

俺も警察官になるために試験を受け、警察官になった。

その後は特に変わったこともなく、平和な時間を過ごしていたのだが、そんな俺が【極神聖帝オーディン】と大きく関わったのは、警察官になり2年ほど経った頃のことだ。

「『機皇帝』・・・ですか」

「そうだ。ここ最近、現れてるみたいでな。上の方も本格的に動き出そうとしてる」

いつもは書類仕事に忙殺されるのだが、今日からその代わりに『機皇帝』と呼ばれるモンスター、およびそれを操る犯罪者の捜査に参加することになった。

その『機皇帝』を操る犯罪者は、交通法規を無視し、無理矢理デユエルさせて事故を起こさせるという、凶悪な犯罪者らしく、すでに被害が何件か報告されていた。

「不意に現れるから見当もつかない。パトロールを強化するしかないか・・・」

俺の上司である倉本（彼の階級は警部）は、資料を睨みながら呟く。

最近はパトロールを強化しつつあるので、被害の度合いも軽減して来ている。

だが、それでも現れないわけではないので、被害件数が減ることは無かった。

そんなこんなで、俺達は捜査を続けていたのだが、ある日、倉本警部がとうとう本命にたどり着いたらしい。

だが、彼はクラッシュさせられ、重体に陥ったという連絡が入った。

俺は倉本警部の容体を確認するため、搬送された病院に向かった。

医師達の懸命な措置のおかげか、何とか一命を取りとめたものの、もう二度とD・ホイールに乗ることはおろか、デユエルすらもできなくなった。

しばらくたったある日、俺は再び倉本警部の病室を訪ねた。

「倉本さん・・・」

俺は彼に声を掛けた。今更、何を話せばいいのか分からなかったが、こうでもしないとやるせなかったのだ。

「菊池・・・か。お前に・・・・・・・・渡したいものが・・・」

まだ、手術してそんなに日は経っていない。会話するのもやっとなのだ。

倉本警部は、苦しそうに傍にある自らのデッキに視線を落とす。

同僚達がお見舞いの時に持ってきたのだろうか。

「これを・・・・・・・・お前に・・・・・・・・」

俺は何を言おうとしているのかを察し、首を横に振って答える。

「駄目ですよ。それは倉本さんの大切なデッキじゃないですか」

「良いんだ・・・・・・・・。もう俺は・・・・、デュエルができない・・・・。このままでは・・・・・・・・、誰にも・・・・使われずに・・・・埋もれてしまう。だから・・・・・・・・、デッキを・・・・仲間を・・・・大事にするお前に・・・・・・・・使ってほしい」

そんな風に言われても、俺は素直に受取れなかった。

確かに彼の言うように、俺は今までのパワーで押す戦い方を止めて、守りながら戦うという戦い方に変えた。

自分だけではない。大切な仲間がいる。それを分かっていく中で俺は戦い方を変えていったのだ。

それを踏まえたとしても、彼の大切なデッキを受け取ることは躊躇われた。

俺が躊躇っているのが分かったのだろう、彼は俺の手を取ると、掌に自らのデッキを乗せる。

「頼む……。このデッキは……。俺の魂そのものだ……。お前に使ってほしい……。いいか……。このデッキを……。使う時は……。自分のためだけに使うな……。誰かを……。仲間を……。守る時だけに使うんだ……！」

俺はとりあえず受け取ることにした。

そうでもしないと、彼は納得しそうになかったからだ。

彼はああ言ったが、俺は彼の魂が込められたデッキをそう易々と使うことはできなかった。

それほど、俺は倉本警部を尊敬していたのだから……。

やがて、彼は無事退院し、車いすでだが、仕事にも復帰した。

現場の仕事はできないため、事務作業をこなす毎日だが、何故か幸せそうだった。

だが、彼とは裏腹に俺の心は晴れない。

いつも、デッキを渡された時の彼の言葉が頭を駆け巡っていたからだ。

だから、余程仲間が追い詰められた状況でもない限り、使わないつもりだった。

そう心に決めていたが、砲撃がへりに当たりそうになっていたあの時、正直俺は焦っていた。

今の俺のデッキ（一つ目のデッキ）には、高攻撃力のモンスターはほとんどなく、砲撃を止められそうになかった。

もはや、俺になす術はないのか……。

仲間を守るなどと大きな口を叩いておきながら、いざとなると何もできないのか……。

そう諦めかけていた俺は、不意に思い出したのだ。

「このデッキを使う時は……、自分のためだけに使うな……。誰かを……、仲間を……守る時だけに使うんだ……！」

尊敬していた彼の言葉と、彼のデッキの存在を……。

（菊池Side（終））

「そうか……。そんなことがあったんか……」

菊池の昔話を聞き終えたはやてが、ポツリと呟く。

はやて以外のメンバーも、沈痛な面持ちをしている。

しんみりとした空気が漂う中、菊池が再び口を開く。

「そういうことだ。オーデインの効果は、『エンドフェイズ時まで魔法・罠カードの効果を受けない。』というものなんだ。だから、オーデインの前には小細工は通用しないんだ」

「それにしても、どんな魔法も受け付けないって……。、もう何でもありだな」

ヴィータが呆れた顔をしながら言った。

シグナムも同じような気持ちなのか、「まったくだ」と相槌を打った。

「ねえ、菊池くん。お願いがあるんだけどいいかな？」

「ん？どうした、フェイト」

ここで、今まで蚊帳の外だったフェイトが訊ねてきた。

「菊池くんはこれからどうするの？ 今までのように、オーデインは極力使わないつもり？」

「ああ。そのつもりだが」

当然のことだ。尊敬している上司が使っていたデッキを身勝手に使うなど、何があってもできない。

『大切な仲間を守るときにのみ、使う』という約束があるからだ。

「そう……。でも菊池くん。これだけは約束してくれるかな？」

「約束？」

怪訝な面持ちで聞き返した菊池に、フェイトは頷く。

「オーデインを召喚する時は、必ず私達に合図か何か、出してくれるかな。でないと、あの大きな槍が当たるかもしれないから」

フェイトの言葉に、少し黙考する。

合図……。そんなものを出したら、敵にばれてしまう可能性がある。

正直、納得し難いものだが、よくよく思い返してみれば、確か召喚したオーデインの槍がヘリに当たりそうになっていたのも事実だ。

「……………分かった。約束するよ」

「よし、約束やで。菊池くん、二言はあらへんな？」

「もちろんだ。出す時には必ず、合図を送るようにするよ」

はやては、菊池の言葉に満足そうに頷くと、なのはとシグナムに声をかける。

「そういえば、なのはちゃんとシグナムは聖王教会に行くんやろ？」

「うん、そうだけど・・・」

「それが何か・・・？」

何故かここで笑顔で菊池を見るはやて。

何か嫌な予感がする。

「せっかくやし、菊池くんも一緒に行ったらどうや？」

「いいい、一緒に！？」

菊池が答えるより早く、少し顔を赤くしたなのはの上擦った声が響く。

はやては内心分かっていながらも、あえて訳を尋ねた。

「何や、なのはちゃん。そんな大声出して、どうしたん」

「な、なななな、何でもないよっ！行こう、菊池くん！」

「お、おい！どうしたんだ、なのは」

ニヤニヤと笑うはやてに、なのははさらに顔を赤くし、菊池の腕を引っ張りながら逃げるように部隊長室を出て行った。

ひとり残されたシグナムは、はやてに一言注意した後、先に出て行った菊池達を追うように部隊長室を後にした。

「もう、はやて。あんまりからかっちゃダメだよ」

シグナムに続いて、フェイトも注意する。

だが、はやてには無意味のようだ。

「ええやん、ええやん。それに、私がただからかっているだけやと思ったら大間違いやで、フェイトちゃん。これでもなのはちゃんのことを応援してるんやから」

なんだかんだ言っても、友達思いなのだろう。

自分なりのやり方で、本人達には悟られないように、そっと後押ししているようだ。

はやてには失礼だが、思わず感心してしまうフェイトであった。

第二十二話 「二つ目のデッキの秘密」 (後書き)

作者「うーん。何かあんまりすっきりするものでもないな。書いた自分が言うのはなんだけど」

菊池「じゃあ、今すぐ書き直せ」

作者「それは無理だって。ここまで書くのにもかなりの労力を使っただから」

菊池「ところで、機皇帝はまだ出てくるのか？前々回ぐらいの時に、倒したはずだが……」

作者「さあ？どうだろうね」

菊池「まさか、この先の展開を考えてないとか言わないよな？」

作者「それはないよ。大体の構想は練ってある。心配すんなって」

菊池「お前が言っても、説得力がカケラも無いけどな」

作者「ヒドッ！そんなこと言わなくてもいいじゃないか」

菊池「事実だもんな。どうしようもないさ」

作者「うう……。こんなそっけない主人公ですが、どうか温かい目で見守ってやって下さい。それでは、この辺で失礼します」

第二十三話 「ヴィヴィオと『ロードランナー』」 (前書き)

今回はデュエルはありません。ですが、【ロードランナー】が大活躍します。

って、大活躍って程でもないかな・・・？

第二十三話 「ヴィヴィオと『ロードランナー』」

菊池は成り行きとはいえ、なのはに腕を引っ張られながら機動六課の入り口までやって来た。

なのはに腕を引っ張られることに不快感を感じることは全くないのだが、とても恥ずかしいというのが本音である。

自然と顔が赤くなってしまうのは仕方ないことだった。

おまけに、菊池の腕を取っているなのはも顔が赤い。

部隊長室でのはやてとのやり取りがまだ尾を引いているのかもしれない。

だが、このままの状態が続けば、色々とまずい。

菊池は意を決して、自らの腕を取ったまま、ぼうっと立っているなのはにおずおずと声をかける。

「あ、あの……。なのは……」

なのはは菊池に声をかけられ、ようやく我に返ったようである。慌てて返事を返してきた。

「え……。あ……。ご、ごめんね！菊池くん」

そう言って、なのははようやく腕を離した。

「い、いや・・・そんな・・・」

しかし、腕を離れたなのはが少し残念そうな顔をしているのが気になる、菊池は何とかとり繕ろうとするも、気の利くような言葉はそう簡単には出てこない。

2人の間に気まずい空気が漂う中、シグナムが入り口まで車を回してきた。

車を止めると、運転席の窓を開けて、こちらに声を掛けて来た。

「何をしているんだ、2人とも。出発するぞ」

そう言ったシグナムの声や表情に怒りや苛立ちは無く、むしろ、呆れて苦笑しているに近いものだった。

シグナムの声を聞いた菊池となのはは、慌てて車に乗り込んだ。

聖王教会へと向かう車の中。

フェイトの車を運転しているのはシグナム。助手席になのは、後部座席には菊池が座っている。

菊池はデュエルディスクからデッキを取り出し、デッキの内容を確認している。

そんな中、なのはとシグナムが話をしていた。

「すみません、シグナムさん。車出してもらっちゃって」

「何、車はテストロッサからの借り物だし、向こうにはシスター
シャツハがいらっしゃる。私が仲介した方がいいだろう」

「はい……」

少しの沈黙の後、再びシグナムが口を開く。

「しかし、検査が済んで何かしらの白黒がついたとして、あの子
はどうなるのだろうか？」

「ああ……当面は六課か、教会で預かるしかないでしょうね……
。受け入れ先を探すにしても、長期の安全確認が取れてからでない
と……」

なのはの言葉に小さく唸ったシグナムは、突然入った通信に意識
が向かった。

「騎士シグナム。聖王教会、シャツハ・ヌエラです」

モニターにはシャツハが映っている。

デッキを弄っていた菊池は、思いがけない人物の声に顔を上げ、
運転席の方を見つめる。

ただならぬ様子のシャツハに、シグナムは冷静に尋ねる。

「どうされました？」

「申し訳ありません。こちらの不手際がありまして、検査の合間にあの子が姿を消してしまいました」

これには、なのほも菊池も思わず険しい表情になる。

何かしらの事件、事故に巻き込まれた可能性も否定できない。

「……急いだ方がいいな」

シグナムは静かに呟くと、アクセルを踏み込んだ。

菊池達は目的地に着き、車を降りると建物からシスターシャツハがやって来た。

「皆さん、申し訳ありません！」

「シスターシャツハ、状況はどうなっていますか？」

慌てた様子のシャツハに、なのほが状況の説明を求める。

「はい、特別病棟とその周辺区域の封鎖と避難は既に済んでいます。今のところ、飛行や転移、侵入者の反応は見つかっていません。こちらも搜索の手を尽くしているのですが……」

「ということは、外には出られない筈ですよね？」

「ええ」

その返答を聞いたなのはは、3人の顔を見やり、指示を出した。

「では、シスターシャツハとシグナム副隊長は建物の中を。私と菊池さんは、建物の外を探します」

六課では、菊池のことを君付けで呼ぶのはだが、外ではさん付けで呼ぶ。

きちんと公私を区別するなのはに感心しつつ、菊池は「了解」と言った。

「それじゃあ、菊池くん。西側の搜索をお願いね」

「分かった。お互いに頑張ろう、なのは」

シグナムとシャツハが建物内へと入って行くのを見送り、なのはと菊池は二手に別れて搜索する事となった。

短い言葉を交わした後、なのはが背を向けて東の方角へと歩き出すのを見ると、菊池も西の方角へと歩き出した。

搜索すること約20分。目を皿のように探しているのだが、見つからない。

「どうしたものか・・・」

デッキのモンスター達に手伝ってもらおうか、と考えてみたがすぐにそれを自ら否定する。

（駄目だ。なのは達は自分の足だけで探しているんだ。俺だけ楽することなんてできない）

そう思ってしまうほど、捜す範囲は結構広い。座って休みたいのをグツと堪えつつ、辺りを見回す。

と、その時だった。

菊池の背後から何か物音がした。

「ん？」

反射的に後ろを向くと、そこには金色の髪をなびかせた小さな少女がいた。

少女は手にしているウサギのぬいぐるみを抱きしめながら、こち

らを見ている。

特徴的な、それぞれ色が異なる左右の瞳に、不安と恐怖が入り混じっているのが分かる。

（こんな時、どうすれば……、そうだ！）

思い立った菊池はデュエルディスクを装着し、とあるモンスターを召喚してみることにした。

だが、ここで召喚する際に大声を出せば、泣き出しそうな予感がある……。

そう思った菊池は、いつものように召喚する時よりも声のボリュームを落とす。

「来い、【ロードランナー】」

【ロードランナー】攻300

突然現れた【ロードランナー】に驚いている少女に、菊池は【ロードランナー】をヒョイツと持ち上げると、少女の近くまで行く。

不安そうな表情で見えて来る少女の前で片膝をつくと、【ロードランナー】を近くで見せる。

「ほら、可愛いだろう？」

「……？」

不安が少し無くなっているとはいえ、『どう言えいいのか?』
といったような表情をされては、安心はできない。

もうひと押しが必要らしい。

そこで、菊池は【ロードランナー】の頭を撫でてやる。

すると、【ロードランナー】が嬉しそうな声で鳴いた。

その様子を見て興味が出て来たのか、少女は不思議そうな顔をしつつも、菊池と同じように【ロードランナー】の頭を撫でた。

誰に撫でられても嬉しいのか、先程と同じ反応を見せる【ロードランナー】。

少女も嬉しそうな顔に変わる。

「・・・わあっ・・・!」

【ロードランナー】の反応を楽しむかのように、少女は【ロードランナー】の頭を撫で続ける。

曇りのない、純粹な笑顔。

そんな笑顔を浮かべる少女を、そっと見守る菊池。

【ロードランナー】がこんな展開をもたらすことは想定外だったが、結果的にうまくいっているため、良しとすることにした。

(って、何やってるんだ!?)

少し考え事をしていた隙に、【ロードランナー】は菊池の腕から離れており、少女と戯れていた。

少女は【ロードランナー】にすっかり気を許したのか、【ロードランナー】を抱きしめたりしている。

一方、【ロードランナー】はこんなスキンシップは体験したことはないものだから、僅かな戸惑いを見せつつも少女と共に笑顔を見せながら遊んでいた。

（いいなあ……。俺ももう少し若ければ一緒に遊べたのだが・・
・）

菊池はそんな思いを抱きながら、少女と【ロードランナー】を邪魔しないように、離れたところでそっと見守ることにした。

あとは、菊池とは反対側の方向を探しているのはと、合流できれば一件落着だったが、そうは問屋が卸さず。

「逆巻け、ウィンデルシャフト！」

「ひっ・・・!？」

「!？」

突然、2階の窓を突き破り、やって来たのは臨戦態勢のシスターシャッハ。

「菊池さん！大丈夫ですか!？」

シャツハは菊池の身を心配してやって来たのだろう。

だが、いくらなんでもやりすぎである。

両手に付けられているトンファーのようなものを構え、敵に向かうかのような態勢。

菊池が【ロードランナー】を使って、少女を気を許していたのだが、全て水泡に帰してしまった。

腕に抱いていた【ロードランナー】をポトリと落とし、その場に力なく尻餅をついた少女は、今にも泣き出しそうな顔を浮かべていた。

菊池がシャツハをたしなめようと声をかけたが、ある人物に遮られる。

「お、おい。シス——」

「ごめんね、びっくりしたよね？」

そう、菊池とは反対側の方を探していた高町なののである。

目に一杯の涙を湛えた少女に、ゆっくりと歩み寄ると、地面に落ちていたウサギの人形を拾い上げ、優しく砂を払う。

なのはは優しい微笑みを浮かべながら、手にしたぬいぐるみをそっと差し出す。

それでも、少女の瞳には恐怖が残るようで。

「・・・私、高町なのは。お名前、教えてもらえるかな？」

警戒を解く為に、まずは自己紹介から始めるなのは。

なのはの優しい声や表情に、緊張感を少しずつではあるが緩めていく少女。

ドサクサに紛れて菊池の元に戻ってきた【ロードランナー】を腕に抱き、様子を見ていた菊池も、ひとまず安堵の表情を浮かべる。

「・・・・・・・・ヴィヴィオ」

「ヴィヴィオ、か・・・・・・・・。素敵なお名前だね」

なのはは、目の前にいる少女――ヴィヴィオと目線を合わせるようにしゃがみ込むと、汚れを払ったウサギのぬいぐるみを、しっかりと持たせた。

なのはの行動が功を奏してきているのだろうか。ヴィヴィオは、なのはと会話を始めたのだ。

シャツハと菊池は、離れたところからそっと、なのはとヴィヴィオを見つめていた。

なのはがヴィヴィオを落ち着かせると、菊池達は聖王教会を後にし、機動六課に戻ってきた。

ただ、ヴィヴィオはすっかりなのはに懐いたらしく、なのはから離れようとはせず、ついには泣き叫ぶ始末。

なのはやフォワード達が宥めているものの、効果はない。

と、そこにフェイトとはやてがやって来た。

「ふふ、エース・オブ・エースにも勝てへん相手はおるもんやね」

「大丈夫？なのは」

どうやらなのはに用があってきたらしい。

《フェイトちゃん、はやてちゃん。あの、助けて》

なのははもうお手上げのようで、フェイトとはやてに念話で助けを求める。

それに答えるかのように、はやてはフォワード達を落ち着くように言い、続いてフェイトがウサギのぬいぐるみを手にし、未だなのはにしがみ付いているヴィヴィオに話しかける。

とりあえず状況を理解するため、なのはと念話で会話をしつつ、ぬいぐるみを動かすことで、なのはへの興味をうまく逸らせるこ

とに成功した。

ある程度フェイトは状況を理解し、続いてヴィヴィオの説得を試みる。

ぬいぐるみを動かしながら、うまくヴィヴィオを誘導させる。

「さすがフェイトちゃん。手慣れたもんや」

ようやくヴィヴィオが落ち着き、ヴィヴィオを除くその場にいた全員が安堵の表情を浮かべたその時……。

「何をしてるんだ？」

フォワード達はドアが開くと同時に振り向き、思わず声が出た。

そこにいたのは菊池だった。たまたま部屋の前を通りかかったところ、なにやら騒ぎが起こっているようなので様子を見に来たのだった。

なのはやフェイト、はやても菊池に気付き声を上げた。もちろん、ヴィヴィオも例外ではない。

なのは達は、突然の菊池の登場に困惑する。

菊池の身長は180オーバー。高い背はそれだけで子供を怯えさせるものだ。

今の菊池の表情に陰しさは無く、困惑した顔なので泣き出すことはないだろうが、それでもいつ泣き出してもおかしくはないだろう。

そう思ったのは達だが、ヴィヴィオは予想外にも菊池の方へ向かっていく。そして、そのまま菊池の方へ近づくと、立ち止って見上げる。

流石に子供に見上げさせるのはまずいと思い、菊池は片膝を付く。これで何とか、ヴィヴィオと同じくらいの視線に何とかおさまることができた。

ヴィヴィオは少しの間、菊池の顔を見つめると言った。

「鳥さんはどこ？」

その質問にヴィヴィオを除く全員が固まる。

いきなり『鳥さん』と言われれば、啞然とするしかない。

というより、菊池とヴィヴィオの言う『鳥さん』には一体どういった関係があるのかが気になるところでもある。

皆が啞然としている中で、いち早く再起動したのは、目の前で『鳥さん』発言を受けた菊池だった。

一瞬、何のことか分からなかったが、菊池は「ああ、そういうこ

とか」と納得する。

ヴィヴィオの言う『鳥さん』は、おそらく聖王教会で見せた【ロードランナー】のことだろうと。

菊池はデッキホルダーからデッキを取り出し、【ロードランナー】のカードをヴィヴィオに見せる。

「このことか？ヴィヴィオ」

「うん！」

どうやら当たりのようである。菊池はデュエルディスクに【ロードランナー】のカードをセットする。

すると、【ロードランナー】がヒョコツと現れた。

「わぁ・・・！」

【ロードランナー】の登場に、ヴィヴィオは笑みを浮かべ【ロードランナー】を抱きしめた。

「キューッ!？」

いきなり抱きしめられた【ロードランナー】は驚きの声を漏らし、菊池の方を見て来る。

菊池は苦笑しつつ、なのはとフェイトに目配せする。

なのはとフェイトは、菊池の目配せの真意に気付き、はやてと共に

に部屋を出て行った。

それを見送ると、菊池はフォワード達に向き直る。

「ヴィヴィオは任せろ。お前達は自分達の仕事をこなしてこい」

「で、でも……」

「菊池さんに任せっきりにするわけには……」

菊池の言葉に、エリオとキャロが渋る。

「菊池さんなら大丈夫だよ、2人とも」

「スバルの言う通りよ。ここは菊池さんに任せましょ」

スバルとティアナの言葉も手伝って、エリオとキャロはしぶしぶ了承してくれた。

「それじゃ菊池さん。お願いしますね」

「ああ、任せておけ」

ティアナが去り際に頭を下げてお願いしてきたので、菊池は頷きながら返事を返し、フォワード達を見送った。

（ヴィヴィオ……。この子はただの子供じゃないような気がする。そんな気がしてならない）

【ロードランナー】と遊んでいるヴィヴィオを見つめながら、菊

池はそう思った。

第二十三話 「ヴィヴィオと【ロードランナー】」（後書き）

作者「今回の話はヴィヴィオがメインのはずなのに……」

菊池「【ロードランナー】がメインみたいになってるよな」

作者「それにしても、まだデッキに入れてたんだな。あんな使いにくいモンスターをよ」

菊池「そんなことはないさ。効果はそこそ良いし、使えないカードではない」

作者「いやいや、全然使えないでしょ！効果とステータスが噛み合っていないのが明白じゃないか！！【シールド・ウイング】の方が絶対使いやすいでしょ！」

【ロードランナー】

効果モンスター

星1／地属性／鳥獣族／攻 300／守 300

このカードは攻撃力1900以上のモンスターとの戦闘では破壊されない。

【シールド・ウイング】

効果モンスター

星2／風属性／鳥獣族／攻 0／守 900

このカードは1ターンに2度まで、戦闘では破壊されない。

菊池「確かにそうかもしれないけどさ……」

作者「アニメでも遊星が使ってるけどね、普通に戦闘破壊されるわ、ドローした時に嫌な顔されたこともあったぞ」

菊池「そうは言ってもなあ……。俺は使い続ける。大切なカードに変わりはないから」

作者「【シールド・ウィング】をもう一枚デッキに入れた方が、賢明だと思うぞ」

菊池「大丈夫だ。ある程度はプレイングで何とでもなる」

作者「それって、プレイングをしくじったら終わりってことだね・
・・」

第二十四話 「とある少女の相談」 (前書き)

長い間、お待たせしました。

今年初の投稿になります。今回もデュエルはありませんが、もうしばらく御辛抱を。

それでは、第二十四話「とある少女の相談」が始まります。

第二十四話 「とある少女の相談」

ヴィヴィオが機動六課にやって来た次の日のこと。

菊池は、自分の部屋で本を読んでいた。

今日は久しぶりの休日である。デスクワークも昨日までに済ませてしまい、暇になったので本を読んでいるのだ。

最初はヴィヴィオの世話でもしようかと考えた菊池だったが、菊池と同じく今日は休日であるエリオとキャロに、「ヴィヴィオの世話なら任せて下さい。菊池さんばかりに、任せるわけにはいきませんから」と言われ、ずこずこ戻って来たのが約1時間前のことである。

（さて、どうしたものか・・・）

ふと時計を見れば、時刻はもうすぐ午前11時になろうとしている。

「平和だな……。こんな休日を味わうのも良いかもしれないな」

元いた世界では、平日は仕事で忙しかったが、休日でも色々と忙しかったのを思い出す。

休日でも仕事関係で時間を割かなければならないこともあったし、ゆっくりと本を読んでいることなどできなかった。

それを思えば、今の生活は十分な余裕を感じさせてくれるものだ。

（明日からはまた、訓練漬けの毎日が続くからなあ。体調管理に注意しないと・・・）

そう思っていると、部屋の扉をノックする音が聞こえた。

菊池の部屋にやって来る者はあまりいない。

ここ最近、誰もやって来ない菊池の部屋を訪れる珍しい来客に、怪訝な面持ちを浮かべながら、菊池は本を置いて立ちあがると扉を開けた。

扉を開けると、そこに立っていたのはティアナだった。

「ティアナか。どうしたんだ？」

「えっと、ちょっと・・・」

何かしらの用があって来たのだろうと思った菊池だったが、ティアナの様子を見るとどうもそうではないようだ。

「まあ、立ち話つてのもなんだ。さ、入って」

「は、はい。失礼します」

菊池はティアナを部屋に誘う。

今までエリオやキャロ、はやてが来たことはあったが、ティアナが部屋にやって来るのは、これが初めてだ。

菊池の部屋を物珍しそうに見ているティアナに、手近にある椅子に座るよう勧めた後、菊池は湯沸かしポットを使って2人分のお茶を淹れる。

「熱いから気をつけてな」

「はい」

さりげなく注意しながら、湯呑に入ったお茶をティアナに渡す。

菊池は、湯気が立っている湯呑を少し見つめた後、本題を切り出した。

「で、早速だがティアナ。どうして俺のところに来たんだ？」

「え？そ、それは・・・・・・・・」

菊池が静かに尋ねると、ティアナは言葉を濁した。

それどころか、菊池と目を合わせようもしない。

（これはただ事ではないな）

直感的にそう感じた菊池は、ティアナが悩んでいるのだと思い、訳を尋ねてみることにした。

「何か悩んでいるのか？俺でよければ、相談にのるぞ」

すると、ティアナは意外なことを口にした。

「違うんです。悩んでいるのは間違ってますが、その……」

そう言って、顔を赤くして俯くティアナ。

「？」

だが、菊池はティアナが何を言おうとしているのか、今一つ掴めない。

菊池が首を傾げ、不思議そうな面持ちでティアナを見つめていると、ティアナは何か決心したのか、顔を上げて真っすぐに菊池を見る。

「菊池さん。少し話を聞いてもらっても良いですか？」

「ああ、構わない」

どうやら、大事な話のようである。菊池は姿勢を正し、ティアナの言葉に頷く。

（本当に、菊池さんは優しい……。私をちゃんと気遣ってくれてる）

菊池の返事にホッとしつつ、ティアナは話を始める。

「菊池さんは、私に兄がいたことを知ってますか？」

（ティアナのお兄さん……。前にヴァイスが言ってたな）

忘れもしない。あの時は、ティアナのことで頭がいっぱいだった。

自分では精一杯できることをしたつもりだが、今思えば、まだまだできることはあったと思う。

「そのことなら、話には聞いてるが・・・」

「そうですか。なら、話は早いですね」

菊池が知っていることに、てっきり驚くのかと思いきや、対して驚くことはなかった。

むしろ、知っていることに半ば納得しているようだ。

「私の夢は、兄が果たせなかった夢……。それは執務官になることなんです。そのために、今まで努力してきました」

「・・・・・・・・」

ティアナは自分の夢について話していく。菊池はティアナを見つめながら、黙って聞く。

菊池の部屋には、ティアナの声が静かに響く。

「でも、最近思うようになったんです。自分には、遙か遠い夢なんじゃないかって・・・・・・・・。凡人の私には到底無理な話なんだって・・・・・・・・」

「ティアナ・・・」

沈痛な面持ちで自分の思い、いや、自らの本音を菊池に伝えるティアナ。

そんなティアナに菊池は何も言えない。ただ、彼女の名前を呟くことしかできなかった。

「アグスタの件で、多くのことを学びました。あの時の経験は、とても大きなものとなると思います。それでも・・・！不安は消えないんです・・・」

「・・・・・・・・」

「確かに、菊池さんが言ってたように、仲間に頼ることも重要だと思うんです。でも、一人になって考えてみると、怖いんです。私には、家族がいないから・・・！」

目に涙を浮かべ、菊池に思いをぶつける。声のトーンも少しずつ大きくなっていることから、抑えていた感情が爆発しそうになっているのが分かった。

「ティアナ・・・」

「もう、どうしたらいいのか分からない！私はこれから、何を目標に生きていけばいいんですか！？」

「ティアナ。少し落ち着け」

菊池は、勢いのあまり、立ちあがりかけたティアナを手で制する。

菊池は一口お茶を飲んで、一息吐くと言った。

「ティアナ、何を迷ってるんだ。お前は執務官になるためにここ

まで来たんだろう？なのに、何故それを否定するんだ？お前は、お前の意思を貫けば良い」

「でも！執務官になるには、かなりのスキルが必要なんです！私には無理です」

「そう簡単に決めつけるな。やってみなければ分からないだろう」

「半端な気持ちでなれるような職業じゃないんです！だから、悩んでいるんじゃないですか！！」

もはや、ここまで来ると只の言い合いだ。ティアナも感情的になってしまっている。

ここは一つ、ガツンと言ってやるべきだろうか？

いや、そうじゃない。

ここでティアナを殴って止めても、彼女の気持ちは変わらないだろう。むしろ、突き放してしまうだけになる。

だから、菊池は……。

「すまない。お前の気持ちに気付いてやれなかった。本当に、苦しかったんだな」

ティアナを優しく抱きしめてやることを選んだ。

「あ……」

「アグスタの時は、お前の話を聞くつもりだったが、なんだかん

だで聞くことができなかった。本当にすまない」

菊池は、自らの思いを伝える。ティアナがここまで悩んでいたとは正直、予想外だった。

（なのはと和解して、気持ちが落ち着いたので思っていた。だが、そうじゃなかった。ティアナは、自らの“本当の思い”を心の奥に封じ込めたのだろう。）

一方、菊池に抱きしめられたティアナは、混乱していた。

喧嘩腰で、あんなひどいことを言ったのだ。怒られても当然だと思っていた。

でも、菊池は怒るところか、謝って来た。

ティアナはおもわず、拍子抜けしてしまった。

「き、菊池・・・さん・・・」

「俺は、お前とちゃんと向き合えてなかったな。人に大きな口を叩いておきながら、情けないと思う」

「そんなことっ・・・!」

「いいんだ。それより、お前は少し思いつめ過ぎだ」

菊池はティアナから離れ、その隣に腰掛ける。

「・・・」

「確かにお前は、他のフォワード達や隊長達と比べれば劣るところが多いだろう。だが、お前にはお前にしかできないことがあるんじゃないか？」

「私にしかできないこと・・・？」

菊池の言葉を聞いて聞き返してくるティアナに、菊池はそうだと行って言葉を繋ぐ。

「お前は模擬戦でもそうだが、現場でも、フォワード達を指揮してるじゃないか。お前がいないと、誰がフォワード達の指揮を執るんだ？そもそも指揮官というのは、少しの時間で、的確な判断をしないといけないんだ。そんな芸当、中々真似はできないぞ」

「っ！・・・」

ティアナは唇を噛み締めて、菊池の話を聞いている。

（怒らせてしまったか？）

ここで、一旦話を止めてティアナの顔色を窺う。

するとティアナは腕を組み、何か考えている。

怒っているのかと思ったが、ティアナに怒り出しそうな気配は今のところない。

ティアナの黙考を邪魔しないよう、余計な物音を極力立てずにお茶を一口飲む。

「あの・・・、菊池さん」

あれから5分程経っただろうか、今まで静かだった部屋にティアナの声が再び響く。

「ん？どうした」

「菊池さんの言ってることは、間違っていない。でも、納得しきれないんです」

「何か引っ掛かることがあるのか？」

菊池がそう尋ねるとティアナは凶星のようで、その通りですと頷く。

「私は元々、魔力の保有量はあまり多くない方なんです。だから、なのはさんのように砲撃魔法を連発で使うことはできません。執務官になったら、色々な犯罪者と相手しないといけなくなります。その時、魔力量が少ないことが足を引っ張ると思うんです。実際、幻影魔法を多用できないのも、このためですし・・・」

自分で言っても苦々しい思いのようで、ティアナの顔は苦悩に満ちている。

そんなティアナに、言葉を選びながら菊池は言う。

「お前の言うように、キャパシティ capacityが少ないことは不利だ。だが、それが必ずしも負けになるかと言うと、そうではないと俺は

思う」

「どうしてですか……？」

菊池の言ったことが信じられないのか、驚愕の表情を見せるティアナ。

「お前が言うのは、犯罪者を力で制圧できないということだろう？俺が言いたいのは、別に力で抑えなくても、頭で抑えることもできるんじゃないかって話だ」

自分の頭をトントンと人差し指で叩きながら、菊池は話す。

「頭で……、ですか？」

「そう。戦術、いやこの場合、戦略と言った方が良いのか……？とにかく、周りの状況、相手の動きや癖、弱点……。それらをうまく使えば、お前よりも強い奴でも勝てる可能性はあるってことだ」

「あっ、なるほど。そういうことですか……」

安堵したように溜息を吐くティアナに、菊池は苦笑する。

「まあ、そういうことだ。あまり思いつめるな。何かあったら、俺でもいいし、誰でもいい。人に相談するのは大事だぞ」

かなり無理矢理だが、話を纏める。それにティアナは不満を漏らすことなく、「はい」と言って頷いた。

「よし。その調子だ」

菊池はティアナの頭にそっと手を置く。すると、ティアナは恥ずかしさのためか、顔を真っ赤にする。

「も、もう……。からかわないで下さい……………」

「からかってないさ。励ましてるんだ」

ティアナの様子を見て、満足そうに微笑みながらティアナの頭を優しく撫でる。

（菊池さんったら、無意識にしているのかしら。だとしたら、かなりの大物よね……。でも、なんか嬉しいな）

恥ずかしさと嬉しさが入り混じった気持ちを抱くティアナを見て、菊池は気持ちを新たにすのだった。

（俺にできることは、限られてる。それでも、少しだけ……。ほんの僅かでも良い。俺は仲間の役に立ちたい）

その時、お昼を知らせるチャイムが鳴った。菊池が時計を見ると、正午を示していた。

「もう昼か。せっかくだし、一緒にお昼食べようか」

ごく自然に誘ったはずだったが、ティアナは何故か顔が赤い。

「……」

もはや、何も言えなくなるほど恥ずかしいらしい。菊池は、女の子らしいその態度に少しばかりの好感を抱きながら、ティアナの手を、大事な物のように優しくとった。

「え・・・」

「さ、行こうか。ティアナ」

手を握られていることに慌てるティアナと共に、菊池は食堂に向かった。この出来事によって、菊池とティアナは、本当の意味で邂逅できたのだった。

第二十四話 「とある少女の相談」 （後書き）

作者 「やっと投稿出来た・・・！」

菊池 「何があったら、そんなに時間がかかるんだ？」

作者 「色々あってな。なかなか小説に時間を割くことができないんだ」

菊池 「頼むぞ、作者。ここんところ、デュエル描写が無いから結構味気ない作品になってるからな」

作者 「ガチで！？それはまずいな！」

菊池 「自覚してるなら、頑張ってくれ」

作者 「こうしてはいられない！早速、書き始めないと！！」

菊池 「本当に、大丈夫なのか・・・？」

第二十五話 「フェイトとの模擬戦【前編】」（前書き）

約一週間ぶりの更新になります。

今回は、菊池が久しぶりにデュエルします。とはいえ、描写はあまりありませんが。

それでは、第二十五話 「フェイトとの模擬戦【前編】」 始まります。

第二十五話 「フェイトとの模擬戦【前編】」

今、菊池は訓練場にいる。

訓練場には、いつものようにフォワード達が、なのはの厳しい訓練を受けている風景が見られる。

菊池も参加するはずだったのだが、なのはが菊池の参加に待ったをかけた。

なのはによると、フォワード達の訓練が終わり次第、何か行われるようだ。だが、それだけでは菊池が訓練に参加できない理由にはならない。

「ごめんね。私も詳しいことは言えないの。もう少しの間だけ待ってくれるかな？」

怪訝そうな表情を見せる菊池に、手を合わせて申し訳なさそうにするなのは。そんななのはに、菊池は気にすることはないと言っておいた。菊池も、無理を言っただけなのは達に負担をかけるつもりは無い。ここは、おとなしくフォワード達の訓練の様子を見ることにした。

ふとここで、菊池はスバルに指示を出しているティアナを見る。菊池が相談に乗って以来、ふっ切った様子で、晴れ晴れとした表情をしていたのを思い出す。

（悩みをふっ切れたようだな。その調子だ、ティアナ・・・）

菊池が一人、満足そうに頷いていると、なのはがフォワード達に集合をかける声が聞こえてくる。

「どうやら、訓練が終了したようだ。それにしても、いったい何が行われるというのだろうか？」

「とりあえず、午前中の訓練はここまで！午後からも訓練あるから、それまでゆっくりと体を休めておいてね」

「「「はい！！」」」

フォワード達は元気な返事をなのはに返すと、菊池がいる方へ歩いてくる。その4人の中で、真っ先にスバルが菊池に気付き、話しかけて来た。

「あっ、菊池さん！」

「スバルか。どうだ、最近の調子は？」

「それが最近、結構調子良いんですよ。今日は、なのはさんに褒められました」

心底嬉しそうに笑顔を見せて、そう話すスバル。菊池も、スバルに釣られるように自然と笑顔になる。やがて、菊池とスバルが話しているところに、やや遅れてやって来たティアナ、エリオ、キャロも交えて、談笑していた。

そこに、フェイトが現れた。フェイトはライトニング隊の隊長であり、エリオやキャロの上司でもある。執務官の仕事が忙しいらしく、訓練に参加することは中々難しいようだ。それでも、時間に余

裕があれば、こうして訓練場にやって来て、フォワード達に教導することがある。別に何ら不思議なことは無いのだが、菊池は何か違和感を覚えずにはいられなかった。これと言った根拠は無いが、勘がそう言っているのだ。

フェイトは、なのはに声をかけ、一言二言話すと菊池達の方へとやって来た。そして、フォワード達の中に菊池がいるのを確認すると、こう言った。

「さあ、菊池くん。模擬戦、始めようか」

「は？」

思わず目を点にして、フェイトを見る。冗談かと思ったが、フェイトは冗談など言ったことはない、その考えを否定する。

その証に、フェイトはバリアジャケットを着用し、手にはバルデッシュを持って、誰もが見惚れる笑顔で菊池を見ている。

もし、フェイトの言葉が本当なら、菊池にとってフェイトと模擬戦をするということは、あまり嬉しいものではない。できることから辞退したいが、フェイトの様子から判断すると、それも叶わないようである。

ところで、何故菊池がフェイトとの模擬戦をやりたいのかというと、菊池は一度、フェイトのプラズマスマッシャーの直撃を受けて、D・ホイールから投げ出されたというトラウマがあるからだ。

それ以来、何となくフェイトにはちよつとした苦手意識がある。

菊池の気持ちを察してか、フェイトはできるだけ手加減はすると言う。だが、それでも一抹の不安が残ってしまう。いくら、強力なシンクロモンスターを出せることができて、フェイトに通用するかどうかは分からないからである。

菊池が不安に思っていると、傍にいたフォワード達が励ましの声を掛けてくれた。

「大丈夫ですよ、菊池さんなら」

「隊長達を相手に互角に戦える力があるんですから、自信を持って下さい」

「菊池さんのカッコいいところ、僕達に見せて下さい」

「私とフリードも応援してますから、頑張ってください」

スバル、ティアナ、エリオ、キャロが期待の目で、そう言った。

さすがにここまで言われれば、菊池も断りきれない。仕方ないと言った風に溜息を吐くと、今か今かと菊池の返答を待っているフェイトやフォワード達に言った。

「まったく……。お前達には敵わないなあ」

「ふふっ。そう言いながらも菊池くん、何だが嬉しそうだよ」

「ここまで期待されてるんだ。断ることなんてできない」

「じゃあ、決まりだね。いきなりで悪いけど、準備してくれる？」

「ああ。少し待ってくれ」

10分程経った後、菊池がD・ホイールに乗って訓練場までやって来た。フェイトはすでに訓練場の中央に立っている。

フォワード達は本来、休憩していても良いのだが、菊池とフェイトとの模擬戦に興味があるみたいで、4人全員が離れた所から観戦するようだ。

「あっ、やっと来た。ちょっと遅かったね」

「すまない。故障していたところを直していたら、予想以上に時間が掛かってしまったんだ」

「ううん、そういうことなら良いよ。それじゃ、なのは。そろそろ始めても良いよね？」

フェイトが、今回の模擬戦の審判役を引き受けてくれたのはに尋ねる。

「うん。菊池くんも準備出来てるみたいだし、模擬戦始めようか。フェイトちゃん、夢中になって菊池くんに怪我させないように気をつけてね」

「大丈夫だよ。私だって加減ぐらいできるよ」

フェイトは、なのはの注意に少し頬を膨らませながら、配置にく。

（菊池くんなら問題ないと思うけど、ちょっと心配だなあ・・・。

なのはの心配を余所に、模擬戦は始まった。

「行くよ、菊池くん！」

「来い、フェイト！デュエルだ！！」

菊池 LP 8000 SPC 0

「俺のターン！」

菊池はD・ホイールを勢いよく発進させると、デッキからカードをドロースする。

（この手札・・・悪くはないが、一度劣勢になれば立て直しは難しいだろう。ならば、速攻で決着をつけるしかない！）

「俺は、カードを1枚伏せる。そして、伏せカードの【リミッター・ブレイク】を破壊することにより、手札から【カード・ブレイカー】を特殊召喚！」

【カード・ブレイカー】攻100

「さらに、【リミッター・ブレイク】が墓地に送られたことにより、デッキから【スピード・ウォリアー】を特殊召喚する！」

【スピード・ウォリアー】攻900

菊池の場に、2体のモンスターが並ぶ。だが、これで終わりではない。フェイトも、それを分かっている。そのため、鋭い視線を菊池に向けている。

「そして俺は、【ジャンク・シンクロン】を召喚！」

【ジャンク・シンクロン】攻1300

【ジャンク・シンクロン】の登場に、なのは達の表情に驚きの色が浮かぶ。

「あの召喚獣は・・・？」

「まさか、シンクロ召喚を！？」

スバルとティアナが思わず声を上げる。エリオとキャロは一度、菊池と戦った時のことを思い出す。

その時にも、菊池が【ジャンク・シンクロン】を召喚していたことを思い出した。

「まだ始まって間もないのに・・・」

「菊池さん・・・」

エリオとキャロは、菊池が本気でフェイトと戦うつもりでいることを悟り、菊池の身を心配する。

だが、フォワード達の心配などお構いなしかのように、模擬戦は進んでいく。

「俺は、レベル2の【カード・ブレイカー】と、レベル2の【スピード・ウォリアー】に、レベル3の【ジャンク・シンクロン】をチューニング！」

菊池の声に反応し、【ジャンク・シンクロン】と、【スピード・ウォリアー】、【カード・ブレイカー】が空高く舞い上がる。

【ジャンク・シンクロン】が3つの輪となり、【スピード・ウォリアー】と【カード・ブレイカー】が、その中を通る。

【スピード・ウォリアー】と【カード・ブレイカー】の身体が透き通り、それぞれ2つの光となる。

「集いし怒りが忘我の戦士に鬼神を宿す。光差す道となれ！シンクロ召喚！吠えろ、【ジャンク・バーサーカー】！！！」

【ジャンク・バーサーカー】攻2700

一筋の光の中から現れたのは、右手に大きな鎌を持ち、まるでスパーロボットのようなモンスターだった。

「【ジャンク・バーサーカー】！？なんという気迫・・・！」

【ジャンク・バーサーカー】から発せられる気迫に、思わずたじろつくフェイト。自然とバルディッシュを持つ手に力が入る。

「【ジャンク・バーサーカー】の効果発動！自分の墓地に存在する『ジャンク』と名のついたモンスター1体をゲームから除外し、相手フィールド上に存在するモンスター1体の攻撃力を、除外したモンスターの攻撃力分ダウンさせる！」

菊池は、墓地から【ジャンク・シンクロン】を除外した。すると、【ジャンク・バーサーカー】からビームが放たれ、それは真つすぐフェイトに向かっていく。

フェイトは慌てて避けようとしたが、間に合わなかった。

結果的にビームの直撃を受けることになってしまう。

「きゃあ！な、何これ！？」

ビームの直撃を受けたフェイトは、すぐに違和感を覚える。直撃した時、力が抜けた感覚が体に走ったのだ。

（い、今のは一体・・・）

フェイトが未知の感覚に戸惑っていると、少し前を走っている菊池が声をかけてきた。

「どうしたフェイト。お前の実力はその程度か？」

こう言われてはフェイトも黙ってはいない。キツと菊池を見つめつつ、態勢を立て直すと、バルディッシュを構える。

「まだまだこれからだよ、菊池くん。もしかして、もう勝ったつもり？」

少しばかりの強がりも含めたフェイトの言葉に、菊池はフツと不敵に笑う。

「いや、お前がこの程度のことでは負けるはずはない。だが、【ジヤンク・バーサーカー】の効果だけでここまで態勢を崩すとはな。もしかして油断していたのか？」

「まさか。これぐらいのことは想定内だよ」

フェイトはそう言ったが、内心では焦りを覚えていた。やはり、なのはの言う通りだと思わざるを得ない。

なのはは、訓練や模擬戦で菊池と戦うことがあるのだが、いつでも油断はできないと言う。昔からの付き合いもあって、フェイトはそう言った話をなのはから聞くことが多かった。

やがて話を聞いているうちに、菊池との模擬戦をやってみたいと思うようになった。これまで、色んな相手と戦ってきたが、菊池の

ような、多種多様な召喚獣を操る相手とはあまり戦ったことはない。

それに、なのはは隠しているのか、そうでないのかはよく分らないが、少なくともフェイトは、なのはが最近、菊池に好意を寄せていることを知っている。いくら菊池が機動六課に対し協力的であっても、なのはが菊池に好意を寄せる理由にはならないはずだ。おそらく2人の間に何かあったのは間違いないとみて良いだろう。

なのはも、フェイトも、無条件で相手の全てを信頼できるような年齢では既に無い。管理局に入局してからの10年という月日は、なのはやフェイトが無垢な少女のままにいる事を許さなかったのだ。相手が厚意を見せてくれたとしても、手放しで受け入れることはできない。

なのに、なのはは菊池に心を許そうとしている。フェイトは言葉ではなく、模擬戦で確かめたかった。なのはの親友として、同じ部隊の仲間として、今の菊池の気持ち、機動六課に対する思い、菊池が見せる、自分達への献身的な行為の真意を。

もし、菊池が自分達を騙しているというのなら、僅かでも必ず負の感情を見せたり、ボロを出したりするはずだ。

「予想ができていたということか？俺にはそう思えないが」

菊池の言葉に対し、結構鋭いところを突いてくる、とフェイトは思う。

菊池は、D・ホイールを運転しながら、器用にこちらを注視している。まるで、フェイトが言ったことが、嘘か本当かどうか確かめるかのように。

ここで本心を悟られるわけにはいかない。フェイトは嘘ではないというふうに、菊池から目を逸らさず、真っすぐに見つめ返す。

「まあいい。ならば、本当かどうか確かめさせてもらおうか。俺は【ジャンク・バーサーカー】で攻撃！」

菊池が攻撃を宣言すると、【ジャンク・バーサーカー】は手に持っている大きな鎌を振り被りながら、フェイトに突撃していく。

先程とは違い、迎撃の準備は出来ていたので、持ち前の速さで【ジャンク・バーサーカー】の攻撃をかわし、少し距離を取る。

「なるほど。なのはとはまた違った戦い方をするみたいだな。面白い」

菊池は【ジャンク・バーサーカー】が攻撃を終えて戻って来たのを確認すると、手に2枚のカードを持つ。

「俺はカードを2枚伏せて、ターンエンドだ」

菊池 LP 8000 SP C 0↓1

フェイトは何とか【ジャンク・バーサーカー】の攻撃をかわしたものの、冷や汗をかいていた。もう少し反応が遅れていれば、勝手に攻撃を喰らっただろう。そう思うと、思わず身がすくむ思いだ。

（なのはが苦戦するのも無理もない。菊池くんは単に力で押して

くるわけじゃない。正面から相手とぶつかって、相手と向き合おうとしてる……。おまけに、菊池くんからは普段とは違う何かを感じる。決して侮れない……。だけどっ！)

「私だって負けられない！」

予想外の菊池の勢いに、フェイトは押され気味だったが、ここからようやく反撃に転じていくことになる。

第二十五話 「フェイトとの模擬戦【前編】」（後書き）

作者「今回は、フェイトさんが主役かな？」

菊池「この作品では、一応主人公の俺が主役だし……。原作キャラだったら、そういうことになるな」

作者「【ジャンク・バーサーカー】って、つい最近アニメで出たカードだよな？ 良いのかな、出しちゃっても」

菊池「大丈夫だろう。効果も微妙だしな……」

作者「使っている本人が言う台詞か……？」

第二十六話 「フェイトとの模擬戦【後編】」 (前書き)

いよいよ、フェイトと菊池の模擬戦に決着が着きます。

勝つのはフェイトか、それとも菊池なのか？

第二十六話 「フェイトとの模擬戦【後編】」 始まります。

第二十六話 「フェイトとの模擬戦【後編】」

模擬戦が始まってから、もうすぐ20分経つ。

今のところ、お互いに大きな動きは見られない。フェイトは菊池を牽制しつつ、攻撃を仕掛けようとしているのだが、何が起るかは分からない。

ここは、菊池の油断を突いて攻撃を仕掛けていくのがベストだろうと考え、菊池の動きを注視する。

「俺のターン！」

菊池 LP 8000 SPC 1↓2

菊池はドローしながら、攻撃を仕掛けてこないフェイトを怪訝に思っていた。

（何故、攻撃を仕掛けてこない？何か策があるのでしょうか？）

「俺は再び【ジャンク・バーサーカー】で攻撃！」

菊池の声と共に、【ジャンク・バーサーカー】が大きな鎌を振り被りながらフェイトに迫っていく。

フェイトは【ジャンク・バーサーカー】が迫って来るのを確認すると、射撃魔法を発動する。

『フォトンランサー』

ある程度の距離から放たれた槍のような魔力弾。連射を行うことにより、たくさんの魔力弾が【ジャンク・バーサーカー】に向かい、当たると爆発を起こした。

「これなら・・・！」

当たった感じはあるので、もしかしたら倒せたかもしれない。

そう思ったフェイトは、僅かに安堵の表情を浮かべるが、それが間違いであることに気付く。

「えっ？うそっ！」

爆発で起きた煙の中から、【ジャンク・バーサーカー】が現れたのだ。

咄嗟のことに、体がついていかない。このままではやられると思ったが、バルディッシュが反応し、自動詠唱による防御魔法を発動した。

『ディフェンサー』

あくまでも、攻撃を受け止めるというよりは、反らすための防御魔法であるが、何もせずに直撃を受けるよりは遥かにましである。

だが、機動力に優れ、「防ぐ」ことよりも「かわす」ことに特化しているフェイトは、防御魔法は苦手であり、このディフェンサー

も、バルディッシュの自動詠唱による最低限の防御でしかない。

それでは、【ジャンク・バーサーカー】の攻撃を防ぐことはできなかった。

【ジャンク・バーサーカー】の振り被った鎌が、膜状のバリアを破壊し、大きな爆発が起きた。

フェイトは爆発の衝撃を受けて、大きく後ろへと弾き飛ばされてしまう。

「くっ・・・強い・・・！」

何とか持ち直したものの、フェイトは自らの状況が不利であることを思い知った。

（これが菊池くんの強さ・・・）

このまま様子見を続けることは危険だとフェイトは考え、まずは【ジャンク・バーサーカー】を倒すことを目標に動き始めた。

「フェイト、何を躊躇っている？そんな気の抜けたような攻撃で俺に勝てると思っているのか！？」

珍しく、本当に珍しく菊池が怒号を発する。さっきとは違う、ただならぬ菊池の様子に、フェイトは思わず身構える。

「お前の強さはその程度のものではないはずだ。遠慮は要らない。全力でぶつかって来い！俺のターン！」

菊池 LP8000 SPC 2↓3

「俺は手札から【Sp—エンジェル・バトン】を発動！自分のスピードカウンターが2つ以上ある時、デッキからカードを2枚ドロ―し、その後、手札から1枚墓地に送る！」

ひいたカードを確認した後、手札の1枚を墓地に送った。

「バトル！俺は【ジャンク・バーサーカー】で攻撃！！」

本日の模擬戦での【ジャンク・バーサーカー】の3度目の攻撃がフェイトを襲う。

だが、フェイトの目に先程まであった迷いの色はない。

「行くよ、バルディッシュ！」

『アークセイバー』

狙いを【ジャンク・バーサーカー】に定めると、フェイトはバルディッシュの光刃を発射する。

アークセイバーは、先程のフotonランサーと比べれば、弾速はあまり速くない。

だが、その代わりに軌道が変則的であり、防御や回避がしにくい攻撃である。

唸りを上げて飛ぶ光刃は、狙いはずすことなく【ジャンク・バーサーカー】に向かっていく。

【ジャンク・バーサーカー】は回避するのではなく、手に持っている大きな鎌ではじき返そうとしたが、光刃の威力が大きかったらしく、鎌は柄の部分で碎け、光刃は【ジャンク・バーサーカー】の胴体を真つ二つに引き裂いた。

「ぐあああああ!!」

菊池 LP8000↓5300 SPC 3

「ぐう・・・なんて強さだ」

菊池は【ジャンク・バーサーカー】が破壊された時に発生した、爆発による爆風にD・ホイールが巻き込まれないように運転しながら、思わぬ反撃に顔を顰める。

（【ジャンク・バーサーカー】の効果で、フェイトの攻撃力を下げていたのに、こうも簡単に攻撃力2700の【ジャンク・バーサーカー】を破壊するとはな。さすがだ・・・。）

「そうだ。その意気だ、フェイト!」

菊池は興奮していた。フェイトの秘めた闘志に火がついたのを感じ、菊池も闘志を燃やしていた。

（この感じは久しぶりだ……。いつの日か俺は、純粹に勝負を

楽しむことを忘れてしまっていたんだろうな)

菊池は口の端を吊り上げ、ニヤリと笑う。モンスターが破壊されたにも関わらず、菊池が笑っている姿を見て、観戦しているフォワード達や、模擬戦を見守っているのはは驚きの色を隠せない。

「菊池くん・・・笑ってる。どうして・・・？」

「召喚獣を倒されて不利になったのに、笑うなんて・・・」

「もしかして菊池さん、模擬戦を楽しんでるんじゃないか？」

ティアナとエリオは、それぞれ自分の思いを口にする。

一方、スバルとキャロは、呆然とフェイトと菊池の模擬戦を見ている。

既に開始から約30分経過しており、菊池とフェイトの模擬戦は最終局面を迎えようとしていた。

「フェイト、どうやら本気になったみたいだな。その調子で向かって来い！俺はここで永続罫、【狂食召喚ーグール・サモナー】を発動する！」

「えっ!？」

このタイミングで、まさかの伏せカードの発動に驚くフェイト。どうやら、菊池の場の伏せカードのことは完全に忘れていたらしい。

「【狂食召喚ーグール・サモナー】は、このターン破壊され墓地

へ送られたシンクロモンスター1体を自分フィールド上に特殊召喚し、このカードを装備する。【ジャンク・バーサーカー】を特殊召喚！！」

【ジャンク・バーサーカー】攻2700

先程破壊された【ジャンク・バーサーカー】が現れ、フェイトは咄嗟にバルディッシュを構え直す。

「あの召喚獣を倒さないと、菊池くんは更なるシンクロ召喚を狙ってくるはず……。それなら、そうなる前に倒すしかない！」

フェイトはギュツとバルディッシュを握り締める。

「バルディッシュ、ハーケンフォーム」

『ハーケンフォーム』

フェイトの声と共に、バルディッシュの形が変化した。

「何っ!？」

「菊池くん、これ以上のシンクロ召喚はさせないよ！ハーケンセイバー!！」

フェイトは、【ジャンク・バーサーカー】に対し、金色に光る追尾刃を飛ばした。

「俺の策を読んでいたか……。さすがだな、フェイト。だが俺は、さらにその先に行く！墓地の【ガード・マスター】の効果を発

動！このカードが自分の墓地にある時、ゲームから除外する事で、攻撃対象になったモンスター1体を守備表示にし、対象になったモンスターは、このターン戦闘では破壊されない！」

【ジャンク・バーサーカー】 攻2700↓守1800

追尾してくるハーケンセイバーを振り切ることは困難である。

そのため、【ジャンク・バーサーカー】は手に持っている大きな鎌を使い、追尾刃をはじき返した。

「はじかれた!？」

倒せるものだと思っていたフェイトは、ハーケンセイバーがはじかれたことに驚愕の声を漏らした。

（なかなか良い読みだが、あと一步及ばずだな。それにしても、俺を相手にここまで闘志を見せてくるとは面白い。）

菊池は、自分が考えていた策を見抜き、戦況をひっくり返そうとしたフェイトに思わず感心する。

「俺のターン！」

菊池 LP5300 SPC 3↓4

「俺は【ターボ・シンクロン】を召喚！」

【ターボ・シンクロン】攻100

「レベル7の【ジャンク・バーサーカー】に、レベル1の【ターボ・シンクロン】をチューニング！」

菊池が叫ぶと、2体のモンスターが空に舞い上がる。

「集いし願いが新たに輝く星となる。光差す道となれ！シンクロ召喚！飛翔せよ、【スターダスト・ドラゴン】！！！」

7+1=8

【スターダスト・ドラゴン】攻2500

「とうとう現れたね、【スターダスト・ドラゴン】・・・！」

フェイトが【スターダスト・ドラゴン】の登場に、不敵な笑みを浮かべる。彼女も菊池と同様に、模擬戦を楽しんでいた。

「まだだ！永続罫、【エンジェル・リフト】！このカードは、自分の墓地に存在するレベル2以下のモンスター1体を選択し、特殊召喚する！蘇れ、【ターボ・シンクロン】！」

【ターボ・シンクロン】攻100

「さらに、自分フィールド上にチューナーモンスターが存在する時、【ブースト・ウォリアー】は、手札から守備表示で特殊召喚する事ができる！」

【ブースト・ウォリアー】守200

「レベル1の【ブースト・ウォリアー】と、レベル1の【ターボ・シンクロン】をチューニング！」

菊池の声と共に、2体のモンスターが空高く舞い上がる。

【ターボ・シンクロン】が1つの輪となり、【ブースト・ウォリアー】がその中を通る。【ブースト・ウォリアー】の身体が透き通り、1つの光となる。

「集いし願いが新たな速度の地平へ誘う。いざな光差す道となれ！シンクロ召喚！希望の力、シンクロチューナー、【フォーミュラ・シンクロン】！」

1+1=2

【フォーミュラ・シンクロン】攻200

F1のレーシングカーのような姿をしたモンスターが、自身についているタイヤを回転させながら現れる。

「シンクロチューナーって・・・まさか！」

フェイトは【フォーミュラ・シンクロン】を見て、模擬戦中に危険行動をとったティアナを撃墜させようとしたのはと、それを阻止しようとした菊池との模擬戦で、菊池が初めて召喚した時のことを思い出したらしい。観戦しているのは達も同様のようだ。

「この流れは・・・あの召喚獣への布石・・・！」

なのはが先の展開を予想し、驚きの声を漏らす。

フォワード達も例外ではなく、驚きを隠せない。

「えっ？菊池さん、まだ何かを召喚するつもり！？」

「あんた、見たことあるはずでしょ。もしかして忘れたの？」

「うーん、そんなこともあったようなく・・・、なかったような・・・」

前にも見たことがあるはずのスバルは、どうやらはつきりとは覚えてないようだ。

菊池が初めて召喚してからそんなに間が経っておらず、菊池と街に出かけた休日の時にも、ティアナと共に見ていたのにも関わらず、もう忘れかけていることに、ティアナが呆れて溜息を吐く。

「それぐらい覚えておきなさいよ。菊池さんが聞いたら、落ち込むわよ」

「そ、そんなこと言われても・・・。だって訓練の時には出してくれないし・・・」

スバルからいつもの明るさがなくなっていくのを見て、エリオとキャロがフォローに回る。

「まあまあ、ティアさん。スバルさんの言うことにも一理ありますし・・・」

「それにしても、あの召喚獣が見られると思うと、何だかわくわくします」

若干1名——キャロだけが、別の意味でフォローを間違っているような気もするが・・・そこは目をつぶっておこう。

「【フォーミュラ・シンクロン】の効果発動！このカードがシンクロ召喚に成功した時、自分のデッキからカードを1枚ドロースる事ができる！」

そう言って菊池は、デッキを一度見て、そっと手を置く。

「俺のデュエルは、仲間達との絆と共にある！」

菊池は、自らの思いを言いながらデッキからカードを1枚ドロース、ドロースしたカードを確認すると手札に加えた。

「本当にやるの！？菊池くん！」

焦りの色を見せながら、なのはが叫ぶ。

それに対し、菊池は言葉ではなく行動によって示す。

菊池がD・ホイールのスピードを上げ始めると、菊池の頭上を飛ぶ【スターダスト・ドラゴン】が咆哮する。

「俺はレベル8、シンクロモンスター、【スターダスト・ドラゴン】に、レベル2、シンクロチューナー、【フォーミュラ・シンクロン】をチューニング！」

【フォーミュラ・シンクロン】が2つの輪になり、菊池と【スターダスト・ドラゴン】はその輪を潜る。

すると、周りの景色が緑色に染まっていく。

（フェイトの思い。それに答えるためには・・・！）

「集いし夢の結晶が新たな進化の扉を開く。光差す道となれ！」

通常のシンクロ召喚とは一線を越えたシンクロ召喚、その名もアキセルシンクロ。菊池はすっかり自分の力として使うことができるようになっていた。

「アキセルシンクロ！！！」

菊池が手に持っている、カードイラスト、カード名、カードテキスト、属性などが何も書かれていない、シンクロモンスターのカードは、菊池が“アキセルシンクロ”と叫ぶと、絵柄やテキストが浮かび上がる。

「消えた！？」

フェイトは、つい先程まで自分の後ろを走っていたはずの菊池が、突然姿を消したことに驚き、慌てる。

どこにいいのかと、周りを見渡した時、後方から再び菊池が現れた。

「生来せよ！^{しやうらい}【シューティング・スター・ドラゴン】！！！」

【シューティング・スター・ドラゴン】 攻3300

「【シューティング・スター・ドラゴン】か……。これが菊池くんの切り札……」

「フェイト！俺の全力を見せてやる。俺は【シューティング・スター・ドラゴン】の効果を発動！自分のデッキの上からカードを5枚確認し、その中のチューナーの数だけ、攻撃する事ができる！」

そう言っ、菊池はデッキから5枚のカードを確認する。すると、5枚のうち、なんと5枚全てがチューナーモンスターだった。

「俺がひいたチューナーの数は5体！よって、5回の攻撃が可能となる！」

なのはの時よりも攻撃できる回数が多い。おまけになのはは【シューティング・スター・ドラゴン】の攻撃を受けることができるだけの防御力を持っているが、フェイトにはない。

1、2回の攻撃なら、持ち前の機動力を生かしてかわせただろうが、5回では厳しいものがある。フェイトは冷や汗をかいていた。

「5回の攻撃！？そんなんっ……！」

「バトル！俺は【シューティング・スター・ドラゴン】で——」

「そこまで……！」

なのはの凜とした声が、菊池の攻撃宣言を遮る。

「何っ!？」

「なのは!？」

「もう勝負はついたも同然だよ。これ以上2人が戦うことは、私が認めない」

なのははバリアジャケットを着用し、手には愛機のレイジングハートを持っている。

その状態で、フェイトと【シューティング・スター・ドラゴン】の間に割って入ることにより、模擬戦の終了を伝える。

「――仕方ない。なのはがそう言うのなら・・・」

菊池は、フェイトとの勝負の決着をつけられなかったことに心残りがあったが、なのはの言い分はもつともだ。デュエルモードを解除し、ドライブモードに移行した後、D・ホイールを止める。

訓練場から【シューティング・スター・ドラゴン】の姿が消え、なのはとフェイトが空からやって来る。フェイトも菊池との勝負が楽しかったらしく、中断してしまったことを残念に思っているようだ。

「良い模擬戦だったね。また時間があつたらやってくれるかな？」

D・ホイールから降り、ヘルメットを脱いだ菊池に、フェイトが声をかけて来た。

「ああ、俺も楽しかった。またやろう」

菊池はそう言って、フェイトと握手する。惜しくも決着はつかなかったが、菊池の中でフェイトに対する苦手意識が無くなり、印象が大きく変わった。

握手をした後、菊池はフォワード達に囲まれ、質問攻めに遭っていた。集まって来た彼女らを無下にすることもできず、戸惑っている菊池をなのはがフォローしている。

その様子を遠巻きに見つめながら、フェイトは思った。

（模擬戦で確かめたかった菊池くんの思いとかは、結局よく分からなかったけど、菊池くんは私達を騙したりするような人じゃないと思う。なんだかんだ言って、私との模擬戦を引き受けてくれたし、私が攻撃を躊躇っていた時も、ちゃんと叱ってくれた。なのはが好きになるのも分かる気がする。今まではよく分からない人だと思ってたけど、今なら菊池くんのこと、私の――ううん、私達の大切な仲間だって胸を張って言えるよ。ありがとう、菊池くん）

なのはのフォローも手伝って、フォワード達の質問に答えている菊池を見て、フェイトは心の中でそっと感謝の意を表すのだった。

第二十六話 「フェイトとの模擬戦【後編】」（後書き）

作者「フェイトさん、なかなかの策士だったな」

菊池「確かに。【狂食召喚ーグール・サモナー】で、【ジャンク・バーサーカー】を特殊召喚しただけなのに、俺がシンクロ召喚を狙ってることに気づくなんて……。俺の戦い方をよく見てるってことだろうな」

作者「恐るべき状況判断能力だ。さすが執務官って言ったところか」

菊池「そういえば作者さんよ。読者の皆さんに、何か言うことがあったんじゃないのか？」

作者「そうそう！実は、私の学校ではもうすぐ期末テストがあり、そちらの方に集中するため、3月の初めあたりまで『一時休載』となります。色々ご不満等、あると思いますが、ご了承ください」

菊池「読者の皆さんとは、3月までは会えなくなるということか。寂しくなるな……」

作者「必ずまた戻ってきますので、それまでの間、宜しくお願いします」

菊池「それではまた、3月の初めあたりにお会いしましょう」

第二十七話 「【ジャンク・バーサーカー】の強さ」(前書き)

約一か月ぶりの投稿になります。

皆さん、長らくお待たせして申し訳ありませんでした。

なかなか、先の展開に進むことが無い話が続きます。

もう少ししたら、進むことができると思いますので、それまでお待ち下さい。

それでは、第二十七話 「【ジャンク・バーサーカー】の強さ」 始めます。

第二十七話 「【ジャンク・バーサーカー】の強さ」

フェイトとの模擬戦が終了し、菊池達は食堂で夕食をとっていた。

菊池の目の前には、山盛りのパスタやサラダがあり、それをスバルとエリオがすごい勢いで食べている。

初めて見た時は、腰を抜かすほど驚いた菊池だったが、今では当たり前の光景として捉えていた。

「それにしても・・・菊池さんって私達の予想を越えたことばかりしてくれるわよね。まあ、慣れちゃったけど」

食事中、ティアナが菊池に目を向けつつ、そんなことを口にした。

「そうか？俺にとっては普通なんだがな・・・」

「フェイトさん相手に、互角以上の戦いができるフルバックはそうそういないと思いますよ、菊池さん」

キャロの言う通り、現場の最前線で活躍しているフェイトを相手に、後方で前線を支援するフルバックが張りあえるなど、通常考えられないことだ。

菊池は異世界から来たとはいえ、戦い方はフルバックそのもの。

模擬戦であったとはいえ、フェイトとうまく立ち回ることができていたのは、それだけ菊池が強いという、何よりの証だった。

「そういえば菊池さん、今日の模擬戦で見たことない召喚獣を召喚してましたよね？えっと、【ジャンク・・・】」

模擬戦終了直後に、フォワード達から質問がたくさんあったが、どうやらまだ続きがあるらしい。

あの時は【シューティング・スター・ドラゴン】のことや、基地で発動した【ガード・マスター】のことに質問が集中していたため、【ジャンク・バーサーカー】のことにはあまり深く触れなかった。

当分フォワード達からは解放されないだろうなと思いつつも、菊池はエリオが言わんとすることに気付き、先回りする。

「【ジャンク・バーサーカー】のことか？」

「はい、それです！大きな鎌を持って、なんか・・・強そうでした。フェイトさんのフォトンランサーを受けたはずなのに、ダメージを受けてた様子がなかったものですから」

エリオの言葉になるほど、と菊池は思った。

あの時は目の前のことに集中していて気付かなかったが、言われてみればそうだった。実際のところ、フォトンランサーを受けても【ジャンク・バーサーカー】が怯まなかったのは、自身の効果でフェイトの攻撃力を下げていたからである。つまり、フォトンランサーの威力が通常よりも落ちていたからだ。

「確かにエリオの言う通り、フェイトのフォトンランサーを受けても【ジャンク・バーサーカー】はやられなかった。おそらくそれは【ジャンク・バーサーカー】の効果が原因だろう」

「効果……ですか？」

怪訝そうに聞いてきたキャロに対し、菊池は頷く。

「【ジャンク・バーサーカー】の効果は2つある。1つ目は、自分の墓地に存在する『ジャンク』と名のついたモンスター1体をゲームから除外し、相手フィールド上に存在するモンスター1体の攻撃力を、除外したモンスターの攻撃力分ダウンさせるという効果だ」

「それって……」

食べる手を止め、思わず声を上げたスバルを一瞥し、菊池は続ける。

「俺はあの時、墓地にあった【ジャンク・シンクロン】を除外した。つまり、フェイトのパワーが【ジャンク・シンクロン】の攻撃力分下がったということだ。【ジャンク・シンクロン】の攻撃力は1300だが……それにしても、あれほどまでにパワーが落ちるものなのか？俺もまさか、あそこまでフェイトが苦戦するとは思わなかったからな」

「じ、じゃあ2つ目の効果は何ですか？」

ティアナが少し慌てた様子で尋ねて来た。どうやら、ティアナが知りたかったのは1つ目ではなく、2つ目の効果のようだ。まあ、1つ目の効果は模擬戦の時に明かしているため、当然と言えば当然か。

菊池はティアナを手で軽く制止つつ、効果を説明する。

「まあ、そう焦るな。2つ目の効果は、守備表示モンスターを攻撃

した時、ダメージ計算を行わずそのモンスターを破壊するというものだ」

「『ダメージ計算?』」

聞き慣れない単語に、スバルとキャロが首を傾げる。

そんな2人を含めたフォワード達に、菊池は説明する。

「そうだな、分かりやすく説明するとするなら……。モンスター同士で戦闘を行う際、攻撃力や守備力というステータスが重要になってくる。例えば、攻撃力2700の【ジャンク・バーサーカー】が攻撃力2500の【スターダスト・ドラゴン】を攻撃した時、どちらのモンスターが勝つか分かるか?」

そう言って、菊池はフォワード達に尋ねてみる。

すぐに分かるはずなど無いことは承知の上だが、ある程度のことは知っておいてほしい。そうすれば、模擬戦や現場に出た時に連携がとれる。

「あ、あの……。菊池さん、ちょっと質問良いですか?」

考えているフォワード達の中から、エリオが小さく手を挙げる。

菊池は手でどうぞ、と促すと、エリオは言った。

「さっきの菊池さんの質問なんですけど……。昔、菊池さんはカードの説明をしてくれたことがあって、その時に表示形式がどうか、言ってた覚えがあるんです。確か表示形式には、『攻撃表示』と『守備表示』があるんですよね?」

「そうだ。表示形式とは、モンスターの戦闘における姿勢を意味するものだ。表示形式によってカードの置く向きが違ってくる。攻撃表示の時はカードを縦に、守備表示の時はカードを横に置くんだ」
菊池がエリオの説明に補足する。

「でも、さっきの菊池さんの質問じゃあ、表示形式が分からないですよ」

エリオの指摘を受け、菊池は思わずハツとなった。

菊池は例を出して分かりやすく説明しようとしていたが、表示形式が分からなければ、肝心のダメージ計算の話に繋がらない。

誤魔化すように頭を掻きながら、菊池は訂正し直す。

「そうだったな・・・すまない、訂正しよう。攻撃表示の、攻撃力2700の【ジャンク・バーサーカー】が、攻撃表示でいる攻撃力2500の【スターダスト・ドラゴン】を攻撃した時、どちらのモンスターが勝つか分かるか？」

菊池はデッキホルダーから、【ジャンク・バーサーカー】と【スターダスト・ドラゴン】を取り出し、それぞれ縦に置いて向き合うような形で机の上に置いた。

フォワード達は、机に置かれたカードを見ながら考える。

しばしの黙考の後、ティアナが口を開いた。

「攻撃表示ってことは、重要なのはどれだけ攻撃する力があるかつ

てことだから……。勝つのは当然、攻撃力2700の方じゃ……」

「その通りだ。あまり深く考える必要は無い。攻撃表示の時には攻撃力を、守備表示の時には守備力を見れば良いんだ」

納得と言ったふうにフォワード達は頷く。

「じゃあ、本題に入るぞ。今度は攻撃表示の【ジャンク・バーサーカー】が、守備表示の【シールド・ウィング】を攻撃した時はどうなる？ちなみに、【シールド・ウィング】は1ターンに2度まで、戦闘では破壊されない効果を持っている」

菊池は縦向きに置かれていた【スターダスト・ドラゴン】のカードをデッキホルダーに戻し、代わりに【シールド・ウィング】のカードを取り出して、横向きに置く。

菊池がカードの出し入れを行っている間にも、質問に対してフォワード達は色々話し合っている。どうやら、数値だけを見れば【ジャンク・バーサーカー】のほうが高いのだが、【シールド・ウィング】には戦闘破壊耐性があることから、すんなりと答えが出にくいらしい。

「【シールド・ウィング】の守備力は……900よね。なら、攻撃表示でいる【ジャンク・バーサーカー】の方は2700だから、当然勝つのは【ジャンク・バーサーカー】……。でも、【シールド・ウィング】は戦闘しても破壊されないし……」

ティアナを中心に考えているようだが、どうやら、少し質問が難しかったようだ。一生懸命答えを出そうとしているフォワード達に對

して、申し訳ないがと思いながらも菊池は答えを言うことにした。

「数値だけで見れば、【ジャンク・バーサーカー】が勝つだろう。だが、【シールド・ウイング】には1ターンに2度まで、戦闘での破壊を防ぐ効果があるから、いくら攻撃力が高くても【ジャンク・バーサーカー】では倒せない・・・と普通はそう考えるだろう。だが、【ジャンク・バーサーカー】は守備表示モンスターを攻撃する時、守備力に関係無くそのモンスターを倒すことができるんだ。つまり、戦闘で破壊するのではなく、【ジャンク・バーサーカー】の効果で破壊することになる」

「じゃあ、【シールド・ウイング】の効果に関係なく、【シールド・ウイング】を倒せるってことですか？」

【ジャンク・バーサーカー】のカードを手に取り、スバルはそう尋ねる。

それに対し、菊池は小さく首を縦に振ることで、肯定の意を示す。

「少し駆け足で説明したから分かりにくいところがあったかもしれないが・・・。【ジャンク・バーサーカー】はかなり攻撃的なモンスターだということが分かってもらえれば良いんだ」

「確かにそうですよね。相手の戦力を削ったり、たとえば相手が守りに入っただとしても、いとも簡単にその守りを崩すなんて・・・」

「す、すごいですね・・・」

エリオとキャロがそれぞれ感嘆の声を漏らす。

「ねえ菊池さん。この召喚獣、また出してくれますか？」

しばらくの間、【ジャンク・バーサーカー】のカードを見ていたスバルが、何やら期待がこもった眼差しで聞いてきた。

「そ、そうだな。機会があれば出すことは否定しないが・・・」

スバルの真意が読めず、困惑気味で返答する菊池。

一方、菊池の返答を聞いたスバルは、小さくガッツポーズしてティアナ達に念話で話し掛けた。

《ねえ、ティア。さっきの召喚獣のことなんだけど、あれだけ強いってことが分かったんだし、次から菊池さんに前線に出てもらうようにお願いしてみても良いんじゃないかな？ 菊池さんなら、問題無い気がするし・・・》

《ホント、そうよね。フェイトさんをあそこまで苦戦させる魔導師はそうそういないわよ。あんたの言うように、フルバックじゃなくて、フロントアタッカーかガードウィングでも良さそうな気がしてきたわ》

《今度の模擬戦・・・菊池さんには、敵の誘導役をお願いしてみても良いかもしれませんね》

《それはいくらなんでもまずいんじゃない・・・》

菊池の知らないところで、菊池を前線に出す作戦が練られていた。唯一、菊池と同じポジションを務めるキャラは、菊池を前線に出すことに難色を示しているが、菊池が前線に出ることは決まりつつあ

った。

こうしてこの日を境に、本来後方支援を行うはずの菊池が、シンクロモンスターと共に堂々と、前線を駆ける光景が見られるようになるが、またそれは別の話である。

第二十七話 「【ジャンク・バーサーカー】の強さ」（後書き）

作者「やっと投稿できた。テストや課題や何やら色々あってドタバタしてたもので・・・」

菊池「で、肝心のテストはどうだったんだ？小説を書く時間を犠牲にしてまで、テスト勉強につき込んだんだから、もちろん良い点数は取れたんだろう？」

作者「ま、まあね。いつも通りさ・・・」

菊池「まったく・・・。進級できそうか？」

作者「・・・おそらくは」

菊池「先が見えないようだな。そんなんで大丈夫か、本当」

作者「大丈夫だ。俺が言ってんだから問題ないさ」

菊池「とても不安な気持ちでいっぱいなんだけど」

作者「それは何かの間違いさ。3月からの制限改訂で【ゴヨウ・ガーディアン】が禁止カードになったのと同じだ」

菊池「いやいや、間違いじゃないから。正確な情報だからな」

作者「それにしても、第五話の後書きで、【ゴヨウ・ガーディアン】の話になった時に【大地の騎士ガイアナイト】を馬鹿にした時あったんだが・・・今思うと、なんか恥ずかしいな。【ゴヨウ・ガ

「ーディアン」が抜けたからって、その穴埋めとして馬鹿にしたた「大地の騎士ガイアナイト」をエクストラデッキに入れてるから・・・」

菊池「まあ、今度から気をつけていこう。な？」

作者「・・・そうだな。さて、今回の話は面白くなかったかもしれない。バトルも駆け引きもないですからね。できるだけ、増やしていきたいと思っておりますが、原作の雰囲気壊さない程度で進めていくつもりです。それでは、また次回お会いしましょう」

菊池「感想、意見等受け付けております。また、誤字脱字等ありましたら、ご報告していただけると有難いです。では、この辺で失礼します」

第二十八話 「ある日の機動六課」 (前書き)

皆様、二か月も更新を止めてしまい、申し訳ありませんでした。

春休み中は自動車学校に行ったり、学校の方も学年が上がって忙しくなったため、小説の方になかなか手がまわらなかったのが原因です。(おそろくですが)

これからは、このようなことがないように努力していきますので、宜しく願います。

今回の話は短いですが、第二十八話「ある日の機動六課」をどうぞ。

第二十八話 「ある日の機動六課」

今日も、空は雲一つ無い快晴である。

そんな中、機動六課の訓練場では、いつものように訓練が行われていた。

「はい、とりあえず朝の訓練は終了!」

「は、はい・・・」

フォワード達はヘトヘトになりながらも、何とかなのはに返事を返す。

なのはの教導には、手を抜くなどということは無く、常にフォワード達が耐え得るギリギリのラインでの訓練を行う為、毎度毎度のこととはいえ、疲れは自然と感じてしまうのだ。

「特に大きなミスも無かったし、この調子で頑張ってるね」

「「「はい!」「」」」

なのはが解散と言うと、フォワード達は戻っていったが、菊池は戻らずに訓練場に留まっていた。

いつもなら、フォワード達と揃って戻っていくはずである。不審に思ったなのはが声をかける。

「菊池くん、どうしたの？」

「ん？ いや何、デュエルディスクの調子を確認しておきたくてな」

菊池はそう言うと、デュエルディスクを起動させ、起動音やソリットビジョンの調子確かめる。

デュエルディスクを使うのは、今日の訓練だけではない。この前のフェイトとの模擬戦の時や、いつもの訓練でも酷使させてしまっている。時々、調整しておかなければ壊れてしまうかもしれないのだ。

菊池が調整している間、なのはは菊池を見つめていた。

見つめること自体、なのはにとって特に大きな意味は無いのだが、ふと菊池と2人きりになるといつい、色々なことを考えてしまうのだ。

（今思えば菊池くんって、どうして私達と一緒に戦ってくれるんだろう？ 本来なら、菊池くんは戦わなくても問題無い立場だし、民間人を戦力に加えないといけないほど、戦力的に不足しているわけでもない。おそらく、はやてちゃんが誘ったことも要因の一つだと思うけど、それだけじゃないはず。菊池くんを突き動かしてるものって何なのかな？）

なのはは菊池と出会ってから、今までのことを振り返って考えていた。

保護された当初は、どこかしら緊張していた菊池。だが、六課メンバーとふれ合っていくうちに緊張も解け、感情を見せるようになった。

ティアナの一件の時は、自分とティアナとの間に出来た軋轢を何とかしようと動いてくれて、結局模擬戦の時にぶつかり合うという結果になってしまったものの、諦めずに語りかけてくれた。

それに菊池がいなければ、ティアナと和解できたのかも分からない。もしかしたら和解出来ないまま、気まずい関係を続けていたかもしれない。

もちろん、菊池がいなくても和解できた可能性も無いわけではない。だが、あくまでも可能性であって、出来るといった保証はない。そう言った意味では、菊池は自分とティアナとの仲をうまく取り持ってくれた。

（ホントに、菊池くんには何かと迷惑かけちゃってるんだなあ・・・。なら、これからは菊池くんにあまり負担を掛けないように頑張らないと。）

なのはが気持ちの整理を終えた丁度その時、菊池もデュエルディスクの調整が終わった。

「なのは、そろそろ戻ろうか。皆も心配するだろう」

「そうだね。さ、行こう」

なのはは、菊池の隣に並んで歩き出す。

食堂までの道の日を行く途中、肩を並べて談笑しながら歩いていく2人のその姿は、とても印象に残るものだったと、2人を見かけた六課の職員は思ったとか。

食堂に着くと、ヴィヴィオと朝食をとっていたフェイトに呼ばれて、なのはと菊池はフェイト達と一緒に朝食をとることにした。

「2人とも、遅かったね。何してたの？」

「え？う、うん。ちょっと色々あって・・・」

何故か言葉を濁すなのはに、フェイトは何かあったのか、と菊池に尋ねるが別に何かあったわけでもない。

「心配するな、フェイト。俺がデュエルディスクの調整をしていたせいで遅くなったただけだ」

「な、なんだ・・・。それなら、心配するまでもなかったかな？」

菊池の返答を聞いて、安堵の息を吐いたフェイト。

それに対し、深く追及されるのではないかと内心焦っていたなのはも別の意味で安堵の息を吐く。

「ヴィヴィオ、ちゃんと食べないと駄目だぞ」

「うゝ、ニンジンきらい」

菊池はヴィヴィオがニンジンを残していることに気付き、注意する。

大抵の子供は好き嫌いをするものだが、ヴィヴィオも例外ではないらしく、好きな食べ物と嫌いな食べ物のはっきりしている。

世間一般では、好き嫌いはいけなことだと言われることが多いが、菊池としてはあまり無理して食べさせるといったことはしない。もちろん、放置しておくのではなく、本人が自発的に食べるようにするのが菊池のやり方だ。

「ヴィヴィオ、ニンジンだけ食べようとするんじゃないって・・・。ほら、こうして他のものと一緒に食べれば、気にならないぞ」

「うゝ・・・・・・・・、やってみる」

「その意気だ、ヴィヴィオ。ちゃんと食べたなら、チョコレートあげるからな」

「ホント!？」

菊池が発した、チョコレートという単語に大きな反応を示したヴィヴィオ。まだニンジンを食べてもいないにも関わらず、チョコレートは貰ったといわんばかりの笑みを浮かべている。

「もちろんだ。そのかわり、ちゃんとニンジンを食べられたな」

「うん!」

チョコレートというご褒美があるためか、嫌いなニンジンを何とか食べきったヴィヴィオに、菊池はチョコレートを渡す。

「よく食べたな。ほら、約束通りチョコレートをあげるよ」

「わーい、ありがとう！菊池さん」

「どういたしまして」

チョコレートを手にし、嬉しそうに満面の笑みを浮かべるヴィヴィオの頭を優しく撫でる菊池。

なのはとフェイトは、菊池がヴィヴィオに無理なくニンジンを食べさせたことに驚いていた。

「へえー、すっかり菊池くんに懐いてるんだね。まるで親子みたいだよ」

「そうだね。菊池くんがヴィヴィオのパパか……。十分似合ってるよ」

「な、何を言ってるんだ。俺はまだ22だぞ、パパは早くないか？」
なのはとフェイトは、先程の菊池とヴィヴィオのやり取りから親子のようだと判断して正直にそう言ったのだが、菊池は慌てて否定する。

歳から考えて早すぎるといったこともあるが、ヴィヴィオには本当の母親や父親がいるかもしれない。

もし、本当の両親が見つかったら、ヴィヴィオは複雑な気持ちになってしまうかもしれないのだ。ヴィヴィオはまだ幼く、何でも正直に受け入れてしまう。余計な負担を掛ければ、それはヴィヴィオの成長に悪影響を及ぼしかねない。それだけは避けたかった。

「そうかな、私は別に良いと思うよ。ねえ、ヴィヴィオ。ヴィヴィオは菊池くんがパパでも良い？」

「うん！」

即答である。そもそも、パパという意味が分かっているのかどうか、激しく疑問に思うが、本人が良いというのならそれで良いのだろう。

菊池は、柔らかに微笑んでヴィヴィオに向き直る。

「これからよろしくな、ヴィヴィオ」

「よろしく、パパ」

こうして菊池はヴィヴィオのパパとなったわけだが、ここで新たな問題が生じる。

それはヴィヴィオの母親のことだ。菊池はてっきりなのはが母親になっているのだと思っていたが、実はそうではなかった。

なのはは、ヴィヴィオにはちゃんとした母親がいるのだから、自分はそれまで面倒を見ていければ良いと思っていたらしい。だから、菊池が「ということは、なのはがヴィヴィオのママになるのか？」というと、少し慌てた。

「何言ってるの、菊池くん！？た、確かに今は保護者代わりだけど、ヴィヴィオには母親がちゃんというんだよ！」

「そう言われてもな……。なのはにはよくなついてたし、問題無いと思うんだが」

菊池が困惑の面持ちでいると、ヴィヴィオがなのはの服の裾を僅かに引っ張った。

「ママ・・・」

ヴィヴィオはなのはがママでも構わないのか、特に嫌がる様子もなく、どこか乗り気な様子である。なのはは、どうするべきか逡巡していたが、決心を固めるとヴィヴィオの方を向く。

「いいよ・・・、ママでも」

「なのはママ・・・」

なのはと楽しそうにしているヴィヴィオ。そこへ、今まで蚊帳の外だったフェイトも交じって話をしている。

そんな彼女らを見て、菊池は考えていた。

ヴィヴィオに、自分は何をしてやれるのか。

詳細は分からないが、なのは達によればヴィヴィオは人造生命体・・・つまり誰かがヴィヴィオの命を作ったということだ。

ヴィヴィオが保護されることになったあの日、確かに謀ったかのように敵が現れた。ヘリをも墜落させるような砲撃、なのは達隊長陣を手玉に取るような戦術……。これは、何かあるといっても過言ではない。おそらく、敵は相当強いと見て良いだろう。

聖王教会から六課に移ってから今までのところ、ヴィヴィオに大き

な変化は見られない。一見、普通の少女に見えるヴィヴィオも特別な生いたちがあるようだ。そう思うと、本当に嬉しそうな笑顔を浮かべるヴィヴィオを見て、菊池は複雑な気持ちになった。

（ヴィヴィオが何故六課で保護することになったのか、俺には分からない。なのは達にもなにか考えがあつてのことだろうとは思うが・・・。俺達が立ち向かおうとしている敵は相当強い。万が一のことがあつた時、俺は皆の笑顔を、六課という大切な居場所を守れるのだろうか？）

菊池の脳裏に、自らのエースモンスターである【スターダスト・ドラゴン】や、今まで菊池と共に戦ってきたモンスター達の姿が浮かぶ。

（カード達よ、俺に力を貸してくれ・・・。仲間を守る力を・・・）
こうして菊池はヴィヴィオの親となったと同時に、親としての責務を負うことになった。それが吉と出るか、凶と出るか・・・誰も分かるはずなかった。

第二十八話 「ある日の機動六課」 (後書き)

作者「とうとう菊池も親になるのか……。早いものだな」

菊池「俺に何ができるのか……。まだ分からないが全力は尽くすつもりだ」

作者「後で後悔はしたくない、ということか？」

菊池「まあ、大雑把に言ったらそういうことになるだろうな」

作者「さて、話は変わるが遊戯王も5D'sからZEXALに移った。だがな、やっぱり5D'sの良さを知ってるからか、どうもついていけない……。5D'sがアダルトすぎたのがいなかったのか？」

菊池「主人公の遊星や、そのライバルであるジャックが大人に近い年齢だったからな、自然とアダルト的な作品になるのは仕方ないと思うが……。それに嫌だったら無理にZEXALを見なくても良いんじゃないか？」

作者「それはそうだが、何か楽しみが無くなったから虚しくなってしまったんだよ。エクシーズ召喚とか出て来てるけど、斬新すぎてよく分からないんだ。まあ、この作品ではシンクロ召喚までしか出さないつもりだけど」

菊池「てことは、出す可能性もあるのか？」

作者「限りなくゼロに近い確率だけだな」

菊池「まあ、読者の方のことも考えて話を書いてくれ。そうしないと、小説じゃなくて、文章の羅列になるぞ」

作者「もちろん、そのつもりだ。それではまた次回に」

第二十九話 「交差する互いの思惑」 (前書き)

まず、最初にお詫びいたします。

三か月も放置して、皆さんを長い間待たせることにしまい、申し訳ありませんでした。

この先レポートや発表会などで忙しくなり、不定期な更新が続くと思います。よろしくお願いします。

それでは、第二十九話 「交差する互いの思惑」 始まります。

第二十九話 「交差する互いの思惑」

仮想訓練場を走る1台のD・ホイール。

D・ホイールの後ろには、5機の仮想ガジェットが追って来ていた。ガジェット達は、ただD・ホイールを追っているのではない。時折、鋭い攻撃を放っており、決して油断はできない状況なのだ。

だが、D・ホイールを運転している菊池に焦っている様子は無く、むしろ楽しんでいた。

「俺のターン！」

菊池 LP5800 SPC4↓5

「俺は、【マックス・ウォリアー】を召喚！」

【マックス・ウォリアー】攻1800

1ターン前にシンクロ召喚された【スターダスト・ドラゴン】の隣に、【マックス・ウォリアー】が並ぶ。菊池の場に新たなモンスターが召喚されたことで、観戦しているフォワード達から歓声が上が

る。
「バトル！【マックス・ウォリアー】の攻撃！！」

菊池の攻撃宣言と同時に、【マックス・ウォリアー】がガジェット
の一体に突撃していく。

「【マックス・ウォリアー】が相手モンスターを攻撃する時、ダメージステップの間、攻撃力が400ポイントアップする！」

【マックス・ウォリアー】攻1800↓2200

「スィフト・ラッシュュ!!!」

【マックス・ウォリアー】が持つ棍が、ガジェットの装甲に当たり、
火花を散らす破壊までには至らない。

（やはり駄目か。だが、この一撃で決めさせてもらおう！）

菊池は【スターダスト・ドラゴン】に目を向け、叫ぶ。

「行け、【スターダスト・ドラゴン】！シューティング・ソニック
!!!」

【スターダスト・ドラゴン】から放たれた銀色のブレスが、突然の
攻撃に対処できなかったガジェット2体を貫いた。

「俺はカードを1枚伏せ、ターンエンドだ」

（やっぱり、菊池くんは強い・・・）

今日1日の訓練は既に終了しており、現在の時刻は8時半。

人がまばらになっている食堂で、なのはは1人、遅めの夕食を食べていた。

時間帯が少し微妙であることを考えて、サンドイッチとスープ、そしてコーヒーという軽めの夕食をとりながら、今日の訓練をモニターで見直していた。

モニターには、菊池のエースモンスターである【スターダスト・ドラゴン】が、仮想ガジェットを撃ち抜いているところが映しだされている。

（【スターダスト・ドラゴン】かぁ……。単体でも強いけど、色んな召喚獣になれる不思議なドラゴンなんだよね……。）

なのはの脳裏には、【スターダスト・ドラゴン／バスター】や、【ソニック・ブラスター・ドラゴン】、そして“シンクロチューナー”と呼ばれるシンクロモンスターとのシンクロ召喚で出て来る【シューティング・スター・ドラゴン】の姿が浮かぶ。

どのモンスターも、なのはを驚かせるには十分であったが、なのはが気になるのは【シューティング・スター・ドラゴン】だった。

（【シューティング・スター・ドラゴン】は、あの一件で、私がティアナを墜とそうとした時に、菊池くんが召喚したドラゴン……。以来、私は【シューティング・スター・ドラゴン】に対する対処法をずっと考えてきた……。）

【シューティング・スター・ドラゴン】を倒すことは、一筋縄でいくものでない。でも、なのははどうしても勝ちたかった。

今まで、菊池が模擬戦などで出してくる度、なのはは果敢に挑んで行ったものの、決定打にはならず、結局は【シューティング・スター・ドラゴン】に押されてしまうのだ。

おまけに、負けず嫌いの性格であるなのはには、負けっぱなしであるという事実がたまらなく悔しく、勝ちたいという気持ちを大きくしていったのである。

「明日は、ちょうど菊池くんと模擬戦をする日だし、何よりリベンジできる絶好のチャンス。菊池くん・・・、今度こそ決着をつけよう・・・！」

明日に控える模擬戦を前に、なのはは1人、決意を新たにしていた。

次の日。

午前中はフォワード達がヴィータの指導の元、厳しい訓練を行なった。

いつもならば、昼休みを挟んで、午後の訓練が始まるのだが、今日は違った。

「さあ、こっちはいつでもいけるよ。菊池くんはどう？」

「ああ。こちらも準備できてる」

なのはは、万全の状態で菊池に挑むため、午前中はヴィータのサポートに回り、口頭での指導に留めた。

そして今、なのははバリアジャケットを着用し、手には愛機のレイジングハートが握られている。

（いよいよ、菊池くんと模擬戦が始まる……。こんな風に今まで一対一で戦ったことなんか無かったし、うまくいくなあ……。）
なのはは昨日までは勝つ気満々で、やる気も漲っていたのだが、目前にして少し不安を覚えたのである。実際、レイジングハートを持つ手が若干震えていた。

だが、そこは何とか精神力で押し隠し、模擬戦に立ちあってくれるヴィータに声をかける。

「私も菊池くんも、準備OKだよ。ヴィータちゃん、お願いね」

「まったく・・・、しゃあねえな。それじゃ、はじめっぞ」

ヴィータが、なのはと菊池を見やり、模擬戦の開始を宣言する。

「よし、試合開始ー！」

その声を合図に、2人は動き始めた。

場所は変わって、とあるビルの屋上。

そこには、フォワード達が目の前に展開されたモニターを見ていた。訓練場にはサーチャーが取り付けられており、遠くからでも見る事ができるようになっているのである。

「まさか、なのはさんと菊池さんが模擬戦するなんて・・・」

「ホント、予想外よね」

スバルとティアナが思わず本音を漏らす、無理もなかった。

何故なら、フォワード達がなのはと菊池が模擬戦するという事実を知ったのが、午前の訓練が終わった後。いきなりすることに驚いたフォワード達だったが、しっかりと返事を返したのだった。

「でも、気になります。なのはさんと菊池さんが一騎打ちで戦うところは、一度しか見たことがありますから・・・」

「私もエリオ君と同じかな・・・。菊池さんが、なのはさんを相手にどんな戦い方をするのか、興味あります」

エリオとキャロは、モニターに映る2人の様子を眺めながら、これから始まる模擬戦にそれぞれ思いを寄せた。

フォワード達がモニターを注視している頃、菊池は既にスピード・ワールド2を発動し、デッキに手を置いていた。

「俺のターン！」

菊池 LP8000 SPC0

ドローしたのは、【デブリ・ドラゴン】。

チラッと確認した後、手札に加えて別のカードを手にする。

「自分フィールド上にモンスターが存在しない時、【ジャンク・フォアード】は手札から特殊召喚できる！」

【ジャンク・フォアード】攻900

「さらに、手札のレベル1モンスター1体を墓地へ送る事で、【ビツク・ワン・ウォリアー】を手札から特殊召喚！」

【ビツク・ワン・ウォリアー】攻100

「そして俺は、チューナーモンスター、【デブリ・ドラゴン】を通常召喚！」

【デブリ・ドラゴン】攻1000

久しぶりの【デブリ・ドラゴン】の登場に、なのはは目を見開く。

「チ、チューナーモンスター・・・！まさか、いきなりシンクロ召喚してくるの！？」

「【デブリ・ドラゴン】の召喚に成功した時、墓地から攻撃力50

0以下のモンスター1体を特殊召喚できる！攻撃力0の【エフェクト・ヴェーラー】を墓地から特殊召喚！！」

【エフェクト・ヴェーラー】攻0

菊池の手札は残り2枚。その2枚のうちの1枚を菊池は掴む。

「自分がモンスターの召喚に成功したターン、このカードは手札から特殊召喚できる。現れる、【ワンショット・ブースター】！」

【ワンショット・ブースター】攻0

菊池は、僅か1ターンでモンスターゾーンを全て埋め尽くしてしまった。その事実には、なのはやヴィータだけでなく、観戦しているフオワード達も、感嘆の声を上げた。

「すごい、すごいよ菊池さん！一気に5体も召喚するなんて！！」

「さすがね……。さあて、何を見せてくれるのかしら？」

スバルは今までにない菊池の高速召喚に、興奮しているようだ。

それに対し、ティアナはスバルのように興奮することは無いものの、どこか含みのある笑顔を浮かべ、モニターに映る菊池を見つめていた。

「俺は、レベル1の【ビック・ワン・ウォリアー】と、レベル3の【ジャンク・フォアード】に、レベル4の【デブリ・ドラゴン】をチューニング！！」

菊池の声に反応し、【ビック・ワン・ウォリアー】と、【ジャンク・フォアード】、【デブリ・ドラゴン】が空高く舞い上がる。

【デブリ・ドラゴン】が4つの輪となり、【ビック・ワン・ウォリアー】と【ジャンク・フォアード】が、その中を通る。

【ビック・ワン・ウォリアー】と【ジャンク・フォアード】の身体が透き通り、それぞれのレベルの光となる。

「集いし願いが、新たに輝く星となる。光差す道となれ！シンクロ召喚！飛翔せよ、【スターダスト・ドラゴン】！！」

1+3+4=8

【スターダスト・ドラゴン】攻2500

菊池の場に【スターダスト・ドラゴン】が現れると、なのはやフォワード達だけでなく、ヴィータも驚きを隠せなかった。

「うそっ！？まだ始まって数分しか経ってないのに・・・」

なのはは愕然としかけるが、ふと思い直す。

（【スターダスト・ドラゴン】の攻撃力は2500。いくら早く召喚したからと言っても、攻撃力が上がるわけでもない。落ち着いて対処すれば問題ないはず・・・）

だが、菊池は【スターダスト・ドラゴン】の召喚だけで終わるつもりはなく、むしろここからが本番だった。

「レベル1の【ワンショット・ブースター】に、レベル1の【エフエクト・ヴェーラー】をチューニング!!」

菊池がそう叫ぶと、2体のモンスターが空高く舞い上がる。

【エフエクト・ヴェーラー】が1つの輪となり、【ワンショット・ブースター】がその中を通る。

【ワンショット・ブースター】の身体が透き通り、1つの光となる。

「集いし願いが、新たな速度の地平へ誘う。^{いざな}光差す道となれ!シンクロ召喚!希望の力、シンクロチューナー、【フォーミュラ・シンクロン】!」

1+1=2

【フォーミュラ・シンクロン】 攻200

「シンクロチューナー・・・!まさか、もうアクセルシンクロを!」

なのはが予想外の展開に驚いている間、菊池はスロットルを回し、スピードを上げていた。

「【フォーミュラ・シンクロン】がシンクロ召喚に成功した時、デッキから1枚ドロウできる。なのは、まだ1ターン目だが、遠慮なく行くぞ!【スターダスト・ドラゴン】!!」

【スターダスト・ドラゴン】の咆哮と共に、【フォーミュラ・シンクロン】が2つの輪になり、菊池と【スターダスト・ドラゴン】は

その輪を潜る。

すると、周りの景色が緑色に染まっていく。

「集いし夢の結晶が、新たな進化の扉を開く。光差す道となれ！」

いつもなら、1ターン目に【シューティング・スター・ドラゴン】を召喚しようとはしない菊池が、今回召喚しようとしているのは、なのはの態度に僅かな違和感を覚えたからだ。

（なのはは、いつも楽しそうに笑顔を浮かべていることが多い。とくに教導や模擬戦の時はなおさらだ。なのに、今日は表情が何処か硬い。何かあったのだろうか？）

なのはとて、どんな時でもニコニコしているわけでもない。場面に応じて、浮かぶ表情は違っている。基本的になのはは、穏やかで優しい女性なので、自然に微笑を浮かべていることが多いというだけのことなのだが。

それでも、菊池には気になった。

（今日のなのはは、どことなく緊張しているように感じる。このターンが終わったら聞いてみるか）

「アクセルシンクロ!!!」

菊池が手に持っている、カードイラスト、カード名、カードテキスト、属性などが何も書かれていない、シンクロモンスターのカードは、菊池が“アクセルシンクロ”と叫ぶと、絵柄やテキストが浮かび上がる。

そして、菊池が再び訓練場に戻って来た。

「生来^{しうらい}せよ！【シューティング・スター・ドラゴン】！！」

【シューティング・スター・ドラゴン】 攻3300

「【シューティング・スター・ドラゴン】か・・・」

【シューティング・スター・ドラゴン】の登場に、なのはは呟く。

（このドラゴンを倒すために、私は仕事の合間を縫って考えて来た。通じる保証はないけど、やるしかない。菊池くんは全力全開で向かって来てる。もし、そうだとしたら、私も菊池くんの思いに応えなきゃ！）

なのはは、小さく頷くとレイジングハートを握り締めた。

そんななのはの様子を見ていた菊池は、なのはの心中など分かるはずもなく、首を傾げるしかなかった。

（なのは・・・、一体何を考えてるんだ？）

「・・・俺は2枚のカードを伏せて、ターンエンドだ」

菊池 LP8000 SPCO↓1

「菊池さん、攻撃しないんだ・・・」

スバルは、菊池が【シューティング・スター・ドラゴン】で攻撃すると思っていたのか、呆気にとられているが、隣にいるティアナは納得いくらしく、菊池の行動に対し、特に反応は無い。

「無理もないわ。菊池さんは【シューティング・スター・ドラゴン】を召喚するのに、多くの手札を消費してる。下手に攻撃に出たら、なのはさんに倒されてしまうかもしれない・・・」

「だから、あえて攻撃に出ずにターンを終了したってことですか？」

「な、なるほど・・・。さすが菊池さん、すごいです」

ティアナの言いたいことが分かったのか、エリオが言葉を繋ぐ。そのおかげで、キャラも菊池の意図に気付いたようだ。

ティアナは、展開されている3つのモニターのうち、真ん中のモニターに目をやった。

ちなみに左端のモニターは菊池の様子を、右端のモニターは、なのはの様子を映し出している。

ティアナが見ているモニターには、【シューティング・スター・ドラゴン】のステータスが映っていた。

（【シューティング・スター・ドラゴン】・・・。なのはさんの猛攻を、このカードだけで防ぐことは難しいわね。でも、私は信じる。菊池さんなら、きっと・・・！）

ティアナが考えている頃、なのはは【シューティング・スター・ドラゴン】をしつかりと狙って、砲撃の準備をしていた。

（まずは、一撃入れる！）

「ディバイン・・・バスター！！」

放たれた砲撃は、狙い外すことなく【シューティング・スター・ドラゴン】に向かう。

「俺は、【シューティング・スター・ドラゴン】の効果を発動！」

この場面で効果を発動すれば、菊池のフィールドはガラ空きになってしまうものの、背に腹は代えられない。

「【シューティング・スター・ドラゴン】は、相手ターンに1度、ゲームから除外する事で、相手モンスター1体の攻撃を無効にできる！」

菊池がそう言うと、【シューティング・スター・ドラゴン】は光の粒子となり、ディバインバスターを打ち消した後、訓練場から姿を消した。

（やっぱり私のバスターを防いできた。でも、安易に防ぐのは迂闊だよ）

なのはは、打ち消されたのを確認すると、すぐに次の一手を打つ。

「レイジングハート」

『ディバインシューター』

レイジングハートに命じて、自身の周りに複数の誘導弾を纏わせながら、菊池に迫っていく。

「シュート！」

ある程度追いついたところで、なのはが菊池に向かってディバインシューターを放つ。

その数・・・7。

【シューティング・スター・ドラゴン】を除外している今、菊池を守ってくれるモンスターは存在しない。

放たれた7つのディバインシューターは、菊池に当たらんと迫っていく。

「ティア！このままだと、菊池さんに当たってしまうよ！どうしよう！？」

「落ち着きなさい、馬鹿スバル！菊池さんだって、これぐらいのことは想定済みよ」

慌てるスバルを、叱りつけるようにして落ち着かせるティアナ。

エリオとキャロは、不安そうにモニターを見つめているが、やがて驚愕の表情を浮かべることになる。

迫って来る7つの誘導弾に対し、菊池は伏せてあったカードの1枚を発動させる。

「罨発動、【くず鉄のかかし】！相手モンスター1体の攻撃を無効にする！！」

カードから現れたかかしが、菊池を守るように膜で包み、誘導弾を弾いていく。

「このエンドフェイズ、自身の効果で除外した【シューティング・スター・ドラゴン】は俺のフィールドに戻って来る！」

【シューティング・スター・ドラゴン】攻3300

（何とか攻撃を防いだが、なのはは【くず鉄のかかし】を破る方法を必ず考えてくる。それまでに、何らかの手を打たないと・・・！）

「俺のターン！」

菊池 LP8000 SPC1↓2

「俺は手札から【SP-エンジェル・バトン】を発動！自分のスピードカウンターが2つ以上ある時、デッキからカードを2枚ドロし、その後手札を1枚、墓地に送る」

デッキから2枚ドロした菊池は、ひいたカードを見て、僅かに顔を顰めた後、1枚を墓地に送った。

「なのは、ちょっといいか？」

「なに、かな？」

このタイミングで声を掛けられるとは思っていなかったのか、なのは少し驚いた様子で返事を返してきた。

「さっきの攻撃は、いつもより鋭い攻撃だったな。なのは、この戦いに何を感じている？」

「感じる・・・？ 菊池くん、それはどういう意味かな？」

怪訝な表情で聞き返してくるなのはに、菊池は真っ直ぐになのはを見つめて答える。

「お前は、俺が【シューティング・スター・ドラゴン】を出した時、表情が変わった。なのは、お前の狙いは【シューティング・スター・ドラゴン】なのか？」

「・・・」

菊池がそう言うが、なのはは答えない。ただ無言でレイジングハートを構え直した。

そんななのはの様子を見た菊池は、ふうと息を吐きつつ、最後の手札1枚を掴む。

「俺は手札から【ミスティック・パイパー】を召喚！」

【ミスティック・パイパー】 攻0

「【ミスティック・パイパー】の効果を発動！このカードをリリースして、デッキからカードを1枚ドロース、それがレベル1モンスターだった時、もう1枚ドロースできる！」

そう言って菊池は、デッキからカードを1枚ひいた。

「俺がひいたのは、レベル1の【スターダスト・ファントム】。よって、もう1枚ドロースできる！」

【スターダスト・ファントム】を手札に加え、菊池はさらにデッキからカードをひく。ひいたカードを確認すると、魔法・罠ゾーンのカード挿入口に差し込んだ。

「カードを1枚伏せて、ターンエンドだ」

菊池 LP 8000 SPC 2↓3

菊池がカードを伏せている様子は、フォワード達が見ているモニターにも映っていた。

3つのモニターを見ながら、ティアナは呟く。

「何とか手札を稼いだけど、このままじゃ防戦一方ね」

「菊池さん、大丈夫かなあ・・・？」

「……………」

スバルとエリオ、キャロは不安そうに、じつとモニターを見ていたのだった。

第二十九話 「交差する互いの思惑」 (後書き)

暗黒「まさか、1ターン目から【シューティング・スター・ドラゴン】を召喚してくるとは……。最初から全力全開だな、お前は」

菊池「俺は勝負する時、必ず全力を尽くす。相手も全力で向かってきているのに、手を抜くのは失礼だからな」

暗黒「なるほど、デュエリストらしい答えだ」

菊池「そういえば、普段デュエルシーンで、あまり発言することが少ないフォワード達だが、今回はよく発言してたな。何でだ？」

暗黒「ん？ いや、特に深い意味は無いんだ。ちょっと趣向を変えてみただけさ」

菊池「そうか」

暗黒「(ま、ホントはアニメ5D'sのWRGP編を見て、ベンチサイドの描写を参考にさせてもらったんだけどね……)」

菊池「終わりが気になるところで丁度途切れているので、不満があると思いますが、作者が近いうちに三十話を投稿します。それまでお待ち下さい」

暗黒「それでは、また次回お会いしましょう」

第三十話 「模擬戦の行方」 (前書き)

約2ヶ月ぶりの投稿になります。

近いうちに投稿するつもりでしたが、修正を加えているうちに遅くなってしまうました。本当に申し訳ないです。

それでは、第三十話 「模擬戦の行方」 始まります。

第三十話 「模擬戦の行方」

観戦組が心配そうに見守っている一方、模擬戦は新たな展開を迎えつつあった。

「菊池くん、【シューティング・スター・ドラゴン】と【くず鉄のかかし】で守りを固めたつもりかもしれないけど・・・、甘いよ」

なのはは、空中から菊池を見下ろしながらそう言った。

菊池は、なのはが言ったことはブラフだと思い、最初は特に何とも思わなかったのだが、目の前の状況に驚くしかなかった。

「な、なん・・・だと・・・」

なのはが言った意味をようやく理解した頃には、既に遅かった。

【シューティング・スター・ドラゴン】が、なのはが仕掛けた設置型のバインドにしっかりと捕らわれてしまっていたのだ。

これでは、【シューティング・スター・ドラゴン】はフィールドから逃げる事が出来なくなってしまう。

その結論に辿り着いた菊池の表情には、焦りの色が見えていた。

菊池が冷や汗を掻いているのを見て、なのははレイジングハートの穂先を【シューティング・スター・ドラゴン】に向ける。

（やっと追い詰めた。今度こそ決める！）

「いくよ、レイジングハート」

『ディバインバスター』

しっかりとカードリッジを2発ロードするのを忘れず、なのははディバインバスターを放つ。

それを見た菊池は、迷うことなく伏せカードを発動させた。

（狙いは【シューティング・スター・ドラゴン】か！だが、俺には【くず鉄のかかし】がある！！）

「罨発動！【くず鉄のかかし】！！相手モンスター1体の攻撃を無効にする！」

「無駄だよ！！」

かかしは【シューティング・スター・ドラゴン】の前に現れ、ディバインバスターを防ごうとするが、ディバインバスターに押し切られてしまった。

かかしを振り切ったディバインバスターは、【シューティング・スター・ドラゴン】をあつという間に飲みこんでいった。

「しまっ……ぐああああ！」

菊池 LP8000↓4700 SPC3

「くっ……。シューティング・スターと【くず鉄のかかし】が・・」

そう。

なのはは、菊池がカード処理を行なっている間、【シューティング・スター・ドラゴン】を捕獲するバインドを設置していたのだ。

【シューティング・スター・ドラゴン】が菊池の場から消えたのを確認すると、今度は菊池にレイジングハートを向ける。

「これで【シューティング・スター・ドラゴン】は菊池くんの場合から消えた。【くず鉄のかかし】も無い今、菊池くんを守る盾はないよ。私の勝ちだね」

菊池が築いた防御の布陣を破ったのはは、勝ち誇った笑みを見せる。菊池としては悔しい場面だが、何も言い返さずになのはを見返す。

（どうすれば……。まさか【シューティング・スター・ドラゴン】がやられるとは思っていなかった。ここは何としてでも凌ぐしかない！）

「菊池くん、ここまでよく頑張ったけど、もう勝負はついたよ。早くバイクを――――」

なのはが模擬戦を終了させようとするが、菊池に遮られてしまう。

「まだだ！まだ、勝負はついていない！行くぞ、俺のターン！！」

菊池 LP 4700 SPC 3↓4

「俺は、【スターダスト・ファントム】を守備表示で召喚する！」

【スターダスト・ファントム】守0

菊池が召喚したのは、あまり強そうにみえないモンスターだった。どう見ても、なのはの攻撃を防げるとは思えない姿に、フォワード達には諦めのムードが漂っていた。

「菊池さん、もう手詰まりなのにどうして？」

「まさか、自棄になったとか……」

キャロとエリオが【スターダスト・ファントム】を見て、そう言ったのだが、ティアナはそんな2人の頭を軽く撫でつつ、2人の言葉を否定する。

「それこそ、まさかよ。菊池さんには何か考えがあるはず。そうでなければ、勝負を続けたりしないわ」

菊池の場には、貧弱そうなモンスターが1体いるだけ。それだけなのに、ティアナには菊池が負けるという考えは無かった。

（菊池さんは、どんな状況であっても道を切り開いてきた。だから、きっと大丈夫……！）

祈る思いで、ティアナは菊池を見つめていた。

その頃、菊池はターン終了宣言を済ませてD・ホイールを走らせていた。

「なるほどね。それが菊池くんの本気だというのなら、私も全力でいくよ!」

「っ!」

なのはは、レイジングハートの穂先を【スターダスト・ファントム】に向ける。

「ディバイン・・・バスター!!」

桜色の砲撃が、【スターダスト・ファントム】を飲み込む。

「ぐううう!だ、だが破壊された【スターダスト・ファントム】の効果発動!このカードが破壊された時、墓地にある【スターダスト・ドラゴン】を守備表示で特殊召喚できる!」

【スターダスト・ドラゴン】守2000

「【スターダスト・ドラゴン】!?で、でも私の攻撃は終わってないよ!」

突然現れた【スターダスト・ドラゴン】に一瞬慌てるのはだが、素早く状況を読み取り、アクセルシューターを生成すると【スターダスト・ドラゴン】に向かって放った。

「俺は【スターダスト・ファントム】の効果発動！墓地にあるこのカード自身を除外し、守備力を800ポイント下げること、【スターダスト・ドラゴン】は戦闘では破壊されない！」

両方の翼でガードする【スターダスト・ドラゴン】に、いくつものアクセルシューターが直撃した。

アクセルシューターは、デイベインバスターよりも威力は低い、それでも【スターダスト・ドラゴン】の守備力を上回る威力を持つため、菊池は【スターダスト・ファントム】の効果を使うしかない。だが、何とか弾幕の第一波は防ぎ切ったようで、なのはも驚きを隠せないようだ。だが、これ以上は【スターダスト・ファントム】の効果を使うことはできず、第二波は防げそうにもなかった。

《レijingグハート。今の【スターダスト・ドラゴン】の守備力は？》

《彼は、【スターダスト・ファントム】の効果を2回使用していますので、守備力は400です。もう、これ以上は防げないでしょう》

《そうだね。じゃあ、今度こそ決めようか》

《了解です、マスター》

【スターダスト・ドラゴン】守2000↓1200↓400

レijingグハートと念話のやり取りを交わし終わると、【スターダスト・ドラゴン】に生成していたアクセルシューターを放った。

今、菊池の場にいる【スターダスト・ドラゴン】には、アクセルシューターを受け切る守備力は残っていない。と、なれば破壊されるのは明白だった。

なのはが放ったアクセルシューターは、あっさりと【スターダスト・ドラゴン】を破壊し、菊池の場は数分足らずで再びガラ空きとなった。

絶体絶命の状況にある菊池だが、ここまでの展開は想定内のことであったため、取り乱すことはない。布石として、とりあえず伏せカードを発動させる。

「罨カード、オープン！【調和の結晶】！！」

「えっ！」

菊池に近づいていたのはは、慌てて接近するのを止める。

「このターン破壊され、墓地へ送られたシンクロモンスターを含む2体のモンスターを墓地から除外し、墓地に存在するシンクロモンスター1体を特殊召喚する！蘇れ、【シューティング・スター・ドラゴン】！」

菊池は【スターダスト・ドラゴン】と、墓地にある【エフェクト・ヴェーラー】を除外する。

【シューティング・スター・ドラゴン】攻3300

「うっ、さっき倒したばかりなのに・・・」

せっかく苦勞して倒したはずの【シューティング・スター・ドラゴン】が復活したことに、なのはの表情には苦悩の色が見えていた。

「まだ効果処理は終わってないぞ、なのは！お前には、【シューティング・スター・ドラゴン】の攻撃力の半分……。1650ポイントのダメージを受けてもらう！」

菊池が言い終わると同時に、復活した【シューティング・スター・ドラゴン】は、口から銀色のブレスをなのはに向かって吐き出した。迫り来る銀色のブレスを見ても、なのはは慌てることなく、冷静にラウンドシールドを展開してブレスを防ぐ。

お互いに一步も引かない攻防が続く中、再び現れた【シューティング・スター・ドラゴン】を見て、フォワード達は歓喜に沸いた。

「さっすが、菊池さん！なのはさんの一撃を上手くしのいだ！」

「「すごい……」」

スバル達は菊池の戦術に感心しているが、ティアナだけは違った。

（なのはさんは、初めから【シューティング・スター・ドラゴン】だけを狙ってたのね。だから倒したあの時、どこか嬉しそうだったんだ……）

そんなことを思いながら、ティアナは菊池が映るモニターを見つめる。

「菊池さん、頑張って……！」

ティアナの思いは、菊池に届くのだろうか。

「俺のターン！」

菊池 LP 4700 SPC 3↓4

「俺はチューナーモンスター、【ジャンク・シンクロン】を召喚！」

【ジャンク・シンクロン】攻1300

D・ホイールの左斜め前方に、【ジャンク・シンクロン】が現れると、なのはは思わず声を上げた。

「チューナーモンスター！？またシンクロ召喚してくるの！？」

今までの菊池の行動から考えると、チューナーモンスターを召喚するという事は、シンクロモンスターが出て来るということだ。

【シューティング・スター・ドラゴン】の対応だけでも精一杯なのに、これ以上シンクロモンスターを召喚されては、対応しきれない。

そう思ったなのはは、自身の周囲に誘導弾を生成する。

「シンクロ召喚なんて・・・させない！！！」

アクセルシューターを【ジャンク・シンクロン】に向かって放ち、

シンクロ召喚の妨害を狙ったのはだが、菊池がそんなことを許すはずがない。

D・ホイールをうまく操ることで、巧みにアクセルシューターをかわしつつ、カード処理を続ける。

「【ジャンク・シンクロン】が召喚に成功した時、墓地に存在するレベル2以下のモンスターを守備表示で特殊召喚できる！来い、【ニトロ・シンクロン】！！」

【ニトロ・シンクロン】守100

【ニトロ・シンクロン】の登場により、菊池の場に3体のモンスターが並び立つ。

「さらに墓地からモンスターが特殊召喚された時、【ドッペル・ウォリアー】は、手札から特殊召喚出来る！」

【ドッペル・ウォリアー】攻800

「レベル2の【ドッペル・ウォリアー】に、レベル3の【ジャンク・シンクロン】をチューニング！」

菊池の声と共に、【ドッペル・ウォリアー】と、【ジャンク・シンクロン】が空高く舞い上がる。

【ジャンク・シンクロン】が3つの輪となり、【ドッペル・ウォリアー】が、その中を通っていく。

【ドッペル・ウォリアー】の身体が透き通り、2つの光となる。

「集いし星が、新たな力を呼び起こす。光差す道となれ！シンクロ召喚！出でよ、【ジャンク・ウォリアー】！！」

2＋3＝5

【ジャンク・ウォリアー】攻2300

「【ジャンク・ウォリアー】がシンクロ召喚に成功した時、自分フィールド上に存在するレベル2以下のモンスターの攻撃力の合計分、アップする！」

菊池の場には、レベル2の【ニトロ・シンクロン】があるため、【ジャンク・ウォリアー】の攻撃力は、【ニトロ・シンクロン】の攻撃力を足して、2600となる。

【ジャンク・ウォリアー】攻2300↓2600

フォワード達は、真ん中のモニターに映る【ジャンク・ウォリアー】を見て、啞然としていた。

「この場面で【ジャンク・ウォリアー】を・・・？」

「でも、この状況で攻撃力2600は力不足じゃあ・・・？」

キヤロとエリオは、【ジャンク・ウォリアー】を見て不安を口にするが、ティアナは2人に首を振って言った。

「菊池さんの狙いは【ジャンク・ウォリアー】じゃないわ。よく見なさい」

ティアナは真ん中のモニターを指し示して、エリオとキャロに説明する。

「【ジャンク・シンクロン】で呼び出した【ニトロ・シンクロン】は、チューナーモンスターなのよ」

その言葉にキャロはハツとなり、思わずティアナを見上げた。

「ということは、まさか菊池さんは・・・」

「そう。【ジャンク・ウォリアー】のレベルは5。そして【ニトロ・シンクロン】のレベルは2。あの召喚獣を出すつもりね」

ティアナの考えは当たっていた。

菊池は、最初から【ジャンク・ウォリアー】で攻めるつもりはなかったのである。

「レベル5の【ジャンク・ウォリアー】に、レベル2の【ニトロ・シンクロン】をチューニング！」

菊池が叫ぶと、【ジャンク・ウォリアー】と、【ニトロ・シンクロン】が空高く舞い上がる。

【ニトロ・シンクロン】が2つの輪となり、【ジャンク・ウォリアー】が、その中を通っていく。

【ジャンク・ウォリアー】の身体が透き通り、5つの光となる。

「集いし思いが、ここに新たな力となる。光差す道となれ！シンクロ召喚！燃え上がれ、【ニトロ・ウォリアー】！！」

5+2=7

【ニトロ・ウォリアー】攻2800

「【ニトロ・シンクロン】が、『ニトロ』と名のつくシンクロモンスターにシンクロ召喚に使用された時、デッキからカードを1枚ドローする！」

菊池はそう言って、素早くドローしたカードを確認し、発動する。

「手札より【スペーススピード・エナジー】を発動！エンドフェイズ時まで、自分フィールド上のモンスター1体の攻撃力を、スピードカウンターの数×200ポイントアップする。今、俺のスピードカウンターは4。俺は、【シューティング・スター・ドラゴン】の攻撃力を800ポイントアップさせる！」

【シューティング・スター・ドラゴン】攻3300↓4100

「攻撃力・・・4100!?」

「さらに【ニトロ・ウォリアー】は、自分のターンに魔法カードを発動した場合、1度のダメージ計算時のみ、攻撃力を1000ポイントアップする！」

【ニトロ・ウォリアー】攻2800↓3800

2体のモンスターを従えて、菊池は後方から追ってくるのはと向

き合えるように、D・ホイールをターンさせ、2体のモンスターに命令を下す。

「行け、【ニトロ・ウォリアー】！ダイナマイト・ナックル！！」

背中に付いているタンクから蒸気を出しながら、【ニトロ・ウォリアー】はなのはに迫っていく。

簡単に迎撃できるような、生半端な攻撃じゃない・・・。

そう判断したなのはは、この場は一旦防御でしのぎ、反撃のチャンスを狙おうと考えたが、2体のモンスターの攻撃力は、3500を軽く超えている。とてもではないが、防ぎきれぬ攻撃ではなかった。元々攻撃力が高く、自身の効果でさらにパワーを上げている【ニトロ・ウォリアー】の攻撃を受け流せず、なのはは吹き飛ばされてしまう。

「あぁっ！なのはさん！！」

「「「なのはさん！！」」」

吹き飛ばされたなのはを見て、フォワード達はなのはの名を叫ぶ。

ヴィータは、なのはを助けるために動こうとしたが、ピタッと動きを止めた。

菊池がD・ホイールを加速させ、なのはのもとに向かっているのが見えたからだ。【シューティング・スター・ドラゴン】が飛翔し、飛ばされているなのはを自身の背中で受け止めて旋回した後、地上

に降り立った。

それから間もなく、菊池が【シューティング・スター・ドラゴン】の近くにD・ホイールをドリフトさせながら止める。

「なのは！なのは！！」

菊池が必死になのはを呼ぶ。すると、【シューティング・スター・ドラゴン】の背中からなのはが身を乗り出し、菊池の呼びかけに答えた。

「菊池くん！ここだよ！！」

声が出たほうを向くと、なのはが手を振っている。菊池はD・ホイールから降りて、なのはの元に向かう。

「どうだ？一人で降りられるか？」

「だ、大丈夫！」

そうは言うものの、背中から地面までそこそこ高さがある。飛び降りれないこともないが、模擬戦が終了した今、なのははバリアジャケットを解除し、元の青と白を基調とした教導隊の制服に戻っていた。誤って落ちれば、無事では済まないだろうと菊池は考え、なのはを見る。

「なのは」

菊池は、なのはにそっと右手を差し出す。差し出したその手には、なのはを気遣う意味が含まれているのだろう。

なのはには、菊池に迷惑を掛けてしまうと気持ちがあったが、菊池の思いを足蹴りにするつもりはない。なのはもそっと右手を差し出し、菊池の手を握った。

菊池は、なのはがバランスを崩して転倒しないように、力加減を調節しながらなのはの手を引っ張って、降りるのを助ける。

何とかうまく降りることに成功したが、降りた瞬間、なのはがバランスを崩してしまう。予想もしなかった菊池は、反射的になのはを庇おうと動いた。

その結果、なのはは菊池の胸に顔を埋めることとなったのである。

／／／／／

「大丈夫か、なのは」

菊池が尋ねるが、なのはからの返事は無い。

不審に思った菊池はなのはを見るが、顔を埋めているために表情は窺えない。

どうしたものか、と考えていた時、なのはが菊池の服を掴んだ。

「？」

／／／／／

何故服を掴まれたのか、菊池は分からずにいた。一方、ほとんど無

意識に服を掴んでしまったのはは、ますます顔を赤くしていた。

菊池となのはが抱き合うように佇んでいた時、遠くから声が聞こえた。

「なのは！大丈夫か！？」

ヴィータが慌てた様子でやって来たのである。ずっと模擬戦を見守っていて、激しい動きなどしなかったはずだが、ヴィータは少し汗を掻いていた。

決して外の気温や湿度が高いという、自然の影響だけではないだろう。ヴィータ自身、何故そこまで汗を掻いているのかは分からなかったが、なのはが心配だったのは間違いない。

（何故、汗を掻くほどまでに自分は焦っていたのだろう。なのはのことなら、今までの付き合いでの経験上、これぐらいのことなら、難なく対処ぐらい出来るはずだ。なのに、どうしてあたしは・・・）

一人考え込んでいたヴィータだったが、すぐに答えが見つかることでもないと思いの片隅に追いやって、目の前の問題を片づけることにした。

「まったく、お前らは何やってんだよ。人が心配してやって来たってのに」

ヴィータの呆れた声に、なのはは慌てて菊池から離れる。何でもないように装っているが、顔が少し赤いのはご愛嬌だ。

「ヴィータちゃん！？違うの！これは違うの！！」

「分かってるって、皆まで言わなくても。お前らが仲良いことに、今更驚かねえよ」

「そんなんじゃないってば！私と菊池くんは、そういう関係じゃないの！」

フワード達は、菊池達がいる場所から離れたところにいるために見えなかったものの、ヴィータにはバッチリと見られてしまったのだ。

なのはとヴィータが何やら言い合っているのを横目で見つつ、菊池は傍に居る【シューティング・スター・ドラゴン】と【ニトロ・ウオリアー】を眺める。

（あの時のなのはの目……。なのはは一体、何を考えていたのだろうか）

怒られるようなことをしたはずは無いが、もしかするとしていたのかもしれない。もし、そうだとしたら謝る必要がある。

菊池は頭を捻って思い出そうとするが、したこともないことを思い出せるはずもない。

結局自分が考えていたことが、単なる勘違いだと気付いたのは、改めてなのはと話をした後だった。

第三十話 「模擬戦の行方」 (後書き)

作者「やっと、なのはとの模擬戦が終わったなあ。とどめが【ニトロ・ウォリアー】だとは……。まあ、そんなところか……」

菊池「あんまり驚いていないところを見ると、大したこと無いってことか？」

作者「いや、結局【シューティング・スター・ドラゴン】は壁でしかなかったわけだし、報われないなあと思ってさ」

菊池「お前、何も壁って言わなくてもいいだろう」

作者「そういう割には一回も攻撃しなかったよな。自身の効果でなのはの攻撃を防ぎつつ、逃げてただけじゃないか」

菊池「ぐっ……。そこを突かれると何も言えない……！」

作者「それに、なのはと何やら良い雰囲気作りやがって。羨ましい！羨ましいぞ！畜生！」

菊池「男の嫉妬ほど見苦しいものは無いな」

作者「お前のツツコミは、いつも辛辣すぎるんだけど！もうちょっと、加減してくれないか？」

菊池「無理だな。諦めろ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4412n/>

魔法少女リリカルなのはStrikerS ～The dueler～

2011年11月16日18時06分発行